



中山修一著作集13 : 南阿蘇白雲夢想

中山, 修一

(Issue Date)

2023-12-21

(Resource Type)

book

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100492085>



中山修一著作集 1 3

南阿蘇白雲夢想

はじめに——著作集 1 3 の公開に際して

ここに公開する著作集 1 3『南阿蘇白雲夢想』は、次の四つのパートによって構成されています。

- 第一部 詩歌の夢の響き（詩歌集）
- 第二部 南阿蘇の庵にて（日誌集）
- 第三部 燎原に幻影あり（小説集）
- 第四部 日々好々万物流転（随筆集）

二〇一三（平成二五）年の三月末日をもって私は、神戸大学を定年退職し、それ以降、南阿蘇（南郷谷）の小庵に蟄居し、執筆活動に専念することを決意しました。神戸大学在職中は、学術論文の執筆や講演活動などが研究上の主要な柱となっていました。定年後は、それに加えて、詩歌や小説、随筆などの創作表現に加えて、わが熊本の郷土人の紹介にも積極的に関心を広げ、取り組んでまいりました。

著作集 1 3『南阿蘇白雲夢想』は、大阿蘇のなかでの生活を、創作という形式をとおして讃美するものです。第一部は、表題の「詩歌の夢の響き（詩歌集）」からもおわかりのように、創作した詩歌を、「自然を讃えて」「人生を見つめて」「亡き歌姫たちへ捧ぐ」の三つの主題に分けて掲載しています。次の第二部「南阿蘇の庵にて（日誌集）」は、普段の心象風景を短く描写した日記文で、一年ごとの編集となっています。続く第三部「燎原に幻影あり（小説集）」は、この間の生活で見聞きした素材をテーマ化し、虚構空間に再構築されたフィクションを集めたものです。そして、最後の第四部「日々好々万物流転（随筆集）」は、日々の暮らしのなかで遭遇した出来事についての思い思いの散文となっています。

いずれのパートも、都会から離れ、自然と直接向き合いながら生活を営むなかで生まれた私自身の生の記録です。自然は美しくもあり、過酷でもあります。あるいはまた、思い出を紡ぎ、いまとあすとを見つめるのにふさわしい場でもあります。巡りゆく季節のなかにあつての一片一個の感動を書き残しておきたいと考えています。しかし、紙幅の都合もあり、一応ここで著作集 1 3『南阿蘇白雲夢想』は完結とし、その続きは、次の機会に（たとえば、著作集 2 3『残思余考——隠者の風花余情』に）譲りたいと思います。

二〇二三年一二月二一日
暮れゆく阿蘇南郷谷の小さきわが庵にて
中山修一

著者について

中山修一（なかやま・しゅういち）

1948年12月、熊本市に生まれる。熊本県立熊本高等学校時代は、新聞部にて部活を楽しむ。東京教育大学農学部林学科に入学、木材工学を専攻する。学生運動の影響でほとんど授業は行なわれず、ヨット部に所属し館山と葉山で年間一〇〇日以上の中泊生活を送る。卒業に引き続き、東京教育大学大学院教育学研究科修士課程において美術学（工芸・工業デザイン）を専修する。その後、東京教育大学は移転し筑波大学となる。

1974年4月に神戸大学教育学部の助手に採用される。それ以降、講師、助教授、教授へ昇格。主としてプロダクト・デザインの実技とデザイン史の講義を担当する。組織としての教育学部は、職を得てしばらくしたのち発達科学部に改組され、さらに現在は、国際文化学部との統合により、国際人間科学部へと改称。

在職中、学内にあっては、神戸大学附属図書館副館長を務め、学外にあっては、大阪教育大学教育学部、長崎大学教育学部、国立高岡短期大学（現在の富山大学芸術文化学部）、および静岡文化芸術大学デザイン学部等で、非常勤講師として「デザイン史」の集中講義に長年従事する。また、海外においては、1995年に、ロンドンのウィリアム・モリス協会が本部を置く〈ケルムスコット・ハウス〉にて招待講演を行ない、さらに2010年には、上海の華東理工大学美術・デザイン・メディア学部に招かれて二日間の連続講演を行なう。

他方、1987-88年にブリティッシュ・カウンシル（British Council）のフェローとして、続いて1995-96年に文部省（現在の文部科学省）の長期在外研究員として渡英し、主として王立美術大学（Royal College of Art）とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）を利用して英国デザインの歴史研究に当たる。

1987年から2013年まで英国のデザイン史学会（Design History Society）の会員。2003-14年、ブライトン大学客員教授（Visiting Professor at the University of Brighton）。また、2008年に学術雑誌 *The Journal of Modern Craft*（Berg Publishers, Oxford）が創刊されたおりには、国際諮問委員会（International Advisory Board）の委員を務める。

2013年3月に定年により神戸大学を退職し、それ以降、阿蘇山中の庵に蟄居し、執筆活動に専念する。専門はデザイン史学。

現在、神戸大学名誉教授、博士（学術）。英国にあっては、王立芸術協会（Royal Society of Arts）の終身会員（Life Fellow）、およびウィリアム・モリス協会（William Morris Society）の終身会員（Life Member）。

訳書（共訳を含む）に、ノエル・キャリントン『英国のインダストリアル・デザイン』（晶文社、1983年）、ハワード・ヒバード『ミケランジェロ』（法政大学出版局、1986年）、ステュアート・マクドナルド『美術教育の歴史と哲学』（玉川大学出版部、1990年、鹿島美術財団出版援助図書）、アヴリル・ブレイク編『デザイン論——ミッシェル・ブラックの世界』（法政大学出版局、1992年）、ジャン・マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』（晶文社、1993年）、およびポール・グリーンハルジュ編『デザインのモダニズム』（鹿島出版会、1997年）。

中山修一著作集 1 3

南阿蘇白雲夢想

第一部

詩歌の夢の響き（詩歌集）

2023 年 8 月

著作集 13 『南阿蘇白雲夢想』
第一部 詩歌の夢の響き（詩歌集）
目 次

中山修一著作集 13
南阿蘇白雲夢想

第一部
詩歌の夢の響き（詩歌集）

目 次

序に代えて	三
第一編 自然を讃えて	四
第二編 人生を見つめて	一三
第三編 亡き歌姫たちへ捧ぐ	二二

序に代えて

この、著作集 13 『南阿蘇白雲夢想』の第一部「詩歌の夢の響き（詩歌集）」は、現在、「目次」にもありますように、以下の三つの編から構成されています。

- 第一編 自然を讃えて
- 第二編 人生を見つめて
- 第三編 亡き歌姫たちへ捧ぐ

かつて私は、流行歌（演歌）の作詞家に憧れたことがありました。無分別なことに気づいたのはのちのことで、そのときは、学术论文の執筆とは異なり、いっさい資料を必要とせず、実証も論証も問われることなく、紙と鉛筆だけでできる最も省力化された表現形式とばかり、単純にも思っていたからです。しかし、無分別さに気づいたあとも、その魅力や魔力は尽きるものではなく、どうやらいまも私の体内に残存していたようです。この著作集 13 『南阿蘇白雲夢想』の第一部「詩歌の夢の響き（詩歌集）」は、ご覧のように、「自然」「人生」「歌姫」を主題にした私にとりましての、いわば近年の「心情の記録」です。大事な記憶が遠ざかる前に、したためておきたいと思います。

（二〇二三年中秋）

第一編 自然を讃えて

[001]

人の言葉にまさるもの
花の香 虫の音 葉の緑
そっと近づき 耳をそばだてる

[002]

たそがれに
一路行くなり
黙の蟻

[003]

ガラス窓に差し込む木漏れ日
風に揺らぐ木々の動きに合わせて
陰影の波が生じる

窓を開けてみる
紅葉を控えた木々の葉が
静かにその時を待っていた

[004]

風が木々に息を吹きかける
葉は惜しげもなく乱れ散る

落ちた葉は雨の露をためる
装った大地が天空を照らす

[005]

猿が木々を揺らし
蛇が草むらを這う

池に水鳥が舞い降り
呼べば狸が寄って来る

[006]

晩秋に
色見の一灯
ここにあり

[007]

雲が流れる
風が流れる
川も流れる

はじめもなく 終わりもなく

鳥が帰る
虫が帰る
牛も帰る

温かい 住処のなかへ

日が沈み
月が昇り
星が輝く

この世のすべてを 見守るように

[008]

少し前までは にぎやかに
どんぐりの実が 屋根をたたいていた

それからしばらくたって いまは
乾いた木々の葉が 屋根を転がり落ちていく

手つかずの雪が 静かに屋根を覆う
もうそこまで その日が近づいている

[009]

寝湯に身を伸ばす

湯煙が風に舞い上がり
色づいた山の葉と戯れながら
灰色の雲に吸い込まれていく

[010]

女湯と男湯を隔てる笹垣に
交わって
さざんか二輪が咲いていた

[011]

乾いた風が無情にも
紅い葉っぱを吹き散らす
冬の支度に余念なく

冷たい雨が容赦なく
紅い葉っぱを地に落とす
明日降る雪にせがまれて

[012]

寒九来て
裸の木々に
めぐみ雨

[013]

日が昇り
冠雪の山肌を輝き照らす
牧場の馬は凜と立ち
日の光に息を吹きかける

[014]

雲海に包まれ
阿蘇の山々がその身を隠し
田畑も生き物も息を潜める
深く静かに時は止まる

[015]

雪が降り 山道に積もる
轍ができ 靴跡が残る
日が出て すべてを消し去る
何もなかったように

[016]

大寒の
雨に潤う
木肌かな

[017]

露天の寝湯に 身を伸ばし
朝寝楽しむ 冬の阿蘇
閉じた瞼に 光射し
白雲夢想 消えにけり

[018]

奥山に
みやび一輪
寒椿

厳寒の
一輪暮らし
静かなり

寒椿
人は人なり
我は我

[019]

厳冬のなかにも
綿菓子のような
やわらかい日和あり
ありがたきかな

[020]

里山の
みぞれ降り散る
立春に
鶯いずこ
梅の香はるか

[021]

積もる雪
白いきつねの
肌に似て

つややかに
細く輝く
夜の明かり

風が舞い
吹き乱れる
そのなかで

積もった雪も
たゆむ枝から
消えてゆく

[022]

白雪の
宴のあとは
ほのぼのと
しずくとなりて
春を呼ぶ

[023]

寒卵
ごはんの上に
鎮座せり

[024]

雪とけて
小川のいのち
せせらぎぬ

[025]

雪しずく
わが身けずって
地に落ちる

[026]

山鳥の
春を望みて
友を呼ぶ

[027]

寒中の
森を駆け出す
小鹿たち

[028]

雪道を
いっしょに歩く
キジと我

[029]

セキレイの
声をあげての
雪遊び

[030]

花の舞い

散ってちらつく
月明かり

[031]
咲いて散りゆく山桜
素にして朴なり
羨まし

[032]
山里に
訪れし春
一心行

[033]
山月夜
桜の花が 湯煙を
誘い乱れて いま散り盛る

[034]
小雨降る
高森峠 九十九の
曲りを重ね 千本桜

[035]
朝霧に 静かに濡れる 森のなか
小鳥の息吹 いま聞こえる

[036]
たそがれて 雑木の森に
こころ向く
色香輝く 薔薇園に増し

[037]

風吹いて 木々が揺れ
木々揺れて 日差し舞う
雑木よ 何歌う
雑木よ 何を泣く

[038]

早朝に 杉の林を まっすぐに
射して分け入る 日の光

[039]

阿蘇五岳
初冠雪に
身を飾り
南郷谷に
光りさす

[040]

紅の葉は
雪と戯れ
杉静か

[041]

野 霜降り
山 朝焼ける
大阿蘇の
静かな祈り
大地にしみる

[042]

山桜 散るを悟りて風に舞う
花忍 青紫の衣にて人を待つ
彼岸花 阿蘇原頭を染めて立つ
寒椿 漆黒の闇に紅をひく

著作集 13 『南阿蘇白雲夢想』
第一部 詩歌の夢の響き（詩歌集）
第一編 自然を讀えて

[043]

気がつけば
西のかなたに
夕陽あり

[044]

美しき
阿蘇より出づる
日の光り
託麻の原に
いま降り注ぐ

第二編 人生を見つめて

[001]

追わず
求めず
止まらず

[002]

個人 個性 個戦
孤独 孤高 孤軍
ひたすら 個孤として生きる

[003]

死を愛さず
さりとして死を拒まず
生のままに立つ

[004]

地を見ず 天を仰がず
前を見ず 後ろを向かず
ただ 我が身をじっと見つめる

[005]

心にさざなみが立ち
想いが渦を巻く
夜光虫の輝きに抗うように
白く 泡音をたてながら

[006]

時に 忘れかけた人を思い出す
時に すれ違った人を振り返る
時に 明日会う人に語りかける
時の無邪気さ
憎むべきか 感謝すべきか

[007]

行きたければ 行くがいい
帰りたいければ 帰るがいい
誰も引き止めず
誰も悲しまず
虫だけが 木陰で 鳴いている

[008]

名を誇らず
力を驕らず

朝の空に おはよう
夕べの空に またあした

時を憂えず
人を恨まず

南の人に 暑くはないか
北の人に 寒くはないか

[009]

白い日傘にさえぎられ 日差しは中へ入れない
夜のとばりに囲まれて 中の様子はわからない
固い鎧に拒まれて 所在無く 名を呼んでみる

[010]

いつものように 日が昇り
いつもになく 涙する

いつものように 鳥が鳴き
いつもになく こころ乱れる

いつものように 花が咲き
いつもになく 血が落ちる

[011]

天を仰ぎみて
そう 目を伏せず そして語らず

地に立って
そう 逃げ出さず そして媚びず

人に交わって
そう 埋もれず そして目立たず

[012]

花の姿は 花には見えず
花の香りは 花に届かず

人の心は 人には見えず
人の想いは 人に届かず

[013]

天空に抱かれて
海を渡る
自分がある

草原に寝そべって
夢をかける
自分がある

人びとに交わって
愛を語る
自分がある

[014]

草をひく
小枝を落とす
集めて乾かす

煙が立ちのぼり

西へ流れて
夕日と交わる

[015]

独り善がりの一人芝居
自己満足と自己嫌悪
騒いでしまった愚かな自分だけが残った

[016]

背中に彫ったものは
人に見えて自分には見えず

胸に刻んだものは
自分に見えて人には見えず

[017]

人を
問いつめてはいけません

人を
追いつめてはいけません

人を
見つめてください
優しく 包み込むように

[018]

あわてず
あせらず
あきらめず

思いを込めて
遠くを見つめて
一步を踏みしめる

[019]

昇りゆく朝日に照らされて 露天風呂
森羅万象 すべての命が蘇える
ああ この世のよろこびよ

暮れなずむ夕日に抱かれて 露天風呂
時空千里 すべての営為が沈みゆく
ああ この世のせつなさよ

[020]

白煙に思う 人の業
湯煙に思う 人の情

彼岸花 まっすぐ赤く 畔に咲き
どんぐり 音をたてて 屋根に散る

問わず語らず 夢化粧
触れず触らず 夢衣装

[021]

大阿蘇をわがものとして生きる
風が吹き 雨が降り 虹が出る

今日も 変わることなし わが大阿蘇よ
明日も 代わるものなし わが大阿蘇よ

[022]

愛したくとも
愛する人を失った人がいる
いかに支えればいいのか
同じ想いを重ねてみる

生きたくとも
生きる場を失った人がいる
ああ どのような言葉も消えてゆく
そっと隣に座る

[023]

話したくても 話せないとき
泣きたくても 泣けないとき
死にたくても 死ねないとき

心に闇が生まれ 抗いが起こる
いつしか 光に照らされながら
諦観と自脱 すべてが無に帰る

[024]

柱時計が時を刻む
時刻には鐘が鳴る

一緒に数を数える
一で始まり一二まで数える

一で始まり一で終わるとき
無限の空白が続く

[025]

心平の わんわんわんが 迫りくる
いまなお続く 阿蘇の大地に

[026]

漱石を 尋ね求めて 内牧
二百十日の 恵比寿はありや

[027]

家がたち
くれない染まる森のなか
あすのいのちを
ひそかに願う

[028]

山の上
紅いもみじに照らされて
契りを交わし
いま並び立つ

[029]
震災に
娘の春を
そっと見る

[030]
かの山は 春夏秋冬 色変わり
住む人同じ 移り気ありや

[031]
春眠や
とろりとろりと
夢ん中

[032]
春眠や
生まれはじめへ
里帰り

[033]
春の日に
忘れかけてた
眠りかな

[034]
何もなく
素足で駆け出す
子どもかな

[035]

母を見て
飛び出す子どもは
素足なり

[036]

素足見る
痛みと土の
香りかな

[037]

やってはいけないことは 決してしない
どんなに誘惑があろうとも

やるべきことは 断固やる
どんなに困難があろうとも

流れゆく、心清くに 身を正す
さまよえる、心熱くに、身を立てる

[038]

自分を思うように
他の人を思いなさい

他の人を大事にするように
自分を大事にしなさい

[039]

苦に向かい
わが身は常に
夢に在り

泣きぬれて
わが身は常に
夢に在り

著作集 1 3 『南阿蘇白雲夢想』
第一部 詩歌の夢の響き（詩歌集）
第二編 人生を見つめて

生きて死ぬ
わが身は常に
夢に在り

[040]
夏休み
解かずに眺むる
参考書

[041]
八月に
会えて悲しや
虫が鳴く

第三編 亡き歌姫たちへ捧ぐ

[001]

そんな顔をして どうしたの
いつものあなたとは 違っているわ

そんな顔をして どうしたの
野辺の花のように 笑ってほしい

[002]

誰かが言っていた
酒は飲むものではなく 酔うためのものだ
そう
水を飲めば からだが生き返り
酒に酔えば こころが蘇える

[003]

小雨が降る降る 湯船をたたく
阿蘇の五岳に わが身をゆだね
流れた月日を 愛しむように
いつか夢見た 御神火の里

小雪が舞う舞う 湯船に消える
阿蘇の噴火を 遠くに眺め
帰らぬ月日を 求めるように
やって来ました 火の山の里

[004]

涙こらえて 西の彼方を見上げれば
消える 消える あなたが消える
手を伸ばしても 届かぬ想い

こころ尽くして いのち燃やして
ああ 離れたくない
飛翔千里 恋心

潤む瞳で 飛び立つ空を見送れば
見えぬ 見えぬ あなたが見えぬ
手を握りしめ 震える体

こころ与えて いのち削って
ああ 放したくない
飛翔千里 恋心

[005]

思いきれもきれないも
晴れぬ想いを噛みしめながら
曇る窓辺に問いかける
秘めて訪ねたひとり宿

小雨ちらつく火の山よ
私の心を
焼いて 焼いて 焼いてほしい
女意気地のやるせなさ

別れきれもきれないも
迷う気持ちを捨て去りながら
飲めぬお酒に涙する
紅く燃え立つひとり宿

小雪舞い散る火の山よ
私の体を
抱いて 抱いて 抱いてほしい
女未練のいとおしさ

[006]

からすが鳴いて
いつしか雪が舞い落ちる

景色が消えて
気づくと風が迫りくる

過去は悔悟と夢のなか
今は不安と夢のなか

[007]

晩秋の朝の陽ざしに手をかざし
空が高くて空気が甘いと
その少女は自分の故郷と重ね合わせる

ホームにたたずみ彼を待つその少女は
泣けない女のやさしい気持ちを
誰はばかることなく大きな声で歌う

その少女は午後の紅茶をほほにあて
会いたいのは温めることと
独りうなずきさりげなく笑う

[008]

世捨て人の子守歌

一.

泣かずに 坊や 寝んねしな
あんたにや かあちゃん いないから
あたいが 代わりに 歌うたる
はい はい はいーい
すべてを忘れ 好きなだけ
あたいの乳を 飲むがいい

二.

笑って 坊や 寝んねしな
あんたにや とうちゃん いないから
あたいが 代わりに 聞いてやる
はい はい はいーい
すべてを捨てて 思い切り
あんたの悲しみ いうがいい

三.

夢見て 坊や 寝んねしな
あんたにや にいちゃん いないから
あたいが 代わりに 遊んだる
はい はい はいーい

すべてを止めて いますぐに
木戸の外に 出るがいい

[009]

悲しみ抱きしめて

一.

この世の悲しみ 抱きしめて
多くを語らず 黙々と
濡れた心が 震え出す

二.

この世の辛さを 握りしめ
涙を流さず 散々と
耐える思いが 地に落ちる

三.

この世の暗さに 閉ざされて
行く手を失い ひしひしと
流れる星に 手を伸ばす

[010]

かきつばた
はじめて会うは
誰々か
人に交じりて
吾訪れん

中山修一著作集 1 3

南阿蘇白雲夢想

第二部

南阿蘇の庵にて（日誌集）

2023 年 12 月

著作集 13 『南阿蘇白雲夢想』
第二部 南阿蘇の庵にて（日誌集）
目 次

中山修一著作集 13
南阿蘇白雲夢想

第二部
南阿蘇の庵にて（日誌集）

目 次

序に代えて	三
第一編 二〇一六（平成二八）年——地震と心筋梗塞が襲う	四
第二編 二〇一七（平成二九）年——生活の再生を願う	七
第三編 二〇一八（平成三〇）年——古希を迎える	一三
第四編 二〇一九（平成三一／令和元）年——執筆が軌道に乗る	二八
第五編 二〇二〇（令和二）年——六回目の年男	五一
第六編 二〇二一（令和三）年——コロナウイルス感染症の二年目	七六
第七編 二〇二二（令和四）年——平穏な一年を念願する	九七
第八編 二〇二三（令和五）年——神戸大学定年退職から一〇年	一二一

序に代えて

この、著作集 13『南阿蘇白雲夢想』の第二部「南阿蘇の庵にて（日誌集）」は、現在、「目次」にもありますように、以下の八つの編から構成されています。

- 第一編 二〇一六（平成二八）年——地震と心筋梗塞が襲う
- 第二編 二〇一七（平成二九）年——生活の再生を願う
- 第三編 二〇一八（平成三〇）年——古希を迎える
- 第四編 二〇一九（平成三一／令和元）年——執筆が軌道に乗る
- 第五編 二〇二〇（令和二）年——六回目の年男
- 第六編 二〇二一（令和三）年——コロナウイルス感染症の二年目
- 第七編 二〇二二（令和四）年——平穏な一年を念願する
- 第八編 二〇二三（令和五）年——神戸大学定年退職から一〇年

小学生のころの私は、よく日記を書いていました。そうした習慣がまだ体内に残っていたようです。この著作集 13『南阿蘇白雲夢想』の第二部「南阿蘇の庵にて（日誌集）」は、ご覧のように、一年ごとに編集した私にとりましての、いわば近年の「日常の記録」です。気持ちや視点の移ろいや変化、停滞や固執などが結果としてにじみ出ています。大事な記憶が遠ざかる前に、したためておきたいと思います。

（二〇二三年初春）

第一編 二〇一六（平成二八）年——地震と心筋梗塞が襲う

一．サルの大家族（年賀状）

新年 あけまして おめでとうございます

秋の暖かなある日のこと、増築した平屋部分の屋根をドンドンとたたく音に気づき、そつと二階に上がり、窓越しからのぞいてみました。

見ると驚くことに、十数匹の猿の群れが思い思いにジャンプを繰り返し、あたかもそれは、輪になって楽しそうにダンスをしているような光景でした。しかしお父さん猿と思しき恰幅のいい猿だけは、一番高いところに陣取り、悠然と毛繕いをしていました。

一方、隣の空き地では、同じく一〇匹くらいの猿たちが、歩き回りながら草木の果実に手をのばし、せっせと口に運んでいました。そのなかのお母さん猿をよく見ると、背中に子猿を乗せ、その胸には生まれたばかりのような幼子が上手にしがみついていた。

そうするうちに、毛繕いが終わったのか、それとも遊戯と食事に満足したのか、お父さん猿の合図のもと、サーカスさながらに、枝から枝へと飛び移りながら、全員一気に森のなかへと姿を消していきました。

穏やかなお正月をお迎えのことと思います。

本年のご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。

二〇一六年 元旦

二．書斎に向ってみる

数日前の地震は、少し揺れを感じましたが、大丈夫でした。今日の夜ころから台風が接近し上陸するとのことですが、いまはまだ風もなく、未明からの雨も止んでいる状態です。

テレビや電話を置いている棚の下には、いままで研究用の資料を入れていましたが、今回の模様替えと大掃除で、この空間に防災関連用品（食料も含む）を入れることにして、先日すべて整いました。また停電に備えて発電機も購入しました。発電のためのエネルギーは、日常家庭で使っている LP ガスです。停電した場合、ウッドデッキに発電機を部屋から持ち出し、壁に設置していますガス栓と結び、発電機を作動させます。発電した電気は、外壁と内壁を通過して室内へ通じるように配線ができています。最大で九〇〇W まで使用可能です。

昨日は、フェフェちゃんを大津町にある病院兼美容院兼ホテルへ連れて行きました。かさぶたが取れて、すっきりした顔になりました。歯槽膿漏が原因なのですが、高齢ですので抜歯ができません。それで対処療法になりますが、薬を飲みながら、定期的に通院し、患部を清潔にする必要があります。片道一時間で、二往復しましたので、昨日は四時間運転したことになります。少し疲れましたが、このようにだいぶ体力も回復してきているようです。

先日、久しぶりに書斎に向かって原稿を書きました。いままではそうした気持ちは起こらなかったのですが、気力も回復しつつあるようです。原稿は、熊本高校卒業五〇周年記

念誌への寄稿文です。来年の三月で高校を卒業して五〇年になります。本当に月日の流れは早いものです。

三．不安と備え

九月二八日に検診のために近くの馬原内科医院に行きました。とくに問題になるような点はありませんでした。ただ、この間ときどき胸痛が自覚されましたので、そのことを伝えたと、心臓自体に異常があるわけではないので、再び心筋梗塞に襲われるのではないかと、心臓が止まるのではないかと、強い不安やストレスが続くと、狭心症に似た痛みが現われるが、その痛みは、感じ方や場所、持続性において狭心症とは異なり、心臓神経症と呼ばれる心の問題だといわれました。

私は、狭心症か心筋梗塞の前兆のような軽度の症状ではないかと勝手に思い込み、二三日に予定していた奈良県立美術館での富本憲吉展の見学もあきらめてしまっていたのですが、神経症的な胸痛であったのであれば、少し無理をしてでも、展覧会に行けばよかったと、後悔しているところです。残念なことをしてしまいました。その後胸痛は現われていません。やはり、心配や不安から来る痛みだったようです。再発のことなど、あまり神経質に考えず、楽天的に日々を送るのがいい結果につながってゆくのかもしれません。

地震以降、病気により体力が低下したこともあり、ほとんど家のことができないでいましたが、やっと居室、地下倉庫、庭や側溝などの手入れと片づけが終了しました。「断捨離」の言葉どおりに、不要なものは思い切り廃棄しました。また、先日は、地震で傷んだ外壁とウッドデッキの補修を業者に依頼し、それも完了しました。一方この間、防災関連の備品や備蓄食品についても、すべて準備が整い、災害に備えることができました。これで、一応気になっていた家のことがすべて終了しました。一〇月を迎え、新たな気持ちで快適な生活をはじめています。

四．秋の訪れ

山荘の木々の落葉は一〇月くらいからはじまりますが、一一月の中旬から下旬にかけて紅葉がもっともきれいになります。その後、色づいた葉が散り、庭一面が紅や黄色の落ち葉で覆われ、まさしくじゅうたんを敷き詰めたようになります。桜の四月と紅葉の一一月が、山荘の庭がもっとも輝く、ぜいたくな季節です。

高森町主催の大阿蘇絵画展も今年で二六回になりました。私の父は最初から出品していますが、今年の作品は「入賞」に輝きました。展覧会カタログには、図版が掲載され、父の絵に対する審査員の方のていねいなコメントも読むことができます。一日一三日が表彰式でしたが、私が代理で出席し、賞状と賞金を受け取ってきました。

心筋梗塞から六箇月が立ち、一一月二八日に、手術をした済生会熊本病院へ行きました。心臓エコー、心電図に異常はなく、血液検査も適切な数値を示し、順調に回復しているとのことでした。一二月一九日に再度来院し、今度は一泊二日で、カテーテルを入れて、ステントの状態を確認する予定です。

一〇月ころから生活のリズムも少しずつ一定化し、本来の学者生活を再開しています。まずは、無理をしない程度に、現在のホームページ「中山修一著作集」（本巻二巻別巻二巻）の将来に向けての構成の見直しからはじめようと思っています。

五．震災を越えて

一二月一九日に一泊入院で、カテーテル検査をしました。右のリストからカテーテルを心臓の冠動脈まで入れて、留置したステントの状態や、ほかに心筋梗塞を起こしそうな血管がないかを画像によって確認する検査です。結果は、異状なく、順調に回復しているとのことでした。心筋梗塞の死亡率は、発生段階で三割、退院一年以内に一割といわれていますが、何とかこの危険性を回避できたようです。次は、来年の六月三〇日に再び済生会熊本病院へ行き、心電図や心臓エコー、血液検査などをして、問題がなければ、済生会病院での術後の検査はこれで終了し、あとはいままでどおり、地元の病院（馬原内科医院）へ四週間おきに通院し、お薬をもらいながら、様子をみてゆくことになります。

麒麟「午後の紅茶」のテレビ CM「あいたって、あたためたいだ。」——このロケが南阿蘇鉄道の高森駅からひとつ目の見晴台駅で行なわれ、いまときどきテレビで見ることができます。ヒロインは上白石萌歌さんという高校生の女優さんです。熊本地震のあと、とくにそれに触れずに、さりげなく南阿蘇を応援してくれていることを知るにつけ、心が温まります。南阿蘇村のホームページの「新着更新情報」の二〇一六年一二月六日更新の項目にそのことが詳しく紹介され、実際の CM と CM メイキング映像を見ることができます。

第二編 二〇一七（平成二九）年——生活の再生を願う

一．道を失った鳥（年賀状）

新年 あけまして おめでとうございます

小雨に煙る春の日の午後のことでした。ロッキングチェアに座り、窓を通してぼんやりと、新しい芽をつけはじめたばかりの庭の木々を眺めていました。するとそのときです。ドーンと衝撃音がするなり、一瞬の間をおいて白いものが何枚もひらひらと舞い落ちてきました。どうやら、二階の外壁に一羽の鳥がぶつかったようです。ウッドデッキに出てみました。しかし、鳥の姿はなく、大小の産毛のような羽根だけが一面に広がっていました。この時期になると、鳥をはじめ小動物の活動が活発になります。元気に巣を飛び立ったものの、春雨に遮られ、一瞬視界を失ったのでしょう。無事に巣まで帰ることができていたらしいのですが。

それからしばらくして、私の住む熊本を大きな地震が襲いました。さらにそれから一箇月と立たないうちに、今度は激しい痛みが私の胸部を……心筋梗塞でした。いま、双方の痛手から心身ともに立ち直り、やっと本来の執筆者生活を取り戻そうとしているところです。

穏やかなお正月をお迎えのことと思います。

本年のご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。

二〇一七年 元旦

二．結露が凍り、寒波が来る

先月、二〇一六年一二月。外気の温度が氷点下になると、部屋のガラス窓に結露が生じます。ある朝のこと、はじめて氷点下四度まで下がりました。お昼前に二階に上がってみると、結露が窓ガラスの下のところに溜まり、それが氷となっていました。ということは、二階の室温も、氷点下まで下がったのかもしれません。年を重ねると、階段の上り下りが大変になると聞いていましたので、生活はすべて一階でできるように、この夏、模様替えと荷物の整理をしていますので、普段はほとんど二階へ行くことはないのですが、結露が凍る現象には、いささかびっくりしました。

今月、二〇一七年一月。西日本、北陸、東日本、北海道の、とくに日本海側は寒波に見舞われ、大雪が降りました。こちら阿蘇のそのときの様子を描写します。二〇日の朝から雪が降りはじめました。降りながら溶けていく雪もあり、大きく積もる様子はありませんでしたが、念のために、夕方、下の農業道路のガード下まで車を移動しました。朝起きて下界を見ると、わずかながら雪化粧をしていました。しかし、スタッドレスタイヤで対応できる範囲の積雪でしたので、家までもってきても大丈夫だったかもしれません。二一日も二二日も同じ感じで、夕方、車をガード下に移動しました。二三日と二四日は、雪は大したことはなかったのですが、牧野道が凍結したため、これも安全確保を優先して、終日ガード下に置くことにしました。車を下に置くと、牧野道の上り下りは徒歩になります。片道一五分程度です。たどり着くころには、体が温まり、湯気が出てくる感じです。

医者から、一日三〇分程度のウォーキングを勧められていたので、ちょうどいい運動になりました。しかし、この間気温は、最低気温が氷点下一〇度まで下がりました。また、一日中氷点下の日もありました。このような日は、外に出ると、寒いという感じを通り越して、体が凍ってゆく感じです。部屋のなかは、いつも二〇度程度に設定していますので、寒さからは無縁の快適空間です。こうした寒波は、これまでの経験ですと、二月にも、もう一度来そうです。九州といえども、北国の冬に近いものがあります。この季節は、スマホに設定している天気概況をいつも確認する毎日です。

三. 越冬から早春へ

一月一七日、お隣の南阿蘇村にあります病院で、胃と大腸の内視鏡検査を受けました。結果は、胃については少し炎症を起こしている箇所がある程度で問題はなく、大腸は、良性のポリープを三箇所切除したものの、こちらのがんとは無関係でした。もしこれからがんが発生するとしても、それが確認できるほどの大きさになるには五年くらいかかるらしく、そのため、また五年後くらいに内視鏡を入れて、検査をしようと思っています。これで、胃と大腸のがんの心配もなく、また、昨年一二月のカテーテル検査で心筋梗塞の再発の可能性も見当たらず、いま全くの健康体を維持している状態です。論文執筆を中心とした規則正しい生活と食事に対する万全の配慮の結果ではないかと考えています。

二月九日はフェフェの誕生日でした。ちょうど満一四歳です。人間でいえば、私より少し年上です。二日に、大津にある病院兼美容院へ連れていきました。カットとシャンプーをしてもらい、かさぶたができそうになったときに飲む抗生剤と、足腰の健康を維持するサプリメントを出してもらいました。元気にしています。

二月も一度寒波がきました。九日から一日までの三日間、車は下のガード下に置き、牧野道を徒歩で登り降りしました。去年もそうでしたが、一月と二月に一度ずつ寒波が来るようです。もうその生活にすっかり慣れたといった感じです。この数日、少し暖かくなり、最低気温が氷点下になる日が少なくなりました。春の近づく音が、聞こえてくるようです。

三月に入り、玄関の階段を上る左手に福寿草が数日前から咲きはじめました。春に向かって一步一步進んでいる感じがします。

四. グーちゃんとの別れと遅い桜

三月三十一日、妹一家のグーちゃんが亡くなりました。だんだん体調が好ましくなくなり、近くの病院に入院中の出来事で、一七歳でした。フェフェちゃんはいま一四歳です。やはり足腰が少し弱ってきたように感じます。しかし、食欲もあり、便も規則正しく、健康です。体の衰えは、ワンちゃんであろうと避けて通ることはできませんが、フェフェちゃんの残りの人生にしっかり寄り添い、一日一日を大切に過ごしたいと思っています。

三月に入ってから、少し雪やあられが降ったりして、気温が上がらなかったせいか、桜の開花が遅れています。一心行の大桜もわが家の桜も、まだつぼみで、開花までには少々時間がかかりそうです。そうしたなか、すでに予定が組まれていた阿蘇南部江原会

（高校の同窓会）の花見がありました。場所は、いつものように、南阿蘇村の藤本医院の庭でした。桜も咲いておらず、少し肌寒く、途中で雨が降ってくるなど、あまり恵まれた花見にはなりませんでしたが、しかし、被災地支援の一環としてインド舞踊のグループが、藤本先生のご厚意で招待されており、はじめて見ることができました。桜の花の下であれば、もっとよかったですのですが、それでも十分感動的でした。

五. 庭づくり

本格的な春が来ました。今年は冬の寒さが少し長く続いたせい、春が来るのが一、二週間くらい遅く、桜も遅れて咲き、散るのもあつという間でした。先日から毎日少しずつ庭の手入れをはじめています。まず、昨年末の最後の落ち葉を集め、一輪車で運んで、沢側ののり面の杉林に捨てる作業です。数日かかりました。次に、植木鉢（大小二十鉢くらいあります。）に新しい土を入れ、植物を植える作業です。マリーゴールドやニワ（庭）ダリア、アジサイなど、さまざまな花をナフコで買いました。最後に、庭のイスやテーブルの水洗いと、側溝の清掃です。いまほぼ計画の八分どおりできました。連休中には完了予定です。ここまでできると、あとは日々の手入れになります。

四月末には、庭のシャクナゲが咲き、そのあと五月に入ると、ミヤコワスレが玄関周りに一斉に咲き出しました。去年は、数株程度だったのですが、今年は群生の様子を呈しています。なぜこのようにたくさん生育したのか、その理由はわかりませんが、とても清楚な小さな花を咲かせ、毎日楽しんでます。もうしばらくするとヤマ（山）アジサイが咲きはじめます。これも楽しみです。

毎年この時期に、南阿蘇村と高森町に在住の五、六人が企画して、自分のお庭を一般公開する「オープン・ガーデン」が開催されます。先日の日曜日に、三軒のお庭を見学に行ってきました。私にとって、今後自分の庭をどうつくるかが大きなテーマで、「オープン・ガーデン」へ行くのは、そのヒントを探すためです。この山荘の庭は、あまり日当たりがよくないので、それに適した庭づくりが必要なのですが、今後時間をかけながら、つくっていきたいと思っています。周囲の森では、最近朝夕、カッコウがよく鳴きます。とても大きな声です。これも自然の恵みだと思い、うれしくて、しばし聞き入っています。

六. 健康状態

心筋梗塞を発症したのは、去年の五月でしたので、ちょうど一年が過ぎ、六月三〇日に、手術をした済生会熊本病院で、心臓エコー、心電図、レントゲン、血液検査をしました。結果はすべて順調に回復しているとのことでした。去年のいまころは、心臓に負担がかかるため、二階に上がることも、水の入ったバケツや重いレジ袋ももてず、不安な生活を強いられていましたが、この一年ですっかり体力がもどり、健康に対する自信もついてきました。これで、済生会病院での定期検査は終わり、今後は、いままでどおり、高森町内の馬原内科医院で四週間ごとに診察を受け、お薬（四種類）を処方してもらうことになります。

フェフェも、歯周病でこの一年、お薬を飲んでいましたが、先月の診察で、少し心臓も弱ってきているようで、こちらのお薬も飲みはじめました。この二月で、平均寿命の一四歳の誕生日をすでに迎えており、人間でいえば、八〇歳に近い高齢になってきました。食欲は変わりません。よく食べてくれます。しかし、いつかは最後の日が来ると思います。その日が来たら、ペット霊園にもっていくのではなく、この庭に土葬して、日々花で飾ってあげたいと思っています。

七. 防災

九月一日は「防災の日」です。この日は、一九二三（大正一二）年九月一日に発生した関東大震災に因んでいます。熊本地震を経験して、防災意識が高まっていた、ちょうど一年前の夏でした。テレビや電話を置いているカウンターの下の空間を防災用の備品や備蓄品を置く棚に改装しました。そのとき、避難所（あるいは病院）へもっていく用品や、ラジオ、懐中電灯、テーブルランプ（電池対応）、ヘルメットなどの備品類、飲料水や食料品やコンロなどの備蓄品、それに加えて、発電機などをそろえました。それ以降、これらの品々を、毎月一日にチェックします。乾電池は切れていないか、食料はすべてそろっているか、あるいは賞味期限が切れていないか、発電機は作動するか。今日が一日ですので、午後からそのチェックをしようと思っています。今年も至る所で、雨による自然災害がすでに発生しています。そしてまた、これから台風の季節を迎えます。それが終わると、積雪の厳冬です。備えを怠らないようにしながら、日々自然と向き合わなければなりません。

八. もう秋です

一年前のこの時期を思い出しますと、やっと退院ができたところで、まだほとんど研究活動ができない状態にあり、一番苦しい生活をしていました。しかしそれでも少しずつ、段ボールを開き、資料をウッドデッキに並べて虫干しをし、仕事ができるように書斎を整えてゆきました。体が回復し出して、実際に机に向かうことができるようになり、本格的にパソコンのキーボードをたたけるようになったのは、年が明けた、今年のお正月ころからでした。三月末には、地震の影響で閉館していた熊本県立図書館も業務を再開しました。こうして執筆活動が軌道に乗りはじめました。いまは、だいたい二週間ごとに県立図書館に行きます。この図書館に収蔵されていない資料は、東京の国立国会図書館へ依頼して、複写物を送ってもらいます。大自然のなか、思考と執筆に明け暮れる、学者として何とぜいたくな日々か、改めて充足感を味わっています。現在、著作集4「富本憲吉と一枝の近代の家族（下）」を執筆中です。

南阿蘇村のホームページ「新着更新情報」（八月二一日更新）で、「キリン午後の紅茶」復興支援 TVCM「おちつけ、恋心」の動画を見ることができます。前回は、南阿蘇鉄道の見晴台駅が舞台でしたが、この第二弾の夏バージョンは、同じ南阿蘇村の白川水源です。主役は同じ、高校生の上白石萌歌さんです。現在オンエア中。その動画を見て、ロケ地の白川水源に行ってきました。早朝だったので、誰も人はおらず、朝もやがかかってお

り、とても幻想的でした。

こちらの夏は、気温が三〇度を超えることはほとんどなく、エアコンも、雨が多く蒸し暑く感じるときに「除湿」として使うくらいです。八月のお盆を過ぎたところから、今年の夏も終わったようで、朝夕、少し肌寒く感じるようになりました。ウッドデッキや庭には、色づいた落ち葉をもう見るができます。こうした山のなかには、一年を通して、気温の変化だけではなく、風や雨や雪の移り変わりも楽しむことができますし、鳥や虫の声の変化、木々や花の色の移り変わりも、肌で感じるができます。これは、自然のなかに、暑さ寒さのみならず、色や音が隠されているということでしょうか。詩や美術が生まれるゆえんもここにあるのかもしれない。

九. フェフェちゃんの旅立ち

今日は、悲しいお知らせです。フェフェちゃんが旅立ちました。

九月二七日（水）。いつも朝の五時ころに、フェフェの顔を拭いて、三種類のお薬を飲ませて、点眼して、パンとバナナを手に乗せて食べさせるのが日課になっていたのですが、この日はお薬も飲もうとせず、好きなバナナも食べようとしませんでした。

九月二八日（木）。この日も、同じでした。病院に連絡し先生と話したのですが、点滴をすることはできるが、数日の延命にしかならないとのことでしたので、自分で看取る覚悟を決めました。だっこしたり、ベッドに寝かせたりしながら、ずっと一緒にいました。涙が止まりませんでした。ベッドではよく寝ていました。目を覚ますと、庭の方をじっと眺めている様子でした。何か見納めにしようとしている感じでした。とても穏やかで、息苦しそうにするわけでも、何か痛みがあるようでもなく、落ち着いた静かな時間が過ぎていきました。夕方、「わんわん、わんわん」という鳴き声を二度繰り返しました。いままでに聞いたことのない、何か楽園にでもいそうな小鳥のような鳴き声で、とても澄んだ美しい声でした。いまにして思えば、これが別れのあいさつだったのかもしれない。夜中、目が覚めました。フェフェを見にいきました。静かに横たわり、もう息はありませんでした。一四歳と七箇月の命でした。

九月二九日（金）。ずっとフェフェのそばにいました。病院にも電話をし、先生に報告をし、お礼をいいました。茶毘の用意をしました。庭に穴を掘り、底にブロックを置きました。木棺として、ふたつあったひとつの救急箱をあてることにしました。

九月三〇日（土）。フェフェちゃんのおもちゃや服など、いつも気にかけてくれていた妹に電話で知らせました。木棺にフェフェを入れ、首輪やうりぼうなどの遊び道具も一緒に入れました。野の花を摘み、中に入れる準備も整ったとき、妹からメールが入り、お別れに来たいということでした。もうすぐ夫婦でこちらに着くものと思います。着きましたら、フェフェにお別れをいってもらい、そのあと、みんなで、茶毘にふしたいと思います。

かけがえのない家族の一員でした。とても悲しく、寂しく思います。苦しむこともなく、安らかな美しい顔をしての、見事な旅立ちでした。感謝しています。本当に、フェフェ、ありがとう！

一〇．紅葉の季節に向けて

九月二十八日に亡くなって、一箇月が立ちました。土のなかで、いまどうしているのかなあ、と思いながら、野の花を飾って、話しかけます。土葬ですので、亡き骸はいつかはこの大自然に帰っていくと思います。元気なあいだは、このように花を絶やすことなく話しかけながら、フェフェちゃんと過ごしていきたいと思っています。

山の紅葉は、一月中旬から下旬にかけてが見ごろとなります。去年の紅葉は、例年にましてきれいだったので、写真にとって、ホームページ「中山修一著作集」に掲載しました。今年は、二週間続けて台風が来たために、色づこうとしていた葉っぱを散らしてしまいました。そのため、今年の紅葉がどうなるのか、心配しています。少しまばらな紅葉になるかもしれません。台風は、葉や小枝を、庭やウッドデッキの一面にたくさん散らします。その片づけが大変です。雨に濡れていると、くっついてうまく集められませんので、乾いたあとの作業になります。二、三日かかりますが、体が温まり、気分転換にもなり、健康にもいいようです。

今年も、高森町主催の大阿蘇絵画展で父の絵が入選しました。九四歳の作品です。十一月一二日（日）の最終日に、妹夫婦と一緒に、両親が来ました。町役場の職員の人たちも、とても感動していました。絵を見たあと、山荘で昼ご飯を食べました。庭の紅葉がきれいで、みんな楽しんでくれました。また、フェフェちゃんのお墓も参ってくれました。

一一．ウォーキング開始

心筋梗塞から一年半が立ちました。血液検査の数値（コレステロール、血糖、腎機能など）も血圧も、順調に回復しています。食生活の見直しと、温泉による湯治の効果だと思っています。そこで、次の健康増進のステップとしてウォーキングをはじめました。場所は、瑠璃温泉の西側にある南阿蘇村白水運動公園です。野球場が四面あり、その外周がウォーキング用のコースになっています。一周を五、六分で歩きます。雨が降っていなければ毎朝七時過ぎに家を出て、まず運動公園に行って三〇分くらいウォーキングをします。それから、八時に開館する瑠璃温泉に行きます。そのあと、アスカで買い物。必要に応じて、コインランドリー、郵便局、銀行、町役場、ごみ焼却施設などに立ち寄って、だいたい一〇時過ぎの帰宅です。これが最近の日課となっています。

いよいよ二〇一七年の最後の日になりました。毎年おせちは、ホテルや料亭から取り寄せます。今年は、銀座花蝶の和洋三段重です。雑煮は自分でつくります。だんだん上手になってきたように思います。明日の朝が楽しみです。明日の予定は、おせちと雑煮を食べたら、いつものように運動公園で三〇分くらいウォーキングをし、そのあと瑠璃温泉で新年の朝風呂を楽しみ、さらに、高森阿蘇神社、上色見の熊野座神社、地元色見の熊野座神社の三社に初詣に行こうと思っています。帰るころには、年賀状も届いているかもしれません。明日の天気はよさそうですので、ウォーキング前に初日の出を拝むことができるかもしれません。二〇一八年がいい年になりますように！

第三編 二〇一八（平成三〇）年——古希を迎える

一. 南阿蘇温泉郷のいま（年賀状）

新年 あけまして おめでとうございます

東西約一八キロ、南北約二五キロ、面積約三五〇平方キロメートルの世界最大級の規模を誇る阿蘇カルデラ。およそ二七万年前から今日に至るまで永久の火山活動を続ける阿蘇火山——いまなお噴煙を上げる中岳。

この火山活動とともに暮らしてきた地域の人びとにとって、温泉は、自然からの大きな贈り物であった。阿蘇の南郷谷に住むようになって以来、近くの温泉施設でゆっくり朝風呂に入るのが、私のほぼ日課となった。

ところが、二〇一六（平成二八）年の四月、この地を大地震が襲った。建物が倒壊したり、宿へ続く道が寸断されたり、湯量が不安定になったり——想像を超える過酷な苦しみをもたらした。この間何とか再開にこぎつけた施設もある。いまだ再建途中の宿もある。なかには再興の見通しさえ立たないところもある。地震前の悠々の時を重ねた自然豊かな姿をいま一度取り戻し、火山の恵みをみんなで分かち合える日が再び訪れることを願いながら、ボランティアも行政も含め、多くの関係の方々の懸命の努力が日々続く。

穏やかなお正月をお迎えのことと思います。

本年のご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。

二〇一八年 元旦

二. 冬の生活

今日から二月です。あっという間に一月が過ぎたように思います。二月も「逃げる」といいますので、あっという間かもしれません。

例年になく、一月は厳しい寒さが続き、たくさん雪も降りました。今朝も、いまこちらは雪が降っています。南岸低気圧の移動に伴い、この雪も移動し、これから関西、関東が雪になるかもしれません。

雪の予報が出たときは、車は、農業道路のガードの下に置きます。エンジンまわりに毛布をかけ、そのうえから専用の車カバーをかけます。タイヤはスタッドレスをはかしていますが、そのうえに、タイヤチェーンも後部座席に用意しています。しかし、ほとんど使うことはありません。というのも、ガード下から街中は、あまり雪も積もらず、積もっても除雪作業により、問題なく車が使えからです。

ガード下から家までは、徒歩になります。長靴に履き替え、買い物などの荷物があるときは、手にもたず、リュックを背負い、マスク、帽子、手袋を着用し、竹の杖を使って、山道を上ります。一五分くらい歩きます。体がポカポカになります。これまで、買い物と温泉は日課となっていました。車をガード下に置くようになってからは、外出は、数日に一回に変え、家のなかで過ごすことが多くなりました。家のなかは十分な暖房力がありますので、快適です。食事も、事前に買いためた材料を使いながら、温かくておいしい料理をつくります。このようにして、いま、山の冬を過ごしています。

心筋梗塞の危険な状態から立ち直り、本来の体調を完全に取り戻しています。そして、うれしいことに、執筆活動も順調に軌道に乗ってきました。著作集4『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』を、もう少しで脱稿します。

三. 守ることができる命を救うために

イギリスにいたときに感じたのですが、あちらは寄付の文化が定着しています。国の政策から抜け落ちたさまざまな社会的、文化的活動を市民や住民が資金を出し合って運営する仕組みが整っており、自分の支援したい団体へ可能な額のお金を寄付するのです。一九八八年に私は、デザイン・カウンシルの第三代会長を務めたライリー卿の推薦により、Royal Society of Arts の Fellow になりました。現在この王立芸術協会の Patron は The Queen、President は The Princess Royal で、二百年以上続く伝統あるチャリティー団体です。一月に、新しいプロジェクトのための寄付の要請がメールで届きましたので、すぐに五〇ポンドをネット上の寄付決済システムを使って支払いしました。ちなみに、英国での私の公的な表記は、「Professor Shuichi Nakayama, MA PhD FRSA」ですが、最後の FRSA は、Fellow of the Royal Society of Arts の略です。英国は肩書き文化でもあります。これにより、英国において最も信用度の高い団体のひとつの会員であることを示します。

日本では、もう何十年も前から、国連 UNHCR 協会と国境なき医師団とひょうご子ども家庭福祉財団の三つの団体に、六月と一二月に少額ですが寄付をしてきました。ところが二月に入ってすぐ、国連 UNHCR 協会から緊急の寄付の要請がありました。何と、封筒の表の余白に、手書きでこう書かれてありました。「もう時間がありません。守ることができる命を救うために、皆様、どうぞ今すぐお力を貸してください。UNHCR バングラデシュ事務所前代表（署名）」。このような表現を見るのははじめてでしたが、緊急性だけは十分に伝わってきました。開封して、なかの印刷物を読むと、ミャンマーからバングラデシュへ逃げまとったロヒンギャ難民の悲惨な状況がレポートされていました。涙が出ました。世界には、水もなく食料もなく、明日の命さえも保障されていない、死の淵にいる人たちがいます。現地にいてその人の命を守ることに懸命になっている人たちもいます。翌日郵便局に行き、災害などの緊急時の資金として別途手もとに置いていたすべての現金を指定口座に振り込みました。

昨日から春一番が吹き荒れ、山も待ちに待った春の感じですが。こうして厳しい冬が終わり、もうしばらくすると、やっと暖くなり、鳥が舞い、虫が動き出します。そして、わが家の桜も開花します。

四. 子どもの日

今日五月五日は「子どもの日」です。親というものは、子どもが何歳の大人になろうとも、永遠に子どもは「子ども」であり、その健康と幸せを願うようにできているようです。ということは、「子ども日」とは、裏を返せば実際的には、子どもの健康と幸せを願う「大人の日」なのかもしれません。

庭は、シャクナゲが散って、それに代ってミヤコワスレが咲き乱れています。小鳥たちも、よく鳴いています。生き物たちにとって、厳しい季節が去ったこの時期が、自らの生命を育む一年で一番いい瞬間にちがいありません。古来より人は、それを見て、それを聞いて、命を蘇らせてきたことを思えば、私たち現代人にとっても、まさしくこの季節は心身の再生の時期であり、体の隅々でそれを感じる喜びを分かち合いたいと思います。

五. 昔からの言い伝え

先日テレビを見ていたら、気象予報士の人が、栗の木の花が散ると、その一週間後くらいを目安に梅雨に入る、とっていました。こちらは山のなかですので栗の木も多く、五月の中旬ころには、山道の至る所で散った白い花を見かけるようになりました。そろそろかなあ、と思っていましたら、その言葉どおりに、二八日に梅雨入りの発表がありました。今年はずっとより早い入梅です。その分、梅雨明けも早いのでしょうか。ともあれ、長雨や強雨による災害が発生しないといいのですが。

これも、昔からの言い伝えのひとつですが、こちらで生活をしていると、年配の方から、自分たちの子どものころは、ビワの葉を焼酎に漬けて、切り傷や虫刺されにそのエキスをつけたり、打ち身や捻挫をしたときには、その漬けた葉を直接肌に貼ったりしていたという話をときどき聞くことができました。たまたま妹の家に行ったとき、そのエキ스가できたところで、スプレー式の容器に入れてもらって、少し持ち帰ってきました。一度ためしに、肌の痒いところに塗り込んでみたら、実にうまいこと成功しました。栗の花と入梅との関係といい、ビワの葉と皮膚トラブルとの関係といい、自然のなかで生まれた先人たちの知恵は、なかなかのものだと気づかされました。

六. 著作集のウェブサイト公開

現在、ウェブサイト公開している「中山修一著作集」を全四巻（本巻二巻別巻二巻）から全一〇巻（本巻八巻別巻二巻）へと衣替えする作業にとりかかろうとしています。そこで気になったことは、いまだ学術雑誌などで活字化されていない、脱稿したばかりのデジタル化した状態のままの原稿の取り扱いでした。ここには、「PDFのセキュリティ設定」と「盗用」という未知の問題が潜んでいそうなのです。さっそくいろいろと調べてみたり、知人に相談したりしてみました。考えた末、結論に達したのは、次のようなことでした。

「PDFのセキュリティ設定」については、多くの人に読んでいただきたいからこそ、手もとに眠らせるのではなく、ネット上に公開するのですから、「印刷不許可」のような、読み手にとって不便となるような制限はない方がいいのではないか——。そして「盗用」については、研究者の良識を信用して、そのような行為をする人はいないという性善説に立ちたいと思いました。もし仮に、そのような人が現われた場合には、おそらくは、モリスや富本の研究者であれば、私のHP掲載の論文を読んでいるでしょうから、私は高齢でその気力がなくなっていたとしても、そうした人たちが声を上げ、盗用論文に対して掲載の取消しの要求をしたり、その盗用者が勤務する研究機関に調査の依頼をしたりするので

はないかと考えましたし、もしそうした取消し要求や調査依頼のような動きが周囲の研究者のあいだから起こらなかったとしても、私自身が、ウェブ上に公開した全著作を最終的に書籍として公刊すれば、それでいいのではないかとも思いました。もっともこの考えには難点があります。生きて著作集が完結するのか。完結したとしても本にしてくれる出版社があるのかどうか。あったとしても、自費出版に近いかたちになることが予想され、そのとき最晩年の私に支払い能力があるのかどうか——。

結論に達したといえ、悩みは尽きません。そのようなことを考え出すと、気がめいて、筆が進みません。気楽な思いで、大自然に囲まれて、思い存分に文字を積み重ねる楽しさを味わうことの方が、実は一番大事なことではないかということに気づかされました。

七．珠玉の展覧会カタログ二点

今年の一月から三月にかけて愛知県にあります名都美術館で「志村ふくみ展」が開催されていたこと知り、図録を購入しようと思い電話をしたところ、完売という返事でした。それから数時間後、どうしてもあきらめきれず、再度電話をし、友人をそちらに行かせるので、コピーをとらせてもらうことはできないかと、こちらの希望を伝えたところ、その場では保留扱いとなり、翌日、担当の学芸員の方から直接電話があり、研究のためであれば何とか工面をして一部贈与したいとのことでした。私としては、思いがけない、本当にありがたい話でした。

小包が届きました。封を切り、二冊の図録が出てきたとき、何かいままでに見たこともない不思議な輝きをもつ宝石でも手にしたような驚きと興奮に襲われました。実に美しい造本でした。頁を開くことを忘れ、表紙と裏表紙をじっと食い入るように眺めている自分がそこにいました。中を見ると、言葉に表わせないような絢爛とした志村ふくみさんと小倉遊亀さんの世界が目飛び込んできました。圧倒されんばかりの迫力でした。少し落ち着きを取り戻して、このふたつの展覧会を担当された学芸員の方の執筆になる「志村ふくみを育てた眼——富本一枝・白州正子・佐久間幸子——」と「小倉遊亀の静物画——富本憲吉との交流にたどる一考察——」の論考を拝読しました。ともに、鮮やかな筆運びの文章です。とくに後者は、全くの未知の世界でした。なぜこんなに落ち着きのある造本ができるのだろう。なぜこんなに静かに語りかける言葉を紡ぐことができるのだろう——。いま、その衝撃にうちのめされています。この二点の展覧会カタログは、私がこれまでに遭遇することのなかった富本憲吉と富本一枝の別の表情を間違いなく豊かに表現しているのです。

八．ハナシノブ

六月一七日に「第一回 みなみ阿蘇 野の花コンサート～はなしのぶ～」が、休暇村南阿蘇の阿蘇野草園で行なわれました。この前身となるコンサートは、一九八一（昭和五六）年から二〇一四（平成二六）年までの三四回にわたり開催された「はなしのぶコンサート」で、今回は、その復活第一回コンサートでした。出場したのは、高森中学校と高森

高等学校の合同の吹奏楽部や熊本市内にある尚綱中学校・高等学校のギター・マンドリン部などの演奏団体でした。野外でのコンサートです。天候にも恵まれ、緑の風が吹く自然環境のなかで美しい音の響きを楽しむことができました。また会場には、鉢植えのハナシノブ（花忍）が所々に設置され、目も、楽しませてくれました。

それでは、ハナシノブとは、どのような花なのでしょう。まだ九州が大陸と陸続きであったころ渡来した種で、暑さに弱く寒さに強く、草丈五〇センチ前後の先端に淡い青紫の花を毎年この時期に咲かせます。ハナシノブはこの阿蘇にしか自生していません。なぜこの地にしか生育しなかったのでしょうか。ハナシノブは森林のなかの日陰は好まず、草原の日当たりのよいところを好みます。阿蘇はその昔、何度も火山噴火により溶岩が流れ出し、森林を高原へと変えてゆきました。そしてその高原は、野焼きなどにより、人の手によって今日まで守られてきました。これが、阿蘇の地がハナシノブを育ててきた大きな理由です。しかし、いまや希少植物のひとつに数えられるまでに激減しています。植物にとっての生育環境が変化しているのです。ここにも環境保全の重要性を見て取ることができますし、「みなみ阿蘇 野の花コンサート～はなしのぶ～」は、演奏楽曲のすばらしさだけではなく、そのこともまた、聴く人に静かに伝えているのかもしれない。

九. ウォーキングコースの再発見と梅雨

昨秋から瑠璃温泉の西側にある南阿蘇村白水運動公園でウォーキングをはじめました。しかし、外周のコースを数回回るだけでは変化に乏しく、新しいウォーキング用のコースを探していました。すると、桜の季節、とてもいいコースを発見しました。高森町民体育館の駐車場に車を止め、ここがスタート地点となります。小さい橋を通過し、右に折れてピクニック広場の北側の小道に沿って歩きます。北には根子岳が広がり、小道の両側には桜が咲き、そのトンネルを通過して休暇村南阿蘇の駐車場北側の道を抜けて、阿蘇野草園へと入っていきます。野草園内の外周を通り抜けると休暇村南阿蘇本館の東側に出ます。そこを右折して、テニスコートとピクニック広場に挟まれた小道を直進すると、もとの町民体育館の駐車場へとたどり着きます。このコースで、だいたい三〇分弱です。なだらかな起伏に富んだコースで、目に映る根子岳や野草も、とても刺激的です。さらに町民体育館のすぐ一段上には高森温泉館があり、ここでウォーキングの汗を流します。高森町のキャッチコピーは「野の花と風薫る郷」ですが、まさしく厳しい冬のあとに訪れる、この季節を象徴するコピーだと思います。

今年も、六月になり梅雨の季節がやってきました。ウォーキングもしばしば休む日が続きます。今年の梅雨は、長雨でも、集中した豪雨でもありません。一日降ったかと思うと一日止むという、断続的な雨のパターンです。どうも天気予報が的中しません。いつ降っていつ止むのかがはっきりしない、気まぐれで、落ち着きのない梅雨の天気なのです。このような状態がいつまで続くのでしょうか。早く日々のウォーキングを再開したいものです。

一〇. 再び、ハナシノブ

『石牟礼道子全集 不知火 第一六巻』（藤原書店、二〇一三年）を読んでいたら、「いのちの切なさ 美しさ」と題された北海道での講演録のなかで、ハナシノブの話が出てきました。「今晚は死んでしまおうかしら、と思ったりする時に、私はちょっと山へ出かけるんです。ここへ来るまでに見たような、景色の所へ車をたのんで連れていってもらうのです。九州の屋根のようなところがありまして、その屋根の所に行きますとね、いろんな雑草がはえているのです。そこで、葉っぱが美しいので机の上にも置こうかしらと思って、なんでもない、そこらへんのその葉っぱを持って帰りました」。するとどうでしょう、小さな紫色のハナシノブの花が咲いたではありませんか。石牟礼さんは、感動しました。「蕾がだんだんになっていて、どんどん花が咲いていくんですよ。はじめて見たものですから、もう嬉しくて嬉しくて。私が非常に落ち込んでいた時でしたから、今度は『はなしのぶ』という山の花に助けられました」。

このとき石牟礼さんが遭遇したハナシノブは、阿蘇のどのあたりの草原だったのでしょうか。前にも書いたように、火山活動という自然の力と、野焼きという人間の力が合わさって阿蘇のハナシノブは生き続けました。しかしもはや、希少植物となっています。もしこのことに気づいていたら、不知火の海を見、水俣病に寄り添った石牟礼さんは、どのような感想をもったのでしょうか。ハナシノブのなかにも、「いのちの切なさ 美しさ」を見ていたかもしれません。今年の二月、石牟礼さんは帰らぬ人となりました。

一一．新作物語「燎原」

一〇月六日に水前寺成趣園能楽殿で石牟礼道子さんの新作能「沖宮」が上演されることになり、そのチケット販売の開始日が七月一日に迫っていたある日、『石牟礼道子全集 不知火 第一六巻』（藤原書店、二〇一三年）に所収されている「沖宮」を読みながら、一方で、雑誌原稿の「中村汀女没後三〇年にあたって——汀女主宰誌『風花』創刊前後の人間群像」を書いていました。そのときの頭のなかは、半分が道子さんで、半分が汀女さんで占められていました。すると、ちょうど水源の地下水のように、パラパラと幾つかの句が浮かんできました。それを少し整理し、連続させると、何とひとつの物語になるではありませんか。こうして、あっという間に、四季四花を主題とした四つの句で構成される新作物語「燎原^{りょうげん}」が誕生しました。舞台は阿蘇南郷谷。登場人物は母とその息子、あるいは妻とその夫、詳細は不明。山野の桜吹雪のなか男は自ら命を絶つも、女は、花忍^{はなしのぶ}の花言葉に身を寄せながら、男を待つ。秋、男は彼岸花^{ひがなばな}となって生き返ると、南郷谷の原頭を真っ赤に染め上げてゆき、続く冬のある夜、漆黒の闇に紅をひいた女は、寒椿^{かんづばき}の花神となって舞い踊る。

山桜 散るを悟りて風に舞う
花忍^{はなしのぶ} 青紫^{せいし}の衣^いにて人を待つ
彼岸花 阿蘇原頭を染めて立つ
寒椿 漆黒の闇に紅をひく

この四種の木や花はどれも、わが小庵の庭やその周辺に見かける、なじみのものです。

こうした日常の生活風景に、汀女さんと道子さんのふたつの異才が、どこからともなく一瞬乗り移ってきたようでした。実に不思議な体験でした。

一二. 図書館がいのち

研究者にとって、図書館がいのちです。本や資料がなければ、一行の文さえも書けないからです。

大学の教員として現役で働いていたころの仕事の三本柱は、教育（授業や学生の論文指導）と学部運営（教授会や各種委員会への出席）と研究（論文の執筆や学会活動）でした。私は、三九年間神戸大学に勤務しました。単純に計算すれば、三九の三分の一、一三年という時間を「研究」に費やしたことになります。定年退職したとき、もはや「教育」と「学部運営」はありませんので、今後一三年間「研究」に専念すれば、現役時代と同じ量の研究成果を生み出すことができるのではないかと考えました。つまり、退職時を「研究」上の折り返し点とみなしたわけです。

退職と同時に、執筆生活の場を神戸から阿蘇の山荘に移しました。しばらく使っていなかったのでまず庭の手入れをし、荷物を入れるために少し増築もし、やっと生活の場が整ったときに、不運にも阿蘇の火山活動が活発化し、火山灰が雪のように降る日々が続くようになりました。何とかそれが収まるや、今度は大きな地震が熊本地方一帯を襲いました。期待していた熊本県立図書館も大きな被害を受け、休館となりました。すると続けて、心筋梗塞が私の身体を襲いました。いよいよ執筆活動に入ろうとしていた時期でしたので、あのときは、すべてが闇に閉ざされた気持ちになりました。

心筋梗塞からほぼ完全に立ち直り、一方、県立図書館が開館にこぎつけたのは、二〇一七（平成二九）年の三月の下旬のことでした。定年退職からすでに四年近くの歳月が流れていました。この空白が、論文の書き方も図書館の利用の仕方も、遠い世界へと押しやっていました。とても不安でした。最初に県立図書館へ行ったのは、四月二六日でした。スタッフの方々はみなさん親切で、その日以来、私の研究活動を支えてくださっています。まさしく「いのち」を得て、いまや執筆活動に専念できるようになったことに、研究者としての無上の喜びを感じる毎日です。

一三. 著作集4を脱稿

ついに先日、著作集4『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』を、「索引」を含めすべて脱稿し、ひとつの区切りがついたことに、ほっとしているところです。二〇一三（平成二五）年四月の定年退職後、一年間の山荘暮らしのお試し体験を経て、庭づくりと家づくり（増築）を行なうも、火山活動が活発化して火山灰に苦しめられる日々が続き、二〇一六（平成二八）年四月の熊本地震、そして五月の心筋梗塞。退院後も机に向かう気力も体力も失い、もうもはや執筆活動はできないのかと不安に駆られながらも、資料を整理したり、少しでも本を読んだりしながら、自分をその方向へともってゆき、年が明けた二〇一七（平成二九）年ころから、やっと数時間、書斎にこもれるようになってきました。三月には、被災していた県立図書館も再開し、執筆の道筋も見えてきました。それから、一年

と数箇月、ここに著作集4が完成しました。四百字詰め原稿用紙に換算して、一、三二八枚あります。自分でも、よく耐えてここまで来たと感激しています。いまのウェブサイト「中山修一著作集」は、本巻二巻別巻二巻の全四巻の構成ですが、これを本巻八巻別巻二巻の全一〇巻の構成へと近日中に衣替えしたうえで、著作集4をアップロードする予定です。そしてこれから、著作集5『デザイン史・デザイン論』にとりかかり、来年三月には、この巻も、何とか書き終えたいと、強く思っているところです。

一四．熊本大学附属図書館へ行く

図書館ごとに特色があります。日常的に利用する熊本県立図書館は、公立の図書館ということもあって、相互貸借は主に近隣の公立図書館のあいだで行なわれます。文献複写は、県立図書館から、主として国立国会図書館に依頼してもらいます。これで、おおかたの本の閲覧や資料の入手は可能となります。しかし、極めて専門的な図書や雑誌類については、その図書館の性格上、収蔵されていないことがあります。その場合は、大学付属の図書館を利用することになります。

研究の過程で、どうしても戦前に英国で発行されたデザイン系の雑誌（**Decorative Art The Studio Year Book**）の一九二六年から一九三七年までの一二冊を見る必要がありました。そこで、熊本大学附属図書館のHPで、その雑誌が所蔵されていることを確認したうえで、電話をしてみました。所蔵されていても、先生方の研究室に貸し出されていることがあるからです。すると、電話で対応していただいた司書の方は、親切にも書庫まで行って、所蔵の確認をしてくださいました。こうして翌日、はじめて熊大の附属図書館（中央館）を訪問する運びとなりました。

レンガづくりのために通称「赤門」と呼ばれる熊大の正門には、懐かしい思い出があります。託麻原小学校の一年生か二年生のころ、何か絵画の全国大会があるとのことで、選ばれた数人が熊大近辺へ行き、思い思いに写生をすることになりました。私はこの赤門を描きました。描いているとき、担任の先生が、スクーターの後の席に母親を乗せて、激励に来てくださいました。この大会の賞には、天、地、人の三つ賞がありました。記憶が少しあいまいになっていますが、幸運にも私の作品は、そのとき「地賞」か「人賞」を受けることになりました。

車でしたので、赤門ではなく、隣のゲートから入構し、手続きをして駐車場に車を止めて、図書館へ入りました。前日に電話をしていたので、すべてスムーズに事が進み、司書の方と書庫に入りました。洋雑誌の「De」ではじまる書棚の一番奥にその一二冊はまとめて並んでいました。閲覧室まで運び、一頁一頁を丁寧にめくって図版を眺めていると、戦前のイギリスのデザインの世界に飛び込んだような錯覚を覚えました。それだけではありません。英国にいたころ、しばしばヴィクトリア・アンド・アルバート博物館の図書館やブライトン大学の図書館で調べものをした経験があります。雑誌のなかの英文の記事を読み進めてゆくうちに、そのときと同じような雰囲気が体全体に蘇ってきました。さらにはまた、現役のときに神戸大学附属図書館の副館長を二年間務めたことがありましたが、どの大学の図書館にも共通する独特の空気が流れています。それに包まれることの幸福感を、ここ熊大の図書館で再びしみじみと浸ることができました。本当にいい一日でした。

一五. 夏の終わりに

私の住む山荘の夏は、平地に比べ、かなり涼しい。標高一〇〇メートルごとに、〇、六度くらい気温が低くなるといわれています。ここは標高七〇〇メートルくらいですので、平地よりも四、二度ほど低く、三〇度を超える日は、ひと夏に数日くらいしかありません。熊本市内が三五度くらいまで気温が上がり、熱中症に注意するようにテレビで報道されているときでも、こちらは三〇度前後で、肌を射すような太陽の強い日差しを感じることもなく、ほとんど冷房を使うこともありません。そのためか、ときどき、弱々しくて何か頼りないような夏に思えることさえあります。酷暑から離れて過ごせることは、ありがたいのですが、その一方で、何といっても山の中ですので、湿度が高く、雨の日も多く、雷の音もよく耳にします。

夏の終わりも平地より少し早く、八月のお盆を過ぎたころから、朝夕、少し肌寒さを感じるようになりました。そういえば、春先から少し前まで、さまざまな音色で日暮らし耳もとを楽しませてくれていた鳥の鳴き声が全くなくなりました。何か季節の推移と関係があるのでしょうか。それに代わって最近、色づいた木々の葉がウッドデッキに落ちているのを見かけます。一足早く、秋の気配が忍び寄ってきているようです。

一六. 寒暖差アレルギー

先日、見るとはなしに、聞くとはなしに、テレビをつけていました。すると、鼻水がどうだとか、くしゃみがどうだとかの話が耳に入ってきました。その話の内容が、どうも最近の私の体の状態と似ているのです。真剣に聞きはじめました。そこではじめて知ったのですが、その症状は「寒暖差アレルギー」というらしく、いままで、なぜこうした症状が出るのか、その原因がわからず、何だろう、なぜだろうと思っていた矢先でしたので、驚きながらも、あつけなく、その疑問が氷解してしまいました。

私の場合、八月の中旬を過ぎたころから、鼻水が出たり、くしゃみが出たり、何か風邪に似た症状を、ときどき感じるようになっていました。しかし、熱はありません。少し喉の痛みもあるような感じでしたので、うがいをするくらいで、これといった対応ができなままになっていたのです。「寒暖差アレルギー」の説明を聞いて、少し思い当たることがありました。八月の下旬に入ると、こちらは山間部ですので、朝の最低気温が二〇度を下回る日が出てきます。そうしたときに、この症状が出ていたようです。私としては、まだ八月ですので、暑い夏という感覚でいたのですが、体の方は正直で、その寒冷を適切に受け止め、その結果が、自律神経を乱してしまったのです。「思い込み」と「冷え込み」の差が、こうして人間の体に変調をもたらすことを、「寒暖差アレルギー」という名称とともに、はじめて知る機会になりました。

そういえば、一月や二月の寒いとき、ときどき、お腹が痛み、下痢をすることがありました。何か悪い物でも食べたのだろうか、あれやこれやと考えても、身に覚えがありません。思うに、これも「寒暖差アレルギー」の一種だったのかもしれない。こちらの冬は厳しく、この時期の最低気温は、しばしば氷点下五度をさらに下回り一〇度を超えること

もよくあります。神戸での生活では考えられない寒さです。自分が思っている以上に、胃腸の方は冷えていたのかもしれませんが。やはり、「思い込み」と「冷え込み」の差が、こうした症状を引き起こしていたのでしょうか。つつい「思い込み」があると、対応が後手に回ります。これからは、実際の「冷え込み」にあわせて、適切に体をいたわらなければならぬことを、テレビの話を聞いていて、今回学ぶことができました。

一七．石牟礼道子の新作能「沖宮」の公演

一〇月六日、水前寺成趣園能楽殿において、今年の二月に亡くなった石牟礼道子さんの新作能「沖宮」の公演がありました。台風二五号の影響で開催が危ぶまれたのですが、幸いにもその少し前に九州北部を通過し日本海に抜け、予定どおり、野外の薪能としてその初演の舞台が無事に公開されました。

原作に従うと、あらすじはだいたい次のようになります。場面は、過ぎし昔の彼岸花の咲くころの島原・原の廃城跡。先の島原・天草の乱で散った天草四郎が登場し、次に四郎の乳母のおもかさまとその夫の佐吉が現われ、さらに、その夫婦の娘のあやが続きます。あや以外はすべて霊界の人で、あやは亡き四郎を慕う、わずか五歳に過ぎない童女です。あやは四郎のことを「兄^{あん}しゃま」と呼ぶ。久しぶりの再会をみなで喜び、昔の思い出に浸る。こうして登場人物たちによる導入の会話が終わると、場面が切り替わり、いよいよ物語が進行します。天草下島の村人たちは、死に絶えんばかりに干ばつに苦しんでいました。そこで、雨を司る竜神への人身御供^{ひとみごくう}として選ばれたのが、乱で両親を失くし、もともと竜神の姫でもあった孤独の身の幼子・あやでした。村の女房たちが涙ながらに縫った緋の衣裳に身を包み、彼岸花で飾られた小舟に乗せられたあやは、独り、夕陽が沈む茜色の沖へと波の合い間を進んでゆきます。浜辺では、「神代の姫となって、沖宮^よの美かところ」へ赴く「あやしゃま」を愛おしみ、雨乞いの村の衆が手をあわせる。やがて天空から恵みの雨粒が降り注ぐも、雷鳴がとどろき、稲妻が炸裂するや、ついにそこで舟影とともに緋の色が視界から消えてしまいます。するとそのとき、あやがひたすら心を寄せる、霊界の天草四郎が、みはなだ色の衣をまとして、その姿を現わすのです。四郎の乳母の娘があやであることからして、ふたりは乳^ち兄^{きょう}妹^{まい}の関係にあります。こうして、雨水をこいねがう村の民を救うための人柱^{ひとばしら}となってゆく悲運のあやと、受苦の身にあるあやを決然と迎え入れ、手をとって導いてゆく守護精霊者としての四郎との、切なくも美しいふたつの魂の道行がはじまるのです。向かう先は、竜神と、いのちたちの大姥^{おおはは}君^{ぎみ}とが住むという海底^{うなぞこ}の沖宮。ふたりの道行の舞いを慰めるように、あるいは祝うかのように、読経や讃美歌にも似た音響が高らかに鳴り渡るなか、この物語は終わりを迎えます。

天草四郎のみはなだ色の装束、あやの緋の色の着衣——これらの能衣裳を担当したのが、九四歳になる染織家の志村ふくみさんでした。石牟礼さんは水俣病の患者とともに救済運動を闘った文学者として熊本ではよく知られていますが、志村さんにつきましては、染織家としてのこれまでの経歴について知る人はあまり多くないように思い、この公演に先立って、事前に編集者に連絡をとり、地元文化雑誌の『KUMAMOTO』の二五号（一二月刊）に「石牟礼道子の『沖宮』の能衣裳を監修した志村ふくみの原風景」を寄稿したい旨を伝えていました。志村さんは、私が研究の対象としている富本憲吉さんとその妻の一

枝さんから若いころ多くの影響を受けて今日に至っている工芸家です。いまその原稿が、あらかたできたところです。

一八．谷人たちの美術館

いま「谷人たちの美術館」が開催されています。谷人とは、阿蘇南郷谷を拠点として作家活動する人たちを指します。毎年、秋のこの時期の二週間、アトリエや工房が一般に公開され、南郷谷全体が、あたかもひとつの美術館のようになる一瞬です。今年で一四回目となります。地震のあと参加者は少し減っているものの、今年も三三人の美術や工芸の作家たちが参加しました。絵画、焼き物、ステンドグラス、創作人形、染織、アクセサリ、写真、キルト、和布小物などなど、表現領域はさまざまです。定住して創作に専念している人もいます。週末や休みのときに、こちらにある別荘兼仕事場に来て、製作を楽しんでいる人もいます。見学をする人は、パンフレットを片手に、ゆっくり車で移動しながら、それぞれのアトリエや工房を訪ね、そこのご主人＝美術家と会話を弾ませ、作品を見せてもらうことになります。私も、何人かの友だちを今年も訪ねました。一年ぶりの人もいます。こつこつと一年をかけて製作された作品を見ると、その人のこの一年間の生活がどうであったのかが伝わってきます。つくる喜びと、見る喜びが、こうしてひとつになるのです。

一九．一雨一度

この季節、一雨ごとに気温が一度下がってゆくといえます。今年は、重なる台風や停滞する秋雨前線の影響もあって、九月の後半からずっと雨の日が多かったように感じます。それだけに、気温も下がり気味になっていました。先週末、冬物のカーディガンやズボンなどを購入し、寒さへの備えをしていたところ、ついに今朝、今年一番の冷え込みとなりました。起きて寒暖計を見ると、寝室が一六度で、隣の食堂が一四度になっていました。外は一〇度を大きく下回っているものと思われます。そこで、この間試運転はしていたのですが、今期はじめての暖房となりました。服も、セーターを出してきました。近年、秋の好季節を楽しむ日が少なくなっているように思います。そのようなわけで、今日は、冬のはじまりを感じる一日となりました。

ここはプロパンガスなので、月に二、三度、検針や供給のために担当者の方が立ち寄り、そこでよくよもやま話をします。ちょうど昨日、ヘビの話をしたところでした。今年は、例年と違って庭先にもウッドデッキにも、一度もヘビを見ることがなかったと、話を持ちかけると、彼は、別の地区でも、そのようなことが話題になり、この夏が暑かったからではないでしょうかと、返してくれた。そして続けて、しかし、南阿蘇村の方では、地震以降ヘビを多く見かけるといふ人もいますと、言葉を継いだ。暑さや寒さ、地殻の変動で、ヘビの生活環境も変わっているのかもしれない。今朝の冷え込みは、冬眠の時期を早めさせるのでしょうか。

二〇．濁流を清流へと換える

ほかの動物とは違い、人間という生き物は、どうも時間の観念に強く縛られているようです。過去の楽しかった思い出に浸り、未来に向けて夢を羽ばたかせる——こうした時間とおつきあいは、大歓迎なのですが、時として、それとは反対の拘束に引っかかることがあります。たとえば人は、しばしば必要以上に過去の出来事を後悔したり、過去の自分を嫌悪したりします。また、未来について心配したり、不安を感じたりもします。こうした雑念や妄想が頭や心に濁流となって押し寄せてくると、気持ちがしおれてしまい、大きなストレスがかかることになります。こうした濁流を、清流へと換える方法はないのでしょうか。考えられるのは、過去や未来からの陰湿で過剰な侵入を食い止め、現在にあって温暖で適量な生を保つことがきるようにと、意識的に、心身の状況を調整することではないのでしょうか。さてそれでは、温暖で適量な生を保つために現在の扉を開けるには、どのような方法があるのでしょうか。

たとえば、部屋を片付けてみます。そうすると、「すっきりした」という清涼感を覚えます。室内が「すっきりした」だけではなく、このとき、心の内面も「すっきりした」のではないのでしょうか。たとえば、今日食べたい料理に意識的に気持ちを向けてみます。肉じゃがと塩サバであれば、それを楽しみながらつくるのです。こうしてでき上がったものを食すと、「おいしかった」という言葉が、自然と口をついて出てきます。この発語は、身体的な胃袋だけではなく、心の満足感の表われでもあります。さらには、庭の手入れをしてみます。雑草や落ち葉が一掃され、色とりどりの花々が咲きはじめるのを目にすると、「美しい」という感じに包まれ、そこに内なる達成感が湧き出てきます。こうして、現在にあって感じるができる、清涼感や満足感、あるいは達成感が、ささやかではありますが、積み重なることによって、生に対する大いなる喜びが形成され、膨れ上がってしまった過去への後悔とか未来への不安とかをいつしか和らげ、過度に背負い込んだストレスを軽減する力となってゆくように思います。

日常の心身にとって大事なことは、過去や未来から濁流が押し寄せてくる気配を感じたら、自覚的に、閉まってしまっている現在の窓をそうっと開け、いち早く、濁流を清流へと転換することではないのでしょうか。感覚的にいえば、過去一、将来二、現在七くらいの割合が心を占めている状態が、日常の健康維持にとって最適なように思います。後悔や不安といった過去や未来からの濁流に身をゆだねるのではなく、できるだけ多くの時間を、現在の生が喜びとして溢れ出た、まさしく地下水源からの清流のなかで過ごしたいものです。

二一．禅の教えと庭造り

立ち寄った書店で、たまたま『老化の悩み 楽解決ワザ』という「NHK ガッテン！」の増刊号が目にとまり、購入して家に持ち帰ると、さっそくパラパラと頁をめくってみました。すると、曹洞宗建功寺のご住職のエッセイのところで手が止まりました。というのも、プロフィールによると、この方は、僧侶であるだけではなく、庭園デザイナーでもあったからです。禅の教えと庭づくり——このふたつは、どう結び付くのでしょうか。こうした関心からこのエッセイを読み進めてゆきました。

要約すると、だいたい、このようになります。禅は生き方を極めるためにあり、そのためには独りの時間が絶対的に必要で、平安時代の僧侶の西行も、歌人の鴨長明も、昔の人はみな、山にこもって隠棲する人生を理想の生き方とした。禅宗の寺では掃除も大切な修行（作務）とみなされ、庭造りもそのひとつと考えられてきた。禅の教えに基づいた庭を眺めていると、心が静まり、呼吸が整い、自然のなかに自分が生かされていることに気づく。こうして、座禅同様に、庭いじりをすることによって、自分を客観的に見ることができるようになり、庭と一体化して「無心」の世界を悟る。

これを読んで、何か庭の本質を教えられたような気がしました。ひるがえって、わが小庵の庭はどうか。心が静まり、呼吸が整い、自然のなかに生かされていることへの開眼を促すような庭——どうしたらそうした庭づくりができるのだろうか。禅にその教えを請わなければなるまいか。

二二. そろそろ冬の到来か

いつのまにか秋が深まり、少し寒さを感じるようになりました。先週あたりから一気に木々の葉も色づきはじめ、ウッドデッキや玄関前の道には、落ち葉もたくさん目立つようになり、その上を、サクサクという音を聞きながら歩くと、この時期固有の季節感を味わうことができます。

テレビのニュース番組では、この数日、朝ごとに今年一番の寒さになったことを伝えていますが、今朝もさらに一段と冷え込み、北国では雪もすでに降っているようです。

そのことを一番感じるのは、ウォーキングのときです。高森町の町民体育館の駐車場に車を止め、ここから野草園を大きく一周するコースをほぼ毎日歩きますが、これまでは、この三〇分のウォーキングで少し汗をかいていました。しかし、いまはそれがありません。何か歩き足りないような、不足感さえ感じます。一方で、目の前に映る野草園の木々や草花の表情も、そして遠くに広がる阿蘇五岳の情景も、この時期になると着実に変化してゆきます。山深いこの地の冬の到来も、そう遠くはなさそうです。

小さいころ、寝る前にパジャマに着替えるとき、よく乾布摩擦をしてくれました。かぜをひかないように、寒さに負けないようにという親心でしょうか。火鉢くらいしか暖をとる用具がない時代です。乾布摩擦は、健康のためだけではなく、体も温まり、こうしてある種、暖をとっていたのかもしれませんが。暖房が完備している部屋で冬を過ごすいまの子どもの生活に、乾布摩擦は生き残っているのでしょうか、ふと、このような疑問が頭をかすめてゆきました。

二三. ラストランへ向けて

今日一二月二日は、私の満七〇歳の誕生日です。これまでは、区切りの誕生日であっても、とくに何かを強く思うということはありませんでしたが、今回は、少し違います。といいますのも、男性の平均寿命から逆算すると、残りが一〇年と、はっきりとした数字が見えてきたからです。充実したラストランの一〇年にしたいと思います。

偶然にも今夜、この南郷谷（南阿蘇村と高森町）に在住する高校時代の同窓生による忘年会が「四季の森」であり、先日講演を頼まれました。個人的にはちょうどこの日が七〇歳の誕生日でもあり、これまで歩いてきた日々を振り返り、残りの人生をどう過ごすかを考える内容にしたいと思い、この間原稿を作成してきました。

最終的に演題は、「私の南阿蘇暮らし——生活習慣の改善と執筆活動」としました。内容は、「なぜ南阿蘇に恋をしたのかな」「生活習慣の改善のなかでの心筋梗塞」「夢追い人の執筆活動」の三つのパートで構成し、動画を含む視覚資料もたくさん使うことにしました。いま最後のチェックが終わりました。これから会場へ向かいます。

二四．冬巡業大相撲阿蘇高森場所

一二月八日に、平成三十年冬巡業の大相撲阿蘇高森場所が高森町民体育館で開催されました。はじめて見る大相撲でしたので、チケットを購入したときから、この日をとても楽しみにしていました。会場に着いたときは、幕内力士の稽古中で、高安や栃ノ心の顔が見えました。当然ですが、いつもテレビで見る顔です。そのあと、横綱の白鵬が姿を現わし、場内は歓喜に包まれました。

序二段、三段目、幕下の取り組みのあと、相撲甚句、初切、それに櫓太鼓打分の演技が披露されました。実は、実際のお相撲以上にこのパフォーマンスを楽しみにしていました。これまでテレビでも見る機会がなかったからです。とくに、寄せ太鼓、一番太鼓、はね太鼓の三種を打ち分ける櫓太鼓打分が見事でした。これを聞いていたときです。小さいころに屋台の店が立ち並ぶお正月のお宮の参道で耳にした音とリズムとがよみがえり、自分が生まれたところのある場面に一瞬、帰ってしまったような、不思議な感覚に陥りました。

幕内の取り組みに先立つ、白鵬による横綱土俵入も見ものでした。今日のように、肉眼で一度に多くの力士を見てしましますと、力士の骨格や肌のつやが一人ひとり大きく違うことがよくわかります。美しいと思ったのが白鵬の身体でした。そして、体とまわしの組み合わせも見事でした。そうした一種の造形美は生まれつきなののでしょうか、それとも努力の賜物なののでしょうか。ひょっとしたら、大勢の観衆の視線が日常的につくり出しているのかもしれませんが。横綱の「強い」と「美しい」とが一体となった表現の型を、この土俵入に見たような気がしました。

二五．目の変化

いつも眼鏡をかけたまま、パソコンに向かって仕事をします。数日くらい前から、パソコン上の文字が、かすんだり、ぼやけたりしてきました。加齢により老眼の度が進んだのかもしれませんが、酷使したために疲れが溜まったのかもしれませんが。そう思って、目薬を買ってきて、点眼をはじめました。しかし、よく思い出してみると、点眼をはじめた数日前に、こんなことがありました。パソコンから離れて、別の印刷された資料を見ようとした時のことです。いつもですと、まず自然と手もとの老眼鏡に手がゆき、それから資料を読むのですが、この日は、眼鏡なしで、資料を前後しながらピントをあわせて文字を

読もうとしている自分がいました。そして実際に文字が読めたのです。一方では、目がかすみ、文字がぼやける。しかし一方では、眼鏡がなくても文字が読める。実に不思議な数日間を体験しました。

そうするうちに、これも偶然ですが、日常使っている眼鏡のフレームが折れて、使えなくなっていました。そこで、新しい眼鏡をつくるために、馴染みの店に行き、この間の話をして、視力を測ってもらいました。するとどうでしょう、前回つくったときの度数が改善しているではありませんか。店主の話によりますと、眼鏡をかけてパソコンの画面がぼやけて見えたのは、度があわなくなった証拠で、眼鏡なしで文字が読めたのは、度がよくなったためではないか、ということでした。そして続けて、目も身体の一部で、身体が老化すれば、目も老化し、身体が若返れば、それに連動して目も若返る、とその店主は知識を披瀝しました。その意見に照らして考えるならば、確かに、心筋梗塞以来、日々励行してきた食生活の改善と、ウォーキングや湯治の習慣化が体調をよくし、それに伴って、血圧や血液検査の値だけではなく、視力にもいい影響を及ぼした可能性があります。こうして、予期せぬ、うれしい副産物に出会いました。

二六. 七〇歳になると

「敬老の日」が近づいたころの話です。町役場から一通の封書が届きました。開くと、一二月に七〇歳になるので、今年の「敬老の日」から年金（祝い金）が出るようになっており、いついつ、どこどこへ取りにきてほしいというお知らせでした。はじめて聞く話なので、「へえ～」という感じでした。

次に、実際の誕生日の日、町が運営する高森温泉館へ行くと、その場で「高齢者入館証明書」が発行されました。この日以降、これを見せることで、いままでの通常料金の半額で高森温泉館に入ることができるようになりました。ほぼ毎日利用する者にとっては、とても助かる特典です。

それからしばらくして、また、町役場から手紙が届き、開封してみると、前期高齢者の健康保険証が入っていました。これにより、従来の三割の自己負担から二割負担へと軽減されるとのことでした。誕生日の翌月（つまり来年の一月）からこの保険証を使うことになります。

この三つが、七〇歳に到達した私の身に起こった変化でした。半分はありがたい思いながらも、半分は、まだまだ老人扱いや高齢者扱いはご免こうむりたいとの思いもあり、複雑な思いでの今年の年納めとなりました。来たる年が、いい一年になりますように！

第四編 二〇一九（平成三一／令和元）年——執筆が軌道に乗る

一．図書館との距離（年賀状）

謹んで新春の御祝詞を申し上げます

私の住む阿蘇郡高森町には、公立の図書館がありません。国立国会図書館を起点にした距離でいえば、高森町は、日本でも遠く離れた地域に属します。同じように、熊本県立図書館を起点にすれば、県のなかでも高森町はそこから遠い距離にあります。このように高森町は、シカやサルなどの野生動物にしばしば遭遇する機会はあるとしても、書籍や雑誌と出会う機会はほぼ閉ざされた文化的に辺境の地なのです。地震のときには、県立図書館も約一年間の閉館に追い込まれ、再開館したのは二〇一七（平成二九）年の春のことでした。そのころから私の執筆活動も県立図書館通いも、順調に日常化してゆきました。所蔵のない本は、相互貸借制度を利用して近隣県の公立図書館から借りることができますし、文献複写はほぼすべて国立国会図書館へ依頼して入手します。ここから熊本市内にある県立図書館まで車で一時間と少々です。日本のなかでも、国立国会図書館に比較的遠くて近い地域に住んでいるのかもしれない。

穏やかなお正月をお迎えのことと思います。

本年のご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。

二〇一九年 元旦

二．日本画の魅力

昨年末に名都美術館から、ありがたくも、「とっておき！日本画コレクション」の展覧会カタログをご恵贈いただきました。いつもながら、細部にまで配慮の行き届いた、美しい図録でした。テキストは当館の学芸員の方の執筆になる「大阪新美術館・日本画コレクションの特色」で、図版は、「艶めく女性美」「主役は子供」「風趣に富んだ情景」「四季の美」「歴史ロマンを感じて」「祈りを捧ぐ」の六章から構成されていました。テキストを読み進めました。とりわけ「女性の活躍」と「おわりに」は、私にとりまして、とても示唆に富む、刺激的な内容でした。

私は、日本画そのものについては全くの素人ですが、ひとりの歴史家としては、女性がどのような存在として歴史のなかに隠されているのかといったことに、強い関心をもっています。いうまでもなく、隠されている場所は、本や雑誌のなかの記述された文章だけではなく、絵や写真やポスターなどの表現された画像（イメージ）にも、当然隠されています。日本画という表現領域においては、とくに明治以降このかた、女性はどう描かれ、それがどう変化してきたのでしょうか。この問題設定は、女性という対象を見る視線（まなざし）の歴史的変容を記述することにつながります。

他方、女性（画家）は何を描いてきたのでしょうか。これは、女性（画家）が何に視線（まなざし）を向けているのか、つまり女性自身の関心の変化を見ようとする問題の設定につながり、いただいた図録から、日本画は、そのことを歴史的に例証する際の、絶好の視覚的な一次資料となるのではないかということに気づかされました。その意味で、図版

の第一章の「艶めく女性美」は、私の関心事にうまく対応していました。

同じく、第二章の「主役は子供」も、大変参考になりました。少し大げさにいえば、いつごろから、「子ども」は発見されたのかということなのですが、単なる「大人」のコピー（髪型や服や遊びや食べ物などに関して）としてではなく、独自の発達の文化的存在としての「子ども」という概念や認識は、いつごろ生まれ、それがどのように変化したのでしょうか、そしてその変化の理由は、何だったのでしょうか。こうした疑問についても、日本画のような表現されたイメージは最もよく教えてくれるように思います。その意味で、第二章の主題を構成する図版もまた、とてもおもしろく拝見させていただきました。

そのようなことを考えながら、ふと富本憲吉のことが思い出されました。といいますのも、一九三六年（昭和一一）の一月に、上野の松坂屋で「富本憲吉日本畫展覽会」が開かれているからです。富本が「女性」や「子ども」を描いたとは思われませんが、彼にとっての日本画と陶器の関係を知るうえでの貴重な作品が陳列されたのではないかと想像しています。富本の陶器をこよなく愛し、しばしば画題にも使ったのが日本画家の小倉遊亀でした。富本のつくる陶器は、深いところで日本画と結び付いているのかもしれません。

三. independent の精神

イギリスにいたころ、よく independent という言葉を耳にしました。Independent という名の新聞もあるのですが、independent researcher とか independent curator とかの肩書きをもった人もたくさんいました。組織に属さない独立した研究者や学芸員のことで、英国では、小さいときから一人ひとりの自立心や独立心が、家庭や学校のなかで育てられているようで、そうした風土のなかで、こうした生き方や職業が可能となっているのでしょう。

大学を退職し、独り山のなかで執筆活動をしているいまの私も、independent の状態にあります。independent の人は、一義的には、組織や制度に守られていません。したがって、そうしたものに頼ったり、甘えたりすることはできないのです。そこで重要なのが、そうした生き方をしている人たち同士の助け合いや支え合いの精神の存在です。コミュニケーションやネットワークが、人と人を結び、勇気と希望を与えます。今朝パソコンと開いてみると、英国から二通、王立芸術協会とウィリアム・モリス協会からメールが届いていました。

かつてモリスは、社会主義同盟の機関紙『ザ・コモンウィール』に一八八六年から掲載が開始された「ジョン・ボールの夢」のなかで、「フェローシップは天国であり、その欠如は地獄である。つまり、フェローシップは生で、その欠如は死なのである」ことを述べていました。

いま現実の身の回りで起こっていることに率直に向き合い、大事にやさしく手を当てること、これがとても大切なような気がしています。

四. 暖かい冬

早いもので、今年もあっという間に一箇月が過ぎ、今日から二月です。

今年は例年と違って、こちらは暖かい冬となっています。雪が降ったのは、去年の暮れの二八日（このときは、ちらつく程度で積もることはありませんでした）と先日の二六日（少し積もりましたが、次の日には消えてなくなりました）の二回くらいで、今朝は、外へ出て見てみましたら、車の屋根に少しだけ雪が付着していました（路上は全くその形跡はありません）。そして、昼になると温度も上がり、ウッドデッキの手すりの上に置いた皿に小鳥たちが飛来し、水を飲んでいました。例年より一、二箇月早い光景です。

去年を思い出しますと、一月と二月に、ともに数日間雪に覆われ、外出せず、家の中で過ごしました。寒気の南下に伴い、朝の最低気温が氷点下五度から氷点下一〇度くらいまで下がり、一日中氷点下の日もよくありました。それに比べますと、何か不思議な気持ちになります。これからの二月はどうなるかわかりませんが、気象の異常が進行しているのでしょうか、暖かいのはいいことなのですが、少し心配にもなります。

五. 恩師への手紙（1）

北住文弘先生

前略 今年の冬は比較的暖かく、先日は、ウッドデッキの手すりの上に置いた皿に小鳥たちが飛来し、水を飲んでいました。例年より一、二箇月早い光景です。

神戸大学を退職し、こちらの山荘で執筆活動を開始して、この三月でちょうど六年になります。いつも資料の入手は県立図書館を利用するのですが、昨年の秋のこと、必要とする資料が県立図書館には所蔵されておらず、熊大の附属図書館へ足を運ぶことになりました。レンガづくりのために通称「赤門」と呼ばれる熊大の正門には、懐かしい思い出があります。託麻原小学校の一年生か二年生のとき、何か絵画の全国大会があるとのことで、選ばれた数人が熊大近辺へ行き、思い思いに写生をすることになりました。私はこの赤門を描きました。描いているとき、担任をしていただいていた北住先生が、スクーターの後の席に母親を乗せて、激励に来てくださいました。この大会の賞には、天、地、人の三つ賞がありました。記憶が少しあいまいになっていますが、幸運にも私の作品は、そのとき「地賞」か「人賞」を受けることになりました。

私は信愛の附属幼稚園を卒業して託麻原小学校に入学し、先生に担任をしていただきました。幼稚園のときはかなり素行が悪く、読み書きの能力も低く、卒園のときには、この子には行く大学はなく、将来を期待しないようにといわれたことを、しばしば母は口にしていました。しかし、小学校に入り、先生にかわいがっていただいたことで、私も母も、どれだけ救われたかわかりません。いまでもこうして研究活動ができているのも、その原点は、託麻原小学校の一年生と二年生のときに先生に教えを受けたことにあります。ここから感謝しています。私が息子に「託麻」と名前をつけたのも、そこに理由がありました。

父（大正一二年生まれ）と母（昭和二年生まれ）は、いまでも御幸笛田の地で、それなりに元気に暮らしています。会えば先生のこと話題になります。先生との出会いは、両親にとっても深く記憶に息づいているようです。

その後、ご体調はいかがですか。どうか、暖かくして、お体をおいといただきませう、ここから念じております。お返事は全く不要です。ご放念ください。春近い高

森から、季節のごあいさつを一言書かせていただきました。草々
中山修一

六. 高森温泉館の休館

高森温泉館が四月から休館になります。町が運営する温泉ですが、人口の減少で利用客も減り、赤字が続いていたようです。売却に出しても買い手が見つかず、とうとう休館（実質は閉館）へと追い込まれてしまいました。毎日九時半ころに温泉の下の高森町民体育館の駐車場に車を止め、そこから休暇村南阿蘇の野草園のなかを約三〇分ウォーキングし、それから一〇時の開館にあわせて入館、まずロビーで新聞を読み、そのあとゆっくりと一時間くらいかけて温泉に入るのが日課となっていました。電気風呂やサウナも充実しており、根子岳の雄姿が眼前に迫る、屋外の露天風呂からの眺めも、実にすばらしいものでありました。

四月からはお隣の南阿蘇村にあります瑠璃温泉に行くことになります。ここは一〇時半が開館時間ですので、その三〇分くらい前に近くの運動公園に行き、そこでウォーキングをすることになりそうです。自宅から少し遠くなりますし、高森温泉館の場合は、七〇歳以上は半額の一五〇円で入館できましたが、瑠璃の場合は、村民ではない、私のような高森町民は、残念ながら、そうした高齢者特典を受けることはできません。

これも、人口減が招く生活上の変化でしょうか。こうした変化は町の至る所で見受けられます。町のお年寄りに聞くと、三〇年くらい前までは地元の県立高森高等学校は一学年四クラスあったようですが、数年前あたりから一クラスに減り、やっと今年度は吹奏楽部の活躍によって人気上がり、二クラスに増えたものの、この四月からの新学期はどうなるかわからないということでした。少子化と高齢化は、明らかにこの町の活力を奪っています。いま有効な手を打たないと、いずれは、高校も消えてなくなるかもしれません。これが、日本の小さな町や村で起こっている現状なのでしょうが、そのなかで実際に暮らしていると、何か肌寒い感じがしきりとしてきます。

七. 恩師への手紙（2）

荒木美智子先生

前略 今年の冬は昨年に比べるとずいぶん穏やかで、雪が積もることもありませんでした。先日は、ウッドデッキの手すりの上に置いた皿に小鳥たちが飛来し、水を飲んでいました。春の到来もうすぐかもしれません。

先日、拙稿「石牟礼道子の死去から一年 ハナシノブ考あるいは『沖宮』考」が所収された『KUMAMOTO（くまもと）』第26号（172-189頁）が刊行されましたので、1部、謹んでお送りさせていただきます。ご笑納いただければ幸いです。

帯山中学校のとき、先生には親身になって、苦手の国語を教えていただきました。何とか国語の力をつけたいと思い、無遠慮にもご相談させていただくと、国語の問題集（ドリル）を渡され、ある程度できたらもっていच्छやいと、やさしく接していただきました。苦手意識を克服したいという思いと、先生に認めてもらいたいという思いがない交ぜ

になって、与えられた問題集に一週間くらいチャレンジし、職員室にいらっしゃる先生に恐る恐るお渡ししました。すると数日後、丁寧に赤で添削されてもどってきました。自分のできの悪さを痛感するとともに、先生にずっとついてゆき、教えを請いたいという気持ちが大きく膨らんだ瞬間でした。それから高校受験の少し前まで、定期的に添削をしていただきました。先生には、本当にご迷惑だったかもしれません。しかしこの間、国語の学力が格段に上昇し、無事に志望校に合格することができました。

大学を卒業して就職したのは神戸大学でした。そこで、デザインの実技と歴史を教え、ご存知のように、定年後、六年前からこの南阿蘇に蟄居し、執筆活動に専念しています。「石牟礼道子の死去から一年 ハナシノブ考あるいは『沖宮』考」は、あのときのできの悪い帯中生徒で、いまや七〇歳になる教え子を書いた一文です。先生にお見せするのは、恥ずかしくもあり、また、ここまで書けるようになったことを褒めていただきたいという気持ちもあります。五五年前、ドキドキしながら問題集をもって職員室に入るときの感覚と全く変わりありません。

先生、帯中時代、いつも傍で気にかけていただき、本当にありがとうございました。ここから感謝しています。いまこうして何とか文章が書けるのも、すべて先生のおかげです。私の文筆の原点は、帯中職員室での先生による添削でした。

この二年、先生からの年賀状が途絶え、体調を崩されているのではないかと案じております。これから好季節を迎えるなか、どうかお体、おいといただきますよう、ここから念じます。お返事は全く不要です。ご放念ください。春近い高森から、季節のごあいさつを一言書かせていただきました。草々

中山修一

八. 野焼き

この地方の野焼きは、毎年、三月に入ると中旬ころまで、あちこちで行なわれます。そのため、野に火が入れられ、炎や煙が目に残ると、一瞬立ち止まってその方向を眺め渡し、春の訪れを実感します。野焼きは、草原の枯草を焼き尽くすことで、害虫を駆除し、新芽の発育を助け、新たな草原へと再生させる、この地方になくてはならない春の到来に先立つ勇壮な儀式です。

先日、野草園をウォーキングしていたら、東側の外輪山に向けた牧草地の一带に、ちょうど火が入れられたところでした。数人の人が自然と集まり、カメラを向け、野の春の話題に花が咲きました。ある人がこんなことをいっていました。野を焼きはじめて、突然風向きが変わると、一瞬にして野焼きの人が風下に立たされることになります。命を落としかねない危険な状況です。そのときその人がとるべき行動は、勇気を出して意を決し、炎のなかを一瞬にして走り抜け、風上に移動することしかなく、唯一これが助かる道とのことでした。

野焼きも、近年その規模が縮小されてきています。担い手の減少がその大きな理由で、いまはボランティアに頼らざるを得ないのが実情のようです。そのため、草原の再生と循環が滞り気味になっているのです。これは野の維持にとって大きな問題をはらんでいます。その一方で、わが家にとっても、実は一大問題なのです。わが家の北側は、一面牛を

飼うための牧草地でした。そのためこの時期には牧野組合の人たちの手によって野焼きが行なわれてきました。しかし、後継者不足や過重労働などが原因となって、この地区の畜産農家が減少し、牧野組合も活動を停止し、そのため、数年前から野焼きも行なわれなくなりました。かつて野焼きが行なわれていたころは、この時期になると、焼けた茶褐色の土からつくしの芽が顔を出し、それを採ってはごまあえにしたり、てんぷらにしたりして、春の山菜を楽しんだものでした。しかし悲しいことに、いまやそうした季節を味わう喜びが一つひとつ失われていっています。野の衰退は、明らかに食文化の劣化を招き、人間から季節感を奪い取っているのです。

九．春の野の色

この地方の風景は、春の訪れとともに、黄色の色調に変わります。といいますのも、田畑の畦道や牧野道、土手やのり面の至る所で、ナノハナ（菜の花）、スイセン（水仙）、タンポポ（たんぽぽ）が一斉に花を咲かせるからです。厳冬の雪景色と初夏の新緑とのあいだに挟まれたこの一瞬に、草原から田園まで、すべての生命体が再生され、その息吹を謳歌します。白、黄色、緑、そしてそのあとに続く、赤（紅葉）、茶褐色（枯葉）——四季の変化は、色相の循環でもあります。

先日の花見のときに、差し入れられた「摘み菜」の和え物をいただきました。最初「菜の花」かと思っていましたら、そうではなく「摘み菜」という種で、摘んでも摘んでも成長するので、この名が付けられたとの説明でした。花は黄色く、少し苦みのある素朴な風味で、春の野を食す感じでした。

わが家の裏庭に去年はじめて一株のフキノトウ（落の臺）を見つけました。すると今年は、そこから少し離れた所に、一〇株超えるくらい群生して芽をつけました。驚くとともに、うれしくなり、図鑑を持ち出して、少し調べたりしてみました。てんぷらにするとおいしいと書いてありましたが、群れて育ったことが何よりの感動で、食すことは、とうとう機会を失ってしまいました。

そういえば、わが家の庭で最初に春を告げる花といえば、フクジュソウ（福寿草）です。今年は暖冬だったせいもあるのでしょうか、二月の上旬には花を咲かせていました。この花の色も黄色です。どうやら、春と黄色は切り離せないようです。黄色は生命の色かもしれません。

一〇．新聞事情

こちらに移り住むまで神戸では、長く『朝日新聞』を購読していました。引っ越してきたとき、新聞のことが気になり、販売店を探してみたら、その店では『朝日新聞』は取り扱っておらず、地元紙の『熊本日日新聞』のみということでした。もともと、世間の動きから距離を置いて執筆活動に専念するために田舎暮らしをはじめようと決意したので、新聞購読などは論外という意識も一方にあって、それ以来、日々家で新聞を読む習慣は絶たれました。

そうはいっても、やはり世の動きは気になるものです。温泉や病院などで備え付けてあ

れば、つつい新聞（どの施設も地元紙のみ）に手が向かいます。しかし震災後、経費削減でしょうか、白水温泉瑠璃は新聞を置かなくなりました。もうひとつの高森温泉館は、利用者減により赤字が続き、とうとうこの三月末をもって、休館へと追い込まれてしまいました。こうして私にとっての新聞を読む場が、一つひとつと姿を消してゆきました。

町民税は確かに納めているのですが、外部からの移住者であるためでしょうか、私の所へは、町の広報誌や回覧文書等はいっさい届きません。そこで致し方なく、配布日にあわせて、だいたい二週間ごとに、自分で町役場に取りに行くことになります。そのロビーには新聞が置かれていますので、その機会を利用して、新聞を読むことがあります。全国紙、地方紙、経済紙をあわせて五紙が備えられています。しかし、読み慣れた『朝日新聞』だけが、どういう理由かはわかりませんが、ありません。どうやら私は、町民向けの行政発信文書の入手のみならず、新聞という社会的情報の取得の面でも、町からつまはじきされているようです。

一一．春の庭

わが家の庭は、春に大きな変化があります。寒さが和らぎはじめると、庭に出て、少しずつ作業を開始します。まず、冬を越した大量の落ち葉を数箇所に分けて寄せ集めます。今度はそれを一輪車で何度も往復しながら、沢側の杉林ののり面へ転がり落とします。この作業は数日を要します。次に、春の花をホームセンターで買ってきて、鉢に植え替えます。そして同時に、庭に置いてあるイスやテーブルにもせっせと水をかけ、越冬の汚れを洗い流します。こうして庭に明るさがもどってきます。春の庭への衣替えといったところでしょうか。

そのあとになりますが、四月の上旬を過ぎるころから、わが家の数本の山桜が満開を迎えます。どれも大きな木ですので、屋根を越える高さくらいまで樹高があり、見上げての、天空の桜観賞となります。隣接する敷地にも桜の木は何本もあり、この時期の一瞬、山のなかのこの地は、夕闇が迫ると、大群のホテルのようなほのかな灯を発光します。

ここは山間部ですので、平地の桜に比べれば、満開の時期は一週間くらい遅れますが、散るのは平地部とほぼ同じで、咲いている日数が少ないように思います。山桜そのものの性質がそうなのかもしれませんが、この時期の山間部に固有の雨の日や風の日が多いせいかもしれません。風が吹くと、本当に花吹雪となって、流れるように花びらが舞い散ります。風がないときは、一枚一枚、静かにゆっくりと、天から降るように地上に落ちてきます。外に出て実際の桜を眺める楽しみは当然としましても、室内にいながら、空から散りゆく桜の花びらを数日かけて楽しむのも、また格別の風情があります。この間、庭もウッドデッキも、玄関前の道も、白に近いピンクの花びらで薄く覆われます。

その一方で、庭をよく観察すると、去年まではなかったような草花を見つけることがあります。今年はレンゲの花が目につきました。どこから、どのようにして、ここに来たのかはわかりません。この大地の土壌には、多くの可能性を秘めた生命体が宿っているようです。春は、そうした生命体を蘇らせる季節なのでしょう。

一二. 熊本地震から三年

三年前の四月一四日に前震が、二日後の一六日に本震が、私たちの住む熊本地方を襲いました。多くの人命が失われ、家屋や大橋が倒壊し、道路や鉄道が寸断されました。誰もが想像していなかった惨事でした。

亡くなられた方の御霊に手をあわせたい。その方々のご親族のお気持ちと向き合いたい。家を失い、いまだ安住の場所を見出せない人たちの思いを受け止めたい。

橋や道は、時間とお金をかければいつかは元どおりになります。しかし、元どおりにならないものがあります。復興とは、元どおりになるものを元どおりにすることだけではありません。重要なのは、元どおりにならないものを、どう支え、どう記憶し、どう未来へ引き継ぐのかということではないかと思います。その意味で、復興に終わりはありません。これが、熊本地震から三年が立ったいまの実感です。

その当時を少し思い起こしてみます。地震からしばらくして、町役場に電話をしてボランティアができないか申し出てみました。小さな子どもたちに絵本などの読み聞かせならできるのではないかと思ったからです。しかし役場ではボランティアの受付は行っていないということで、残念ながら実現しませんでした。それから数日後の夜中、心筋梗塞に襲われました。多くの人の手によっていのちが救われました。地震に続いて、いのちのはかなさと大切さを実感した瞬間でした。

一三. 丸岡秀子の声

丸岡秀子は、一九〇三（明治三六）年に長野県の南佐久郡に生まれ、その生涯を、農村女性の地位の向上や平和運動に捧げた活動家であり、文筆家である。日本母親大会の生みの親のひとりとしてもよく知られている。丸岡のそうした生き方の原点に、富本憲吉と一枝がいた。奈良女子高等師範学校（現在の奈良女子大学）の学生るとき、丸岡は、この夫婦を安堵村に訪ねた。のちに丸岡は、その出会いの衝撃を、「近代」とのめぐり合いという言葉でもって表現している。

先日、丸岡秀子に関するウェブサイトを見ていたら、偶然にも「丸岡秀子の声」に出会った。これは、一九八〇（昭和五五）年一〇月に東京の五反田にある希望ホールで開催されたときの講演「時代の連続と不連続」の肉声の一部（五分程度）であった。そのなかで、七七歳になる丸岡は、「老い」について、こう語っている。自分は「老い」がどのようなものであるかを、具体的に誰からも教えてもらったことはなく、しかし、このことは重要なことであろうと考え、子や孫への遺産と思って、いま日記に書きつけている。七〇の「老い」は、二〇、三〇、四〇代に何を考え、どう生きたかを総括したものでないかと思う。そして、七〇には八〇の「老い」の重みはわからないし、八〇には九〇の「老い」のつらさがわからないとも話していた。

丸岡が生きていたら、おそらく驚嘆するであろうが、いま書店へ行けば、「老い」をどう生きるかというテーマの指南書が、ずらりと並んでいる。団塊の世代が定年を迎え、高齢化社会が加速するなか、「老い」は、家族をはじめ、周りの人たちをも巻き込んだ、まさしく国民的関心事となっているのである。しかし「老い」が、丸岡がいうように、二〇、三〇、四〇代に何を考え、どう生きたかの集約であるとするならば、「老い」がはじ

まってから「老い」を考えるのでは、手遅れということになろう。つまり、人生後半のよりよい老い方には、人生前半のよりよい生き方が「連続」のうちに実質的に関与しているからである。しかし丸岡は、たとえ六〇であっても、七〇の「老い」の重みはわからないともいう。ここに丸岡は、一方の「不連続」を見ているのであろう。結論的にまとめれば、誰しも、いまから一〇年後の様相は実感として想像することはできないものの、間違いなくいまの様相が一〇年後につながっているということになろうか。

以上のように、五分程度の断片的な短い肉声から、私なりに、演題にあります「時代の連続と不連続」を読み解いてみました。正確な読み取りになっているかどうかは別にして、そうした「老い」への思いに、次第に私も近づいてきているようです。

一四．春の日に（１）

こちらは数日前から、強い雨ではありませんが、降ったり、止んだりしています。雨は木々に恵みを与え、庭の新緑が輝いて見えます。この時期、鳥のさえずりも盛んです。いろんな声が飛び込んできます。しかし植物と違い、鳥たちはゆっくり観察できず、いまだに鳴き声と名前が結び付きません。またこの間、玄関横のシャクナゲが開花し、見ごろを迎えました。そうした毎年この季節に咲く定番の花とは違って、庭では、去年までは見受けなかったような野草が幾つか芽を出しています。おそらく野の鳥が野の花をついばみ、別の野に種を蒔くのでしょう。野鳥と野草の不思議な生命維持の関係です。ところで先日、遊びに来た地元の友だちの案内で、隣接する空き地でタラの木を数本見つけました。残念ながら、もうすでに芽は伸びきっていましたが、来年のこの時期の新芽が楽しみです。タラの芽のてんぷら、絶品だと思います！

一五．春の日に（２）

春は、草木や小鳥たちにとって生命再生の季節です。虫たちにとっても、同じことだと思います。しかし、彼らについては、季節の題材になじまず、これまでほとんど触れることはありませんでした。それでは虫たちに悪いと思い、今日は、ここに書き記しておきます。

こちらに移り住んで、最初のころのこの季節に驚いたのは、アリの大量発生でした。アリは、台所のゴミ箱に出現しました。そこで、キッチン・カウンターの上に小さなビニール袋（スーパーでもらうレジ袋）を置いて一日分のゴミ入れとして、台所仕事の最後に開口部をしっかりと閉じて町指定のゴミ袋（のに入ったゴミ箱）に入れるようにしました。一日単位のゴミ処理です。こうしてアリの好物と思われるものを遮断したことにより、それ以降、アリはゴミ箱に近寄らなくなりました。しかし今年のこの季節は少し様子が変わって、ゴミ箱でなく、押し入れの片隅に大量発生しました。そこで講じた対策が、粘着剤が塗布されたシートを使ってみることでした。このシートは、かつてネズミが部屋に出現したときに使用した残り物で、思惑が見事に的中し、一箇月もそれを置いていたら、アリも身の危険を感じたのか、もはや上がってこないようになりました。もっとも、床下から上がってくるアリの道は不明のまま、塞ぐことはできず、また来年も、同じ対策をしなけれ

ばならないかもしれません。それにしても、なぜ押し入れに出現したのか、それも不明です。

この時期に室内で発生する虫はアリだけではありません。クモもそうです。とくにクモは、洗面所や台所で見かけます。水分の補給のために現われるのでしょうか。対策は何もありません。見かけたら、履いているスリッパを脱いで、それでたたくことです。クモはとても弱い生き物で、たたくと足と体を丸めるようにして死に絶えます。いのちを奪う罪悪感がありますが、「ごめんなさい」というほかありません。

ときどき、スズムシが台所のシンクにすることがあります。かつて床の下で飼っていたことがあり、その繁殖の名残ではないかと思っていますが、こちらは、手を添えると、飛び込んできますので、そっとそのまま握って外に逃がしてやります。しかし、どういう方法を使ってシンクまでやって来るのか、いまだに謎となっています。

先日、排水溝を掃除していたら、生まれたばかりのような小さなネズミが二匹死んでいるのを発見しました。家のなかの配管を通して排水溝に来たのか、野外から水を求めて排水溝に近づき溺れたのか、それはわかりません。数年前に、部屋のなかにネズミが現われたり、天井から走り廻る足音が聞こえたりしたことが一、二度ありました。どうやら、家ネズミや野ネズミが、この周りにいるのは間違いないようです。

こうした虫やネズミたちは、私も含めて人間たちから嫌われ、草花と違って、この時期、その生命の輝きに目を向けられることはほとんどありません。しかし、彼らも生きているのです。

一六．イノシシ被害

ここは山のなかですので、野生動物がたくさん住んでいます。日常的に目にするのが、シカとサルです。シカは山野だけではなく、庭にも現われることがあります。偶然にも、一度庭でシカの角を見つけたことがありました。サルは高い所が好きらしく、ときどき屋根の上でジャンプする音がすることがありますし、あるときにはウッドデッキから室内をのぞき込んでいたサルと目があったこともありました。イノシシは昼間に出くわすことはありませんが、家の周りにもところどころに穴を掘ったあとがあり、これはイノシシの夜の活動の形跡です。

山間部や農村地の町や村では、こうしたシカやサルやイノシシの被害に頭を抱え、猟師さんたちに駆除を依頼し、一頭につき幾らかのお金を出して買い取っているところもあります。

先日のことです。朝起きて窓を開けてみたら、異様な光景が目飛び込んできました。私の家の西側には、約二メートル幅の狭い林道が走っており、その林道と宅地とは高い所で一メートルほどの高低差があるのですが、そののり面の一部が崩壊し、低い林道に泥が散乱していたのです。すぐにイノシシの仕業とわかりました。しかも、その状況の大きさからいって、一頭ではなく、数頭によるものではないかと直感しました。地元の人から、イノシシは土のなかの木根や、そこに眠る小動物を好むと、聞いたことがありました。どうやら昨夜は、食を求めての活動だったようです。

単なる穴であれば、周りの土をスコップで埋めてゆけばいいのですが、のり面の崩落と

なりますと、それとは勝手が違い、修復に少々手間取ってしまいました。そのとき、作付けした野菜や果物が被害に遭う農家の人びとの怒りの声も、少し実感できたような気になりました。そうはいつても、こうした野生動物たちがこの地の先住民であることに変わりはありません。野生や自然と人間との共存の最初の一步が、この日の出来事に隠されているのかもしれませんが。

一七．野鳥天国

こちらで生活していて驚くことは、野鳥の生息を身近に感じられることです。これまでに、車を運転していてキジやヤマドリのように歩きに出会うことがありましたし、目の前の庭の木に、大きなフクロウが止まっていることもありました。数年前には、カッコウが朝夕、よく鳴く年もありました。またあるときは、郵便箱を開けてみると、たくさんの苔のような草が出てきました。巣をつくるために野鳥が運んできたものと思われます。

ウッドデッキの手すりの一角に水を入れた大判の皿を置いています。鳥が寄ってきて水を飲みはじめると、皿の底をつつく音が聞こえてきますので、部屋にいてもすぐに鳥の存在に気づきます。ときには羽を広げて水浴びをします。隣りの木の梢には、次の鳥が待機している姿を見ることがあります。鳥の種類は正確にはなかなか特定しがたいのですが、ムクドリやヒヨドリ、セキレイやキツツキなどの仲間ではないかと思います。

冬が終わり、いよいよ三月初ころから野鳥が鳴きはじめ、野草園をウォーキングしていると、野鳥を撮影するカメラマンの姿が目につくようになります。鳴き声は五月ころにピークを迎えます。わが家でも、ひねもすいろんな鳴き声が響き合い、まさに野鳥は森の合唱団です。

先日、それとなく NHK の朝の番組を見ていたら、野鳥の話題となり、興味深く視線を移しました。専門家の解説によって、ウグイスやメジロなど、数種類の野鳥の姿と鳴き声の紹介がはじまりました。すると、庭先で実際の野鳥が鳴いているものですから、テレビの鳴き声と複雑に絡み合い、異様な音の空間ができてしまいました。これには驚きました。

一方、この番組で教えられたのは、ウグイスの色のことでした。キャスターのひとりもそう思っていたとのことでしたが、私自身も、ウグイス色やウグイス餅などから連想して、ウグイスの色は、草色（緑色）をしているものと信じていました。ところがこれはメジロの色で、専門家によると実際のウグイスは茶褐色で、映像で見ても、確かにそうでした。庭では早朝から夕暮れまでウグイスが鳴いていますが、いまだその姿を見たことは無いと思い込んでいました。しかし、実際には、ウグイスもお皿の水を飲みにきていたのかもしれませんが。よく観察してみたいと思います。

一八．温泉と新聞——その後の事情

前にも書きましたように、この三月末日をもって町が運営する高森温泉館が閉館に追い込まれました。赤字が続き、売却に出しても買い手がつかず、やむを得ない選択だったようです。この間、昨年の一二月に七〇歳になった私は、高齢者福祉の恩恵にあずかり、入浴料

金は半額の一五〇円になっていましたし、入館のたびにロビーに備え付けの新聞を楽しんでいました。

そのようなわけで、私もそうですが、多くの高森温泉館の常連客は、行き場を失い、四月から隣の南阿蘇村にあります阿蘇白水温泉瑠璃に通うようになりました。しかし、私たち高森町住民は村外者になりますので、七〇歳を超えていても福祉の特典はなく、正規料金の三〇〇円を払わなければなりません。そのうえに私の場合は、新聞を読む場も失われました。温泉棟には以前は新聞が常備されていたのですが、経費の削減でしょうか、震災後ころからそれもなくなっていました。しかし、かつてこの宿泊施設に家族で泊り、そのとき宿泊棟の受付で新聞を読んだことを思い出しました。温泉棟に隣接する宿泊棟に行ってみると、いまも新聞が備え付けられていました。何か救われたような感じがしました。

こうして四月から新しい生活のリズムへと移行しました。九時半に瑠璃温泉の駐車場に車を止めると、すぐ近くの南阿蘇村白水運動公園の展望台で南外輪山を望みながら独自の体操をし、続けて、運動公園と瑠璃温泉を囲む公道をウォーキングとして二周します。そのあと宿泊棟の受付で新聞を読み、一〇時半の開館にあわせて温泉棟に移動して、入浴をするというパターンです。

このパターンに慣れてきたころ、六月一日から料金が四〇〇円に改定されるとのアナウンスが流れました。私を含めて、病中病後の湯治場として毎日のように利用している常連客にとっては、この値上げは痛手で、日々の話題になりました。そうしたなか、高森町が一〇枚綴り一セット四、〇〇〇円の回数券を瑠璃温泉から買い取り、それを七〇歳以上の町民高齢者に半額で売り出すという話が舞い込んできました。しかし、半額での回数券の販売は、六月一日と二日が週末なので、三日の月曜日から町役場で、ということらしく、入浴仲間の目には、そうした町の対応は、なぜ五月三十一日までに販売ができないのか、町民の意向を無視した身勝手なお役所仕事に映りました。そしてまた、本来であれば、高森温泉館の閉鎖にあわせて高森町は、隣村の温泉施設の半額回数券を用意し、従来からの高齢者福祉の政策を中断させることなく、正しく継承すべきだったのではなかったのかといった批判の声も聞かれました。加えて、高森温泉館へ行くにはバス便もあったのですが、高森町方面から隣村の瑠璃温泉へのバス便はないらしく、高森温泉館の閉館に伴い足を奪われ、温泉の楽しみをあきらめざるを得なくなった町民たちがいることも耳にしました。このような一連の動きのなかに、高齢化と過疎化にある村落の厳しい現状を見たような気がしました。

一九．血圧対策——薬物治療か体質改善か

心筋梗塞で入院しステントを入れてから三年が経過しました。この間、四週間おきに通院し、経過を観察しながら数種類のお薬を出してもらっています。先日病院に行くと、先生から、イミダプリルという血圧を下げる薬をこれまでの五ミリグラムから半分の二．五ミリグラムに変えたいというお話がありました。診察に先立って毎回測定する血圧の値が、この数箇月、一三〇代から一〇〇代へと低下していたからです。

この三年間、試行錯誤を繰り返しながら、温泉（湯治）、体操とウォーキング、そして食事に最大限の注意を払って日々の生活を送ってきました。そのなかにあって、コレステロールは別ですが、血圧と血糖につきましては、どうすれば正常値の範囲を保つことができるの

かが、自分なりに少し感覚的にわかってきていました。しかし、心筋梗塞のような重篤な病気を過去に一度経験した人は、通常の正常値よりもさらに厳しい値が求められるのが通例です。それにしても、この数箇月の降下現象については、薬物治療の成果なのか、それとも体質改善の結果なのか、それをうまく判断することはできません。おそらくは両者の複合された作用によるものであると思われる。

通院開始以来、薬の量を減らすことが、私の最大の目標になっており、はじめてその一步を達成できたことをうれしく思います。これまでどおり、温泉（湯治）、体操とウォーキング、そして食事という三つの生活習慣の観点から自己の身体管理を徹底し、最終的には、薬を必要としない健康で健全な体に復帰したいと強く願っています。夢のような話ですが！

二〇．阿蘇野草観察会

今年も「野の花コンサート～はなしのぶ～」が南阿蘇ビジターセンターの阿蘇野草園で開催されました。このコンサートには、野の花に感謝して音楽を捧げるという思いが込められており、音楽と自然保護運動とが組み合わされた融合の企画となっています。そのため、午前の野外コンサートは、午後の野草観察会へとつながってゆきました。去年はコンサートだけで、野草観察会には参加しませんでしたでしたが、今年は、最近野草に関心をもちはじめたこともあり、心待ちにしていました。私のような一般参加者だけではなく、遠来からの団体参加者もあり、熱気に包まれていました。一五人程度で構成するグループが五班でき、さっそく班ごとに南阿蘇ビジターセンターから阿蘇野草園へと入って行きました。私たちの班の解説担当者は、熊大理学部若い教員の方でした。参加者のほとんどが高齢者で、なかには、日ごろからこうした観察会に参加し、とても野草に詳しい人が多く含まれていました。私は、隣接する高森温泉館が閉鎖される三月末までは、この野草園をウォーキングコースにしていたので、野草園自体には馴染みがあったのですが、そこに生息する野草については、ほとんどその名前も知らず、とてもいい勉強の機会となりました。とくに、クララをはじめて見て、感動しました。オオルリシジミというチョウは、このクララの周りだけで生活し、いまや唯一阿蘇・九重地域でしか見ることができない絶滅危惧種になっていることは知っていたのですが、残念ながら、クララの開花期はすでに終わり、オオルリシジミを見ることはできませんでした。いま毎日通っている阿蘇白水温泉瑠璃の名称は、このチョウの名前からとったもので、そしてまた、温泉に付設されているレストランの名前は「クララ」といいます。そのような日々の親しさもあって、実際のクララに出会えたことは、今回の野草観察会での思いがけない収穫となりました。

二一．大雨

昨日は、食堂の二箇所だけ外の様子を見るために雨戸を開けていましたが、それ以外は締め切って、一步も外に出ることなく、家のなかで過ごしました。いまは小康状態で、小雨に変わっています。しかし、土砂災害警戒情報も大雨警報も避難勧告も発表されたまま、まだ解除されていません。予報では、今週はずっと傘マークが並んでいますので、降

ったり止んだりの日が続くものと思われます。本当に避難を要するような、身の危険を感じる大雨にならないといいのですが。

こちらは阿蘇の山間部ですので、いつもの冬ですと、雪で閉ざされる日が数日続くことが、一、二度あるのですが、今年はそれが全くなく、異常な暖かさでした。入梅宣言は平年より二一日も遅れ、夏のような天気がつい先日まで続きました。梅雨に入ったかと思うと、この大雨です。やはり自然界が少しずつ狂いつつあるようです。これも人間の悪行の結果なのでしょうか。つついそのようなことを考えてしまいます。

今日から七月です。あっという間に、今年も半年が過ぎました。猛暑や台風などの脅威から離れた、穏やかな後半を過ごしたいと願います。

二二．コレステロール対策——果たして新生児にもどれるか

梅雨が明け、一気に暑くなりました。とはいっても、こちらは高くても三〇度までで、それを大きく超えることはありません。都会に比べれば、やはり別天地なのかもしれません。

前々回に「血圧対策——薬物依存か体質改善か」を書きましたが、これは、その続編です。六月の診察の際に、これまで二種類飲んでいた血圧の薬の内の一種類（ビソプロロールフマル酸塩錠）を服用中止にしようと医師から告げられ、日々の努力が実ったと、とても感動しました。その思いを胸に、それから四週間後の昨日が定期診察の日でした。前回の採血の結果が知らされ、すべての項目が基準値内にあり、心配していたコレステロール値も七三と、とてもいい成績でした。しかし、医師の判断によれば、一般の人であれば、この数値で問題ないのだが、私の場合は一度心筋梗塞を経験しているのです、やはりコレステロールを下げる薬は必要とのことでした。それではどこまで下がると薬が必要でなくなるのかをしつこく尋ねてみると、四〇という答えが返ってきました。この値は新生児の値だそうで、実際にはここまで下げるのは難しいだろうということでした。新生児にもどることはもはやできないかもしれませんが、今の薬（ロスバスタチン錠）は七．五ミリグラムですので、その量を五ミリグラム、さらには二．五ミリグラムまでは下げられるように努力したいと考えています。これまでの対応策は、一日の時間の適切な管理と食事への万全の配慮、それに加えて毎日のウォーキングと温泉療法でしたが、今後も途切れることなく続けてゆけば、いつかは達成できるのではないかと、あるいは、ひょっとしたら新生児に生まれ変わることもできるのではないかと感じています。

二三．台風の後始末

今回の台風は、私の生活にも被害をもたらしました。強い雨は風を伴い、木々の小枝や葉を庭や道路の一面に落としてしまいました。町の公道につながる数百メートルの牧野道はスギ林を切り開いた小さく狭い坂道で、台風が去った次の日、車で下りてみると、地に落ちた小枝や葉っぱで車も徐行しなければ通れないくらいになっていました。もともとこの林道は、数年前までは、下の部落から牧野まで牛をトラックに乗せて運んでいた牧野道として活気があったのですが、日増しに牛を飼う農家がなくなり、それに伴って、道を管

理していた牧野組合も解散し、いまではほとんど私しか日常的には使用しない、さびれた状態になっているのです。

さっそく枝と葉の除去作業です。正式な名称はわかりませんが、熊手の形をしたほうきのようなもの、加えて、運動場の地面を均すときに使うトンボのような形をしたもの、それらを使って枝と葉を数メートルごとにかき集めてゆきます。それが終わると、手で一輪車に移し替え、道路脇にある何箇所かの狭い平地のところまで運び、そこに廃棄するのです。作業は、この単純な繰り返しです。一日一時間半くらいの労働で、三日かかりました。自宅の庭の作業には、二日かかりました。

しかし幸いなことに、土砂崩れはありませんでした。この道は大変危険な道で、これまでに、地震や台風や梅雨のときなど、両脇ののり面が崩れ、土砂で塞がれたことが何度ありました。小規模な場合には、自分の力で除去しますが、そうでない規模のときは、町役場に連絡をし、業者が出て、重機による撤去作業が行なわれます。今回の台風の被害は軽微なものに止まり、こうした土砂崩れの災害に見舞われることはありませんでした。ある意味で、少し安堵した次第です。

二四．白内障の兆候

一、二週間前から目に違和感があり、物がぼやけたり、二重に映ったりするようになりました。隣り村の眼科に行ってみました。眼科に行くのは、小さいころに一度眼帯をつけたことが微かに記憶に残っており、おそらくそれ以来のことではないでしょうか。はじめに眼圧や視力などの検査をし、続いて医師の診察を受けます。結果は、少し白内障の症状が出ており、加えて、軽い結膜炎にも罹っているとのことでした。医師との会話のなかで、毎日四、五時間はパソコンと向き合っていることを告げると、目を酷使しないことも大事とのこと。お薬は、水晶体の濁りを抑え、白内障の進行を遅らせるものと、目のピントを調整する筋肉の働きを改善するビタミン剤の二種類の点眼薬が処方されました。そして帰りに、白内障に関する症状と治療について書かれた冊子をもらいました。それによれば、薬はあくまでも進行を遅らせるためのもので、症状を改善したり、視力を回復させたりする効果はないようです。症状が進み、日常生活に支障が出るようになれば、手術を考えなければなりません。そのようにならないように、祈るだけです。

二五．夏の終わり

お盆を過ぎるころから、夜明けが遅くなってきたと感じるようになります。それまでですと、だいたい五時ころには外が明るくなっていたのですが、この時期になりますと、それより三〇分ほど遅れて、白みはじめます。

こちらは標高が約六六〇メートルあり、気温は平地に比べ四度ほど常に低く、夏場でも三〇度を超えることはほとんどありません。その意味では、最高の避暑地です。しかし、何といても山間部ですので、よく雨も降り、そのため湿度も高く、風のないときなどには蒸し暑く感じられます。

テレビの天気予報を見ていたら、秋雨前線が話題になっていました。先日までは梅雨前

線と台風の接近が話題の中心になっていたことを考えれば、急速に季節は変化しているようです。こちらの生活は、だいたい一〇月から翌年の四月までが、暖房器具を使う冬の季節となります。どうやら今年も、夏が終わり、冬の到来がそこまで近づいているようです。

二六．長雨

確かお盆の連休のころ台風が来て、大雨をもたらしました。一九日に所用で神戸に行ったときは、何とか昼間は良好だったのですが、帰りの飛行機を降りてすぐに、雨が降り出し、俵山を越えるときには、ワイパーが役に立たないほどの激しい雨に見舞われました。その後も雨は続き、先日の大雨では、佐賀県や長崎県に被害が及んでいます。テレビの映像を見ますと、周りが水没し、民家や病院が孤立しています。こちらはそれほど大きな被害は出ていませんが、いまままだ断続的に降り続いています。いつもですと九月の後半ころから稲刈りがはじまります。しかし今年は、日照不足で発育が進まず、また連日の強い雨で、なぎ倒された稲も見受けられるようです。今日から九月です。この雨はいつまで続くのでしょうか。例年になく長雨を経験しています。

二七．子どもたちへ

昨日、熊本公証人合同役場において、資産の分与にかかわる公正証書と年金の分割にかかわる公正証書の二種類を作成し、その足で熊本市南区役所の出張所に離婚届を提出し、受理されました。

この間、機会があるごとにおふたりには、私の申しわけない気持ちをお伝えし、謝ってきましたが、こうして離婚手続きがすべて完了したことを踏まえて、改めて父親としての私がおふたりに与えてしまった苦しみや悲しみに対しまして、心から陳謝させていただきたいと思います。

ふたりに心ならずも味あわせてしまった心痛の重みを考えますと、決して許してもらえないようなものではないことは重々承知しています。その思いの内にあって、いまの私の心境を以下に少しだけ述べさせていただきます。

振り返ると、私が離婚を決意し、離婚届を書いて相手方に渡したのは、もう一〇年くらい前のことでした。しかし同意してもらえず、その後、おふたりが大学を卒業し、職を得て社会人になるのを見届け、それなりの父親の役割と責任を果たしたうえで、二〇一三年三月三十一日の退職と同時に山に帰り、隠遁生活を開始しました。その後「離婚協議書」を作成し、家族みんなの同意を得たものの、実行には移されないままになっていましたが、やっと念願がかない、その日が昨日訪れました。いま私は、地獄のような暗闇から何とか這い出して、新鮮な日の光を浴びるのに似た、安堵の気持ちでいっぱいです。

私たち夫婦には、生き方や考え方にかかわって相容れない決定的な違いがあり、何事につけ、対立や争い事が日々絶えることなく結婚期間中に続いていました。しかし、そうしたことがすぐに表面化することはありませんでした。ふたりの子どもが生まれると、夢中になり、また必死になって、日々を過ごしていましたし、感受性が豊かになるころになる

と、夫婦の不和を見せたくないとの思いから、子どもの前では意識的に言い争いを避けるようにしていました。しかし、大学に入るところから、私自身の緊張感も緩み、それに耐える限界に達したのかもしれませんが、夫婦関係が最終的に破綻し、そしてその結果、ふたりの子どもたちへ苦しみや寂しさを与えてしまうことになりました。私は、神戸の地で死んだような生き方を最期まで続けるよりも、人間らしく生きたままの姿で死んでゆきたいという強い思いから、定年退職後は山での塾居生活を選択しました。現状の理不尽な寒風に晒されたまま最期まで忍耐する力がなく、生に対する執着心のようなものが捨て切れずに残存していたということでしょうか。結果的に、こうした私のわがママが、おふたりを悲しませ、苦痛を強いることになってしまいました。決して許されるものではないと承知しながらも、「どうかお許してください。ごめんなさい」という言葉しかいまの私には残されていません。先のない父親の、やっと巡ってきた晴れがましいいのちの輝きのために、どうか辛抱してください。しかしこれは、父親としては決してふさわしくない、子どもに対する一方的で独善的な甘えなのかもしれません。

あなた方はともに自宅のある神戸で生まれました。実家での出産ではなく、自宅で出産したいとの申し出を聞いたときには、果たして自分がどこまでできるのか不安がよぎりましたが、実際にやってみると、いのちを慈しむ気持ちが自然と体内から湧いてきて、せつせとおむつを替え、抱っこしてあやし、沐浴をさせては夢中になる自分がそこにありました。いまでも、抱いているときの肌触りや心地よい重みが、この両腕に残っています。少し大きくなってからは、イギリスでの生活も家族で楽しみました。あなた方はそれぞれに、日本人学校と現地の幼稚園に通学しました。帰国後しばらくすると、塾通いは避けて、「お父さん学校」をはじめました。生徒にとっては苦痛なだけの、単なる教師役である父親の自己満足だったのかもしれませんが。ふたりとも大学へ進学すると、それぞれのイギリスへの留学も視野に入ってきました。それ以前からちょうどこの時期、私は、本務校においてのみならず、数校で非常勤講師をし、東洋ゴム工業のデザイン・コンサルタントをし、名古屋の国際デザインセンターのデザイン・ミュージアムのディレクターをして、楽しくも必死に働いていました。すべてが過去のいい思い出になっています。

しかし、育児第一や家族第一は、その分、どうしても研究にあてる時間が少なくなります。私の性格は、まずは育児や家族を先行させ、そのうえで、子どもが成長し、自分も定年になったら、すべての時間を自分のための研究にあて、失われたものを取り戻そうと考える、他者優先のそれでした。周りでは、定年を迎えると、その時点で研究も終わる人がほとんどですが、私の場合は、定年が、研究者としての折り返し点でした。いま私は、大自然に囲まれて、思索にふけては、机に向かって格闘し、ひたすら文字を書き連ねています。去年は、著作集4「富本憲吉と一枝の近代の家族（下）」をウェブサイトアップロードし、今年はまだすぐ、年内には、著作集5「富本憲吉・富本一枝研究」を公開する予定です。三年前に心筋梗塞に襲われたときは、死を覚悟しましたが、幸運なことに、奇跡的に何とか生き延び、その後の健康づくりもうまくゆき、現在のところ、快調に執筆が進んでいます。

来年の三月になれば、すべての分与や分割の実行が終わり、私自身の個人資産も確定しますし、その前には、今後の分割後の年金額もおそらく判明することでしょう。こうした経済状態にあわせるように、残りの生活設計をしなければなりません。そして、その後の

過程のなかで、いつかは笛田の両親のお見送りをすることになるでしょうし、あなたたちにとって負の遺産となるにちがいないこの山荘とも、どこかの時点で別れなければなりません。

しばしばメディアのなかで取り上げられていますように、現代の社会が要請していることは、「親孝行」ではなく「子ども孝行」です。私も、そのとおりだと思います。私はこの間、たくさんの「親孝行」をいただきました。ふたりが歩きはじめたときは、本当にその成長に感動しましたし、大学に入ったときは、言葉では表現できないような充足感を味わいました。本当に「親孝行」、ありがとう。これからは私が、「子ども孝行」をする番です。それは、どこの親も同じだと思いますが、子どもに負担をかけない、迷惑をかけないという一語に尽きると思います。私の最期もそうありたいと思い、これから自分に一番あったかたちを見つけてゆきたいと思っています。

父親としてこれまで何ひとつ十分なことがしてあげられず、それどころか、苦しみだけを与えてしまった私に、何もう資格はないのですが、それでも、おふたりの今後の安寧を衷心より祈ります。どうかお幸せな人生を歩んでください。

二八．火山活動と降灰

今日から一〇月です。今年も残すところ三箇月。一年の進み具合が、本当に早いような気がします。もう少し、時間がゆっくり流れてほしいものです。そうすれば、季節の移り変わりも、もう少したくさん目で楽しむことができそうですし、もう少ししみじみと体で感じるような気がします。

この夏から中岳の火山活動が活発になり、火山灰が降るようになりました。ウッドデッキや庭のテーブルには、うっすらと黒く積もり、車も汚れが目立ち、水洗いが欠かせません。この時期は、南や東から風が吹くため、高森町や南阿蘇村への降灰は少ないのですが、冬になれば北風に流されて、多くはこちらに降り落ちることになります。五年前にも中岳の活動が活発化したことがあり、そのときは、ゴーグルをして、傘をさして、子どもたちは登校していました。今回は、これほどひどくならないといいのですが。すべては自然まかせです。

二九．ブリッジをはじめる

少し前からコントラクト・ブリッジというトランプのゲームをはじめました。この同好会は私の高校の先輩が主宰するもので、月に二回、長陽の健康センターの一室を借りて開催され、毎回十数名程度が参加しています。子どものころ家族や友だち同士でブリッジをしていましたので、はじめて参加したときは、てっきりそのときのルールと同じゲームとばかり思っていたのですが、コントラクト・ブリッジは、それとは少し違って、大きな流れはほぼ同じですが、細部のルールが全く異なっていました。いま、ルールを覚え、適切な判断力を身につけるために四苦八苦しているところです。

途中でおやつタイムがあります。先輩の奥さまがコーヒーとお菓子を持参され、参加者全員でテーブルを囲んで、よもやま話をします。みんな高齢者です。そして多くは、この地へ

の移住組です。ここにひとつの連帯感が生まれます。ゲームのあとの頭を休める時間であると同時に、いま生きていることへの相互の共有の時間となっているようです。少し続けてみたいと思います。

三〇．父の入院と絵画制作

九六歳の父が肺炎で入院しました。当初は大変危険な状態でしたが、病院スタッフの懸命のご尽力により、驚くことに日増しに回復してゆきました。三週間を経過したところです。肺炎自体はほぼ完治し、いまは、以前の日常生活へ支障なくもどれるように、運動機能のリハビリに集中しています。

本人のいのちをつないだのは、絵の制作だったような気がします。父の絵は阿蘇を題材にしたものがほとんどで、第一回展から毎年この時期になると、高森町主催の大阿蘇絵画展に出品してきました。父が入院したのは、ちょうどこの展覧会の審査のために作品を搬入する日が迫り、作品の完成を急いでいた時のことでした。入院中、ときどき思いがよぎるのでしょうか、家と病院を行ったり来たりしながら絵を描きたいとか、この展覧会への出品について口にししました。実際にはそれは無理なことで、家族は、未完成でも、作品を搬入することも考えました。しかし、それもあきらめました。といいますのも、退院ができて家に帰ったとき、作品がなくて戸惑うようなことがあってはならず、作者の最後の一笔を待って完成へ至ることを願って、入院時のままの状態を保っておくことの方がいいのではないかと考えたからです。

主治医の先生からは、二階への上り下りは危険を伴うので、絵の制作は一階で行なうようにとの助言がありました。退院後は画室を一階に移し、そこで、この絵画作品が完成し、来年の大阿蘇絵画展に出品できるようになることを密かに祈っているところです。

三一．冬近し

報道によりますと、昨日（十一月二日）、今シーズン全国初の雪が北海道の稚内で降ったそうです。こちらも少しずつ朝夕寒さを感じるようになってきました。先月の中旬あたりから、最低気温が一〇度を下回り、最高気温が二〇度に達しない日が多くなり、少しずつ暖房器具を使う機会が増えてきました。庭やウッドデッキには色づいた落ち葉が目立つようになり、自然界は着実に冬への備えをしています。

夜になると、「ヒュー、ヒュー」という独特の鳴き声が聞こえてきます。いまがシカの発情期なのです。一年を通じてよく見かける動物がサルとシカですが、サルは大家族で群れをなし、ときどき屋根に登ってはジャンプをして遊びます。一方シカは、親子連れか、一匹のときをよく見かけます。以前に、シカの角を庭で見つけたことがありますが、朝早く起きて庭の方に目をやると、よくその姿を見かけることがあります。シカも、イノシシと同じく、夜行性の動物なのでしょうか。これから一段と寒くなる冬のあいだ、彼ら野生動物たちは、どこで、どのようにして過ごすのか見当が付きませんが、ひっそりとこの周辺で生息していることは間違いありません。そう思うと、一方的ではありますが、何か変な、一種の連帯感のようなものを感じてしまいます。

三二．温泉談義

毎日通う白水温泉瑠璃が開館するのは、午前一〇時半です。この時間の少し前から、いつも数名の朝風呂愛好家が集まり、入り口が開くのを待ちます。男湯の朝一番の客は、ほぼ決まった数人の客です。サウナに入ると、温泉談義よろしく、自然と会話が進みます。話題はそのときどきでさまざまですが、貴重な日々の情報や意見の交換の場と化します。この常連客に共通しているのは、どの人も、多かれ少なかれ、体に故障や不安を抱えていることでしょうか。朝夕の二回この温泉に通い、電気風呂で肩の痛みを和らげている人もいますし、週三日人工透析を受けながら、その合い間にこの温泉で体調を整えている人もいます。また別の人は、膝と足首に痛みをもち、朝の仕事が終わったあと、この温泉に足を運びます。その意味で、みな湯治客なのです。

私が、温泉のあるこの地に移り住んだのは、前立腺がんの摘出手術後に悩まされた尿トラブルから何とかして逃れたいという一心の思いからでした。最初の一年は、私も朝夕の二回通ってサウナで汗を流し、電気風呂で下半身に刺激を与える療法を試みました。全くの自我流の発想でしたが、徐々にその効果が上がり、昼間の尿漏れも夜間のトイレ通いも、日常生活に大きな支障をきたさない程度にまで、改善されてゆきました。

それから数年後、今度は心筋梗塞を患いました。退院後決意したのは、抜本的な体質の改善でした。そのとき私は、食事、体操（ウォーキングを含む）、温泉の三つの要素を組み合わせることによって、これまでの生活習慣は変更できないか、直感的にそう考えました。そこで、本を読んだり、人の意見に耳を傾けたり、試行錯誤を繰り返したりしながら、自分なりに研究を重ね、科学的な根拠のあるものだけを選び出し、ひとつの定型化した生活システムのようなものをつくり出しました。食事療法、運動療法、それに加えての温泉療法。この組み合わせによる新たな生活習慣の構築も、自己流にすぎないことには変わりありませんが、それでも、このたどり着いたシステムを信じて、それ以降毎日、規則正しい生活を実行しています。幸い、何とか健康づくりに成功しているのではないかとというのが、現在の実感です。

温泉は、いまや私の生活に欠かせないものとなっています。そして昔の人びとの湯治の習慣に思いを馳せながら、日々、温泉通いを楽しんでいるところです。

三三．灰色の紅葉

わが家の庭は、いつもこの時期になりますと、一面の木々の葉が色づき、さながら錦の織物の世界が出現します。しかし、今年は少し事情が異なります。

夏のころから中岳の火山活動が活発化し、普段の穏やかな白煙に代わって、黒や灰色の激怒色の噴煙が大量に火口から舞い上がるようになりました。噴煙は、南風のときは阿蘇谷の方へ、北風のときは南郷谷へと流れてゆき、岩石が小さな粉状に砕かれ火山灰を降らせます。噴火の激しい日は、田や畑、道路や家の屋根、まさしく地上の一面に火山灰がうっすらと積もり、空気もまた汚れます。わが家の庭も例外ではありません。そのようなときは、木々や草花、石垣に火山灰が落ち、砂をかぶったような、薄暗い視覚世界が現われ、落ち葉の地面

も、歩くと、ザラザラとした、不快な感触が伝わってきます。

残念ながら、見ごろの紅葉も、この火山灰で生育が悪いのでしょうか、葉の量も少なく、発色も悪く、さらに、その葉を降灰が覆い、例年とは違った様相です。今年は、無残にも灰色の紅葉となってしまいました。

三四．著作集5『富本憲吉・富本一枝研究』を脱稿

二〇一三（平成二五）年三月に神戸大学を定年退職し、業者に頼んで荒れていた山荘の庭に手を入れ、続けて、同じく自分で図面を書いて少し増築も行ない、いよいよ神戸からの引っ越しの荷物を入れ、新しい執筆活動の準備が整ったと思ったところで、今度は阿蘇の中岳の火山活動が活発化して、長期にわたって火山灰に悩まされ、ついには二〇一六（平成二八）年四月に熊本地震が発生。そして心筋梗塞を発症したのは、ちょうどその一箇月後のことでした。退院後の気力と体力の減退は、今後の執筆活動を奪い去ってしまうのではないかという強い不安を引き起こすほどのものでした。しかし、何とか立ち上らなければならない。そう思って、いま一度食事を見直し、運動を取り入れ、湯治の効用を信じて、とりあえず最初の一步を踏み出しました。その結果、これまでの生活習慣は徐々に改善の方向へと向かい、気力と体力も、少しずつ蘇ってゆき、やっと短時間であれば書斎の机に向かうことができるようになりました。それはちょうどいまから三年前の二〇一六（平成二八）年の秋が深まった紅葉の時期でした。年が明けた二〇一七（平成二九）年の春には、震災で閉館していた熊本県立図書館が再開しました。心から待ち望んでいた執筆のための環境が、こうして同じように回復してゆきました。ここへ至って、私の執筆活動は本格的に開始されることになります。

定年から四年の歳月が流れていました。この空白期間が、私の執筆能力をやせ細らせてしまっていないか、当初は本当に不安でした。しかし、思っていたよりも早く不安は解消され、昔の経験が再生されてゆきました。一年後の二〇一八（平成三〇）年の春には、現役時代の続編に相当する、著作集4『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』を無事に脱稿し、それを含めてウェブサイト「中山修一著作集」を全面改訂し、その年の初秋にアップロードすることができました。そしてそれからさらに一年間と数箇月、一心不乱に執筆に専念し、ちょうど昨日、著作集5『富本憲吉・富本一枝研究』をほぼ予定どおりに擱筆することができました。現役時代から私のウェブサイトの管理をお願いしている方にすべての原稿を渡し（といっても、ウェブ上の共有フォルダに置くだけですが）、編集作業が終わり次第、来年の一月末ころには神戸大学のサーバーにアップロードし、更新された「中山修一著作集」をご覧いただけるものと思います。これから、新しい巻の執筆に向かいます。

三五．「中山修一著作集」の今後

私は、ウェブサイト上の自分の著作集を更新してゆくに際して、新しく数巻を書き終えた時点で、既存の巻を含めて、全体的な巻の構成を改めて考え直し、微調整を行なうことにしています。その際に気をつけているのは、各巻の内容の流れと、そのタイトルのつな

がりについてです。また分量についても、できるだけ各巻等量（四〇〇字詰め原稿用紙に換算して、一千枚）になるように配慮します。著作集5『富本憲吉・富本一枝研究』を攷筆し、これから、新しい巻の執筆に向かおうとしているいま、ウェブサイト「中山修一著作集」の今後の全体像（全一〇巻）を以下のように再構築してみました。■が執筆完了の巻を表わし、□が一部執筆完了の印で、今後の執筆が残されている巻を意味します。

- 著作集1 『デザインの近代史論』
- 著作集2 『ウィリアム・モリス研究』
- 著作集3 『富本憲吉と一枝の近代の家族（上）』
- 著作集4 『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』
- 著作集5 『富本憲吉・富本一枝研究』
- 著作集6 『日本デザインの底流』
- 著作集7 『英国デザインの諸相』
- 著作集8 『デザイン史研究余録』
- 著作集9 『阿蘇白雲夢想』（随筆集ほか）
- 著作集10 『阿蘇風花余情』（回顧録ほか）

全体的なつながりはうまくいっているでしょうか。未完部分の巻を書き進めながら、今後も全体の構成に常に意を用い、再調整を施し、そして、必要に応じて増巻してゆきたいと考えています。

三六. 「処女作へ向かって完成する」のかな

私が学生だったころ、研究者の仕事は処女作に向かって完成するという言葉に接し、そういうものなのかなという思いをしたことがありました。著作集5『富本憲吉・富本一枝研究』を書き終え、いま、ウェブサイト「中山修一著作集」の今後の全体像（全一〇巻）を並べてみて、改めてその言葉が蘇ってきました。私の場合の処女作は、明らかに、著作集1『デザインの近代史論』です。確かにこのなかに、私の学問的関心事の多くが含まれています。そしてそれ以降の巻は、その一つひとつの関心事を敷衍化したもののようにも感じられます。どうやら、無意識のうちに、繰り返し繰り返し、掘り下げよう、掘り下げようとしているようです。この指向性の力は、一体何なのでしょう。とても不思議に思えてきます。「三つ子の魂百まで」という言葉がありますが、研究上の関心事も百歳になるまで、変わることなく続くのでしょうか。

私は、一九八七（昭和六二）年にブリティッシュ・カウンシルのフェローとして、また一九九五（平成七）年に文部省の長期在外研究員として英国に赴き、そこで新しい学問であるデザイン史という学問に出会いました。そのときまでに私の心を占めた関心事は、ひとつには、一九世紀英国のデザイナーであり詩人であり、社会主義者でもあったウィリアム・モリスという人物の実践と思想であり、ひとつには、日本ではじめて工芸家としてのモリスに興味を抱いて英国に留学し、のちに陶芸家となった富本憲吉についての事跡であり、そしてそれらに加えて、日英両国の近代におけるデザインの歴史と思想に関するものでした。いまか

ら三〇年くらい前の話です。思うに、それ以降私の関心事は凍結されたままで、何ひとつ変わっていません。それを思うと、「処女作へ向かって完成する」というよりも、「処女作へ向かって盲目となる」というのが実感に近く、そしてまた、「処女作へ向かって歩む」ということは確かにあるとしても、私の場合、「完成する」には程遠いように思います。言い訳になるかもしれませんが、まさしく「人生短し、学成り難し」といったところでしょうか。おそらく現実には、いのちとともに未完のままで息絶えることになるのでしょう——これらの研究主題が、可能であれば次の若い研究者へ引き継がれてゆくことを密かに念じながらも。

第五編 二〇二〇（令和二）年——六回目の年男

一．研究上の祖先との対面（年賀状）

謹んで新春の御祝詞を申し上げます

昨年末に、著作集5『富本憲吉・富本一枝研究』を脱稿しました。準備が整い次第、ウェブサイト「中山修一著作集」にアップロードしたいと考えています。この巻は、第一部「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」と第二部「富本憲吉という生き方——モダニストとしての思想を宿す」から構成されていますが、とりわけ第二部には、私の特別な思いが込められています。のちに陶芸家として大成する富本憲吉は、明治末年にウィリアム・モリスの思想と実践に関心を抱き英国に留学した最初の日本人で、帰朝後「ウィリアム・モリスの話」を『美術新報』に寄稿します。私のこれまでのささやかなモリス研究にとりまして、まさしく富本憲吉は大先達であり、この巻を書き終えたことによって、やっといま、自分の研究上の系譜の祖先に対面したような気持ちになっています。これが、この巻へ寄せる「私の特別な思い」です。今年、私にとって六回目の年男が巡ってきました。次の年男まで、何とか気力と体力を維持し、執筆が続くことを願っています。

穏やかなお正月をお迎えのことと思います。

本年のご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。

二〇二〇年 元旦

二．納骨堂の購入

昨年末に、蓮政寺の納骨堂^{れんしやうじ}を購入しました。このお寺は、一六世紀末創建の母方神吉家の先祖代々の菩提寺です。私は小さいころ、上通を出たところの上林町にある信愛幼稚園という幼稚園に通っていて、しばしば、迎えにきた母親に連れられてこのお寺に行き、木戸を通して水を汲み、お墓の前で手をあわせたことを記憶しています。私が四歳のころに、区画整理に伴い、鶴屋百貨店ができました。それまでは、このあたりの土地も蓮政寺の敷地だったようです。区画整理後、神吉家のお墓を含め蓮政寺のお墓は、熊大の裏手にある立田山の小峰墓地に移され、その後は、こちらにお参りに行くようになりました。しかし、お寺はいまの地に残り、その後建物内に納骨堂が設置されてゆきました。このお寺の宗派は日蓮宗ですが、他の宗派の信者にも門戸を広げ、仏教だけではなくキリスト教の信者の霊骨も、納められているとのことでした。購入に先立って、神吉家の供養のお経をあげていただきました。私もそれまでに何回か入ったことがありましたが、お経を唱える本堂は実に立派です。このときご住職とお話ができて、私の高校の大先輩であることもわかりました。

中山家の先祖から続くお墓は、宇土市にある浄土真宗の善行寺というお寺の境内にあります。しかし、父親は末っ子でもあり、残された子どもや孫たちにとっては、遠く離れたこの地ではお参りするのになんとか不便だろうということもあって、宗派は違いますが、これまでに関係の深かった蓮政寺に自分たちの遺骨を預けることを決意しました。そのようなわけで、購入した納骨堂には、まず笛田の両親が入り、次に私が入ることになります。

私がこの納骨堂を買おう思ったのは、両親や私自身のためだけではなく、子どもたちのことも考えてのことでした。もっとも、時代とともにお墓に関する考えも生死観も変わってしょう。したがって、将来的にここに納骨するかどうかは、それぞれのそのときの状況によるものと思います。最終的にそのときがきたとき、離れて遠くに住む子どもたちがどのように考えるかは私にはわかりませんが、しかし父親として、選択肢だけはしっかりと残しておきたいと思いました。（一月）

三. 親子二代のデザイン思想の受け渡し

かつて私は、国立高岡短期大学（現在の富山大学芸術文化学部）で、毎年「デザイン史」の集中講義を受け持っていた時期がありました。そのとき多くの先生方と親しくなり、それ以来いまでも何人かの先生と音信が続いているのですが、そのなかに金沢美術工芸大学での柳宗理先生の教え子であった方がいらっしゃいます。先日その先生からメールをいただきました。そこには、島根県立美術館で「柳宗理デザイン——美と対話」展が開催されるにあたり、そのカタログに「とても四六歳には見えない黒い髪の一流デザイナー柳宗理、日本からカッセルへ」と題した一文を、最近寄稿したことが書かれてありました。そしてまた、内容的には、一九六〇年から六一年にかけてドイツのカッセルの大学で教鞭をとられた柳宗理先生の足跡をたどるもので、そのときの招聘の経緯や授業内容、さらには本人主催による「JAPAN FORM」展などについて多く触れているとのことでした。

数年前に私は、直接ご本人から、一年間カッセルに滞在し、当時の同僚の先生方や教え子たちを訪ねては面会し、半世紀以上前の恩師の滞在の様子について丹念に調査をしたというお話を聞いていました。おそらく図録へのこの寄稿文も、そのときの調査に基づいた、優れて実証的な「恩師柳宗理研究」になっているものと思われます。ちょうどいたメールには、「これを機に資料を再読しましたが、まだまだ足りないことが多く、なんとかもう一度思っていますが、何しろ知力、気力、体力、そして資力も足りません。でも、今年はもう一度精度を上げるべくがんばろうと思っています」との、さらなる研究への瑞々しい決意が添えられていました。

承知のように、柳宗理さんは、民芸を唱導した柳宗悦さんを父にもつ戦後の日本を代表するインダストリアル・デザイナーのひとりです。戦前戦後の日本のデザイン運動を見てみると、親子二代にわたって引き継がれて展開された事象が散見されます。たとえば、柳宗悦・柳宗理の例だけではなく、田中後次・前田泰次や豊口克平・豊口協などがそうした事例となります。親子というふたつの世代のあいだで、どのようなデザイン思想上の共感や葛藤、反駁があったのでしょうか。伝統的か刷新的か、土着性か国際性か、手か機械か——論点に興味は尽きません。しかしながら、かなり前からそうしたテーマで書いてみたいと思いながらも、なかなかそこまでたどり着けないのが、いまの私です。いつかそのときが本当に来たら、このたびお知らせを受けた図録掲載の論文「とても四六歳には見えない黒い髪の一級デザイナー柳宗理、日本からカッセルへ」は、間違いなく一級の資料になることと思います。楽しみです。（一月）

四．新型コロナウイルスへの対応

新型コロナウイルスの感染拡大に多くの関心が集まっています。過剰なまでに心配したり、心ないデマに惑わされたりすることはあってはなりませんが、合理的で適切な自己管理は必要のように思います。インフルエンザやかぜが流行する例年のこの時期の健康管理と基本的に変わりはないのですが、今年は、それを少し強く自覚して、励行しています。具体的内容は、以下のようなことです。

- ・外出するときは、マスクと手袋を着用する。せきやくしゃみをしている人との濃厚接触はしない。不要不急の遠出や旅行は避ける。
- ・帰宅したら、うがいと手洗いを十分に行なう。
- ・免疫力や体力を低下させないために、良質な食事と睡眠に心がけ、清潔な服や下着を着用し、体温の保持に気を配る。

何ととっても、健康が第一です。自分でできることは、意識的に毎日実行しています。

ところでこれまでは、雪も降らず、不気味なほどの暖冬でしたが、今日からの一週間の予報によりますと、氷点下の最低気温が続くようです。冬がもどってくるのでしょうか。昨日、庭の水道の養生をしました。一方で、中岳の噴火もいまだ続いており、火山灰に苦しめられています。昨日洗車した車が、今朝見ると、黒い火山灰で覆われていました。

冬の寒さの再来、止むことのない降灰、加えて新型コロナウイルスの発生——生活環境がどうもよくありません。（二月）

五．火山灰に悩まされる

日々、火山灰に悩まされています。阿蘇中岳で大きな噴火があったのは、昨年四月だったのでしょうか。それ以来、噴火活動が持続しています。秋ころまでは、おおかた南からの風に乗って、北側のカルデラである阿蘇谷（阿蘇市など）へと火山灰が流れていました。しかし昨年の一二月あたりから、風向きが変わり、西風や北風になりました。その結果、火山灰は、私たちの住む南郷谷（南阿蘇村や高森町など）へ降るようになりました。火山灰は、灰といっても紙や木片を燃やしたときにできる灰とは異なり、岩石を砕いた微細な粉状のものです。中岳火口から噴き出した真っ黒い煙（火山灰）は、家の屋根、庭、ウッドデッキ、車だけではなく、田畑や森林にも等しく降り注ぎます。こうして、空や大気、大地や山の色を変えてゆきます。

地元の人は、この灰のことを「よな」と呼びます。年が明けたころから、「よな」が一段と激しくなってきました。窓を閉め切っていても、「よな」が部屋のなかへ入ってきます。道路に積もった「よな」は、中央分離帯の白線さえも見えなくし、車は「よな」を巻き上げながら走ります。雨が降ると、積み重なった「よな」は、コールタールのような、黒い泥上の粘着質に化してゆきます。そのようなわけで、マスクは欠かせませんし、気象庁の降灰予報も、欠かさず毎日チェックします。

いま私の家の庭も、そして車も、風向きにもよりますが、また日によって量も異なりますが、ほぼ毎日のように降灰に苦しめられています。庭の水道水（地下水を汲み上げた井戸水）

を使って洗い流しても、結局はたちごっこです。疲れも出ますし、ストレスも溜まります。そんななか、数株の福寿草が花を咲かせました。玄関へ上がる階段横のいつもと同じ場所です。しかし今年は、暖冬のせいでしょうか、二週間ほど早い開花です。名前のとおり、すさんだ心に「福寿」をもたらしてくれました。ありがたい限りです。そうするうちに、また灰が降り、黄色の花が、灰色に変わってしまいました。これには、もう言葉がありませんでした。（二月）

六．著作集のプロデュース

定年退職時に考えたことは、研究（論文の執筆）の続行でした。神戸大学に在職したのは、ちょうど三九年間で、この間の大学教員としての職務は、研究、教育、組織運営がその大きな三本柱となっていました。ということは、単純に計算すれば、三九年間の在職期間中に研究にあてた時間は、実質一三年ということになります。そこで、定年退職後の一三年間の生活を研究主体の生活へと組み替えることができるならば、明らかに定年という区切りは、研究者としての人生の折り返し地点ということになるはずです。つまり、これからの一三年間で、現役時代の研究の総量と同量の研究ができることがわかってきたのです。定年のときが六四歳でしたので、ゴールは一三年後の七七歳です。こうした目算のもと定年後の執筆活動がはじまりました。

問題は、次の二点でした。ひとつは、何について書くのか。もうひとつは、研究成果の発表の場をどう確保するのか。前者については、専門分野である「デザイン史」にかかわる内容であることはいうまでもありませんが、具体的には焦点が定まらず、とりあえず、現役時代に書きかけていた「富本憲吉と一枝の近代の家族」の後編から着手することにし、その擱筆後に、それ以降の内容は検討しようと考えました。後者については、せっかく自由気ままな田舎暮らしをはじめた以上は、現役時代に慣例となっていた、原稿の分量や執筆の締め切りなどの制約のなかでの学会や大学内の研究紀要への投稿、そのようなことから距離を置き、神戸大学のサーバーにウェブサイト「中山修一著作集」を設け、そこにできあがった原稿を適宜アップロードしてゆき、研究成果を一般公開しようと考えました。このふたつの問題は、結局のところ、中山修一というひとりの研究者の研究上の地政学的全体像（つまり自画像）をあらかじめつくっておき、その空白部分を一つひとつ埋めてゆき、それを公開しながら、最終的に完結させるという手法にかかわる問題にほかなりません。イメージ的には、この手法は、ジグソーパズルの絵柄をはじめに描き、すでに手もとにある既存のピースを置いてゆき、その後、残りの空白部分に当てはまるピースをつくっては埋め込んでゆく、インスタレイション的でパフォーマンス的な作業に近いといえるかもしれません。しかし、残りの空白部分を埋めるにふさわしいピースが、ちょうど見合った色とサイズの部品として、うまく立ち現われてくれるかといえ、必ずしもそうとは限りません。大きくなったり、小さくなったり、横にはみ出したり、どうしても期待どおりにはならず、つくってみなければわからないところがあるのです。その場合には、最初に描いた絵柄をご破算にして、事態を踏まえて、新たに次の絵柄を描かなければなりません。そうした行為を繰り返すことによって、奥に隠れていて自分さえも気づかなかった、研究者としての地政学的全体像が、つまりは、研究者としての本来的自己のすべて

が、結果として、その姿を現わすのかもしれませんが。つまり、何度も何度も自画像を描き改めることで、眠れる自己を掘り起こすのです。

現役のときは、日々の執筆に追われ、自分がどこに向かい、どのような研究者像を形成しようとしているのかといったことには特段関心をもつことはありませんでしたが、現役を退き、折り返し点に立ち、残りの道のりを見渡そうとしたときに、こうした思いが、自然と体内から湧き上がってきたのでした。このことは、自分が、「中山修一著作集」という一幕の劇を演じる役者であると同時に、その劇を生み出すプロデューサーであることを意識させるに十分な出来事でした。

以下は、私の自画像の変遷です。定年退職すると、現役時代に執筆したそれまでの論文を集めて、二〇一四（平成二六）年一二月に本巻二巻別巻二巻の全四巻から構成される「中山修一著作集」をウェブサイトオープンしました。構成は次のようなものでした。以下の記号は、アップロードした際の各巻の完成度合を示しており、■が執筆完了を、□が一部執筆完了を、そして□が未着手を表わします。

- 著作集 1 デザインの近代史論
- 著作集 2 富本憲吉とウィリアム・モリス
- 別巻 1 博士論文
- 別巻 2 詩歌集

次に全面改訂したのが、二〇一八（平成三〇）年九月でした。本巻八巻別巻二巻の全一〇巻へと生まれ変わりました。構成は次のようなものでした。ここで大きく自画像の絵柄が書き換えられました。

- 著作集 1 デザインの近代史論
- 著作集 2 ウィリアム・モリスと富本憲吉
- 著作集 3 富本憲吉と一枝の近代の家族（上）
- 著作集 4 富本憲吉と一枝の近代の家族（下）
- 著作集 5 デザイン史・デザイン論
- 著作集 6 ウィリアム・モリス研究
- 著作集 7 英国デザイナー列伝
- 著作集 8 阿蘇白雲夢想
- 別巻 1 博士論文
- 別巻 2 共著論文

そしていま、二〇二〇（令和二）年二月に上の構成を以下のように改訂し、ウェブサイトにアップロードしました。

- 著作集 1 デザインの近代史論
- 著作集 2 ウィリアム・モリス研究
- 著作集 3 富本憲吉と一枝の近代の家族（上）

- 著作集 4 富本憲吉と一枝の近代の家族（下）
- 著作集 5 富本憲吉・富本一枝研究
- 著作集 6 日本デザインの底流
- 著作集 7 英国デザインの諸相
- 著作集 8 デザイン史研究余録
- 著作集 9 阿蘇白雲夢想（随筆集ほか）
- 著作集 10 阿蘇風花余情（回顧録ほか）

いまアップロードしたばかりなのですが、これまでの経験から推量すれば、今後さらに書き進めると、どうしても全体のストーリー性や各巻の分量などに不具合が生じ、新たな自画像へと絵柄を描き直さなければならない事態が発生する可能性があります。こうして、著作集の姿が進化してゆきます。そしてその一方で、研究者としての自分の可能性を、自らの手でさらに発掘してゆくことになります。そのためにも、いい書き手でありたいと思うだけでなく、いいプロデューサーでもありたいと願いつづけているところです。次の全面改訂はいづつ来るのでしょうか。そのとき構成はどのように変わるのでしょうか。（二月）

七. 火山灰の効用

なかなか中岳の火山活動が収束せず、日々降灰に悩まされています。そんななか、「徳ちゃん通信」（二〇二〇 春 三五号）が送られてきました。これは、地元の「つけものや徳丸」が発行する手書きのお便りで、その季節にあったさまざまな話題がA四サイズ一枚に掲載されています。今号の「徳ちゃん通信」で私の目を引いたのは、阿蘇山の噴火に伴う火山灰についての短文でした。そのなかで、環境省の職員の方から聞いた話として、火山灰がもたらす効用が三つ挙げられていました。

- 一. 火山灰で水はけもよくなり、とても肥沃な土壌ができる。
- 二. 火山灰は天然の浄化装置で、阿蘇で降った雨をろ過してくれ、おいしい飲料水にしてくれる。
- 三. 火山の噴火で、現在の温泉のパワーがさらに強まる。

降灰に苦しむ心を少し和ませてくれる話題でした。長期的な視点に立てば、確かにそのとおりです。火山の噴火も火山灰も、大きな自然の営みのなかにあって、私たちに多くの恩恵をもたらしているようです。

裏庭に目を向けると、積もった火山灰のなかからフキノトウ（蕨の臺）が今年も芽を出していました。人間と違って、フキノトウ（蕨の臺）は火山灰を悪者扱いにはしていないようでした。（三月）

八. コロナウイルスに関する王立芸術協会からのメール

現在世界を席卷している新型コロナウイルスにかかわって、英国の王立芸術協会（正式名称は、Royal Society for the encouragement of Arts, Manufactures and Commerce、略称は、Royal Society of Arts = RSA）から、会員（Fellow）である私たちにも、一通のメール届きました。メールの表題は、「コロナウイルスに対する RSA の対応と予防策」というもので、グローバルに展開している RAS の行事を一時中断することや、公衆衛生当局の指示に従って現在業務を行なっていることなどが詳しく、ていねいに述べられていました。会員に安心を与える情報の提供となっていました。一方で、行間からは、コロナウイルスの感染拡大への危機感が少なからず感じ取れました。

私をこの協会に推挙してくださったのは、デザイン・カウンシルの第三代会長を務められたライリー卿（ポール・ライリー）でした。それは一九八八年のことで、そのときの会員数は七千人程度で、しかもその多くは英国人であったと記憶しています。その後、グローバル化の勢いに乗って、会員は世界中に拡大してゆき、いまや数万人近くまで膨れ上がっています。人類の世界的将来像（芸術、文化、社会、産業、通商、教育等々）について論議し、発信することを活動の柱とするこの協会は、日頃から実にうまくネットワークが構築されており、こうした感染拡大の危機に対しても、すばやく対応しているとの感を持ちました。このことは、この協会の存在への会員のさらなる信頼感を今後増幅させてゆくにちがいありません。

山のなかで暮らす私は、普段から外出の機会は少なく、ほとんど感染のリスクはないのですが、感染拡大による影響は少し出ています。それは、私の研究にどうしても必要な存在である県立図書館が臨時閉館していることです。しかし、ホームページを見ると、閉館中の業務として、電話やメールによる文献の検索や複写の依頼はできるとのことで、今後はそうした方法を取りながら、利用させていただこうと思っています。（三月）

九. 赤木俊夫さんの奥様へ

森友学園への国有地払い下げにかかわって公文書が改ざんされ、その行為を強いられた善良な公務員の赤木俊夫さんが苦悩のなかで自死されました。それから二年の月日が流れ、先日奥様が、国と関係者を相手取り民事訴訟を起こされ、加えて、ご主人の遺書を公開され、真相究明のための再調査を求める署名活動を開始されました。この遺書を読めば、赤木さんの無念さはひしひしと胸を打ち、公権力の恐ろしさが伝わってきます。これが、いまの政治の実態なのです。決して看過することはできません。

さっそく私も署名し、カンパに加わりました。赤木さんの誕生日にあわせて、署名に参加された方々への奥様からのお礼と感謝のメッセージが専用のウェブサイト上に公開されました。そこで私は、次のようなコメントを書きました。

赤木さんの奥様

どのようなつらい、苦しい思いできょうのお誕生日までお過ごしになったか、それを見ると、胸が張り裂けるようです。このたびの署名活動は、本当に勇気が必要とする行為だったと思います。心から敬服いたします。私は奥様の考えを支持し、ともに歩むことは、この国の国民としての義務であり責任であると信じています。赤木さんは国民の

ためにお仕事をなさいました。そのご恩に報いることが、ひいては、この国に健全な政治を再生させることにつながってゆきます。どうかこれからの道のりがいばらの道であらうとも、心を強くもって、前を向いて歩いてください。それが赤木さんの無念を少しでも和らげ、笑顔を取り戻していただく残された道ではないでしょうか。くじけないでください。応援しています！

そして、半日が過ぎて、もう一度コメントを投稿しました。今度は、賛同者のみなさまを念頭に置いて書きました。この時点で賛同者は一五万人をすでに超えていました。

賛同者のみなさま

いまこの国は、民主主義も三権分立も、崩壊の危機に瀕しています。私たち賛同者は、決して奥様を孤立させることなく、しっかりと一団となってスクラムを組み、再調査と民事訴訟を何としてでも勝ち取るために、まっすぐ信念をもって闘おうではありませんか！これは、国民の義務であり責任であると思います。

私の目からすると、思うに、いま日本は、法治国家として瀕死の状態にあります。一人ひとりそれぞれが、できる方法を使って、声を上げる時期であると痛感します。それをしなければ、この国は、戦前のような暗い時代へと再び突入してゆくことでしょう。何としてでも、国民が声を上げて、ここで食い止めなければならない——私は、そう強く思います。（三月）

一〇．コロナウイルス感染拡大の影響

私の住む阿蘇地方のような田舎にも、コロナウイルス感染拡大の影響がいまや出はじめています。

私も加わっている「ブリッジの会」が、四月からしばらくのあいだ中止になりました。この愛好会は、この地区に住む十数人の高齢者が参加して、月に二回ブリッジ（四人一組でテーブル囲んで行なうトランプのゲーム）を楽しんできました。ゲームだけではなく、途中のお茶の時間も楽しく、格好の情報交換の場となっていました。

それとほぼ時期を同じくして、私が毎日通う瑠璃温泉でも、サウナと休憩用の和室について使用中止の措置が取られました。人と人との接触をできるだけ避けることが目的のようです。致し方ない措置とはいえ、とくにサウナの閉鎖は、一番風呂を楽しむ常連客が顔をあわせ、日々の団らんを楽しむ場を奪ってしまう結果となりました。

その後、阿蘇地方にも、三人の感染者が確認され、七つの都府県に対して緊急事態宣言が発令されると、それにあわせるかたちで、瑠璃温泉を含む南阿蘇村の三つの公営温泉すべてが営業中止となりました。前立腺がんとう心筋梗塞を患っている私にとっての温泉の利用は、まさしく病後の湯治であり、健康増進のための温泉療法を意味していましたので、利用できなくなったことを、とても残念に思っています。

これまで、一〇時三〇分の温泉の開館時間にあわせて、その前にウォーキングをしていました。一番風呂に入って、その日の執筆の疲れをとり、ウォーキングの汗を流すのが、

一日の楽しみであり、ストレス解消の時間でもありました。しかし、それができなくなり、そのために生活の時間割を少し変更しなければならないことになりました。

これまでの日常生活は、こうでした。三時起床、ただちに朝食。四時から八時三〇分まで書斎で執筆。昼食（その日の二回目の食事）ののち、九時過ぎに家を出て、瑠璃温泉のパーキングに駐車。ウォーキング、新聞閲覧、そして入浴。帰りに、日によって違いますが、必要に応じて、買い物、病院、給油、銀行、郵便局、役場、コインランドリー、ゴミ収集場への立ち寄り。一時ころに帰宅。その後、家のことや庭の手入れ、あるいは休息。三時から夕食づくり。六時就寝。

これを、このように変えようかと思っています。つまり、温泉での一番風呂ではなく、一日の終わりの自宅入浴（あるいはシャワー）へ切り替えるのです。三時起床、ただちに朝食。四時から八時三〇分まで書斎で執筆。昼食ののち、家のことや庭の手入れなどの雑事。一二時ころに家を出て、買い物その他を町ですませて、新緑の野草園でウォーキング。帰宅して、入浴かシャワー。三時から夕食づくり。六時就寝。

山のなかの隠遁生活者であろうとも、コロナウイルス感染拡大の影響から逃れることはできません。どこまで拡大するのか、いつ収束するのかが見通せないこと、そして、感染の症状が出た場合の、検査を含む対応がどのような手順で迅速になされるのかが明確化されていないこと、不安は増します。（四月）

一一．民生委員との出会い

私の住む町で、災害時に支援を必要とする一人暮らしの高齢者を事前に登録する制度が動き出した。私もその該当者であるため、登録のための書類をもって、この地区を担当される民生委員の方が、拙宅を訪ねて来られた。民生委員という言葉は知っていたが、どのような方法で選ばれ、どのようなお仕事をなさる人かまでは、全く知識がなかった。そこで、用意されていた用紙の記入方法の説明を聞きながら、民生委員について幾つかの質問を挟んでみた。すると、一人暮らしの高齢者を定期的に訪ね、安否の確認をするのも、自分たちの仕事であるとの説明だった。そのようなサービスがあるとは知らなかったのも、はじめてそれを聞いて少し驚いた。

私は根っからの地元町民ではなく、外から参入してきた町民なのである。外来町民というのは、何かと冷遇される。差別といってもいいかもしれない。たとえば、町が発行する広報や回覧文書は、地区の担当者は届けてくれないので、こちらから役場まで取り行かなければならない。ゴミは近くにステーションがないので、ゴミ収集基地まで持参しなければならない。つまり、外来者や移住者は、行政サービスの最も遠いところに位置づいているのである。今回の災害時支援の登録も、その制度を知って、私から役場に頼んで、それを受けて民生委員の方が来宅されたわけで、私から申し出なければ、この制度からも見放されていたかもしれない。

もっとも、直接役場に出向いて回覧文書を受け取るのも、直接ゴミを基地まで運ぶのも、確かに不便ではあるが、意味のないことではない。というのも、対応していただく方と直接顔をあわせて会話をし、何がしかの心の交流ができるからである。

今回はじめて民生委員の方にお会いし、会話のなかで、一人暮らしの安否確認の制度を知

ったことはありがたかった。それから一箇月くらいが立って、さっそく安否確認の電話がかかってきた。この地区にコロナウイルスの感染者が確認されたらしく、とくに話題は、感染の怖さと注意の喚起に集中した。少し心の交流ができたような気がした。（四月）

一二. ウォーキングコースの変更

コロナウイルス拡大の影響を受けて、私が毎日通う瑠璃温泉が一時閉鎖に追い込まれた。これまで私は、開館の一時間前に温泉の駐車場に到着し、三〇分のウォーキングと三〇分の新聞閲覧を楽しんでいた。ウォーキングは、南外輪山を望む展望台で準備体操をしたあと、そこから白水運動公園と瑠璃温泉を囲む公道を二周歩くことが定番となっていた。しかし、温泉の休館に伴いウォーキングコースも見直さなければならなくなった。近場の馴染みのコースを選んだ。ここは、高森温泉館が廃業するまで使っていたコースで、ピクニック広場を出発し、阿蘇野草園を巡って、国民休暇村に出る、自然豊かなコースである。

さっそくこのコースを歩いた。いつもだとこの時期、この一帯は、ピクニック広場を取り巻く桜が開花を迎え、一年で一番華やかな景色となる。そう期待して行ったものの、残念ながら裏切られ、ほぼ半分くらいがすでに散ってしまっていた。これも暖冬の影響で、開花の時期が早まったせいであろうか。しかし、もう少しすると、阿蘇野草園のシャクナゲが一斉に開花する。こちらはウォーキングコース沿いではなく、少し奥まったところにある。見逃さないように気をつけて、桜の分まで楽しみたいものである。（四月）

一三. 「目白押し」に出会う

私はウッドデッキの手すりの一角に、直径三〇センチ弱の平皿に水を入れて置いている。ここに小鳥たちが飛んできて、頭を下げて水を飲んだり、羽をばたつかせて水浴びをしたりする。春になり暖かくなると、鳥の活動が活発になり、この皿ものにぎわいをみせる。しかし鳥は一般に憶病で、すでに先客があれば近づかないし、そうでなくても、この皿にたどり着くまで何度もキョロキョロとあたりを見渡し、少しでも音や影を察知すると、目的を果たさずにすぐ飛んでゆく。

しかし、先日は様子が違っていた。たくさんの小さな鳥がどこからともなく一度に飛んできて、水を飲んだり、ジャンプをするように体を動かしたりして、はしゃいでいた。皿のなかには五、六羽はいただろう。すると、その動きのなかで押し出される鳥もいるし、そのときばかりと、皿の外で待機していた鳥がなかに入る。全部で一〇羽以上の小鳥による「おしあいへしあい」あるいは「おしくらまんじゅう」の演舞である。一日に数回、二日間続いた。

私にとっては初めての観察体験である。この鳥は何者なのだろう。目の回りの白い輪は確認できなかったが、上面は黄緑で下面は白。間違いなくメジロであろう。メジロといえば「目白押し」を連想する。いま私が見ている「おしあいへしあい」を演じているメジロの行動が「目白押し」という言葉を生んだのか。調べてみた。竹下信雄『日本の野鳥』（小学館、一九九二年、四七頁）には、こう書いてあった。「“目白押し”という言葉があるが、野外ではメジロがたくさん並んでいる状態を見た研究者はいない」。ということは、私が、本当のメジロによる野外での「目白押し」に日本で最初に遭遇した観察者ということになるのである。

うか。そうであれば、歴史的な瞬間に幸運にも出会ったことになる。（四月）

一四．オーバーマスク

昨年の秋以降、火山灰が多く降るようになり、この降灰を吸い込みたくないという思いから、それ以来、私にとってマスクの着用は日常化している。降灰は窓を閉め切っていても部屋のなかに入ってくる。私は、外出時だけではなく、部屋のなかでも使用している。

今度は、それに加えて、この数箇月前から発生したコロナウイルスの感染拡大である。マスクは、二重の意味で欠かせないものになった。

この山奥の町でも数人のコロナウイルスの感染者が確認された。そうしたなか、私自身の外出自粛の生活がはじまった。治療薬やワクチンが開発されるまで、この自粛生活は長期にわたり続きそうな気配である。

少しでも気分を転換したり、ストレスをうまく発散したりする方法はないだろうか。そしてまた、手もとにある白いマスクは、いつかは底をつく。何とかそれを少しでも食い止めることはできないだろうか。いま多くの人が、そのことを考え、工夫をしているにちがいない。

私は、マスクの色に着目した。白はどうしても、清潔感を表わすのにはいいが、長期間使うには、あまりにも冷たく、心を和ませる色ではない。そのうえ、汚れやすく、頻繁に使い捨てなければならない。そこで、白のマスクの上につけるオーバーマスクというものを着想した。このようなものがあれば、ファッションブルなエプロンのように、日々楽しく取り換えもできるだろうし、汚れや痛みを防ぐため、少しでも長く白色のマスクを使うことができるようになるのではないかと考えたからである。

色物や柄物の端切れを使ったオーバーマスクの作成を妹に依頼した。先日、その数点が出来上がり、着用してみた。誰に見せるものでもなく、家にいてひとりで使うものではあるが、何となく心が華やぐ。いま使っている柄は、私の研究対象としている一九世紀イギリスのデザイナーのウィリアム・モリスのデザインによるものである。

もう一箇月以上前からマスクも手に入らなくなった。そして、私の手持ちのマスクも少なくなってきた。妹は、マスクが入手できなくなったら、白のマスクに代わってキッチンペーパーを使い、その上にオーバーマスクをしたらどうだろうかといっていた。この提案で、マスク不足の心配も少し解消された。外出制限や自粛生活のなかにあっても、おしゃれを楽しみたいという気持ちがあることに、自分で気づいて、自分で驚いている。こうした気持ちは誰にでもあるのだろうか。もしそうであれば、人類のファッションの誕生のひとつの要因として挙げられるのかもしれない。少し大げさにそうってみた。（四月）

一五．もしコロナウイルスに感染したら

もしコロナウイルスに感染したらどうなるのであろうか。国民誰もが、いま一番心配している関心事であろう。連日テレビは、コロナウイルスのことを伝えている。その報道の断片をつなぎ合わせてみた。最悪の場合、だいたいこのようなストーリーになるのではなかろうか。

熱や咳の症状が出たのでかかりつけ医に電話をすると、保健所に電話するようにといわ

れる。保健所に電話をしても、お話し中でなかなかつながらない。何十回目かにやっとつながるも、コロナウイルスによる感染症状とは思われないので、自宅で静養するようにとのこと。PCR 検査を懇願しても、受け付けてもらえない。疲労と失望のなかでの自宅待機。しかし症状は回復するどころか、日に日に味覚が失われ、高熱も続き、倦怠感と息苦しさが増す。もはや限界だと思い、救急車を呼ぶ。乗車するも、コロナウイルスの感染が疑われるため、次々と病院の拒否にあい、受け入れ先が見つからない。やっと受け入れてもらった病院で PCR 検査をすると、陽性と判明。ただちに人工呼吸器を装着。しかし、症状の悪化は止まらず、ついに息を引き取る。家族との最後の別れの言葉さえ交わすこともできず、遺骨だけが家族のもとへ届けられる。

これが多くの人が頭のなかで描いているストーリーなのではないだろうか。しかし、この場合は病院へ何とかたどり着いているが、急変の場合はそれさえもかなわず、自宅死や路上死のケースも、テレビで報道されている。

恐怖としかいいようがない。なぜ、PCR 検査がすみやかに実施されないのか。なぜ医療機関での迅速なる手当てが受けられないのか。いまの検査と隔離の仕組みでは、人のいのちが軽く扱われているように思う。（四月）

一六．コロナウイルス感染拡大の影響（続）

いつものように高森町民体育館前の駐車場に車を止めて、橋を渡ってピクニック広場に向かう。人影なし。一連の体操のあと、北側の外周を歩き出す。広場を出て休暇村南阿蘇の駐車場を左手に見ながら、阿蘇野草園に入ろうとすると、そこに立て看板が設置されていた。前日のウォーキングのときにはなかった。読んでみると、コロナウイルス感染拡大の防止の観点から入園を禁止すると書かれてあった。近くで作業をされていた施設の関係者の方に話を聞くと、環境省から昨日通達があり、やむを得ず閉園したとのこと。さらに今後の予定に話が及ぶと、毎年六月にこの野草園で開かれる野外コンサートの「ハナシノブ」も中止――。

緊急事態宣言の発令と同時に、瑠璃温泉を含む南阿蘇村の温泉施設がすべて休館となった。それまで瑠璃温泉近くの白水運動公園をウォーキングコースとしていたのであるが、温泉が利用できなくなったことに伴い、このコースをあきらめて、四週目に入る。そして、ついに野草園も閉館。新たに利用しはじめたこのコースからも撤退を余儀なくされる始末となった。

前立腺がんと心筋梗塞を患っている私にとっての温泉の利用とウォーキングは、まさしく病後の健康増進のために欠かせない日常生活の一部であった。基礎疾患をもつ高齢者が感染した場合、重篤化しやすいという。今後の健康生活のありようを再構築しなければならない。

一方、執筆生活にも影響が出ている。執筆に欠かせないのが、資料であり、文献である。これまでそれらの入手には、主として熊本県立図書館を利用していた。ここも同じくコロナの影響で閉館して久しい。資料や文献が手に入らなくなった現状を踏まえて、執筆する順番を見直し、その入れ替えを検討している。つまり、新たに資料や文献を必要としないテーマの文を優先して先に書く方向で、執筆戦略の再構築を進めているのである。

集団で抗体ができるか、有効なワクチンか治療薬が開発されるか、それまでは、このコロナウイルスとの人類の戦いは続きそうである。一年なのか、二年なのか、それはわからない。自粛により収束の兆しが見えても、それを緩めると、さらに大きな次の第二波が襲いかかってくるかもしれない。その間に生じる、社会、生活、労働、経済、生産、教育、医療、文化への打撃は想像を絶するものがある。この過酷な体験の前に立ち、現在の文明のあり方が、大きく世界的規模で哲学的に問われはじめようとしている。世俗から一見隔離されたような隠遁生活者にも、その実感がひしひしと強く押し寄せてくる。果たして、コロナ以降の地球人類の生存形式はどのようなになるのであろうか——。（四月）

一七．緊急事態宣言の解除

やっと緊急事態宣言が全国的に解除された。いつも利用する阿蘇白水温泉瑠璃のホームページにアクセスすると、少し前から日帰り温泉は再開していた。さっそく行ってみた。開館といえども、幾つかの制限や要請が加えられていた。休憩用の大広間やサウナの利用禁止。それ以外にも、脱衣かごが撤去され、洗面化粧台からはドライヤー以外の備品が姿を消し、さらには、浴室以外ではマスクの着用要請が張り紙に書き出されていた。

温泉棟の隣の宿泊棟に入って、馴染みの係りの人と言葉を交わす。まだ宿泊は停止したままとのこと。人影だけではなく、いつも読む、受付常備の新聞もなくなり、ひっそりと静まり返っていた。

同じく、熊本県立図書館のホームページを開いてみる。ヘルスチェックシートの記入や検温、マスクの着用が義務づけられ、開館時間も短縮されていたものの、こちらも開館していることがわかった。しかし、私が資料収集の一環として利用する、古い雑誌等のレファレンスサービスについては、その再開がはっきりと明示されていなかった。そこで、続けて国会図書館のサイトへと飛ぶ。すると、来館サービスの休止は延長するが、遠隔複写サービスの受付は再開することが告知されていた。もしそうであれば、これまでの私の利用形態であった、県立図書館を経由した国会図書館の文献複写サービスが受けられるのではないか。そしてまた、県立図書館を通しての他館からの図書の借用も可能となるのかもしれない。一度問い合わせてみようと思う。

こうして、緊急事態宣言の全国的な解除に伴い、温泉も図書館も再開し、現象的には以前の生活パターンが徐々に回復しつつある。

しかしながら、精神的には、いまだ積極的な行動や移動にはつながっていない。熊本市内の感染確認者数の多いことが心理的に影を落としているのかもしれない。あるいは、身近な生活空間であるこの狭い地域においてもこれまでに数名の感染が確認されており、そのことが、躊躇する気持ちをなにごしか形成しているのであろうか。さらには、第二波の襲来に対しての無意識の身構えがそうさせている可能性も否定できない。そうした行動の萎縮状態のなかで、心置きなく自由に社会的活動ができる平穏な日が一日も早く訪れることを強く願う。緊急事態宣言は解除されたものの、完全に解放されえない複雑な心的状態にいま置かれている。（五月）

一八．日常風景へ視線を移して

この間、コロナの感染拡大にずっと関心が向いていました。いまやっと、緊急事態宣言が解かれ、日常風景にも目を向けるようになりました。いつのまにか、野鳥の声のさえずりがあまり耳に届かなくなったような気がします。一方、中岳の噴火は続いているようです。春になり風向きが変わったせいか、車の屋根やウッドデッキに積もるほどの大きな降灰の影響はありませんが、それでも、油断して窓を開けていると、部屋のなかに侵入してきて、目に入ります。数日前に梅雨入りが宣言されました。昨年に比べると半月ほど早いでしょうか。雨が続いています。風も強いです。このように、コロナのなかにあっても、自然の日々の営みは続きます。これからは、少し日常風景へ視線を移して、コロナで委縮した心身を和らげたいと思っています。

そうしたなか、ロンドンのウィリアム・モリス協会から年次総会の案内が、メールで届きました。今年は、こうした非常事態を受けて、ズーム・プラットフォームを使って行なう、ヴァーチャルの総会形式を選んだことが書かれてありました。先日はインターネットを利用した緊急の募金が行なわれました。ロンドンも一日も早く、日常生活を取り戻してほしいと、願うばかりです。（六月）

一九．今年も前半終了

六月が終わり、今年も前半が終わりました。歳のせいでしょうか、時の流れが、本当に速いように感じます。

今年の春は、あまり心躍る春ではありませんでした。火山灰で庭やウッドデッキが汚れ、コロナ騒動で日常時間が大きく変わり……といった具合でした。久しぶりに今日と明日は晴れのようなのですが、その後また傘マークです。早くいい季節にもどってほしいものです。

しかしこの七月は、少し新しい変化がありそうです。ひとつはウッドデッキの改修工事です。梅雨が明けたら、その工事がはじまります。楽しみです。もうひとつは、著作集をいまの全一〇巻から全一二巻へと更新する作業が進んでいることです。八月のはじめころには、アップデートできるのではないかと思います。これもまた、楽しみです。

また全国的に感染が広がっているようです。決して油断してはいけません。マスクを着用し、人との距離をとり、手洗いとうがいをこまめにし、しっかりと自分で自分の身を守りたいと思います。（七月）

二〇．豪雨災害

球磨川が氾濫しました。球磨村や人吉市などの流域の現場の様子が、映像としてテレビに流れます。家や車が濁流に呑み込まれ、鉄道の線路や橋梁が折れ曲っています。何と痛ましい光景か、言葉ありません。住民は、どんなに怖かったことか——どれほど想像しても、その思いに至ることはないでしょう——ただただ、身が震えるしかありませんでした。

私が四歳のときに経験したのは、一九五三（昭和二八）年六月二六日の白川の氾濫による大洪水でした。いまもよく覚えています。道路から玄関へと水が入ってきます。そして、い

つも生活する畳の上へと侵入してくるのです。私はその時期、信愛幼稚園に通っていて、『キンダーガーデン』という雑誌を定期購読していました。当時これが私の宝物と呼べるものでした。引き出しから出して、二階まで数回往復して運び込みました。運び終わったころには、食事をする座卓が、茶色く濁った水の上に浮かび、ゆらゆらと揺れていました。その後数日間、水が引くまで、親戚の三世帯で、二階でうずくまるようにして過ごしました。

熊本は四年前に大きな地震を経験しました。昔から、災害は忘れたころにやって来るといいますが、いまはそうではありません。痛ましい記憶がいまだ消えないうちに、次の災害が襲ってきます。そしてまた、多くの人々のいのちが失われてゆきます。手をあわせるしか、なすすべはないのでしょうか。（七月）

二一．小説執筆

コロナウイルスの感染拡大の影響で、熊本県立図書館のサービスが停止しました。いつも私は、この図書館を利用して本を借りたり、文献の複写をしたりしていました。この図書館に所蔵がない図書については、近隣県の図書館から相互貸借が受けられますし、過去の古い雑誌記事等については、国立国会図書館の文献複写サービスの提供を受ける手配をしてもらうこともできます。したがって、この図書館は、私の研究上なくてはならない施設でした。その図書館が閉館したいま、それに伴って、私の研究も停止してしまいました。そこで、計画していた執筆の順番を入れ替えて、学術論文の執筆を後回しにして、文献を必要としない小説を、この期間を利用して書くことにしました。

学術論文の執筆の場合は、実証主義が重視されるため、何を書くにしても、すべて証拠となる歴史的資料に根拠を置かなければなりません。一方、小説の場合は、そのような制約はなく、すべて書き手の想像力や創作力にゆだねられることになります。その意味で、全く対極にある執筆の手法であるといえます。

恐る恐る書きはじめてみました。事実に基づかない、虚構空間での人物と出来事を描写するのですから、いままでとは勝手が違い、戸惑いもありましたが、何とか、中断せずに書き終えました。「沈みゆく村落」という題をもつこの小説が、私にとっての第一作となります。文化雑誌『KUMAMOTO』を編集している友人にメールを書き、次号に掲載できないか、検討を依頼しました。それからしばらくして、「編集会議の結果、掲載することになった」という返事が返ってきました。それに気をよくして、一気に執筆を続行し、二作目に相当する「雪消を待つ女」を、いまちょうど脱稿したところです。コロナ感染拡大期にあつての、学術論文から離れての、つかの間の小説執筆でした。（七月）

二二．著作集の全面改訂

ウェブサイト「中山修一著作集」を全面的に改訂し、更新（アップロード）しました。各巻の構成は、以下のようになりました。

著作集 1 『デザインの近代史論』

デザイン史家としての私の研究の原点と土台となる初期近代史論の集成。

著作集 2 『ウィリアム・モリス研究』

英国デザイナーのウィリアム・モリスについての明治末日本の研究様相。

著作集 3 『富本憲吉と一枝の近代の家族（上）』

憲吉（陶工）と一枝（『青鞥』同人）の家族史——出会いから結婚まで。

著作集 4 『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』

憲吉（陶工）と一枝（『青鞥』同人）の家族史——家庭生活と晩年の離別。

著作集 5 『富本憲吉研究』

モダニストとしてのデザイン思想の文脈から描く富本憲吉という生き方。

著作集 6 『日英デザイン思想の形成』

日本と英国における近代のデザイン思想の形成過程。【本文未着手】

著作集 7 『デザイン史再構築の現場』

近代運動崩壊前後のデザイン史再構築の日英の現場。【一部執筆完了】

著作集 8 『研究断章——日中のデザイン史』

近代の日本と中国のデザイン史断章——博士論文と共著論文。

著作集 9 『研究余録——女性と家族の歴史』

性的少数者としての富本一枝の生涯とモリスの家族史。【一部執筆完了】

著作集 1 0 『研究追記——記憶・回想・補遺』

学者としての私の研究忘備録、郷土人礼讃、学究回顧録。【執筆継続中】

著作集 1 1 『南阿蘇白雲夢想』

南阿蘇に隠遁しての随筆集、詩歌集、小説集、雑記帳。【執筆継続中】

著作集 1 2 『南郷谷千里百景』

愛する南郷谷の自然と事象と小庵を画像化した写真集。【撮影継続中】

二〇一四（平成二六）年一二月にはじめてこの著作集を開設したときの巻の構成は、本巻二巻別巻二巻の全四巻から成り立っていました。その後、二回の全面改訂を経て、やっと今回、全一二巻の構成による「中山修一著作集」へとたどり着くことができました。形式のうえでは、これが完成形に近いものです。しかし、内容的にはまだ、【本文未着手】【一部執筆完了】【執筆継続中】【撮影継続中】の巻が残されています。気力と体力とを何とか維持し、数年後には全巻が完結するよう、力を振り絞りたいと考えています。（七月）

二三．県南部豪雨災害への支援

県南部の球磨・人吉地域を襲った集中豪雨は、球磨川の氾濫を招き、多くのいのちを奪い、建物や橋梁を呑み込んでしまいました。

直ちに、いろんな団体や組織が義援金の募集を開始しました。私は、熊本県の社会福祉協議会が行なうボランティア支援に関する募金活動に賛同し、インターネットを通じて指定口座に送金しました。その後、今度は個人でボランティア活動をしている方から直接連絡があり、さっそく同じ方法で振り込みをさせていただきました。

この方は、お隣の南阿蘇村に在住する女性の歯科医師さんで、高校の後輩です。いただいた支援金募集のお便りによりますと、災害発生後の当初は、口腔ケア用品やマスク、それ

に消毒薬などを被災地の避難所や介護施設に送る支援をしていたそうですが、それから一箇月が過ぎ、被災者の方々の「食べることと歯を磨くこと」の重要性に鑑みて、いまは、野菜配布の支援へと発展しているとのことでした。そして、現地へ届けられるお野菜は、何と、驚いたことに、南阿蘇村で生産される地元野菜でした。

歯と野菜に着目した、歯科医師さんらしい、使命感に満ちた発想です。加えて、野菜を買うことで地元を助け、野菜を送ることで被災地を助ける——双方の支援につながるボランティア活動ともいえます。こうした柔軟な着想力、そして積極的な行動力、本当に頭が下がります。心強く感じました。（八月）

二四．両親の入院

先月の二二日に母親が体調を崩して、近所の病院に入院しました。母親なくしては生活が難しい父親も、大事をとって一緒に入院です。三日目から、病院の配慮で、ふたり部屋に移り、一緒に暮らしています。何か病名がついた深刻な病気というわけではなく、年齢的なものと、過労が重なったようです。

入院当初は二〇分に制限されていたものの、面会はできていたのですが、その後、コロナ感染のさらなる拡大を受けて、面会は全面禁止となりました。玄関受付で検温をし、必要事項を用紙に記入したあと、病棟の看護師さんと呼んでもらい、頼まれたものや洗濯物の受け渡しをします。そのようなわけで、それ以来ふたりとは顔をあわせることなく、携帯で声を聞くだけとなりました。コロナや熱中症からも離れ、ホテル暮らしをしている感じで、九七歳（この九月で）と九三歳（この六月に）の高齢者のふたりにとっては、この時期一番安全な生活方法ではないかと思っています。

一週間を過ぎたころから私の病院通いも安定化し、水曜と土曜の二日間となりました。六時に家を出て、四季の森温泉の駐車場に車を止め、そこから「あそ望の郷くぎの」まで往復三〇分歩き、それから温泉で汗を流して、熊本へ向かいます。はじめに病院に寄って洗濯物を受け取り、笛田の実家で洗濯しているあいだに、郵便物などを確認したり、部屋の空気を入れ替えたり、庭に水をまいたりします。そのあと、病院の隣のコインランドリーで乾燥し、乾いたものを玄関受付で看護師さんに渡します。これが一連の作業の流れです。

一昨日病院から連絡があり、今日（一四日）、退院です。これから病院へ迎えに行きます。（八月）

二五．草刈り

山荘暮らしをはじめて以来、庭とのつきあいが生まれました。庭は一年単位の繰り返して姿を変えますので、試行錯誤の学習が数年続きました。やっと、今年でこの山の生活も八年目に入り、庭の手入れも少しずつ定型化してきました。

大きな庭の手入れは、春、夏、秋の年に三回行ないます。春は、冬のあいだ雪の下で眠っていた昨年の暮れの落ち葉をかき集めます。すると、みずみずしい大地が現われます。そこへ華やかな春の花を選んで購入しては、移植してゆきます。夏の主な仕事は、梅雨のあいだ

に伸び切った雑草の草刈りです。イスやテーブルも水洗いし、避暑が楽しめるような、清涼感ある庭へと整えます。秋の庭は、落葉で覆われ、秋雨や台風に見舞われれば、その上に折れた小枝類が散乱しますので、それを集めては処分し、本格的な紅葉のじゅうたんの出現を待つことになります。

いつもと違って今年の梅雨は長く、明けたのは、七月の終わる二日前でした。そのようなわけで、庭の手入れをはじめたのも、例年よりは遅く、八月になってからのことでした。夜明けとともに、一回につき一時間から一時間半くらい、必ずしも毎日ではありませんが、少しずつ手作業で進めてゆきます。すると、異変に気づきました。昨年の秋から阿蘇中岳の噴火活動が激しくなり、この地域一面に日々火山灰を降らせていたことが原因でした。草を刈ってゆくと、姿を現わしたのは、水分を含んだ、生命に満ちた、しっとりとした土ではなく、灰色の微細な岩石の粒子でした。さらさらとしていて、何か無機質的で、あたかも砂漠にでもいるかのような砂の感触でした。

思えば春は、降灰の真っ只中にあり、手入れもそこそこに済ませ、花を植えることもありませんでした。今回も、手入れをしても、また降灰に覆われるのではないかという重苦しい気持ちのなかでの作業でした。延べにして一〇日間くらいは要したでしょうか。やっとこの夏の庭づくりが終わりました。ちょうどその時のことです。阿蘇の火山活動が少し沈静化したので、噴火警戒レベルを二の「火山周辺規制」から一の「活火山であることに留意」へと引き下げるとの発表が、地方管区の気象台からありました。これで火山灰から解放されます。庭も、手入れされたいまの状態でも秋の紅葉期を迎えることができます。作業をしたかいがありました。疲れが和らぎ、秋を待つ、少し華やいだ気分になりました。（八月）

二六．晩酌の終わり

ちょうど二箇月くらい前だったと思います。夕食に先立って、いつものように晩酌をしたのですが、口に含むと、苦く、ざらざらした感じが襲ってきました。いままでに味わったことのない、はじめて経験する不快な感触でした。

神戸での現役時代は、夕食後に仕事をするが多かったために、ほとんど晩酌はしませんでした。七年前に山での生活をはじめると、三時の起床とともに朝に仕事をするようになり、夕食時の晩酌は、一日の終わりを告げるけじめのひとつとなっていました。最初は日本酒を飲んでいましたが、糖分が多いとのことでしたので、焼酎に代えてみましたが、口に合わず、それ以降、ウィスキーをストレートで飲むようになっていました。一日の量は九〇ミリリットルと決めていました。しかしこの日は、最初の一口で、異変に見舞われました。異変の理由はわかりませんが、それ以降、飲みたいという積極的な気持ちが失せてしまいました。

たばこは、心筋梗塞を発症して以降、健康を気遣う自分の意思で完全に止めていました。しかし、晩酌を止めたのは自分の意思ではありません。お酒さえも飲めないような、ひ弱な老体になってしまったのだろうか。少し情けないような気持ちになりました。

それから二箇月が立ちました。定量の晩酌は止めたのですが、食前酒としての、わずかに舐める程度のものであれば、体にいいはずであると思い直し、数日に一度は、忘れないようにと口に含んでいます。一瞬にして、五臓六腑を刺激し、全身が香り立ちます。いまに気づ

くと、これが本当のお酒の効用なのかもしれません。そう思うものの、長年つきあったお酒との別れには、何かさびしいものがあります。やはり加齢がそうさせるのでしょうか。これからは、「数日に一口」の友となりそうです。（八月）

二七. 九月の片々雑事

先月（九月）は雑多なことが幾つも起こりました。

（一）BS アンテナの回りの枝や葉が伸びて、BS が視聴できなくなりましたので、八月三一日に、ベスト電器にお願いして、屋根に登って、切ってもらいました。

（二）九月一〇日、一日、一四日の三日間、ウッドデッキの部分的な改修工事がありました。腐っている箇所を取り換え、全体的に腐食・防水塗料を塗ってもらいました。

（三）九月一五日、小説「沈みゆく村落」が掲載された、雑誌『KUMAMOTO』（三二号）が発刊されました。

（四）小学校以来高校まで一緒に、山口大学医学部の教授を定年で辞め、いま山口の済生会病院に勤めている友だちと、ひさしぶりに再会。何とその彼が、高校二年の春、クラスメート数人で南阿蘇に遊びにきたときの写真をもっていて、その進呈を受けました。私がいまここで暮らす原点となる写真です。

（五）九月一九日、自宅で尻もちをついて数日後のこと、父が腰の痛みを訴え、自力で歩けなくなりましたので、東（あずま）病院に緊急搬送。二九日、東病院から、実家のすぐ近くの御幸病院へ転院。圧迫骨折の形跡が認められ、歩行訓練のリハビリを兼ねて、しばらく入院の予定。

（六）九月二三日は、フェフェちゃんの命日。庭に咲く野草を摘んで墓石を飾り、手をあわせました。

（七）前日に車のパンク発見。翌二八日に飯塚モータースで修理。

（八）九月三〇日、ついにプリンタが動かなくなりました。最近何かと不具合が目立ってきたパソコンとあわせて、近日中に購入予定。

（九）先月末より、著作集 9 『研究余録——女性と家族の歴史』の第二編「ウィリアム・モリスの家族史——近代の夫婦の原像を探る」を執筆中。

以上が、先月の片々雑事です。少しコロナも落ち着いてきたようです。今月は、対応をしっかりとったうえで、秋の好季節を楽しみたいと思います。（一〇月）

二八．任命拒否

具体的な根拠となる事例は長くなりますので省きますが、いまの政治状況を見るにつけ、三権分立も民主主義も、危機に瀕しているように感じられます。この国の戦後の再出発に際しての基本事項は、国家の領域と国民の領域との明快な区別だったと思います。しかし、いまの現象の特徴は、国家が権力を乱用し、国民の領域に力づくで侵入してきていることです。数年前、教育基本法が改訂されましたが、その前文にある「真理と平和の希求」が「真理と正義の希求」に置き換えられました。「平和」は一義的ですが、「正義」は多義的です。つまり、「正義のための戦争」も可能ならしめる意味を含みます。また昨日は、菅首相は、日本学術会議が推薦した同会議の会員候補者一〇五名のうちの六名の任命を拒絶しました。おそらく拒否された六名は、国家の視点にとって都合の悪い主張をこれまでになされてきた人たちではないかと推量されます。これでは、官僚のみならず、学者までもが国家の顔色を見るようになり、憲法が保障する学問の自由や表現の自由が瓦解する結果を招きかねません。このことは、国家が国民の上に立ち、国民の自由や権利を完全に支配のもとに置いた戦前の政治状況へと立ち戻ることを意味します。いま、まっとうな戦後教育を受けてきたと思っている私は、その確信する部分が破壊されてゆくような、そんな悲痛な思いをもっています。（一〇月）

二九．自伝を書く意味

「よくいわれますが、HISTORYはHIS STORYであり、これまで歴史家は男性の歴史しか書いてこなかった。人間類の半数は女性なのに、なぜ歴史家は彼女たちの歴史を書いてこなかったのだろうか。女は男に比べ、本当にあらゆる点で劣っており、歴史に残す必要のない種族なのだろうか。そうでないことは明らかであり、歴史家は女性の歴史に着目すべきである。こうすることによって、男女間の抑圧や差別の社会的文化的構造が明らかになるであろう。」

以上が、フェミニストの歴史家が唱える主張の原理となる部分でした。私が専門とする芸術史の一部であるデザイン史においても、そのことは強調されてきました。私が「富本憲吉と一枝の近代の家族」（ウェブサイトの著作集3と4に所収）を書いたのも、いま「ウィリアム・モリスの家族史」（著作集9の第二編に所収予定）を書いているのも、そうした男性中心主義への反省に基づいています。

ところで、英国にいたころ、英国人の研究者がこんなことを言い出しました。「人は死ぬ前に、どんなに短くてもいいので、自分の人生の歩みについて感想を書き、それを地元の図書館に寄贈し、五〇年後に一般公開するようにしたらどうだろうか。そうすれば歴史家は、男女に関係なく、有名無名に関係なく、階級や学歴などに関係なく、すべての生きた人の足跡が残り、いま歴史学に求められている「普通の人びと（ordinary people）」の歴史が記述可能となるのではないか。」

そのときは一瞬驚きましたが、よく考えてみると、いまに生きる人は、過去に生きた人に学ぶしかなく、そうすれば、多くの人びとの生きた事例を図書館に行っては学び取り、

自分の生きるよすがとなすことができそうですし、「自伝」を書き残すことは、生を終えようとする人間の責務のようにも思えてきました。私も、最後には「わが学究人生を顧みて」（著作集10の第三部に現在書きかけ中）を書こうと思っています。（一〇月）

三〇. パソコンとプリンタの買い替え

数箇月前からパソコンとプリンタの調子が悪く、不具合が目立つようになってきました。そろそろ買い替えの時期かと思い、店頭で現物を見たり、カタログで比較したりして、少しずつ検討をはじめました。その一方で、新しく購入した機種 of 初期設定や、古いパソコンから新しいパソコンへのデータの移動については、ネットで調べたり、人に聞いたりして、少しは情報を集めたのですが、元来こうしたことは不得手で関心も低く、これらの作業は業者に任せることを考えていました。

ところが先日、突然にもプリンタが完全に作動しなくなりました。そこで、あわててプリンタとパソコンを注文し、購入しました。ワイン色のほぼ同色によるコーディネートです。問題は、パソコンの初期設定とデータの移動です。ここで思いついたのは、業者に頼まず、自分でやることでした。山のなかの生活は、無人島での生活と同じであると思えば、人に頼ることを前提に問題の処理にあたることはできないはずです。そう思い、意を決して、初期設定とデータの移動を独力でやってみました。悪戦苦闘、約八時間を要しました。幾つかの課題は残りましたが、それでも、何とかできました。パソコン音痴の私が、人に頼らず、ここまで自分で成し遂げたことは、ほめてあげてもいいのではないかと思います。

新しいパソコンは反応が速く、なかなか快適です。それにしても、あまりにも薄く軽量になっており、驚きました。これが、この一〇年間の技術の進歩なのでしょうか。（一〇月）

三一. 「ウィリアム・モリスの家族史」を書き始める

著作集9『研究余録——女性と家族の歴史』の第二編「ウィリアム・モリスの家族史——近代の夫婦の原像を探る」を八月の末から書きはじめました。これまでは、こうしたものを書く場合、「はじめに」を書いて、次に「本文」を書いて、最後のまとめとして「おわりに」を書いてきました。しかし今回は、その順番を入れ替えて、「はじめに」を書いたあと、「本文」を後回しにして、いま「おわりに」を書いています。これまでの断片的な勉強で、おおかたの内容は理解できていましたので、最初に「はじめに」と「おわりに」を明確化することにより、逆に「本文」の内容を規定しておきたいと考えたからです。つまり、「はじめに」が出発の港で、「おわりに」が到着の港です。これらが明瞭になることによって、その間の航海は比較的安定した航路をたどるのではないかと、一方的に信じているのです。

富本が終わってモリスになりました。ほとんど資料は英語です。七転八倒の日々です。しかし、楽しくもあります。

富本の妻の一枝さんは、『青鞥』の同人で、「新しい女」とも「新しがる女」とも揶揄されながら、時代にもてはやされました。日本の一九一〇年代のはじめのころの話です。一方、調べてみますと、それに先立って一八六〇年代の英国にあって「時の女 (Girl of the Period)」

が、そして一八九〇年代に「新しい女（New Woman）」と呼ばれる女性たちが登場していました。モリスの妻のジェインの青春時代が六〇年代で、娘のメイの青春時代が九〇年代です。そして、それからおよそ一〇〇年後に、英国のフェミニスト運動が本格的に活発化します。実におもしろい日英の歴史的現象ではないでしょうか。

そうした文脈も踏まえながら、いま、「ウィリアム・モリスの家族史——近代の夫婦の原像を探る」を、楽しみながら書き進めているところです。（一一月）

三二. 「ウィリアム・モリスの家族史」を書きはじめ（続）

著作集9『研究余録——女性と家族の歴史』の第二編「ウィリアム・モリスの家族史——近代の夫婦の原像を探る」を八月の末から書きはじめました。いま、「はじめに」に続いて「おわりに」の最後のところまでできました。しかし、分量が大幅に予定を越えてしまいました。

私の著作集は、だいたい各巻、四百字詰め原稿用紙に換算して、一、〇〇〇枚前後で設計されています。当初、著作集9『研究余録——女性と家族の歴史』は、すでに脱稿している第一編の「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」と、いま執筆中の第二編「ウィリアム・モリスの家族史——近代の夫婦の原像を探る」のふたつの論考で構成されるように予定されていました。ところが、第二編を書き出してみると、想定していた約五〇〇枚程度の分量を大きく越えそうな見通しとなったのです。そこで方針を変えて、「ウィリアム・モリスの家族史——近代の夫婦の原像を探る」をひとつの巻として独立させ、それまで予定していた、未着手の著作集6『日英デザイン思想の形成』に変えて、著作集6『ウィリアム・モリス研究（続編）』とすることにしました。

そうすると、著作集全体の構成が、玉突き式に少し変更を余儀なくされました。まず、著作集9『研究余録——女性と家族の歴史』のタイトルを著作集9『研究余録——富本一枝の人間像』に変え、第二編のタイトルを新たに「富本一枝の生涯——本人と仲間たちの語りで綴る人生模様」とし、今後執筆することになりました。これは、一枝さん本人と、平塚らいてうさんや丸岡秀子さんなどの友人たちの言説だけを使って、一枝さんの生涯を描こうとするものです。つまり、いっさいの執筆者の思惑が介入しない伝記という新しい形式へ向けてのひとつの実験です。極めて客観的なドキュメンタリーとなることが想定されます。ただそれだけでは機械的で無味乾燥なものになりそうです。それをどう読み物に仕立て上げるか、ここが執筆者の力量が問われる課題になるものと覚悟しています。

次に、第六巻として予定していました『日英デザイン思想の形成』も、変更しなければなりません。それについては、第何巻にするかは、これから考えるとして、いまは、『日本デザインの底流』と『英国デザインの諸相』の独立したふたつの巻にすることを頭に浮かべて、構想しています。

これまでもそうでしたが、実際に何か書きはじめてみると、当初の思惑を大きく塗り替える必要がないような事態が生じます。今回の手直しの結果、現行の全一二巻が、全一四巻になることが見えてきました。さらに今後、内容、形式ともに、どう変化していくのでしょうか。自分でもよくわかりませんが、何か著作集が生き物のように、呼吸をしていることが感じられます。（一一月）

三三．色づいた葉が落ちる

わが家の庭は、春の桜と秋の紅葉が、自慢です。十一月になり、少しずつ冷え込んできますと、それにつれて、庭のカエデ、モミジ、イチョウなどの葉が、黄色や赤に染まります。なかには、ローズ色に変色する葉もあります。手に取るように庭に出て体感するもよし、ウッドデッキから、そして室内から遠く全景を見るもよし、まさしく一幅の絵巻物です。

しかし、そうした盛りの紅葉も、時間の流れにともなって、ゆらめきながら少しずつ地に舞い落ちてゆきます。すると今度は、絢爛豪華な敷物がそこに誕生します。自然とカメラを向けてしまいます。この一瞬の輝きを永遠に自分のものにしようとする心が働くのでしょうか。それとも、この象徴的瞬間と向き合うことによって、一年の終わりを心に刻もうとしているのでしょうか。

葉は、そのいのちを終えると、土に帰り、次のいのちを生み出す養分となります。しかも、それを永久に繰り返すのです。しかし、それだけではありません。春の風に舞い散る山桜、夏の日の光を四方に反射する新緑の木々、そして、その年の終幕を告げる、鮮やかに燃え上がった秋の葉——花びらも、木も葉も、間違いなく、山で暮らす私のいのちに、大きな養分をもたらしているのです。（十一月）

三四．父親の入退院

先日、父親が退院しました。九月末の入院でしたので、ほぼ三箇月入院していたことになります。原因は、家で尻もちをついたことによる圧迫骨折でした。入院当初は、当然ながら痛みもあり、自力で歩くこともできず、移動は人の手を借りての車いすでした。しばらくして容体が安定したころからリハビリがはじまりました。かつて、病後の身体機能の増進のためにこの病院に転院したときには、しばしばリハビリにも立ち会い、どのようなメニューに従って回復のための訓練をするのかを身近に見ることができましたが、今回はそれができませんでした。といいますのも、コロナウイルス感染症の拡大を受けて、最初のころは、面会は予約制で面会時間も一五分に制限されており、さらに途中からは、感染レベルが上がったことに応じて、面会が完全禁止となってしまったからです。

しかし、情報は適宜電話により病院から提供されていました。あるときは、誤嚥性の肺炎を併発したので、治療に入るといった内容の連絡がありました。実際に本人とは会えず、心配しましたが、極めて軽度のものであったらしく、初期の手当てで無事に回復へと向かいました。また、退院が近づいてきたころには、こんな連絡が入りました。食べ物の呑み込みの機能が衰えており、それへの家庭での対応について説明したいので、来院してほしいという要請でした。行ってみると、管理栄養士やコーディネーターの方が待っておられ、退院後の食事の作り方や、介護食品やサプリメントの利用の方法について、指導を受けました。そうした過程を経て、杖はつきますが、自力による歩行ができるまでに回復し、帰宅することになりました。

九七歳という年齢からして、ここまでの回復は難しいかもしれないとも考えていましたので、入院以前の家庭生活が再び送れるようになったことを喜ぶとともに、適切な医療を提

供していただいた病院に、とても感謝しています。本人の積極的な努力もあったようですが、理学療法士や作業療法士の方々の献身的で専門的な支援の大きさを改めて実感しました。

体調不良で母親も同じ病院に入院していたのですが、病院側の配慮もあり、家庭生活に慣れるために、父親よりひと足先に退院していました。こうして、夫婦そろって、新しい年を迎えることができるようになりました。（一二月）

三五. コロナウイルス感染症の「第三波」

いつものように、回覧文書を受け取るために町役場へ行った。車を駐車場に止めて玄関へ向かうと、いつもと違った雰囲気漂っていた。掲示用の衝立が入口に立てられ、それを読もうとすると、ひとりの職員が近づいてきて、「何か急ぎの用ですか」と尋ねる。回覧文書の受け取りにきたことを告げると、しばらくここで待っていてほしいと言い残して、庁舎に入ってしまった。立て看板を見ると、今日から二日間、特殊清掃をすることのことが書かれてあった。詳しい事情がわからないまま、あたりを見回したりしながら、落ち着かなく突っ立っていると、いつもの総務課の担当者が封筒に入れた回覧文書をもって、玄関口に現われた。話を聞くと、建設課のひとりの男性職員がコロナウイルスに感染していることが判明し、これから庁舎内の消毒と、職員全員の PCR 検査をするという。家に帰って、防災無線に録音されていた町からの連絡を再生してみると、ほぼ同じ内容が伝わってきた。

国の政策である「GoTo トラベル」の影響もあって、この間感染が一気に拡大し、「第三波」と呼ばれる波が、東京や大阪や札幌といった大都会を襲っていた。そうした余波が、こうした山間部の小さな村落にも、いま押し寄せてきていることを実感する。職員の PCR の検査結果はまだ公表されていないが、クラスターが発生していなければいいのだが……。

連日テレビは、東京都の感染者数が、曜日最多を更新し続けていることを伝えている。そして関係者は、医療現場のひっ迫を必死に訴える。営業時間の制限強化や特措法の改正や、あるいは緊急事態宣言の発出を巡る考えにも、曖昧な隙間が見え隠れする。さらには、夜の会食に繰り出す無分別な国のリーダーたちの能天気な行動が、世間の批判を浴びる。「医療崩壊」は何としてでも避けなければならないが、その前に、感染阻止へ向けての適切な判断にかかわって、もうすでに「行政崩壊」が進行しているのではないかと、独り山にこもって心配する。杞憂なのか、それとも、これが実際なのか。（一二月）

三六. 学術論文と著作集との執筆上の違い

大学教員としての現役時代には、いわゆる学術論文と呼ばれるものを書き、学会の雑誌や大学の紀要に投稿することが、研究成果の発表の方法として日常化していました。しかし私は、大学を定年退職すると、学会誌や研究紀要への投稿を卒業し、自由な執筆活動の道へと分け入りました。それ以降研究成果は、ウェブサイト「中山修一著作集」を新設し、そこに順次、執筆したものをアップロードすることによって、公開してきました。

学術論文と著作集とでは、執筆上、幾つかの大きな違いがあります。学術論文の場合は、文字の分量や写真の枚数などについて、その最大量が決められています。一般的にいて、分量は、四〇〇字詰め原稿用紙に換算して五〇枚程度が限度となっているのではないで

しょうか。また、提出の期日も決められています。一方、いま私が書いている著作集のための原稿には、分量の制限も締め切りの期限もありません。すべて、自分の意のままで、これほど、何物にも制約されない自由な執筆はありません。

いま書いている「ウィリアム・モリスの家族史——近代の夫婦の原像を探る」は、当初は四〇〇字詰め原稿用紙に換算して五〇〇枚くらい（だいたいこれが一冊の本の分量に相当します）を考えていたのですが、それが書き進めてゆくと、予定を大幅に超えて、どうやらその倍近い見通しとなってきました。また図版も、最初の思いにあっては五〇点程度を考えていたのですが、それもどんどん増えてゆき、版權が切れている関連書籍のなかの画像をスキャンした枚数だけでも、もうすでに一〇〇点を大きく上っています。これから執筆は、いよいよ佳境に入りますが、いま私は、書きたいだけのものをすべて書き、必要と思うだけの図版をすべて使ってみたいという思いになっています。このような心境は、現役時代に体験することはありませんでした。

いま少し振り返ってみますと、私たちの現役のときには、分量や締め切りだけではなく、論文の数もまた、気になる点として、日々つきまといっていました。それというのも、助手から講師、講師から助教授、助教授から教授へと昇任する際には、業績の審査があるのですが、時としてその審査において、論文の内容というよりも、むしろ見た目でカウントできる、論文の本数がものをいう事態が起こりうるからです。いまは、聞くところによると、研究者を取り巻く環境はさらに悪化し、昇進の際だけではなく、短い年単位で日常的に業績を審査する大学もあるようです。これには少し首を傾げたくります。といいますのも、こうなると教員は、深化させたい自己の研究に落ち着いて没頭できず、ついつい目先の結果を追い求めるようになるのではないかと、思われるからです。研究には、どうしても発酵や熟成に、ある程度の時間が必要です。そのためには、一年といわず、さらにもっと長い期間が必要とされる場合もあります。そのことに思いを馳せるとき、日銭を稼ぐような研究を強いる現行の研究制度からは、真に創造的で深みのある、大河のような研究成果は生み出されにくいのではないかと心配が胸をよぎります。短い時間のなかで高速回転させて数量を増殖させようとする研究の仕組みを垣間見るにつけ、その先には、細く伸び切って断片化された、この国の貧相な研究の世界が横たわっているような気がしています。（一二月）

第六編 二〇二一（令和三）年——コロナウイルス感染症の二年目

一．ウィリアム・モリスの詩「川の兩岸」（年賀状）

謹んで新春の御祝詞を申し上げます

一八七〇年に、英国の詩人でデザイナーで社会主義者のウィリアム・モリスは、二五編の自作詩で構成される『詩の本』と題された彩飾手稿本をつくりました。その第一編の詩題が「川の兩岸」でした。この詩は、男女のあいだに流れる清い川を連想させるものでありますが、その一方で、中世のゴシック精神と新しい英国精神、さらには資本と労働のあいだに流れる濁流が念頭に置かれていたとも解釈できます。いま私たちの社会や文化に目を向けますと、問題はさらに先鋭化し、分断と抑圧が一国のみならず、地球規模で発生し、「富者と貧者」「多数者と少数者」そして「強者と弱者」とのあいだに激しく流れる「川」となって現われていることに気づかされます。そうしたことを思い浮かべながら、モリスの理想と実践を共有し、自己の問題意識を整理するために、今年の夏以来、著作集第6巻に所収予定の「ウィリアム・モリスの家族史——近代の夫婦の原像を探る」の執筆に取りかかっています。穏やかなお正月をお迎えのことと思います。

本年のご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。

二〇二一年 元旦

二．波乱の幕開け

昨年末の寒波に続き、再び寒波に見舞われました。七日から九日にかけての大雪に備えて、事前に買い出しをし、車は、牧野道へ入るすぐ手前の、交差してその上を走る農業道路のガードの下に置きました。雪が積もり、凍結した場合には、スタッドレス・タイヤを履いていても、自宅に続く牧野道の坂道を車で上ることは困難だからです。

雪が降って、庭もウッドデッキも、一面銀世界に変わりました。いつもそうなのですが、今回もまた、雪の上に、はんこで押したような、足跡を見ることができました。それも違った形のものが、幾つかありました。小動物たちの足形です。夜のあいだ彼らが、家の周りを行き来していることが、これでよくわかります。しかし、私の知識では、足跡から小動物の名前を特定することはできません。

一日、はじめて家から出ました。まだ雪は残っていましたが、長靴を履き、竹の杖を頼りに、雪を踏みしめるようにして牧野道を下りてゆきました。一五分くらいで車のところに到着しました。車に掛けていたカバーを外し、タイヤのストッパーに使っていた煉瓦を取り除き、いつものように温泉へ向かいました。久しぶりの常連客の友だちとの顔合わせでした。会話は、雪とコロナ。

今日は、その次の日です。いま玄関を空けて、外をのぞいてみると、深夜に雪が降ったらしく、残った雪の上に新雪が覆っていました。また、数日は家に引きこもることになりそうです。

この間に、首都圏の一都三県に緊急事態宣言が出されました。そしてその後のニュースによると、熊本の県知事も緊急事態宣言の発出を政府に要請する検討に入ったとのこと。雪と

コロナが身の回りをふさぎます。そして、精神的に強い圧迫感を感じます。いまこうして、波乱の二〇二一年の幕が開きました。（一月）

三．モリス伝記の執筆に邁進する

富本憲吉と富本一枝の研究が一段落し、昨年の夏から、「ウィリアム・モリスの家族史」を書いています。それまでと違って、使う資料がほとんど英語の文献となりました。そうしますと、どうしても一日の執筆量が少なくなります。それを補うために、少し勉強時間を多くとる必要に迫られました。そこで最近、就寝時間をいままでよりも一時間繰り上げて、五時にしています。そして、夜中の一時ころに起床です。こうすることによって、朝の八時までのあいだ、少なくとも五時間は執筆にあてられるようになりました。ちなみにそのあとは、昼ご飯（普通の人の朝ご飯）を食べて、九時過ぎに家を出て、ウォーキング、新聞、温泉（そのあと必要に応じて買い物）を楽しんで、お昼を過ぎたころの時間に帰宅し、一休みのあと、夕食の準備となります。

雑誌『KUMAMOTO』から、「二〇二一年、今年こそは」というテーマで原稿を書いてほしいとの依頼がありましたので、先日その原稿「ウィリアム・モリスの伝記の執筆に邁進する」を書き上げ、送ったところです。今年は、ウィリアム・モリスとの格闘の一年になりそうです。（一月）

四．「対策」の洪水

ここは山沿いですので、冬のあいだ、寒気が南下すると雪になります。ひと冬に、だいたい三回くらいは、一〇センチほどの積雪に見舞われ、その間の数日は、外へは出ずに、家にこもります。

先日、この季節三回目の降雪の予報が出ました。それを聞くと、大雪になるかどうかは別にして、車を下の牧野道の入り口のところまで移動します。わが家から牧野道の入り口までは、一キロ弱の細い坂道で、雪が降り、その後凍結すれば、家からこの牧野道を降りるのが危険になるためです。雪の積もった牧野道を一五分くらい歩いて車のところにたどり着くと、そこからは、あまり雪が積もることのない町を中心部へ出ることができます。山道を歩くため、防寒対策が必要です。帽子、マスク、手袋、杖、長靴、厚手の服などなどです。

しかし、最近の生活を振り返りますと、「対策」と呼ばれるものは、寒さ対策だけに止まらないような気がします。加えて、コロナ対策、自然災害対策、健康対策、さらには認知症対策、まさに「対策」の洪水です。これほどまでに、私たちの生活は、危険にさらされているということでしょう。ゆっくり、のんびりと生活することを願って、この山暮らしをはじめたのですが、なかなかその夢へ届かないのが、現状のようです。（二月）

五．水のない生活（1）

朝起きて水道の蛇口をひねると、水が出ませんでした。昨夜の寝るまでは使えていたので、凍結したのかな、と一瞬不安がよぎりました。いつもは、氷点下三度以下の予報が出ると、

凍結防止のために、少しでも出しっぱなしにした状態で寝るのですが、昨夜はそれほど冷え込む予報はなく、そうした対策はしていませんでした。たまたまお向かいの方が昨夜から週末を楽しむために来ていらしたので、お尋ねすると、わが家と全く同じ状況で、今朝から水が出ないとのことでした。断水の原因は、どうやら凍結ではなさそうです。

この別荘地では、敷地の一角にポンプ小屋があり、このなかに設置されているポンプで地下水を汲み上げてタンクに溜め、そこから各世帯へ排水する仕組みになっています。住民は、私ひとりが定住者で、残り四世帯は、週末や休暇を利用した不定期の滞在者です。私が常駐している関係で、数年来、この「四季美の郷自治会」の会長を仰せつかっています。そこで、さっそく、いつもの設備会社に連絡をし、地下水を汲み上げるポンプの作動状況を見てもらいました。結果は、電気系統にもポンプ自体にも異常はなく、おそらく水位が下がったためにポンプによる吸い上げが実際上できなくなったのだろう、という所見でした。そして、その対処の方法としては、ポンプをクレーンで釣り上げ、水位の状態を確認したうえで、必要な長さのパイプを継ぎ足す必要があるとのことでした。ただ、このポンプは、最初の設置以降、もうすでに三〇年以上が経過しており、今後経年劣化でまた別の不具合を起こす可能性もあり、クレーンを入れて釣り上げるこの機会に一新してはどうかという提案も、いただきました。

そこで、ほかの住民のみなさんに連絡し、状況を説明しました。この古くなっていたポンプについては、この数年、総会で話題になり、見積もりも事前にとっていたこともあり、すぐにも新品と取り換えることに賛同していただきました。そして、工事費用に関しては、一時金を徴収して、およそ半額をまかない、残りは、自治会の現有資金を切り崩すことになりました。

こうしていま、私の水のない生活がはじまりました。お風呂は、毎日温泉に行くので問題はありません。トイレの水も、浴槽に溜め置きの水があるので大丈夫です。飲み水はペットボトルが三本あります。ほかに水は、五リットル入りのボトル三本に、水道水（地下水）を入れて、備蓄していました。さあ、これでどこまでもつのでしょうか。工事が完了し、水が出るようになるのは、果たしていつでしょうか。途中で給水に行く必要に迫られる可能性もありそうです。

それにしても、なぜ地下水の水位が下がったのでしょうか。業者の方の話では、ときどき見かける現象とのことでした。これも、気候の変動や地下の火山活動の影響によるものなのでしょうか。いずれにいたしましても、水が使えない、厳しい生活をこれからしばらく経験することになりました。結果的に、いい体験になるといいのですが。（二月）

六. 水のない生活（2）

二回にわたって、設備会社の方が、現状の確認に来られました。少しずつ水は出るようになりました。しかし、濁った水で、砂も混じっています。水位も計ろうとしましたが、途中で電極のついた細いケーブルが止まってしまい、下まで降りませんでした。これらのことから判断して、先日の断水の原因は、水位の低下ではなく、どこかで崩落のようなものが起こったか、あるいは、ポンプ自体の経年劣化によるものではないかと考えられるとのことでした。そこで、設備会社にはポンプ交換の見積もりをお願いし、住民のみなさんには、見積書

の内容や工事内容を聞くための、臨時総会の開催通知を出しました。

すぐにも見積書は出てきました。しかし、臨時総会を予定している二日前に、設備業者から、この工事から手を引きたいとの申し出がありました。あまりにも突然であり、全く予期していないことでしたので、とても当惑しました。業者の言い分は、井戸のなかがどうなっているかわからず、このまま進めてもポンプを引き上げられなかったり、引き上げられたとしても、今度は新しいポンプを定位置まで入れられなかったりする可能性が高く、住民のみなさんには、ポンプの交換ではなく、新規に井戸を掘ることを提案し、必要であれば、その業者を紹介したいということでした。

臨時総会には、この設備会社の担当者に来ていただき、そうした意向と提案について説明してもらいました。説明を聞いたあと、住民だけでこの問題について検討しました。新規に井戸を掘るには莫大なお金を必要とすることは、いうまでもありません。そもそも、本当に新たに井戸を掘るしか、解決の道はないのでしょうか。出席者のどの人の顔も曇っていました。そこで、この別荘地を分譲した会社に問い合わせ、この井戸のこれまでの履歴を詳しく尋ねることにし、その仕事が、定住者である私に任されました。その会社は、隣り村にあり、社長とは私も面識があり、さっそく翌日にうかがうことにしました。（三月）

七. 水のない生活（3）

翌日私は、この別荘地を分譲した会社に行きました。そこでわかったことは、だいたい以下のようなことでした。

（1）分譲を開始したのは三十数年前で、その後一〇数年間、自分たちの会社で井戸の管理をし、自治会の結成時に、井戸の管理業務も、関係書類と一緒に自治会に引き渡した。

（2）モーターの寿命は大体一〇年前後で、自分たちの会社で管理していたときに、一度取り換え工事をした。それから、いま一〇数年が経過していることを考えれば、経年劣化によってモーター自体が停止寸前の状態にある可能性がある。

（3）しかし、汚れた水が出ているということは、井戸のなかの地質に、何らかの異常が発生している可能性がある。熊本地震以来、至る所で、水位が下がったり、水路が変化したり、側壁が崩落したりしている。

（4）経費のことを考えると、まずは、モーターの交換工事を考え、業者の判断で、どうしてもそれが無理のようであれば、次に、新規の井戸掘りについて考えてはどうか。

さっそく私は、聞いた内容をまとめて、住民のみなさんにメールで報告し、あわせて、関係書類の存在の有無を尋ねました。というのも、関係書類が残っていれば、取り換え工事を行なった、かつての業者名や工事の内容（モーターの製造番号や揚水管の長さや地質の様子など）がわかり、これから行なう業者選定や工事の依頼内容にかかわって、役に立つ情報が入手できるのではないかと考えたからです。しかし、残念ながら、そのような書類や資料は、

どなたの手にも残されていませんでした。

その間、何とかまだモーターは稼働し、少量の水を汲み上げています。しかし、水質検査の結果、飲料水には適さないことが判明しました。この別荘地に定住して生活しているのは、私だけです。この水の使用はトイレ専用とし、飲み水や調理の水を確保しなければなりません。友人に相談した結果、湧水トンネルで無料の湧き水が提供されていることを知りました。新たに一個の大きなポリタンク（二三リットル）と三個の小さなボトル（五リットル）を購入して、さっそく水汲みに行きました。情報どおり、自然の湧き水でおいしいらしく、他県からも車で来て、給水する様子が、見て取れました。こんな身近なところで水を手に入れることを本当にありがたく思いました。

こうして日々の給水による生活がはじまりました。本当に止まってしまう前に、何とかモーターの取り換えをしなければなりません。それができなければ、井戸を新しく掘ることも考えなければなりません。大きな問題に直面しました。（三月）

八．水のない生活（４）

こうして一週間が立ちました。ところが、一番恐れていたことが起こったのです。つまり、モーターが完全にストップしたらしく、水が全く出なくなっていました。大きな断水は、神戸の地震のときと熊本の地震のときの二度経験していました。そこで、これまでの体験や知識を総動員して、この事態への対応策を考えました。以下は、それをまとめたものです。

（１）お風呂は、これまでどおりに、瑠璃温泉へ行く。洗濯は、瑠璃温泉のコイン式洗濯機を利用し、乾燥は、いつものコインランドリーへ持って行って乾かす。トイレは、大だけ水洗で流し、小は尿瓶にとって、庭の草木の肥料とする。飲料水は、数日間隔で湧水トンネルに水を汲みに行き、徹底的な節水に努める。

（２）羽釜を洗う回数を減らすために、一度に二日分の二合を炊く。野菜や食材も、二日分まとめて切り、まな板と包丁を洗う回数を減らす。（まとめて準備）

（３）料理は、総菜ごとに小分けにして盛らず、大きめのひとつの皿にまとめて盛り付ける。（まとめて盛り付け）

（４）冷たい料理であれば、皿の上にサランラップを敷いて、その上に盛り付け、食べ終わっても、皿を洗わないですむようにする。また、少々の汚れは、水洗いせずに、紙でふき取る。（汚れ対策）

（５）汁物は、鍋を使って料理をしたあとに、茶わんや井に移す方法では、洗い物がふたつになるので、できる限り、ひとつの土鍋ですますようにする。（プロセスに簡略化）

（６）ゆで汁などは、すぐ捨てないで、洗い物用に再利用する。（再利用）

（７）必要に応じて、紙のコップや皿、割りばしやプラスチックのスプーンを利用する。（使い捨て）

さあ、いよいよ「水のない生活」がはじまります。どんな生活になるのでしょうか。ただ幸いなことは、これから暖かくなることです。焦っても仕方ありません。できるだけ早く業者を選定して、工事を依頼し、水の出る日を待ちたいと思います。（三月）

九．水のない生活（５）

二回目の臨時総会が、開かれました。主たる議題は、すでに業者から提供されていた、「ポンプ引揚工事」と「ポンプ据付工事」のふたつの見積書の検討でした。見積書に加えて、事前に行なわれた調査を踏まえて、次のような質問回答書も届けられていました。それによれば、前者の工事については、成功率一四パーセント（七回引き揚げて一回成功）で、五月の連休明けに施工、後者の工事については、成功率はさらに低くなる可能性があり、施工は、「ポンプ引揚工事」終了後の一〇日前後ということでした。

いろんな観点から、論議が進められました。そして、全員一致して得られた結論は、引き揚げ不能の可能性のあるものの、それにかけるしかなく、引き揚げが失敗した場合、見積書に挙げられている金額の損失もやむなし、というものでした。もっとも、引き揚げがうまくいったとしても、次の据え付けがうまくゆくという保証は何もありません。しかし、「ポンプ引揚工事」をしないまま、給水が停止した状況をこのまま放置するわけにもいかず、苦渋の決断でした。

少なくとも「ポンプ引揚工事」までは、私の「水のない生活」が続きます。もし、五月にふたつの工事がともに成功しなければ、完全に水が断たれます。不安といえば不安ですが、いまはあまり深刻に考えずに、湧水トンネルへ行きさえすれば、何とか給水ができるわけですので、それを頼りに、「あわてず、あせらず、あきらめず」の自分のモットーを信じて、これからしばらく「水のない生活」と向き合いたいと思います。（三月）

一〇．自然の変動

今年は、いつもの年と比べて、暖かくなるのがとても速く感じられます。庭で最初に咲く花はフクジュソウ（福寿草）なのですが、例年ですと二月の終わりに、去年は二月のなかに咲き、今年は何と、二月になる前に黄色い花を咲かせました。そのあと、雪が降り、残念ながら、見ごろの期間は短いものになってしまいました。

サクラも今年は早く、三月の中旬を過ぎたころに満開になり、いまはもう葉桜に変わりました。ウッドデッキや庭に落ちている花びらを見ると、今年はその量が少なく、絢爛豪華なサクラを楽しむことも、ほとんどなかったような気がしています。

玄関に上がる階段の右手に、数本のシャクナゲがありますが、もうすでに赤く膨らんだつぼみを幾つも見るができます。もう数日で開花しそうです。いつもは、四月の末なのですが、シャクナゲの花が開くのも、今年は早まりそうです。

何が原因かはわかりませんが、地球の温暖化や気象の異常と関係があるのかもしれませんが。いずれにしましても、花の開花日が動きますと、人間の季節感に狂いが生じます。いま私たちの生活は、そうした変動の現象のはじまりに位置しているのかもしれませんが。

（四月）

一一．あれから五年

一四日に笛田の両親を病院に連れてゆき、帰りの道は、いつもの俵山越えではなく、大津町を經由して、一箇月前に開通した新阿蘇大橋をはじめて渡りました。崩落した阿蘇大橋に代わるものです。五年前のこの日が、熊本地震の前震の日で、私は夜が明けると、前日につくっていたてんぷらとポテトサラダをもって、笛田に向けて車を走らせました。それから二日後の一六日に、本震が襲いました。

思い起こすと、幼稚園のときの熊本大水害、そして神戸大学時代の大震災、さらにそれに続く、退職後の熊本での地震と、何度か大きな自然災害と向き合ってきました。身近な人を亡くし、住む家を失った人の思いを考えると、言葉にはならず、手をあわせるしかありません。いま生かされていることを、大事にしたいと思います。（四月）

一二．雑感三題

今日から五月。先日、お隣の南阿蘇村で感染者が確認されたとの報道がなされました。昨年暮れの高森町の役場職員の感染以来、南郷谷は平穏な状況が続いていたのですが、先日、東京、大阪、京都、兵庫に、緊急事態宣言が出されたこともあり、少しずつ身近に迫ってきている感じがしています。

今年は春の訪れが例年よりも数週間早く、サクラは三月の末に終わり、いつもならばいまころ咲くシャクナゲも、もうとつくに散ってしまいました。いま庭は新緑の季節を迎え、目にも鮮やかな緑を楽しませてくれています。少しでも、変わりゆく季節に耳を澄ませたいと思います。コロナの重苦しい雰囲気とは別に、何かすがすがしい音色が響き伝わってくるかもしれません。

先ほどから雨が降り始めました。雨音を聞きながら、きょうもパソコンに向かっていきます。執筆も順調に進み、数日前に半分の通過点を過ぎました。人の書いたものを読むことではわからなかったことが、自分の判断と自分らしい表現力でもって実際に言葉として書くことによって、実に幾つものことがはっきりと認識できるようになってきました。こうした「発見」こそが、研究者にとっての最大の喜びであり、いまそれを、改めて実感しています。（五月）

一三．水が出た！

ついに念願かなって、水が出ました。五月一〇日、九時前から水中ポンプの引揚作業がはじまりました。仕事を依頼したボーリング設備会社からは、ここを施工した前の業者の事例からすると、ケーシングが入っておらず、裸孔の状態である可能性が高く、うまく引

き揚がる可能性は一割前後ではないだろうかという事前の判断をいただいていたので、本当に手をあわせて祈るような気持ちで見守りました。ポンプと揚水管をあわせて約六〇〇キロの重さがあると想定して、クレーンで引き揚げてゆきます。しかし、一トンを超えてもびくともしません。徐々に荷重を増してゆきますが、揚水管は動きません。そうした状態が三時間続き、ボーリング設備会社の社長も私も、ほぼ諦め、引揚作業を断念する気持ちへと傾いていました。そこで話し合いの場をもち、最後の手段として、揚水管の破損を覚悟して、さらなる荷重をかけて引っ張ることにしました。破損して破片が飛び散る可能性も考えられるので作業員を遠ざけ、それからクレーンのオペレーターへ二トンまで上げる指示が出されました。動きません。二トン一〇〇、そのときです、わずかに一センチほど動いたようです。そして五センチ揚がりました。状況から判断して数時間前に手配していたさらに大型のクレーンが現場に到着し、クレーンを入れ替えて、さらに徐々に荷重を増してゆきます。揚がりはじめました。一〇メートルほどの揚水管の一本目が揚がり、二本目、三本目と、引揚作業は進みます。しかし、途中動かなくなります。少し荷重をかけては荷重を落とす、その繰り返しをします。また、必要に応じて少しずつ回転させることもやってみます。忍耐を要する、地道な作業です。現場とオペレーターとのあいだで無線を使った微妙なやり取りが続きます。すると、びくともしていなかった揚水管が持ち揚げられます。それを何度も繰り返しながら、ついに最後の揚水管と、その先についていた水中ポンプが引き揚げられました。

翌日の一日、内部の調査のために、孔のなかにカメラが入りました。しかし、途中で止まってしまい、それ以上、下へは入れることができませんでした。おそらくその箇所では孔が横へずれているようです。地震などの地殻の変動が原因なのかもしれませんが、いつ、どのような力によってそのずれが生じたのかまでは、よくわかりません。しかしこれは、次の揚水管据付作業の困難さを予告する暗雲として、工事関係者と私の胸に、のしかかってきました。加えて、途中までしか確認できないままカメラによる調査を諦めざるを得なかったため、この箇所より下の孔の様子がどうなっているのかも、わかりません。さらに何箇所かにずれが生じている可能性もあります。

五月一五日、総会が開かれました。ボーリング設備会社の社長から、資料に基づき、引揚工事とカメラによる調査についての報告がなされました。話し合いの結果、ここでこのまま引き下がることはできず、据付作業の困難性を十分理解したうえで、望みを託してこの作業にかけてみることになりました。

五月一七日、据付工事がはじまりました。今度は、引揚作業とは逆の手順になります。新しいポンプを先端につけた新しい一本目の揚水管から孔に入れてゆきます。一本、二本と、順調に入りました。しかし、先日カメラが止まったところで、揚水管も止まってしまいました。事前に予想されていた、ずれている箇所に到達したのです。荷重を上げたり下げたり、回したり、微妙な調整が続きます。すると、揚水管が下がり、何とその難所を無事にくぐり抜けたではないですか。みんなの顔が安堵の表情に変わりました。しかし、それより下の孔がどうなっているのかは、カメラで確認できていけませんので、不明です。引き揚げたときの感触を頼りに、作業は続きます。そしてついに、一五〇メートルの定位置まで最後の揚水管が入りました。こうして、何とか無事に据付工事が終わりました。しかし、途中でポンプが損傷を受けている可能性もあります。電源を入れるまでは、わかりま

せん。地上での配管と配電の工事がはじまりました。そして、電源のスイッチが入りました。モーターが動き、揚水管を通して、地下の水が上がってきました。関係するすべての人に、耐えて苦しんだ心に光が差し込み、達成したことへの喜びが全身に満ち溢れてきました。

私にとって生命の水が蘇りました。ありがとう！（五月）

一四．梅雨のなかで

今年は、例年より三週間ほど早く梅雨入りしました。これまでの季節感ですと、五月といえば、鯉のぼりが泳ぐ、晴れ渡った青空が目に見えますが、今年は、連休が終わるや、もうすでに曇天か雨の日が連日続いています。

私の家は、牧野道の坂道を八〇〇メートルほど上がったところにあります。この牧野道は、もともとは、放牧するための牛をトラックに載せて放牧場まで運ぶためにつくられたものです。しかし、畜産業の衰退とともに、この牧野道も本来の目的を失い、牧野に隣接する別荘の所有者によってのみ利用されるまでに、やせ細ってしまいました。畜産業がそれなりに機能していたころは、この道も、牧野組合の管理下にあり、日々、手入れと管理がなされていました。しかし、牧野組合が消滅してしまうと、道も徐々に管理が行き届かなくなり、至る所で陥没したり、両側面の切り立つ杉林の木が倒れたり、左右ののり面が崩落したりと、何かにつけて、問題を生じさせてきました。この梅雨の季節と、秋の台風の季節が、とても危険な時期で、毎日通るたびに、不安な気持ちにさせられます。

先日、倒木が電線の上にかぶさっているを見つけました。いつものように電力会社に電話をし、その様子を伝えます。対応は早く、翌日通ったときには、すでに撤去されていました。しかし、こうした倒木を引き起こす激しい雨も、決して悪いことではありません。梅雨に入ると、長雨で落ちた葉や小枝が道路を塞ぐことがよくあるのですが、一晩の激しい大雨は、それらを、一斉に坂のたもとまで押し流し、実にうまく清掃をしてくれるのです。これは、とてもありがたいことなのですが、しかしその結果は、少し問題です。といいますのも、これによって坂の下では、大量の土に混ざった葉と枝の山積みが出現し、車の通行を妨害する悪玉と化してしまうからです。一日一時間、二日くらいかけて、スコップを使って両脇ののり面の空きスペースに移動します。水分を含んでいるのでかなり重たく、重労働です。しかし、それが終わってみると、道は美しく蘇り、心もすっきりと晴れ渡ります。この季節、こうしたことが、もうあと一、二回、繰り返されるかもしれません。道も心も、そしてお天気も、すべてが晴れ晴れとなるのは、もう少し時間がかかりそうです。（五月）

一五．著作集の再編

以下が、現在の著作集（ウェブサイト「中山修一著作集」）の構成です。頭につけている記号は、■が執筆完了を、□が一部執筆完了ないしは執筆（撮影）継続中を、そして、□が未着手を表わします。

■著作集 1 『デザインの近代史論』

- 著作集 2 『ウィリアム・モリス研究』
- 著作集 3 『富本憲吉と一枝の近代の家族（上）』
- 著作集 4 『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』
- 著作集 5 『富本憲吉研究』
- 著作集 6 『ウィリアム・モリス研究（続編）』
- 著作集 7 『デザイン史再構築の現場』
- 著作集 8 『研究断章——日中のデザイン史』
- 著作集 9 『研究余録——富本一枝の人間像』
- 著作集 10 『研究追記——記憶・回想・補遺』
- 著作集 11 『南阿蘇白雲夢想』
- 著作集 12 『南郷谷千里百景』

昨秋から執筆に入ったのは、ウィリアム・モリスの家族についての伝記で、書き終わったら、著作集6『ウィリアム・モリス研究（続編）』に入れることを考えていました。しかし、書き進めてゆくにしがたって、予定していた分量（四百字詰め原稿用に換算して約一、〇〇〇枚）を大きく上回ることが段々とわかってきました。そのことは、著作集6『ウィリアム・モリス研究（続編）』の一卷には収まりきれず、何らかの増巻を考えざるを得ない事態になったことを意味しました。そこで思いついたのが、著作集6『ウィリアム・モリス研究（続編）』は、名称を著作集6『ウィリアム・モリスの家族史』へと改めたうえで本文だけを所収し、他方、結論部分におけるひとつの論考として想定していた「ウィリアム・モリスと富本憲吉の家族の比較」と、巻末に掲載を予定していた「図版集」は、ともにそれぞれ独立させて、新しい巻のなかの一部に収めることでした。その新しい巻が、著作集7『日本のウィリアム・モリス』です。いま、この巻の第二部を「富本憲吉とウィリアム・モリス」とし、第三部を「画像のなかのウィリアム・モリス」とする構想にたどり着いています。そうした構想に端を発して、さらに一種の玉突き現象が引き起こりました。つまり、この際に、新たに著作集8『英国デザインの英国性』と著作集14『外輪山春雷秋月』を一気に設けることを思い立ったのです。そうすることで巻数も、以下のように、これまでの全一二巻から全一五巻へと増巻されることになりました。

- 著作集 1 『デザインの近代史論』
- 著作集 2 『ウィリアム・モリス研究』
- 著作集 3 『富本憲吉と一枝の近代の家族（上）』
- 著作集 4 『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』
- 著作集 5 『富本憲吉研究』
- 著作集 6 『ウィリアム・モリスの家族史』
- 著作集 7 『日本のウィリアム・モリス』
- 著作集 8 『英国デザインの英国性』
- 著作集 9 『デザイン史再構築の現場』
- 著作集 10 『研究断章——日中のデザイン史』
- 著作集 11 『研究余録——富本一枝の人間像』

- 著作集 1 2 『研究追記——記憶・回想・補遺』
- 著作集 1 3 『南阿蘇白雲夢想』
- 著作集 1 4 『外輪山春雷秋月』
- 著作集 1 5 『南郷谷千里百景』

再編の主たる目的は、内容上のバランスです。著作集 1、8、9 の三巻がデザイン史・デザイン論を扱っています。そして、著作集 2、6、7 の三巻がウィリアム・モリスに、著作集 3、4、5 の三巻が富本憲吉に焦点をあてて論じた部分です。一方、その主要研究の周辺に目を向けた雑録三部作が著作集 1 0、1 1、1 2 で、退職以降に取り組んだ創作部分である阿蘇三部作が著作集 1 3、1 4、1 5 となります。

自分が書きたいと思っている総量と、元気に書けるであろうと期待している残りの年数とを勘案しながらの、中長期計画となります。すべての巻を脱稿するまでは、何とか健康寿命を保ちたい——これが、いまの私の願いです。（五月）

一六．図書館利用の再開

昨年からのコロナ感染拡大の影響で、県立図書館が閉館していましたが、やっと開館の運びとなりました。入館時に手の消毒をし、体調に関する質問シートに回答して、係員に渡します。二階の一般図書のカウンターへ行きます。職員とのあいだはビニールのシートで遮断され、これまであった椅子も撤去されていたので、立ち話となりました。以前に比べて、落ち着いて話をしたり、相談をしたりする雰囲気は薄れましたが、必要な本を借り出し、文献複写を国立国会図書館へ依頼する手続きをしました。感染が拡大すると、いつまた閉館になるかわからず、いまがかきいれどきのなのです。

県立図書館での用事が終わると、次に熊本市立図書館へ向かいました。県立図書館が所蔵していない図書を借りるためです。熊本市立図書館は熊本市民が利用の対象者なのですが、図書館をもたない県内の幾つかの町村と提携して、その町村民も利用が可能となっているのです。私のような図書館のない町に住む者にとりましては、とてもありがたいサービスです。

しかし、さらに欲をいえば、熊本県の至るところに図書の貸し出し中継基地のようなものをつくり、熊本県立、県内の各市立、各町立のすべての図書が垣根を取り外して相互に利用できるようなになると、わざわざ熊本市内まで出かけなくてすみ、図書の利用がもっと身近なものになるように思います。そして、さらに将来的には、日本中の、あるいは世界中の本や雑誌がデジタル化され、いつ、どこにいても利用できるのが一番いいと思います。そんな日が来るのでしょうか。そのときは、もはや感染症の発生による図書館閉鎖などは、遠い過去の話になっていることでしょう。（七月）

一七．ワクチン接種の体験

コロナ感染症のワクチン接種がはじまりました。私も二回目の接種が終わりました。二回とも、筋肉痛のようなものは残りましたが、発熱も倦怠感もなく、心配していた副反応は杞

憂となりました。

田舎の町に住む私の場合は、予約もスムーズにいったのですが、熊本市内に住む両親の場合は、電話もつながらず、しばらくすると、予約自体の受付も中断され、なかなか思うように進まず、インターネットでの予約も、私の操作能力では歯が立ちませんでした。そうするうちに、インターネットによる予約に困難を抱えている高齢者のために、幾つかの市の施設において、職員による代行の予約が実施されるという知らせが入りました。さっそく、指定日の指定時間の一時間前に行きました。ところが驚くことに、すでに長い列ができていたのです。聞くとみな、予約の電話が繋がらず、パソコンも使い慣れておらず、すぐる思いで早起きをして、ここへ来たとのことでした。

やっと順番が来て、両親の予約作業がはじまりました。しかし、近くのかかりつけの病院での接種を希望したのですが、すでに予約が埋まっているとのことで、遠く離れた大型接種会場しか予約が取れませんでした。

帰宅してそのことを知らせると、ともに九〇代の超高齢者である両親は、馴染みのない、大勢が集まる会場に、不安を感じました。ところが、しばらくして、空きができたとの連絡が、かかりつけの病院からあり、いつもの定期健診と同じように私の付き添いのもと、比較的安心して接種を受けることができるところまでできました。しかし当日、問題が起きました。接種券に関する一部の書類を母親が失くしていたのです。それでも、何とか接種はしてもらい、必要書類の再発行を市に依頼する手続きを取って、やっと帰宅の途につきました。あとは、副反応が出ないことを願うばかりです。（七月）

一八．東京オリンピック

コロナ感染症が拡大し、緊急事態宣言が発出されているなか、無観客の状態で、東京オリンピックの開会式が行われました。この間、緊急事態宣言が出されているにもかかわらず、オリンピックの開催を強行する姿勢が疑問視されましたし、一方で、観客を入れないで開催する意味も問われました。

今回のオリンピックは、誰のために、どのような目的をもって開催されるのかが、最後まで語られることなく、うやむやのうちに突入してしまったという感があります。その曖昧さは、開会式の一連のセレモニーにも現われていました。主題や表現や進行に、明確な意味づけがなされておらず、そこから、大会の意義が全世界に向けて発信されたという印象は、ほとんどありませんでした。そう感じたのは、私だけだったのでしょうか。（七月）

一九．連載への挑戦

いま、著作集6『ウィリアム・モリスの家族史』の執筆が進行中です。第一六章において、モリス没後の日本へのモリスの影響に言及しました。具体的内容は、第一節が「夏目漱石の英国留学とモリス」、第二節が「富本憲吉の英国留学とモリス」です。

書き終わって、少し思いを巡らせてみました。第五高等学校の英語教師としての漱石の前任にラフカディオ・ハーンがいます。そして、後任に厨川白村がいます。五高離任後、ハーンは東京帝国大学でモリスの詩歌について講義をしています。漱石は、五高在任中の英

国留学において、モリスに深い縁のあるヴィクトリア・アンド・アルバート博物館をしばしば訪れます。また、白村は五高の次の三高時代に、富本憲吉の帰朝報告ともいえる評伝「ウィリアム・モリスの話」に強い感銘を受け、すぐさま『東亜の光』に「詩人としてのウィリアム・モリス」を寄稿するのです。一方富本は、東京美術学校在籍中に漱石の講演を聞いた可能性があるだけではなく、両者は、英国留学以降、実際に会う機会をもちました。

このように歴史の糸を紡いでゆきますと、ハーン、漱石、白村が第五高等学校に在籍したころ、熊本がモリス研究の中心になっていたのではないかと一つの図柄が浮かんできました。こうして、富本憲吉のモリス関心の過程を文脈に使いながら、「ウィリアム・モリスと第五高等学校の英語教師たち」のタイトルのもと、新しい図柄の小論を書き、地元の文化雑誌『KUMAMOTO』の編集をしている友人に送ってみました。するとさっそく電話があり、これを四回に分けて、九月刊行の次号から連載したいとの提案でした。私にとっては、ありがたい申し出であり、すぐに快諾し、四回分の物語へと再構成してみました。連載ですので、それぞれの回の内容にまとまりがあるというまでもなく、それだけではなく、次の回にうまくつながってゆく流れのようなものも大切にしながら、四回分の「ウィリアム・モリスと第五高等学校の英語教師たち——ハーン、漱石、白村のモリスへの関心」がここに完成しました。この雑誌は季刊誌ですので、一年間の連載になります。はじめての経験に胸が高鳴っています。（七月）

二〇．母の入院と父との生活（１）

父は、来月九月の誕生日で九八歳になり、母は六月に九四歳になったところです。七月末に母が入院しました。父親との介護生活の疲れが出たようです。食事が進まず、体力が落ちたことによるもので、とくに大きな病気というわけではありません。過去にも、こうした経緯での入退院が何度かありましたので、とくに心配はなさそうです。しかし、コロナの感染拡大を受けて、病院は面会禁止の対応を取っています。顔をあわせることはなく、電話での連絡のみです。入院開始の数日は、身の回りの品で、届けなければならないものも多く、その場合は、玄関受付で担当の看護師さんをお呼びし、病室に持って行ってもらうことになります。

かかりつけの病院でもあり、こちらの家庭の事情もよくご存じで、何かと便宜を図ってもらえることが、ありがたいです。母が入院すると、さっそく病院から連絡があり、父親も一緒に入院する対応を取りましょうか、という親切な提案がありました。過去にも何度かそうすることがありました。ふたりが同じ病院に入院すると、家族はとても安心で、助かります。しかし、父親は極度の病院嫌いで、食べ物も好みははっきりしていて、もし父親が入院すれば、体力が弱るだけではなく、認知症もさらに悪化するのではと危惧しました。それに、面会もできません。そこで、病院からの提案は、とりあえずお断わりし、しばらくのあいだ様子を見ながら、父親と一緒に生活することにしました。（八月）

二一．母の入院と父との生活（２）

父親との生活がはじまりました。健康を維持してゆくうえで基本となるのは、食事とお風

呂と睡眠です。

これまで買い物は、私も代行していましたが、おおよそのことは母親から聞いていましたので、父親がどのような食事を摂っているのか、想像がついていました。しかし、実際やってみると、試行錯誤することが多くありました。一例ですが、最初は、見栄えがいいようにと、ひとつの大きめのお皿に数品目を並べて出していましたが、見ていると、料理から口元までの距離が長く、運ぶのが大変そうでした。そこで、小さなお皿に一品ずつ入れて、テーブルに並べ、お皿を手にもたせるようにしてみました。そうすると、お皿を口元まで近づけて食べるようになり、しだいに、自分から、好きな食べ物の入ったお皿を手取るようになりました。この方が、本人にとって食べやすく、楽しかったようです。

父親の食事は、おおかた次のようなものの組み合わせによって成り立っています。バナナ、自家製水ようかん、刺身（まぐろかサーモン）、それに卵焼きは、どれも小さく切り刻んで、それぞれ小さいお皿に盛ります。これらは本人が好む必須のアイテムです。ご飯は、やわらかいおかゆで、大さじに二杯くらい。かば焼きのタレや梅干しの漬け汁などで味をつけます。あとは、豆腐やプリンやヨーグルトなどの、飲み込みに負担がかからないもの。飲み物としては、メイバランス、ヤクルト、リンゴジュース、カルピス、牛乳、甘酒、それにお茶が、日常の飲料水となります。ほとんどの場合、とろみをつけます。

野菜は、昔からほとんど口にすることはありませんでした。それでは栄養が不足するのではないかと思いがちですが、この年齢まで長生きしていることを考えると、人間にとって必須というわけではないのかもしれないかもしれません。一方、甘いものには、若いときから目がありませんでした。いまも、水ようかんを毎日食します。それでも、血糖値に問題はありません。不思議な現象です。

食事の提供者である私は、栄養のことをあまりに考えすぎたり、決められた分量のようなものに囚われて無理強いしたりするようなことはせず、本人が好むものを、好きなだけ食べて満足感を得る、そのことに、一番力点を置いています。（八月）

二二．母の入院と父との生活（3）

現在、母が入院しています病院から、週三回、父のリハビリのために自宅に来てもらっています。作業療法や言語療法などを組み合わせた、父の状態にあわせたメニューが組み立てられているようです。

いつもの最初の問いかけは、今日は何月何日ですか、という質問です。しかし、父は、正確に答えられません。すると、担当の方は、カレンダーを指さして教えます。場合によっては、そこにボールペンで丸をつけるように指示されることもあります。

用意した食べ物や果物などの絵を見せて、名前を答えさせたり、また、紙に書かれた文字や単語や短い文章を読ませたりすることもありますし、その日の新聞の大きめの見出しを読むように指示を出されることもあります。ここから、少し時事問題や世の中の動きにかかわって、いまだあれば、コロナのことやオリンピックのことなどにかかわって、会話へと持ち込もうとします。

また、父親に関連する古い写真を使って「これがどの場面か」という問いからからはじまり、父親の小さいころの生活体験を過去の記憶から蘇らせる手法も、しばしば使われます。

現在の事象の話題よりも、過去の記憶の蘇りの方が、父親にとっては楽しいようです。そうした一連の流れのあと、手足の動きを円滑にするリハビリのための簡単な運動が始まります。父親は、食べ物を飲み込む力が衰えているらしく、そのために、喉の筋肉に刺激を与えたり、舌の動きを加速させたりする運動もします。こうして、四〇分のリハビリの時間が過ぎてゆきます。

お風呂は、訪問介護によって、週三回行なわれます。父は、お風呂自体はとても好きなのですが、時として気が乗らないことがあり、風呂場まで行こうとしません。そんなときは、困った顔をすることもなく、うまくヘルパーさんが、時間をかけて父と会話をしながら、その気に導いていかれます。そばで見えていて、これこそ本当にプロの技だと、感心します。

リハビリにしても、入浴にしても、自宅で行なうことが最近急速に充実しているように感じます。これに加えて、食事の宅配や訪問診療も進んでいます。そうしたことを考えるならば、家の空間構成と動線というのは、老後の二〇年や三〇年を視野に入れてデザインされなければならないように感じるようになりました。その際、介護される本人の快適さのほうにどうしても目が行きがちですが、むしろ、終日介護をする人の快適さというまでもなく、加えて、定期的に訪問していただく療法士、ヘルパー、看護師、医師、そうした人たちの快適さのほうにもまた、将来的には、優先して目を向けなければならないことになるのではないかと、自分がその立場に立ったいま、そういう思いを実感しています。（八月）

二三. 母の入院と父との生活（４）

日常的に生活していると、父の認知症が進行していることが、よくわかります。しかし、今回の生活で新たに驚いたのは、起きているあいだ中、奇声を発することでした。たとえば、「チャッチャッチャッ、チャッチャッチャッ、チャッチャッチャッ、チャ〜」とか、「ポッポッポ〜、ポッポッポ〜、ポ〜」とかの幾通りもの奇声音のフレーズをリズムカルに絶え間なく口にするのです。テレビを見ながらも、食事をしながらも、トイレまで歩きながらも、絶えることはありません。話しかけて、関心をそらそうとしますが、止むことはありません。本人は全く自覚なく、発声しているようです。

寝る前には、処方された睡眠導入剤を飲むのですが、効き目がない夜は、ベッドのなかでこの奇声音が休むことなく永遠に続いてゆき、夜中の一二時、さらには夜明け方にまで及ぶことがあります。隣の部屋で寝ている私の耳にも十分伝わり、睡眠がとれません。そこで、主治医の先生に相談してみました。この症状は、内科的疾患というよりも、精神科的なもののようで、「コントミン糖衣錠」という薬を処方してもらいました。この薬は、神経を調節し、心の不調を整え、不安や緊張を和らげる効能があるようです。

さっそく一日三食後の服用を開始しました。すると、確かに効果が現われました。昼間の奇声音が連続的なものから断続的なものへと変わり、音量も低く弱くなりました。夜も、睡眠状態が長く続き、私の睡眠の妨げになることがほとんどなくなりました。

服用から一週間後に、その効果や父親の様子を報告するために、私だけの次の外来受診が予定されています。おそらく、この薬の効果が適切であると判断されれば、母親の介護もかなり楽なものになり、退院後も、これまでどおり、ふたりでの生活が可能になるのではないかと、思っているところです。（八月）

二四．母の入院と父との生活（５）

精神安定剤の服用から一週間が立ち、予約されていた時間に病院へ行き、この間の父の様子を主治医の先生に報告しました。先生も、大変喜んでおられました。そして、これまでの四週間おきの外来診療から、訪問診療への切り替えの提案も受けました。

こうして、家庭における受け入れ態勢が整いました。同時に、母親の体調も回復し、退院への運びとなりました。ちょうど三週間の入院でした。これで、私と父との生活も、ひとまず終了です。

父親は、自宅での晩期を強く希望する人で、母親は、夫に寄り添い世話をすることを自らの使命と考える人です。精神安定剤の服用のおかげで父親の夜の睡眠が安定化し、加えて訪問診療の開始により、母親の負担もこれまでに比べればずいぶんと軽減するものと考えられます。しかし、母親も高齢ですので、また再び体調を崩して入院の事態になるかもしれません。おそらく今後は、入退院の繰り返しになることが十分に予想されます。その場合は、父との生活が復活します。それまで私も、山での生活を再開し、これまでどおり、ウォーキングと温泉を日課とし、健康の維持に努めたいと考えています。（八月）

二五．インタビューのテープ起こし

一九八七年から翌年にかけて、ブリティッシュ・カウンシルのフェローとして私は英国に滞在し、英国デザインの歴史について調査をする機会をもちました。そのとき、十数名の著名なデザイン史家にインタビューを試みました。この時期は、モダニズムが終焉し、それに伴い、デザイン史の記述方法も大きく変わろうとしていたときでした。そうしたこの学問にとっての転換期に際してのインタビューですので、資料的価値は高く、今後書く予定の著作集 9 『デザイン史再構築の現場』の第二部「英国のデザイン史学誕生前夜」の参考資料に掲載しておきたいと考え、とりあえず、ジリアン・ネイラー、ジョン・ヘスケット、そしてペニー・スパークへのインタビューのテープ起こしを依頼し、その成果物の一部が先日届きました。見ると、当時のことがふつふつと蘇り、三十数年前の自分に出会ったような気になりました。また、内容的にも、記憶から遠ざかっていた事象が再現されており、再びいま新鮮な知識と出会う機会となりました。今回の成果物は、ペニーのものでしたが、今後ジリアンとジョンのテープ起こしがもどってくるのを、いまから楽しみにしているところです。（八月）

二六．著作集に「別巻」を設ける

ウェブサイト「中山修一著作集」を、現在の全一二巻から全一五巻に衣替えする作業を進めています。新しい全一五巻の構成は、以下のとおりです。

著作集 1 『デザインの近代史論』

著作集 2 『ウィリアム・モリス研究』

- 著作集 3 『富本憲吉と一枝の近代の家族（上）』
- 著作集 4 『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』
- 著作集 5 『富本憲吉研究』
- 著作集 6 『ウィリアム・モリスの家族史』
- 著作集 7 『日本のウィリアム・モリス』
- 著作集 8 『英国デザインの英国性』
- 著作集 9 『デザイン史再構築の現場』
- 著作集 1 0 『研究断章——日中のデザイン史』
- 著作集 1 1 『研究余録——富本一枝の人間像』
- 著作集 1 2 『研究追記——記憶・回想・補遺』
- 著作集 1 3 『南阿蘇白雲夢想』
- 著作集 1 4 『外輪山春雷秋月』
- 著作集 1 5 『南郷谷千里百景』

必ずしも最初から意図したわけではなかったのですが、結果的に、この一五巻を見渡してみますと、五つの主題による分類が可能であることが判明しました。それは、「デザイン史・デザイン論」（著作集 1、8、9）、「ウィリアム・モリス研究」（著作集 2、6、7）、「富本憲吉研究」（著作集 3、4、5）、「周縁領域探索」（著作集 1 0、1 1、1 2）、「阿蘇創作三部作」（著作集 1 3、1 4、1 5）の五領域です。そこで思いついたのが、「主題別著述総覧」を設けることでした。ウェブサイト「中山修一著作集」を訪問する人で、もし私のモリス研究に関心をもっている人であれば、その部分だけを閲覧したいと思うのではないのでしょうか。それであれば、全著作を研究テーマごとに分類した一覧を設定しておけば、そうした便益にかなうのではないかと判断いたしました。そこで、今回の再編に伴いまして、別巻『主題別著述総覧』を加えることにしました。更新アップロードは、九月末か一〇月のはじめを予定しています。この全一五巻＋別巻をもって、私の著作集の最終的な巻の構成となる見込みです。あとは、「未完」になっている部分の執筆に専念し、全巻を脱稿することです。八〇歳になるまでには完結すべく、精進したいと考えています。（八月）

二七．原稿の取り下げ

締め切り日が来ましたので、拙稿「ウィリアム・モリスと第五高等学校——ハーン、漱石、白村のモリスへの関心（1）」を文化雑誌『KUMAMOTO』の編集者へメールに添付して送信しました。そして、その際の添付には、熊本大学五高記念館から提供を受けた、第五高等学校の新築校舎の図版に加えて、ラフカディオ・ハーン、夏目漱石、厨川白村に関する図版の計四点が付けられていました。その校正紙が、先日届きました。しかし驚いたことに、図版の位置は変えられ、しかも白村の図版は削除されていました。理由は何も書かれてありませんでした。原稿の取り下げも覚悟で、その異常さにつきまして返信を書きますと、すぐにも、謝罪の言葉とともに、図版のレイアウトを修正した次の校正紙が送られてきました。これにも、私は驚きました。ハーンを含む群像の写真が、あまりにも小さく縮小され、本人を特定することができない図版となっていたのです。なぜ、説明もなく一方的に、本文で指

示している図版の位置を別の位置へと移動したり、一部の図版を削除したり、あるいは、図版としての意味をなさなくなる程までに縮小したりするのか、私にはかいもく見当がつかず、こうした乱暴な対応に私自身耐えきれず、結果として、今回の寄稿を諦めることにしました。

編集者には、テキストの著作権は私に、また、画像の著作権については熊本大学五高記念館に属するので、ただちにこの時点で、流用や転用を避けるために、そのすべてを破棄するように求め、そのようにした旨の返事を受け取りました。その後私は、写真の提供を受けていた熊本大学五高記念館の担当者にこの間の経緯を説明し、謝罪するメールを書きました。

なぜ、このような理不尽とも思える事態が発生したのでしょうか。今回の担当者は、私にとってはじめての編集者でした。執筆者にも説明できないような深刻な事情が編集者にあったものと推測するしかありませんが、無言のまま自分だけの都合で強行する行為には、何もない結果は伴いません。残念な結末となってしまいました。この原稿は、今後、私のウェブサイト上の著作集に掲載したいと思います。（八月）

二八．著作集の再編更新

ウェブサイト「中山修一著作集」を、これまでの全一二巻から全一五巻＋別巻に再編して、アップロードしました。このウェブサイトを開設したのは、神戸大学を定年で退職した翌年（二〇一四年）の暮れのことで、著作集1『デザインの近代史論』、著作集2『富本憲吉とウィリアム・モリス』、別巻1『博士論文』、別巻2『詩歌集』の本巻二巻別巻二巻の全四巻で構成されていました。別巻2『詩歌集』以外は、神戸大学に在職していた期間に執筆した研究論文によって構成されていました。

思い起こせば、ちょうどこのころから神戸を離れ、山での生活の準備がはじまりました。山荘を少し増築し、庭を手入れし、車も購入しました。これでやっと定年後の執筆活動が始めできると希望に満ちた時期でした。しかし、二〇一六年の四月に、熊本を大きな地震が襲いました。翌五月には、心筋梗塞が私を襲いました。その後の半年間は、体力も気力も失われ、もう二度と文を書くことはできないのではないかと思う日々でした。どうにか机に向かい、パソコンのキーボードをたたくことができるようになったのは、その年が押し迫った紅葉が過ぎたころからでした。定年の前年の二〇一二の夏にがんに侵された前立腺をすべて摘出する手術をしており、文章をつくるのはおよそ五年ぶりのことでした。満足に書けるのか、とても不安でした。

それから五年の歳月が流れ、執筆量も順調に伸びてゆきました。そして、主題も、より明確になってきました。今回アップロードした全一五巻は、三巻ずつ五つの主題に分けることができます。それは、「デザイン史・デザイン論」「ウィリアム・モリス研究」「富本憲吉研究」「周縁領域探索」「阿蘇創作三部作」の五領域です。一五巻すべてが完結するには、まだ時間がかかります。健康を保ち、全巻完結まで精進したいと、決意を新たにしているところです。（一〇月）

二九．阿蘇中岳の噴火

先日、阿蘇中岳が噴火しました。活火山ですので、日常的に噴火しているのですが、今回のような大きな噴火は、一年数箇月ぶりでした。庭やウッドデッキ、車や家の前の道、すべてが火山灰で覆われました。灰といっても、木や紙を燃やしたあとに残るような灰ではなく、溶岩の小さな粒子です。とても厄介なのは、簡単に水で洗い流すことができず、そうすれば、どろどろの粘り気のある液状の物質になってしまうことです。それでもウッドデッキなどは、洗うしか方法はなく、これまでに何度かそうしているのですが、洗っても洗っても、灰色の粒子は残り、いまだに完全に除去できずにいます。

前回の噴火は、一年以上続いたように記憶しています。しかし今回は、まだ連続した噴火にはなっていません。予報は、同規模の噴火が近日中に起こる可能性を示唆しています。毎日不安のなかで、視線は、阿蘇中岳に向かいます。白い噴煙は確認できますが、大規模な噴火までには至っていません。一過性のものであってほしいと願うばかりです。

朝起きて、雨戸を開けると、いまだ雨で流されず、風で吹き飛ばされず、火山灰がそのままこびりついた庭の木や葉が目飛び込んできます。同様に落ち葉も、灰色のまだら模様の世界です。気が沈みます。活力を奪われます。いつになったら、生き生きとした自然の姿にもどるのでしょうか。今年の紅葉は、楽しめそうにありません。悲しくなります。しかし、これも、もうひとつの自然なのかもしれません。（一〇月）

三〇．父親の終末期ケア

入院中の父親が終末期のケアに入って、一箇月になろうとしています。酸素吸入と点滴による水分の補給が、主なケアの内容です。母親も心身の疲労で、父親と一緒に同じ病院に入院しましたが、いまはずいぶん回復しています。しかし、病院の計らいで、退院はせず、父親と廊下を挟んだ反対側の病室にいて、できる限り父親と時間をともにしています。

ふたりが入院した当初からしばらくは、コロナ感染症拡大の影響を受けて、入院見舞いは完全に禁止されていました。それが先日やっと解除となり、平日の二時から五時までのあいだの一五分間、一家族一名の事前予約制で、面会ができるようになりました。

九八歳の父親の最期が近づいてきています。これまでに、四人の孫からの手紙や写真が届き、繰り返し母親や看護師さんが読み聞かせをしています。昨日私が面会に行くと、目を少し開け、何かを話そうとしますが、はっきりとは聞き取れない状態になっていました。手を握り、安心できるように、話しかけます。一五分が過ぎるころ、看護師さんがやって来て、合図をされます。別れ際に手を振ると、手を振って応えてくれました。（十一月）

三一．母親の退院

父親と母親がそろって近くのかかりつけの病院に入院したのは、九月の中旬でした。父親は認知症が進むとともに軽い肺炎を併発し、母親は介護に伴う心身の疲労が重なっていました。この後父親の肺炎は回復したものの、退院後の自宅での生活は望めず、そのまま入院を続け、主治医の先生の考えもあり、しばらくして、いよいよ終末期のケアに入りました。一方、母親の容体は医療のおかげである程度回復したものの、病院の計らいで、すぐには退

院せず、父親と過ごす時間を日々少しでも長く確保するために、それ以降も入院生活が続いていました。しかし、母親の場合は、入院の最長期間が二箇月という制限があるらしく、加えて、コロナウイルス感染症の拡大が下火となり、面会禁止が緩和されたこともあって、退院することになりました。こうして父親は入院生活を続行する一方で、母親の自宅での自立した生活がはじまったのでした。

この間、父親の病室には四人の孫から手紙と写真が届きました。また、本人の生まれ故郷の風景を撮った写真も枕元に置かれ、看護師さんや見舞客の誰かれとなく、それらを読んで聞かせたり、見せたりしながら、父親を楽しませてくれています。先日行きましたら、病室が変わっていました。この病室のベッドからは、窓を通して金峰山が目に入ってきます。この山へは、私が小さいころよく家族で登ったことがあり、熊本市内の西のシンボルとなっている山です。父の目には、この山はどのように映っているのでしょうか。言葉で自分の気持ちを語ることはもはやほとんどなくなりましたが、走馬灯のように、過ぎ去った日々が蘇っているにちがいありません。（一二月）

三二. 宿泊施設とレストランの休業

毎日通っている瑠璃温泉には、宿泊施設とレストランが併設されています。かつてまだ子どもたちが小さいころ、彼らの祖父母もさそって、何度か宿泊したことがありました。一方レストランは、その後も温泉での入浴のあと、ときどき立ち寄っていました。しかし、それらの施設が、休業に追い込まれました。それを聞いて、最終日の一日前、レストランへ行って、いつものお気に入りの「ちゃんぽん」を食べました。

休業に至った理由は、外部の私たちは知る由もないのですが、おそらくは、コロナ感染症の拡大による顧客の減少が、その最大の理由になっているものと思われます。また、聞くところによると、五年前の熊本地震からの復興に伴う公的助成金が打ち切られたことも、引き金になったようです。地震といい、感染症といい、自分たちの力ではいかんともしがたい苦しみの災難が、さらに二次的に人間の生活に襲いかかって経営を圧迫し、その継続を奪うことになったとすれば、単に休業がさびしいという情緒的な思いを超えて、何か計り知れない空虚さのようなものを感じます。「空」や「虚」といった感覚が、避けて通ることのできないものとして、いつも人間の生活を支配している——逆らうことなく、それを受け入れなければならない——これが現実なののでしょうか。そのために、涙と詩は生まれたのでしょうか。（一二月）

三三. 新聞の閲覧から遠ざかる

いつも私は、開館の一時間くらい前に瑠璃温泉に行きます。駐車場に車を止め、約三〇分間、温泉敷地の周りを歩きます。それから宿泊棟へ行き、そこの受付に備えてある新聞を、温泉が開く時間まで見るのが日課となっていました。昨日も行ってみました。しかし新聞は、前日のものがそのまま置いてありました。宿泊施設とレストランが休業になったことに伴う措置にちがいないという思いがよぎりました。

もうこれから新聞を読む機会がなくなるかと思うと、情報の入手先が途切れた、無重力の

空間に放り出されたような思いがしました。しかし、よくよく考えてみると、もともと山暮らしをはじめた理由のひとつには、世俗という身につけてしまった営みから離れることにあったわけですので、その考えに立ち戻れば、世の動きを日々いちいち確認する必要はなく、それが失われたからといって、とりたてて驚くことはないのです。

しかし、落ち着いていま振り返ってみると、新聞の閲覧には、別の意味が隠されていたのです。新聞が置いてある宿泊棟の受付に毎朝行くと、当然ながら、受付の人とあいさつを交わし、何か大きな出来事があった翌日などは、それをさかんに会話を楽しんでいました。また、ベンチに腰掛けて新聞を読んでいるあいだも、受付の隣りが事務室であることもあり、従業員の人たちの出入りも頻繁で、その都度お互いに声を掛け合っていました。こうした人と人の交流は、いま思い返すと、新聞の閲覧の同じくらいに、あるいはそれ以上に、私にとって重要な意味をもっており、いまそのことに気づかされたのです。新聞からの情報は、スマホからでも入手できます。しかし、人と人が交わす言葉や表情は、対面以外に取って代わる手段はありません。私は、それを失ったのでした。（一二月）

三四．父親の死に立ち会う

一二月一三日へと日付が変わってしばらく時間が立った深夜、電話が鳴り、病院からの知らせを受けました。ここから入院している病院まで車で一時間一五分くらいかかります。取り急ぎ身支度をして、車を飛ばしました。着くと、当夜の宿直の医師の看護師のおふたりが待っていらっしゃいました。その時点で死亡が確認され、そのことを私に告げられました。そのあとふたりは席を外されました。手を握りしめ、涙が込み上げてきました。これで、父親の九八年にわたる生涯が幕を閉じました。妹に連絡をし、近くに住む母親を迎えに行きました。みんなで父親を病院から自宅へ連れて帰るころには、少し夜が明けようとしていました。（一二月）

第七編 二〇二二（令和四）年——平穏な一年を念願する

一．昨年を振り返って

昨年を振り返ってみますと、二月の末に、水を汲み上げているこの別荘地のポンプが経年劣化により故障し、新しいポンプに交換するまでのおよそ三箇月間給水が止まり、湧水館トンネルの水汲み場へ通う日々が続きました。七月末には母親が入院し、その後のおよそ一箇月間、実家に泊まり込み、父親と一緒に生活を送りました。九月一三日、父親と母親がともに入院しました。最初はコロナ感染症の影響で面会が制限され、会うこともできない状態が続きました。母親は二箇月で退院したものの、父親はちょうど三箇月が立った一二月一三日にこの病院で亡くなりました。

こうしたなか私は、気を紛らわすかのように、許す時間はパソコンに向かいました。当初考えていました予定よりは、大幅に遅れましたが、あと一週間程度で脱稿します。この「ウィリアム・モリスの家族史」は、モリス研究者の私にとっての、ひとつのまとまりをもった記念すべき作品となります。一箇月くらいをかけて「索引」をつくり、その後、二月にはウェブサイト「中山修一著作集」の第六巻としてアップロードしたいと考えています。（一月）

二．社会の動きから離れる

父の死から一箇月が過ぎようとしています。振り返ってみると、その間、新聞とテレビも、そしてラジオからも完全に遠ざかった生活をしていました。

それまで新聞は、瑠璃温泉の宿泊事業の終わりとともに、すでにほとんど見る機会を失っており、テレビも朝のニュース番組程度に止めていたのですが、それも完全に途絶え、毎日午前二時ごろの起床とともにスイッチを入れていた、NHKのラジオ深夜便さえからも、完全に離れてしまっていたのです。

もともと、社会の動きから離れるために、こうした自然のなかで暮らしているのですから、望んでいた本来の姿に一段と近づいたということもいえます。しかし、私にとりまして、どうしてもほしい情報があります。それは、天気にかかわる情報です。とくに冬の季節は、気温と、それに加えて雪の情報が気になります。いくら社会の動きから離れても、天気予報から離れることはできません。

昔、人びとはいまのような天気予報というものがないとき、毎年の四季の変化から、太陽や月の運行から、そして動植物の行動から、次に起こる天気を経験的に読み解いていたものと思います。自然のなかで暮らしていると、このことを、少しばかり追認することができます。カラスが大声で騒いでいるあとには、大雨や大風になることがよくありますし、クリの花が落ち始めると、確かに梅雨に入ります。非科学的な現象の組み合わせですが、よく調べてみると、そこには、気圧や湿度や気温などが関係した必然的な因果関係があるのかもしれない。

父親の死は、さらにいっそう社会の動きから離れることを私に要請しました。これも、外目には情緒的な現象かもしれませんが、実際には脳や神経の動きと連動した結果なのかもしれないと思うようになりました。（一月）

三. 寒中お見舞い

寒中お見舞い申し上げます

冬の寒さが厳しいおり、お変わりなくご健勝にてお過ごしのことと拝察いたします。

私事になりますが、昨年一二月一三日、父中山理が、九八歳の生涯の幕を閉じ、他界いたしました。そのため、年頭に際しましてのごあいさつを控えさせていただきました。

穏やかなお正月をお迎えだったことと思います。本年のさらなるご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。

二〇二二年 立春を前にして

四. 小林信のその後の足跡を知る

著作集 12 『研究追記——記憶・回想・補遺』の第一部「わがデザイン史忘備録」に所収の「第一七話 小林信のその後」において詳しく書いていますように、ある方からの一通のメールから、小林信の足跡の一端が判明しました。

著作集 14 『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』においても、著作集 11 『研究余録——富本一枝の人間像』に所収しています第一編「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」においても、私は、小林信について言及していました。小林信という人物は、一九二四（大正一三）年四月に、富本家のふたりの娘を生徒とする私設学校に赴任してきた女性の教師です。その年の八月の『婦人之友』を見ますと、「私たちの小さな学校に就て」という表題のもと、富本一枝が「1. 母親の欲ふ教育」、小林信が「2. 稚い人達のお友達となつて」、そして、富本憲吉が「3. 生徒ふたりの教室」を寄稿しています。しかし、奈良女子大学の学術情報センターから得られた情報によりますと、少なくとも翌年（一九二五年）の十一月には、「桑野信子」として東京に住んでいるのです。いつ、どのような理由があって安堵村を離れたのか、また「小林」から「桑野」への改姓、「信」から「信子」への改名の背景は何であったのか、いずれもはつきりとはわかりません。さらには、そのとき後任の教師が決まった形跡も、あるいは、ふたりの生徒の転校先が決まった形跡もありません。なぜ小林信は、あわただしく教師の任務を放棄して東京へと去っていったのか、そのことが、執筆以降の私にとって大きな謎として残っていましたし、同時に、その後の「小林信」あるいは「桑野信子」の足取りが、とても気になっていました。そこへ、「桑野信子について」という表題のメールが届いたのですから、私にとっては、言葉を越えた大きな衝撃でありました。

メールの内容によると、「桑野信子」は、与謝野鉄幹・晶子門下の歌人で、一九三三年創設の潤光女学校の初代国語教員（一九三六年まで勤務）をしていました。その後、メールに添付して『婦女界』（第45巻第3号、1932年、50頁）の画像が送られてきました。そこには、桑野信子の和歌五首が記載されていました。またこの方から、『現代短歌分類辞典』にも、信子の作品三五首が掲載されているというご教示をいただきました。

私は、小林が安堵村を去った理由を、推測を交えて、かつてこう書いていました。

なぜかくも短期間のうちに、確たる教育成果もなく、しかも後任や転校先が未定のまま、この学校は閉じられなければならなかったのか。極めて重大な何かが、このときこの学校に起こったことが想定される。それは何か。一枝と小林のあいだに愛を巡る何か深刻な問題が生じた——そのように考えるのが、やはり自然で順当なのではないだろうか。小林に向けられた一枝の一方的な愛だったのか、双方が許し求め合う愛だったのか、正確にはわからない。前者であれば、一枝の行動に驚いた小林は、逃げるようにして安堵村を去った可能性があるし、後者であれば、引き裂かれるような、意に反した強圧的な解雇だった可能性もある。そうでなければ、そののちの、深尾須磨子と荻野綾子、あるいは湯浅芳子と中條百合子にみられる事例に近いものがあったのではないかと考えられる。つまり、小林が結婚をすることによって、ふたりの関係が強制的に終了した可能性である。

いかなる結末であったとしても、前任の女学校に自分の居場所を見出すことができず、一年で職を辞し、希望に満ちて安堵村の富本家に赴き、「此の小さな学校は何にも換へ難い私の寶です」と書いていた純真で若い小林は、このとき、教師としても女性としても、何らかの挫折と苦しみを経験したにちがいがなかった。

忽然と姿を消した「小林信」は、「桑野信子」という名の歌人となっていたのです。そして、彼女が詠んだ和歌も残されているようです。読んでみたいと思います。安堵村での体験が、ひとりの女性教師にどのような陰影を投げかけているのか、私は、それを知りたいと思います。（二月）

五. 果たして「事件」なのか

父が亡くなり、遺言に従って相続登記をすることになりました。ところが、遺言書がある場合は、相続登記に際して、家庭裁判所で検認を受ける必要があることがわかりました。ここで、遺言書の検認を依頼する手続きに入ったのですが、そこで驚いたのは、私の手続きの事案が、「令和4年（家）第〇〇号 遺言書検認申立事件」という名称で呼ばれることになったことです。〇〇の箇所には、事件番号としての具体的な算用数字が入っています。

相続登記という今後の行政手続きに際して必要とされる遺言書の検認を依頼する行為が、果たして「事件」という名辞で呼ばれることが妥当なののでしょうか。あまりにも市井の感覚からかけ離れた用語法であり、不可解な違和感に襲われました。

裁判所と関係をもったのは、今回がはじめてのことでした。したがって、裁判所のすべてがわかっているわけでは当然ないのですが、しかしながら、この小さな経験から私は、いかに裁判所が市民の高みに立って存在する権力の強圧的な虚構装置となって運営されているのかに気づかされました。（二月）

六. 自力申請の副産物

親が死亡したあとに子が行なわなければならない行政上の手続きが、幾つかあります。そのひとつが、相続登記です。私の場合は、自筆の遺言書が残されていたので、まずは、

家庭裁判所で遺言書の検認を受け、それによって公的に相続人を確定したのちに、実際の相続登記の手続きに入ることになりました。

家庭裁判所での検認の手続きも、地方法務局での登記の手続きも、実に煩雑であるために、司法書士の専門家に依頼した方がいいといった内容の助言を人から聞いていましたので、はじめはそうのように考えていたのですが、難題挑戦と経費節約の思いから、自力で申請することに意を決しました。

まずは地元の、家庭裁判所の出張所と地方法務局の支局に足を運び、申請に必要な書類について話を聞きました。どの役所もそうかと思いますが、親切に相談にのってくれる人もいれば、ぶっきらぼうな態度をとる人もいます。いずれもはじめて聞くことばかりで、要領をえないまま、必死にメモをとる作業でした。

次に、必要書類を集める作業に入りました。そのなかに、「父親の生まれてから死亡するまでの籍が連続してわかる書類」がありました。私は、籍はひとつで、それを示す戸籍謄本というもののひとつで、それを取得すれば、これに関する書類は整うものと思い込んでいました。ところが、そうでないことがすぐにも判明しました。つまり、父親の場合は、父親が生まれたときに祖父が自分の籍に入れた戸籍謄本と、結婚後、父が新たに籍をつくり、亡くなるまで本籍としていた戸籍謄本との二種類が存在することがわかったのです。

そのため、父親の生まれ故郷の市役所に足を運ぶことになりました。父が生まれたのは、いまから九八年前です。その間に戦争もありました。そんな古い戸籍謄本がいまだに保存されているのかどうか、半信半疑でした。しかし、それがちゃんと残っていたのです。それを見たとき、父の誕生に際して祖父が役場に出生届を出す姿が、頭をよぎりました。村の風景、役場の様子、着ているものや話し言葉——もちろん見たわけではありませんが、それでも、映画やテレビで見る百年前の情景が、脳裏をかすめて行ったのです。

こうして、家庭裁判所での自筆遺言書の検認と地方法務局での相続登記に必要な書類が、少しずつそろってきました。それは、予期せぬことではありましたが、ある意味で、戸籍を通じて、父親の生涯を知る機会となりました。自力申請から得られた、思わぬ副産物でした。（二月）

七. 浅香さん追憶

浅香嵩さんの一周忌がそろそろ巡ってきます。それにあわせて「偲ぶ会」が企画されているらしく、偲ぶ会実行委員会から、当日会場に展示するパネルに使用予定の思い出の文や写真を送ってほしいとの依頼がありました。

浅香さんは大学の少し先輩で、著名なインダストリアル・デザイナーであり、日本インダストリアルデザイン協会（JIDA）の会長も務めました。そこで、私は、次のような短文を寄稿しました。

コンパのおりに、空の一升瓶を片手に、「よかちゃん」を踊る浅香さんの姿が、いまでも脳裏に焼き付いています。人間味に溢れ、友情に厚く、加えて母校愛に捧げた浅香さんの一面です。それからもう半世紀が過ぎ去ってしまいました。しかし、追憶は変わらず、永遠です。これが、私にとって浅香さんのいまに生きる姿となっています。

偲ぶ会では、AXIS ギャラリーと隣の JIDA ギャラリーを使って、展覧会と思い出話の会が催される計画とのことです。浅香さんの人となり、デザイナーとしての魂が、再び蘇ることになるにちがいありません。盛会を祈りたいと思います。（二月）

八. ふたりの女性に巡り会う

突如として富本家の「小さな学校」の教師を辞め、私の目から姿を消していた小林信さん、つまり、その後改姓し、歌人として生きていた桑野信子さんを求めて、先日、熊本県立図書館へ行きました。そこで私は、以下の書籍と雑誌をとおして、信子さんの短歌と対面することができました。

- （１）『冬柏』国立国会図書館デジタルコレクション（図書館送信限定）。
- （２）『婦女界』第四五巻第三号、一九三二年。国立国会図書館へ複写依頼。
- （３）山本三生編纂『新萬葉集』巻三（きの部～この部）改造社、一九三八年。
- （４）『明星（復刊）』国立国会図書館デジタルコレクション（図書館送信限定）。

それらのなかに所収されていた信子さんの短歌のうち、とりわけ以下の三首が、私の目を引きました。

わが男の子母と並びて物を讀み星座の名など言ふ年となる
一筋に君を思ふと告げにこし風ならなくに身に沁む夕
大和なる赤埴（あかはに）をもつてつくねたる小さきこの壺親しかりけり

最初の歌から、小林信さんは、安堵村を出たあと、おそらく結婚して桑野に改姓し、男の子を設けていたことがわかりました。

次の歌のおおよその意味は、「一筋にあなたを思っております、と私に告げに来てくれた風ではないのですから、私にとってその風は冷たく、身に沁み入るような夕べです」となります。もしこの歌が、安堵村を去るときの心象を詠ったものであるとするならば、明らかにその風は、富本一枝ということになります。さらに裏読みすれば、愛を告げに来てくれる風（＝富本一枝）であってほしかったという意味にもなります。

最後の歌は、安堵への思いを詠った作品ではないかと思われまふ。ここに登場する「壺」は、その昔富本憲吉が小林信に贈呈した自作の陶器だったのではないのでしょうか。それが正しければ、小林信（桑野信子）は、富本憲吉の生き方と芸術に強い共感を覚え、富本がプレゼントした「壺」を、思い出とともに秘蔵していたことになります。

こうして私は、長年探し求めていた小林信さん（その後の桑野信子さん）に巡り会うことができたのでした。それだけでも十分に私は感動していたのですが、そのとき、偶然にも、もうひとりの探し求めていた人に巡り会ったのです。

最後に図書館のカウンターで必要書類への記入を書き終え、視線を上げたとき、目に映ったひとりの司書の方が、まさしく長年私の心に残っていたその人だったのです。

かつて私は、富本憲吉の研究から派生するかたちで、妻の一枝さんに興味をもつようになりました。少しずつ調べていくうちに、どうも様子がおかしく、一枝さんは、性的少数者ではないかと思うようになりました。とはいっても、当時の私は、性的少数者について何も知識がなく、この司書の方に相談し、基本となる書物を紹介していただいただけではなく、その内容や読み方についてまで、ご教示いただいたことがありました。こうして私の富本一枝研究がはじまったのですが、執筆の途中で遭遇したのが、「小林信」という女性でした。この人が、一枝さんが愛した女性で、富本家の「小さな学校」の教師だったのではないのか——。こうした仮説をもってこの司書の方に相談すると、親切にも、さっそく奈良女子大学の学術情報センターに連絡をとり、「小林信」の奈良女子高等師範学校の卒業前後の消息についての確認作業にあたられました。こうして、「小林信」が当時、富本家に在住し、その後上京し、「桑野信子」となっていたことが判明したのでした。これは、研究者としての私に、大きないのちを吹き込むものでした。

ところがちょうど三年前、その方は別の図書館に移られたらしく、「小林信」同様に、私の視線から突然にも姿を消してしまわれたのでした。十分なお礼の気持ちをお伝えすることもなく、いたずらに時だけが過ぎてゆきました。その女性が、いま私の目の前に立っていらっしゃるのです。このとき、驚きや感動をはるかに超えた、無の時空が一瞬私に与えられたのでした。

桑野信子さん、そして図書館司書のこの女性——この日、偶然にも同時に、この間会いたいと思っていた人に巡り会えたのでした。（二月）

九. 新聞贈与

毎日通う瑠璃温泉の宿泊施設が廃業になって以来、受付に備えられていた新聞を読む機会を、私は失いました。さらに加えて、それまでもその傾向はあったのですが、昨年末の父親の死以来、テレビにも興味を失い、全く見なくなりました。唯一見るのは、瑠璃温泉のサウナに備え付けられているテレビです。

毎日、開館と同時に、私を含む常連客三人がサウナに入り、テレビのワイドショーを見ながら、日々の出来事を話題に、会話に花を咲かせます。そのなかで、情報音痴であり、情報難民である私が、もっぱら聞き役になります。そうした私の境遇を不憫に思ったひとりが、昨日、自宅で読んだ一週間分の熊日（地元の熊本日日新聞）をもってきてくれました。帰って読んでみると、確かに世の中は動いていました。世の動きが、身近な出来事なのか、それとも遠い他人事なのか、いまの私は、その距離感を計りかねているところです。（三月）

一〇. 母親の入退院から施設入居へ

昨年末に父親が亡くなり、四十九日が終わってしばらくすると、母親（九四歳）がめまいで転倒し、今後の再発を防止する観点から、その日（三月八日）のうちに急きょ入院。とくに外傷はなく、投薬とリハビリによる加療開始。めまいそれ自体は治まったものの、足の衰えを回復させるのには限界があり、したがって、自由な自力歩行が困難な状態にあることに変わりはなく、主治医からは、自宅での独り暮らしは危険なため、施設（サービス付き高齢

者向け賃貸住居）への入居の助言を受ける。こうして、自宅生活から施設生活への移行を決断するに至りました。

およそ一箇月間の入院期間中は、コロナ感染症の拡大期にあたり、母親との面会はできませんでした。しかしその間、施設入居に向けた準備に奔走する日々が続きました。入居するサービス付き高齢者向け賃貸住居は、この病院と同じ医療法人が経営する施設です。まず見学をし、説明を受け、契約の運びとなりました。その後ただちに、引っ越しの準備に取りかかり、必要な新たな生活用品の購入もすませ、何とか四月五日の退院にあわせて、無事入居が完了しました。

入居すると、今度はケアマネージャーとの打ち合わせが待っており、さっそく室内に、ベッドから立ち上がるための手すり、そしてそこからトイレまで伝い歩きするための手すりを設置。同時に、車いすと歩行器も新たに搬入。そのあと、訪問リハビリ、訪問介護、訪問看護に関しての打ち合わせと続きました。

現在、訪問リハビリは、週に二回（一回四〇分）主として歩行訓練に、訪問介護は、週に二回（一回一時間半）主として入浴介助に、そして訪問看護は、週一回三〇分の健康管理にあてられています。

私は週に二回、阿蘇の山奥の住まいからこの熊本市内の施設に車で通い、車いすに乗せての散歩、食料品の買い出し、ポータブル・トイレの洗浄、床の掃除機掛け、そして、関係者との打ち合わせと情報共有を行ないます。食事は、自宅生活のときからほとんど受け付けず、この施設では昼食のみの提供を依頼。そこで、母親が好む食料品の買い物は欠かせない日課になっています。また、母親は以前に心筋梗塞を患ったことがあり、そのこともあっていまは、室内設置の酸素濃縮装置に頼る生活をしていますし、散歩や浴室へ移動する際は、携帯用酸素ボンベを装着した車いすを使っています。月に一度の外来受診も、私が車いすを押して病院へ連れていきます。

こうした生活がはじまって三週間が過ぎました。（四月）

一一．息子家族の一時帰国

息子の家族が仕事の関係でシンガポールに赴任したのは、二〇一九年の秋のことでした。この間コロナ感染症の国際的な広がりにより出入国に際して厳しい制限が課せられ、年に一度の一時帰国ができないまま、およそ二年半が経過し、やっとこのたび実現することになりました。

同じ理由から、息子たちは、昨年末の祖父の死去に際してお葬式に参加することができませんでした。そこで、この滞在中に、納骨堂がある蓮政寺にて納骨の儀式を行なうことにし、祖父との別れの場を設けました。また、入居した祖母の施設へも連れていきました。久しぶりの対面でした。

息子の上の子どもは、この日本滞在中に四歳の誕生日を迎え、下の子は、シンガポール生まれですので、はじめて日本の地を踏むことになります。神戸から私の娘も駆けつけてくれました。この山荘は、息子と娘がまだ小さいころ、毎年学校の休みごとにその季節を過ごした、思い出の住み家です。こうして、久しぶりの一家そろっての夕食を、この山荘で囲むことができました。（四月）

一二. 久しぶりの会食

南郷谷に住む高校の同窓生数名が集まって、久しぶりの会食を楽しみました。コロナ感染症の影響を受けて、この数年、こうした会合は、すべて先延ばしになっていました。ところが、少し下火になり、やっと実現した次第です。言い出しっぺの自宅の庭の東屋を使わせてもらい、お弁当をとっての昼食会でした。

私は、心筋梗塞を発症して以来、ほぼ毎日、三食すべてを自分でつくっています。そのようなわけで、お弁当を買って食べたり、コンビニの食品ですませたりすることはありませんでした。そうした食生活の人間にとって、この日の食事会は、驚きの連続でした。

驚きは、まず、出されたお弁当から始まりました。隣村の人気の専門店からテイクアウトされたものでした。中身は、エビフライとヒレカツで、大量のキャベツが添えられていました。食べてみると、本当においしく、明らかに日々の自作を超える、腕の立つ専門職人の作品でした。完全に脱帽、自信喪失です。

コンビニの味噌汁も用意されていました。驚いたのは、専用の容器ごとに、味噌と具が詰め合わされていたことです。私は、インスタントの味噌汁というのは、味噌と具だけであって、容器（味噌汁のお茶碗）は自分で用意するものとばかり思っていました。そうでは、ありませんでした。完全なオールインワンの味噌汁でした。しかも、味も満点。

最後に、ノンアルコールの飲み物にびっくりしました。私は、ノンアルコールといえばビールとばかり思い込んでいました。ところがこの日用意されていたのは、それに加えて、ノンアルコールのワインでした。飲んでみると、決してワインジュースではありません。本物と変わらない、何ともいいワイン風味です。うなっていました。

私にとってのこの日の昼下がり、久しぶりの会話の盛り上がりだけでなく、最近の食事情の新発見が伴う、まさに感動のひとつときでした。（五月）

一三. 索引づくり

著作集 6 『ウィリアム・モリスの家族史』の本文脱稿を直前に控えた、昨年の一二月一三日に、父親が他界しました。その後、四九日までの一連の儀式を終えたところで、母親が自宅にて転倒し、近くのかかりつけの病院に入院。主治医の勧めもあり、退院後は施設への入居を検討。幸運にも施設は見つかり、退院と同時に入居し、四月のはじめから母親の新しい生活がはじまりました。

いま振り返ってメモを見ても、一月九日に本文を擱筆しています。しかし、その以降、索引の作成が遅々として進まず、難航している様子がわかります。

これまでに完成した各巻にあっても、索引づくりは、本文の完成度を高めるうえでの必須の重要な作業として、私は位置づけてきました。今回の『ウィリアム・モリスの家族史』は、本文の分量としては、四〇〇字詰め原稿用紙に換算して、約一、四〇〇枚あります。その分量の多さに加えて、索引にとるべき人名や事項は、ほとんどが英語表記で、それを日本語に訳し換えたものです。そのなかには、書名や作品名も多く含まれます。当然ながら、索引は、日本語と英語の両言語併記となります。本文を読み返してみますと、執筆時には慎重を期し

たつもりですが、それでも、不統一が散見されます。どちらに統一すべきか、もともとの出典や資料にあたり、辞書や辞典を参照することもあります。ひとつの固有名詞の日本語訳の確定に数時間、場合によっては、一日を費やすことさえありました。こうしてやっと、六月四日に完成しました。取り組めた日を数えてみると、断続的ではありますが、総計でおよそ六〇日を要していました。

私は、日本語で書かれたものであろうと、英語で書かれたものであろうと、研究書や学術書を手に取った場合、最初に索引を見ることが多くあります。索引全体を眺めてゆきますと、そこには山々の連なりが見えてきます。そして、その頂から裾野までが視野に入ってきます。その絵が、稠密であればあるほど、本文内容も緻密であることが、経験からわかっており、それが私の読書上の習性となっているのです。

一方で私は、とても散漫な作業をする、注意力を欠いた人間であることを自覚しています。スペルミス犯すのはしばしばですが、その事項は「285」頁であるのにもかかわらず、平気でそれを「385」と書いたりします。そうした自分の情けない性格を知っているだけに、冷静に一つひとつを着実に作業する人をとてもうらやましく思います。

果たして今回の索引は、どれくらいの出来上がりになっているのでしょうか。最善を尽くしたという達成感はあるのですが、しかしながら、おそらくいまだ目に見えない単純なミスが隠されていることは、十分に想像されるところです。あのウィリアム・モリスも、スペルミスの名手でした。そう思いながら自らを慰めつつ、これをもって著作集6『ウィリアム・モリスの家族史』の完成としたいと思います。

一応この内容でウェブサイト「中山修一著作集」へアップロードします。もしミスが見つかれば、今後の更新のとき、そのつど修正させていただくつもりです。それにしても、落ち着かない日々の環境のなか、やっと索引づくりがゴールしました。いま独り喜びに浸っています。（六月）

一四．母親の再入院

退院後、施設へ入所してしばらくすると、胸痛にしばしば見舞われるようになりました。もともと母親は大動脈弁膜症を患っており、こうした症状は、今回はじめて発生したわけではありません。数週間前にも緊急受診をしていました。

昨日、四週間ごとの定期診察のために外来受診をしました。すると、待合室で胸痛が起こり、点滴による緊急対応をしていただき、その間に幾つかの検査を受けました。その結果を踏まえて、主治医からこう告げられました。「入院が適当と思われます。無事に回復し退院できることを期待しているところですが、このままここで看取りという可能性もあります」。

一〇日後に、母親の九五回目の誕生日が来ます。（六月）

一五．自然の劣化

いつも四月の終わりに大きく咲き乱れる庭のシャクナゲが、あまり咲きませんでした。また、ヤマアジサイも同じで、今年は、ほとんど咲こうとする気配が見受けられません。一方、

鳥の声も、例年に比べて弱々しく貧相です。そういえば、数年前から、外灯に呼び寄せられて集まってくる夏の虫も、激減しています。

人に感動や安らぎを与える「自然」が大きく変わろうとしているように感じられます。先日、自宅から下に降りる牧野道で土砂崩れがあり、町役場に頼んで撤去してもらいました。すでに季節は梅雨進行中です。人に災いや恐怖を与える「自然」へと、変わり果てぬことをいま祈っています。（六月）

一六．気象病

気象病を自覚するようになったのは、定年後、山での生活をするようになってからのことでした。低気圧が近づいてきたり、雨雲に覆われたりすると、軽い頭痛が起こります。「そろそろ雨になるんだな」と思うことで、やり過ごせることがほとんどで、頭痛薬を飲むほどの痛みに襲われるようなことはあまりありませんでした。

ところが、数日前に体験した気象病は、それまでとは全く異なっていました。最初の症状は、倦怠感でした。全身に疲労感が重くのしかかり、頭痛がしてきました。南の高気圧が、例年になく梅雨前線を北に押し上げたようです。雨も激しさを増してきました。そして、次の日には、熱が三八度八分まで上がり、歩くことも困難になりました。こうした状態が、何と二日も続きました。解熱剤を飲めば、一時的に下がりますが、半日ともたず、また次の一錠。頭は冷やすも、全身から汗が吹き出し、頻繁に肌着の取り換え。実に苦しい二日間に及ぶ激闘でした。

天気も回復し、それから三日後、梅雨明けの宣言がありました。六月中の梅雨明けは珍しく、しかも、三週間にも満たない、極めて短いものでした。この間、関東地方では、四〇度を超える異例の猛暑だったようです。

今年の梅雨期の極端な気象の変動は、私の体に大きな影響を与えました。こうした影響は、山に住む鳥や虫にも及んでいるにちがいありません。前の文で「自然の劣化」について書きましたが、それは、具体的にいえば、近年の「気象の劣化」に由来するものなのかもしれません。自分の気象病から、いまそう考えるようになりました。（六月）

一七．こむら返り

気象病について書きましたので、もうひとつの持病であるこむら返りについても書いておきます。

はじめて症状が出たのは、もう十数年前のことだったと記憶していますが、そのときは、何といってもはじめての経験で、その痛みはどう耐えるのか、必死にもがき苦しんだことを覚えています。それからしばらくのあいだは、その症状に見舞われることはなく、ほとんど忘れかけていたのですが、数年前から、日常的に発症するようになりました。「日常的」といっても、数日間隔で定期的に起こるのではなく、一、二箇月くらい空くこともあれば、二日続けて起こることもあります。

私の場合、こむら返りが起きるのは、いつも就寝中で、寝返りを打ったときです。しかも、「こむら（ふくらはぎ）」だけとは限らず、足先の甲の部分がいれんする場合もあります。

痛みを感じても、睡眠の深さが勝り、結果的にそのままやり過ごしてしまうこともあります。多くの場合、その激痛に耐えかねて、すぐさま薬に飛びつくことになります。私が常用しているのは「芍薬甘草湯」という漢方です。三〇分もしないうちに和らぎます。なぜ、短時間である激痛が退散するのか、不思議に思うくらいです。

しかし、先日の痛みは、いままでのそれとは全く異なり、左のふくらはぎが、大きな音を立てて爆発したかのようなあり様でした。いつもの薬を飲むと、ひとまず痛みは治まりました。しかし、翌朝目を覚ますと、例のふくらはぎの部分に違和感が残っており、歩行の際に鈍い痛みを感じました。自然とそこに手がゆき、マッサージをしていました。次に、つま先立ちをしたり、前傾の状態でテーブルの端を握り、片方ごとに足のストレッチをしたりしていました。数日をかけて、幾分改善しましたが、まだ違和感は少し残っており、その部分を自然とかばおうとする自分に気づきます。

こむら返りとは別に、この数年前から、もの忘れや勘違いが多くなりました。初期の認知症だと思います。この前は、スーパーで一円と百円を取り違えました。冷蔵庫に入れたと思っていたものが、電子レンジのなかから出てきました。先ほどまでスムーズに口から出ていた人や場所の名前が、急に出てこないこともありました。

体や脳が下り坂に向かっていることは確かです。残念な思いがします。しかし、食い止めることはできません。ただ、ウォーキングをし、温泉に入り、食事に気をつけ、良質な睡眠をとるように心がけるしか方法がありません。ついつい、寡黙になる日々です。（七月）

一八．感染の再拡大と面会禁止

七月に入って、コロナ感染症の再拡大がニュースで伝えられるようになりました。そして、熊本県の一日の感染者数も、ついにこれまでの最高の一、五八八人に達してしまいました。

「第七波」の到来かもしれません。これに合わせるように、私の住む町の役場では、広報紙によりますと、四回目のワクチン接種が計画されているようです。

そうしたなか、母親が入院する熊本市内の病院から電話がありました。面会が全面禁止になったという知らせでした。これまで、事前の予約により、平日の午後二時から五時までのあいだ、家族一人につき一五分の面会が許されていたのですが、それができなくなったのです。したがって、すでに入れていた次回の予約も、自動的にキャンセルになってしまいました。ただ、必要なものは、病院の入口受付で病棟の看護師さんと呼んでもらい手渡すことによって、本人に届きます。これまでの経験を振り返りますと、昨年以來、この病院では、感染拡大の山と谷に合わせて面会禁止と予約面会とが繰り返されてきています。次に母親に会えるのはいつになるのか、残念ながら、いまのところ見通せない状況です。（七月）

一九．息子の感染

私の息子の家族は、仕事の関係でいまシンガポールに駐在していますが、息子が新型コロナウイルスに感染したとの連絡が入りました。家庭では、いろいろと対応を考え、実行しているようですが、それでも老婆心ながら、完全な隔離と徹底したアルコール消毒の重要性の観点に立って、次のような対処策を列挙して返信しました。

（一）まだでしたら、部屋中の家具、おもちゃ、ドアノブなど、息子が触ったところや飛沫が飛んでいる可能性のあるところを完全にアルコール消毒してみてください。ウイルスは、数日生存するようです。

（二）息子の生活する部屋をひとつに決めて、完全に隔離してください。食事と飲み物は、ドア越しに渡し、決して直接話をしたり、息子から受け取るものに直接触れたりしないようにしてください。話は、メールか携帯で行なうようにしてください。

（三）息子がトイレに行くときは、家族は離れ、トイレ使用後は、便座、ドアノブ等、消毒してください。お風呂は、家族の最後に入り、使用後は、完全消毒を心がけてください。

（四）息子が、隔離の部屋から移動して、トイレやお風呂を使うときは、マスク着用。できれば二重。その際、家族の者を近づけないようにしてください。通ったあとは、周囲の家具など、徹底して消毒をしてください。

（五）家族は、一日に数回、手の消毒と検温をしてください。

これからの一週間か一〇日間、息子の家族にとっては大変な日々が続くかと思いますが、家庭内感染を防ぐとともに、いまの軽微な症状から悪化することなく自力回復に向かうことを強く願っているところです。

さて、それから八日後——家族から連絡があり、シンガポールのルールにより、隔離終了の扱いになったとのことでした。（七月）

二〇．コロナウイルスへの感染の可能性

いまから六年前の二〇一六（平成二八）年五月に、私は心筋梗塞に見舞われ、ステントを一個、冠動脈に留置しました。それ以降、四週間ごとに、近所のかかりつけの病院で診察を受け、薬を処方してもらっています。

前回病院にいったとき、その少し前に私を襲った「気象病」のことを先生にお話しました。すると先生は、コロナウイルスに感染していた可能性を示唆されました。私は、発熱と倦怠感があったものの、せきやのどの痛みはなく、食欲にも味覚にも変わりがなかったことを告げると、この感染症は同じウイルスが引き起こすにもかかわらず、症状は人によって千差万別とのことでした。続けて私は、もしあのときの「気象病」がコロナウイルスによる症状だったとすれば、すでに感染によって抗体が体内にできており、もはや感染することはありませんよね、と尋ねてみました。それに対する先生の反応は、「いや、そのようなことはありません。一度感染しても、二度、三度、感染する人もいます」というものでした。病院から

自宅へ帰る途中、車を運転しながら、ひょっとしたら、あれがコロナウイルスの症状だったのかな、と神妙な気持ちになっていました。

それから数日後、町役場で四回目のワクチン接種を受けました。その日対応されていた医師と看護師さんが、いつものかかりつけの病院から派遣された方々で、和気あいあいのなかで、無事接種が完了しました。しかし、二度、三度、感染するのであれば安心できず、先日の病院の帰り同様に、再び神妙な気持ちになってしまいました。（八月）

二一．修復された熊本城天守閣

二〇一六（平成二八）年四月に発生した熊本地震で、熊本城は、建物が倒壊し石垣が崩落するなど大きな被害を受けました。復旧作業が続くなか、二〇一九（令和一）年から特別公開がスタートしました。

先日、神戸に住む娘が仕事の関係で熊本に来ました。仕事の前日、ふたりで復興の様子を見るため熊本城へ足を運びました。至る所で生々しい傷跡がいまだに残されていましたが、天守閣はほぼ修復を終え、内部の展示品も閲覧することができました。

熊本市民の多くにとってなじみの場所であり、誇りとする名所が、この熊本城なのです。私自身は、地震から六年が立ったこの日はじめて、復旧した天守閣の前に立ったわけですが、その姿の美しさは、過去のその時々思い出を蘇らせました。子どものころ親に連れられてしばしば花見に行きました。あるときは、写生大会でこのお城の雄姿を描きました。またあるときは、当時城内に設けられていたプールで夏を楽しみました。復興にあたりどれだけ多くの方が尽力されたか、それを思うと自然と頭が下がります。完全にすべてがもとの状態になるまでにはまだ時間がかかるようです。計画どおりに進むことを祈りたいと思います。

その日の宿泊に選んだのは、客室から熊本城が望めるホテルでした。デパートの地下でお惣菜を買い込み、お城を見ながら食べていると、外は次第に暗くなり、ライトアップがはじまりました。紫紺の天空のなかにくっきりとその誇らしげな姿が浮き出てきました。昼間の見学と相まって、娘とともに熊本のシンボルと向き合った思い出に残る午後のひとときでした。（八月）

二二．著作集6『ウィリアム・モリスの家族史』の公開

ウェブサイト「中山修一著作集」の第六巻として『ウィリアム・モリスの家族史』をアップロードしました。

振り返りますと、私がデザインの研究に関心をもちはじめた学生時代には、体系化された「デザイン史」と呼ばれるような授業科目はありませんでした。それでも、それに関連する何点かの単行研究は存在していました。当時私は、ハーバート・リード『インダストリアル・デザイン』（勝見勝・前田泰次訳、みすず書房、一九五七年）、ニコラウス・ペヴスナー『モダン・デザインの展開』（白石博三訳、みすず書房、一九五七年）、『現代デザイン理論のエッセンス』（勝見勝監修、ペリかん社、一九六六年）、利光功『バウハウス』（美術出版社、一九七〇年）、小野二郎『ウィリアム・モリス』（中公新書、一九七三年）、そして阿部公正『デザイン思考』（美術出版社、一九七八年）などをむさぼるようにして読みました。そし

て、どの書物においても共通して取り上げられていたのが、ウィリアム・モリスの思想と実践についてだったのです。そこで私の関心も、躊躇なく、一九世紀の英国が生んだデザイナーにして社会主義者、そして詩人でもあったその人物へと注がれてゆきました。

しかし、どの本においてもそれは断片的な内容になっていました。なかなかモリスの全体像を手に入れることは困難でした。詩作とデザインと政治活動が彼のなかでどうつながっていたのであろうか。そしてまた、ラファエル前派の著名な画家であるダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの絵画作品にしばしば登場する、妻のジェインは、モリスとのあいだでどのような家庭生活を送ったのだろうか。こうした一種の謎が、自身のなかで解決できなかったのです。

私の研究生生活のなかで、モリスの全生涯を知りたいという欲求が常につきまとっていました。それがやっと、『ウィリアム・モリスの家族史』として完結したのです。優に半世紀の時間が流れていました。時間は要したものの、その間挫折することもなく、何とかここに到達できたことを、研究者としてとてもうれしく思います。幸せ者であることを実感する日々です。支えてくださった多くの方々に感謝します。（九月）

二三．強風被害と保険金請求

七月半ば過ぎの出来事です。大雨と強風の発生予報に伴い、倒木によるガラス窓の破損を防ぐために、いつものように雨戸を閉めました。二日後風雨も収まり、雨戸を開けてみると、ウッドデッキ近くの木の下が折れ、ウッドデッキの内部に倒れ込んでいる様子が見て取れました。一瞬の晴れ間を利用して外に出てみると、折れた幹と枝が、設置されていたエアコンの室外機と家屋の壁面の一部に覆いかぶさっていました。

被害状況を確認するために、また、引き続き悪天候による二次被害を回避するために、まず倒木を安全な場所に移動しました。覆いかぶさっていた木の幹や枝とともに室外機は定位置からずれた状態で移動し、配管が外れた状態になっていました。強い風雨に打たれてそうなったものと思われます。おそらく、冷媒ガスはすべて漏れ出て、室外機自体の機能にも損傷が及んでいるものと判断されました。

さっそく保険会社に連絡をとると、保険金請求のための書類一式が郵送されてきました。必要とされる書類は、現場状況を示す写真、被害機種の購入時の明細書、修理明細書（あるいは全損証明書）、同等機種の購入見積書などでした。写真は自分で撮り、被害機種の購入時の明細書は、幸いにも手もとに残っていました。一番厄介だったのは、修理明細書（あるいは全損証明書）の作成でした。メーカーの担当者に来ていただいて、破損状況を確認してもらいました。在庫部品がないこともあり、全損と判断され、被害内容を大阪の本部に連絡して、証明書を作成してもらうことになりました。こうして、しばらくしてやっと必要書類がすべて整い、保険会社に郵送することができました。

それから数日後、保険会社から連絡がありました。内容は、同等機種の購入見積書から、規定により一万円を差し引いた金額を、およそ一週間後に振り込むというものでした。それを受けて、さっそくその機種の購入のために、見積書を作成してもらった店舗に行きました。ほぼ一週間後に店舗に届き、それから取り付けをするとのことでした。

こちらは、九月半ばごろから涼しくなり、冬へ向けての支度がはじまります。ちょうどそ

れに間に合ったことに安堵しています。（九月）

二四．母親の再々度の入退院

めまいの症状により入院し、退院と同時に施設に入居したのは、四月初旬のことでした。それからおよそ二箇月後、過去に患った大動脈弁膜症（あるいは心筋梗塞）におそらく起因していると思われる胸痛が母親をしばしば襲うようになりました。こうして六月に再入院し、主治医からは、この入院が最期の可能性になることを告げられながらも、何とか無事に退院できたのは八月のはじめのことでした。

こうして再び施設での生活がはじまりました。ところが、それから一〇日後、今度は転倒により左側の肩と腰を打って痛みが生じ、かかりつけの同じ病院に入院しました。幸い骨折はなく、強い打撲による痛みでした。入院中はコロナ感染症拡大の影響を受けて面会ができず、約四週間、一度も顔を合せることなく、今日退院の日を迎えました。

前回もそうでしたが、介護タクシーではなく、車いすに乗せて施設まで帰りました。車いすにしたのは、病院から施設までの距離が短いこともありますが、下界の様子を少しでも母親に味わってもらうためでした。暑い暑いといいながらも、施設の建物が見えてくると、「また同じ施設の同じ部屋に入れるのかい」と聞きます。どうやら母親は、入院中も部屋の代金を払っていることを知らず（あるいは忘れており）、再入居はできないものと勘違いしているようです。部屋に入ると、入院前と同じ家具が並んでいることに驚き、少し安心したのか、そのままベッドに入り、寝てしまいました。

一方私は、ケアマネジャーと今後の訪問介護や訪問リハビリなどの打ち合わせをし、施設の責任者の方とは、食事のことやお薬の管理になどについて確認をし、それを済ませると、残してきた入院中の生活用品を受け取りに、再び病院へ行きました。

こうして、四月の施設入居後の二回目の入院が終わりました。今後も、施設生活と入院とを繰り返すのかもしれませんが。（九月）

二五．白い彼岸花

私の山荘は少し標高が高く、家の周囲では一箇月ほど早く咲くのですが、下界の南郷谷の平地部では、至る所でお彼岸のこの時期に、彼岸花が一斉に開花します。色は、すべて赤です。ところが、毎日通う瑠璃温泉の花壇に、白い彼岸花が咲いているのが目に止まりました。ちょうどそのとき、顔見知りの係の人が通りすがり、少し会話を楽しみました。

彼の話によると、すでに閉館している宿泊棟の庭に咲いていたものを、球根として移植したとのことでした。そして続けて、彼岸花は毒をもっていて、もぐら除けになり、かつては土葬だったので、墓地によく植えられていたと、教えてくれました。その名残でしょうか、確かにこの地域のお墓の周りやそれに続くあぜ道には、例年この時期、彼岸花が群れるように咲きます。しかし、それは、どれも赤い彼岸花なのです。なぜ、白の彼岸花がここに開花しているのでしょうか。その問いには、不明という回答でした。

かつて母親が、住職の話の聞き伝えとして、彼岸花は仏壇の花としては飾らない方がいいということをいっていたことを思い出しました。彼岸花には毒があるという言い伝えによ

るものかもしれません。しかし、白い（どちらかといえばプラチナ色の）彼岸花を眺めていると、そうとも思えない、何か気品に満ちた優美さのようなものが伝わってきました。はじめて見る、不思議な数株の花との偶然の出会いでした。（九月）

二六．台風一四号の接近

台風一四号が九州に接近しています。ニュースによると、数十年に一度経験するような、甚大な被害をもたらしかねない大型で強力な台風のようなようです。こうした予報を受けて、私が毎日通う瑠璃温泉も、昨日から二日間の臨時閉館になっています。

昨日の午後、次第に雨が強まり、風も出てきました。すべての部屋の雨戸を閉め、食堂の雨戸だけ少し開けて、いつでも外の様子が見渡せるようにしました。数日間閉じ込められても対応できるように、二食分のチャーハンをつくり、先日つくって冷凍していたお好み焼きも、冷凍庫から取り出して自然解凍をはじめました。

台風で一番怖いのは停電です。これまでも強い雨が降ると、しばしば自宅へ上がる牧野道沿いの木が倒れ、停電の原因となっていました。その場合は、九州電力に電話をして、修復作業の依頼をします。停電は、地下水を汲み上げるポンプの作動を止め、それによって給水が遮断されます。そのことを見越して、いつもお風呂には水を貯めています。主としてトイレ用に使います。飲み水は、五リットル入りのペットボトル六本に、湧水館トンネルの自然水を入れて、日常的に準備をしています。

六年前の熊本地震を教訓に、それ以来、停電が長引いた場合に備えて、プロパンガスを燃料とする発電機を用意しています。いざとなれば、この発電機を使って室内に電気を取り込むことができます。まだ一度も使っていませんが、テレビ、炊飯器、パソコン、携帯の充電くらいであれば、一度に使用しても大丈夫です。プロパンガスは、いつも定期的に、四本のボンベに切らすことなく十分に供給してもらっていますので、発電機だけではなく、通常どおり、調理用のコンロの燃料としても活躍することになります。

昨日の深夜から今朝にかけて、台風は熊本地方を通過していきました。寝たり、目が覚めたりの繰り返しでした。この間、線状降水帯も発生したようですが、停電もなく、無事夜明けを迎えようとしています。聞こえる雨音も、次第に落ち着いてきました。いまこの一文を書いたら、雨戸を開け、外の様子を確認したいと思います。おそらく庭一面に葉っぱや小枝が散乱しているにちがいありません。最も心配なのは、倒木や土砂崩れが牧野道で発生していないかということです。まだ吹き返しが続くそうなので、この確認は明日になります。自分の手に負えない場合は、役場に連絡して、撤去の依頼をしなければなりません。それにしましても、私が経験した一晩に限って言えば、今回の台風は、予想されていた脅威ほどの大きなものではなく、いま胸をなでおろしているところです。（九月）

二七．歯が欠ける

冷たい水などを飲むと、上の前から右へ二番目の歯がしみて、痛みを感じるようになりました。もともと歯医者に行くのが嫌いで、今回もなかなかその気になりませんでした。だんだん生活に支障が出てきて、とうとう歯科医院を訪ねました。しかし、予約なしの飛び込

みだったために、四〇分くらい待ってもらうことになることが告げられました。そのとき、「しめた」と内心思い、直近で空いていた数日後を予約し、取り急ぎ帰宅しました。危機から逃げ出したといった感じでした。

その日の夕方のことです。食事のあと、いつものように歯を磨いていました。すると、何かちょっとした違和感を覚えました。口のなかのものをすべて吐き出すと、そのなかに歯のかけらが含まれています。明らかにその歯は、例の歯の一部です。小さなビニールの袋に入れて、予約日に持って行くことにしました。これ以降、痛みから解放されて、ある意味で、もとの快適な生活が復活しました。「してやったり」といった感じでした。

その日が来ました。神妙な面持ちで案内に従い、診療用のイスに座りました。私からこの間の事情を説明し、欠けた歯を差し出しました。すると先生は、口のなかを診ながら、「それでは、レントゲンを撮ってみましょう」といって、別の部屋に移されました。そのあと、再び診療用のイスにもどり、レントゲンの結果の説明がはじまりました。

説明の概要は、「欠けた歯は、これまでしみていた歯の一部に間違いなく、虫歯が原因だったと思われます。残った歯を見ると、もはや神経がなくなっており、そのために、痛みが消えたのでしょう。今後残された歯に雑菌が繁殖する可能性がありますので、治療をお勧めします」というものでした。こうして、アニメによる今後の治療方法の説明がはじまりました。その映像を見ていると、次第に、痛みや恐ろしさが連想されてゆき、意識が遠のくような感じに襲われました。前に「親知らず」を抜いたときの感覚が蘇ったものと思われます。結局、この怖さに自分は耐えることはできないと思い、勧められる「差し歯」の提案も、それを理由にお断わりしました。それを聞いて、苦笑いをしながら先生は、「このままでは、どうも見栄えが……」と、おっしゃるので、「もうそれほど若くはありませんので……」と、必死に答えてしまいました。やっとのこと、「今後また痛みを感じるようになったときは、来院しますので、そのときは、どうかよろしくお願いします」と伝えて、この日は帰宅しました。恐怖と安堵の一日でした。（九月）

二八．ヘビ出現

郵便受けを開けたら、何かが動きました。よく見ると、ヘビがいました。竹の杖が近くにありましたので、それを使って、外に出よう誘導しました。体長五〇センチくらいのヘビで、柱をつたいながら、下の地面へと逃げてゆきました。

ヘビを見るのは、今年になって三回目です。一回目は春先で、外壁沿いの狭い通路の草むらのなかを移動していました。二回目に見たのは、外の水道のところでした。赤い色をした小さなヘビで、水を飲みにきていたのかもしれません。

これまで、たまに数年に一度くらい、ウッドデッキや庭でヘビの姿を見たり、ウッドデッキや外壁で抜け殻に遭遇したりすることがありました。しかし、今年のように立て続けに出くわすことは珍しく、ヘビにとっての環境に何か変化が起きているののかもしれません。

ずいぶん前の話になりますが、庭の木に鳥の巣箱を掛けたことがありました。ところが、そのなかにヘビが侵入し、鳥や卵を襲いました。それ以来、巣箱を取り払いました。それから数年が立って、今度は、郵便受けにせっせと土や苔を運び、鳥が巣づくりをはじめました。

しかし、ヘビが侵入することを恐れて、せつかく運び入れた土や苔でしたが、すべて取り除いたことがありました。

今回目にしたのは、その郵便受けです。ヘビは鳥の巣と勘違いして侵入したのかもしれませんが。しかし、季節は秋で、鳥の産卵時期ではありません。冬ごもりを前に、餌探しをしていたのかもしれませんが。それにしても、人工の郵便受けにまでその範囲を広げているを見ると、自然界に探せる餌が減少している可能性もあります。

ヘビを見るのは、やはり怖く、見た瞬間は一步身を引いてしまいます。それでも、ヘビにとって生きづらい環境があるのであれば、それは人間の行動の結果なのかもしれず、複雑な気持ちになります。この近くでよく目にするのは、シカ、イノシシ、サル、タヌキといった動物たちです。加えて、日常的に人間の目に止まらない動物もたくさんこの森のなかに生息していると思われます。彼らは、自分たちの生活環境の変化をどう思っているのでしょうか。そして、もし人間の存在がわかるのであれば、彼らの目には人間はどう映っているのでしょうか。仮にその手段があるとして、そのことを知った人間は、どう変わるのでしょうか。今回のヘビの出現から、こんなことを考えてみました。（一〇月）

二九. ヘビを巡るサウナ談義

私が通う瑠璃温泉は、一〇時三〇分が開館時間ですが、実際にはその一〇分くらい前に開けてくれます。それは、時間前に常連客が集まってくるからです。とくに冬は寒いので、開門に気を遣ってくれます。ほぼ毎日来る男性の常連客は、私を入れて三名です。三人とも、まずサウナに入ります。ここで、最近の世の中の話題や個人的な出来事を誰とはなしに口にし、そこから会話が盛り上がります。先日私は、その前の日のヘビ出現の一件を持ち出しました。

私「昨日、郵便受けを開けたらヘビが入っていました。怖くて一步身を引いたのですが、何とか近くにあった竹の棒で誘導して、外に出しました。ヘビを見るのは、今年に入って三回目、今年は多いような気がします」。

常連 B さん「おいどんなんか、ヘビ見たら、すぐに殺そうとするんだけどな。ばってん、ヘビは金運ば運びます。昔、若かったころ、ヘビを見たとき、思わぬ金が入ってきたことがありました」。

常連 A さん「夢に出てきただけでも、お金が寄ってくといえます。ヘビより竜です。竜の夢を見れば、間違いなく、大金が懐に入ってきます」。

常連 B さん「うちのおふくろなんか、夢にヘビが出てきた日なんか、誰にもいわずに、パチンコに行きますよ。黙って行くのがミソで、口に出したら、運が尽きますけんね」。

私「それで、そのときのお母さんのパチンコは、どうでした」。

常連 B さん「儲けて帰ってきました。あっはっは」。

常連 A さん「先日、役場から敬老の日のお祝い金が振り込まれていたでしょう」。

私「そう、そう。いつもは二千元ですが、今年は、町の経済活性化のために八千元が上乘せられて、一万円が入金されていました」。

常連 A さん「そうでしょう。これもヘビのおかげですよ。これからしばらくは、じゃんじゃんお金が入ってきますよ」。

私「本当ですか。それだといいいんですが」。

常連Bさん「へびは、人に嫌われますが、本当は人の味方ですたい。この阿蘇地区の幾つかの神社でへびを飼っていて、参拝客に見せとります」。

それを聞いて、境内にへびを飼っている神社のことを思い出しました。また、脱皮したへびの抜け殻を財布に入れておくとお金が貯まるという言い伝えも、確かに私の記憶に残っていました。

そういえば、敬老の日のお祝い金に加えて、強風で破損したエアコンの保険金が、最近入金されたばかりでした。これからも、お金が近づいてきてくれるのでしょうか。そのような、取り留めもない思いを楽しみながら、今日も、サウナ談義に興じたのでした。（一〇月）

三〇．南阿蘇村の谷人たちの美術館

外輪山に囲まれた世界に誇るべき広大なカルデラ地帯。その中央部分に東西に連なる阿蘇五岳。これによって分断された北側のカルデラが阿蘇谷、一方、南側のカルデラが南郷谷。南郷谷は、その大部分を南阿蘇村が占め、その東の一部が、私の住む高森町となっています。南阿蘇村は、それまで存在していた長陽、白水、久木野の三つの村が合併して、二〇〇五（平成一七）年に誕生した新しい村です。阿蘇の五岳を一望できる風光明媚なこの村には、芸術を愛する移住者も多く、村は、このときの三村合併を機に「谷人たちの美術館」を発足させました。これにより、秋の一定期間、南阿蘇村に点在する美術家や工芸家の工房やギャラリーが開放され、誰もが自由に訪問でき、こうして、つくり手と村内外の人たちとの交流の場が生み出されたのでした。

手もとに残るパンフレットを見ますと、二〇一九（令和一）年の一〇月一日から二週間の会期のもとに開催された「谷人たちの美術館」には、二九もの工房が参加していました。内容は、絵画、陶器、ガラス工芸、人形工芸、写真、鉄道模型、古布小物、草木染や皮工芸と、実に多彩です。しかし、その後の二年間、コロナウイルス感染症の影響で、中止を余儀なくされ、今年（二〇二二年）は、三年ぶりの開催となりました。今年のパンフレットに目を向けますと、残念ながら、参加工房は二〇と、かなり減少し、寂しさを禁じ得ないものとなっていました。

私も、期間中、何人かのアーティストを訪ね、旧交を温めました。一方、今回はじめて訪問し、知り合いになったアーティストもいました。その方は、もともと熊本のご出身で、長くパリに滞在して絵画製作に取り組まれたあと、阿蘇の魅力に引き寄せられ、近年、この地に引っ越してこられたご高齢の女流画家です。阿蘇五岳の頂が眼前に広がる南外輪山のふもとに、その方のご自宅と、それに隣接する「モン・プティ・パレ絵画彫刻館」がありました。「モン・プティ・パレ絵画彫刻館」には、ご自身の絵画作品が並べられ、別室にアトリエがあるとのことでした。展示されていた作品群は、心に映し出された印象概念を柔らかい色彩で明るく構成された抽象絵画で占められていました。他方、その展示棟とご自宅を挟む中庭に、一体の彫像が設置され、敷地全体の周囲は、植樹された緑で心地よく演出され、さながら「私の小さなお城」といった空間のつくりとなっていました。ドリンクをいただきながら、双方の仕事のことを語り合う、秋の午後のひとときでした。（一〇月）

三一. ご褒美か息抜きか

私が通う瑠璃温泉は開館が一〇時三〇分ですので、いつも三〇分ほど前に到着し、開館まで体操とウォーキングをします。駐車場に車を止めてまず向かうのが、すぐ近くの展望台です。南外輪山を一望でき、眼下には運動公園が広がります。そこで一〇分ほど体操をし、体を整えます。小学校のころは、校庭に集まる機会があれば、みんなでラジオ体操をしていました。いまでも体がそれを覚えていて、自然と手足が動いてくれます。また、学生時代はヨット部に属し、そこでも、海に出る前に、受け継がれた独自の体操をしていました。これもいま生かされています。

体操が終わると、運動公園と瑠璃温泉をあわせた、その周りの公道を歩きます。だいたい一周歩くのに一〇分かかりますので、二周歩くのが通例となっています。この三〇分の体操とウォーキングは、これまで休みを入れることなく連続して行なっていたのですが、数箇月前から、少し異変が生じました。途中でコンビニに寄るようになったのです。そこでのお目当ては「チョコモナカジャンボ」です。片隅に用意されているカウンターに座って、外を眺めながら食べることになります。

この時間は、深夜に起きて五時間くらいの執筆活動を終え、そのあと街中に出て、必要に応じて食料品の買い出しをし、銀行や給油や役場などでの立ち寄りの用件も済ませ、温泉入浴前の一日で一番ほっとする時間です。自分へのご褒美と言い聞かせながら、こうして、週に一、二回のコンビニ立ち寄りを楽しむようになりました。

しかし、よく考えてみると、どうもご褒美は口実のようで、実際には、三〇分連続の運動が続かず、生き抜きすることを体が要求しているようにも感じられます。しかも、同じ内容の行動が、もはや三〇分では収まらず、四〇分くらいを要することもあります。こうしたことは、加齢によるものかもしれませんが、やはり手足が弱ってきているらしく、動きに切れがなく、スピード感も減少している感じがします。どうやら体にとって、途中休憩が必要なようです。

カウンター席に座って「チョコモナカジャンボ」を食べながら、パッケージに目を向けると、「販売開始五〇年記念」という文字が飛び込んできました。自分の弱りかけている体を思いやる一方で、「チョコモナカジャンボ」の生命力に感じ入った瞬間でした。（十一月）

三二. 中山修一著作集の「終活」

いま、神戸大学附属図書館の学術成果リポジトリに、ウェブサイトで公開しています中山修一著作集のうち、第一巻から第六巻までと第一〇巻の計七巻が登録され、公開の手続きが完了しました。この著作集は、全一五巻の完結を目指して、現在書き進められており、今回公開される運びとなった完成巻以外は、現在、執筆進行中の未完の状態にあります。

私は、この未完の巻の将来が気にかかり、附属図書館の担当者の方に、以下の三点につきまして、問い合わせをしました。

（一）今後は、ひとつの巻が完成し次第、ご連絡し、今回と同じ手順で公開をお願いしたいのですが、そのように考えておいて問題ないでしょうか。

（二）一五巻全巻が完結するには、順調にいても、もう六年ほどを要します。その間、すでに公開している巻に、変換ミスや用語の不統一などにかかわってミスが見つかり、若干の修正が入る可能性があります。そこでお尋ねいたしますが、最後の巻が完成した段階で、修正を必要とする巻につきまして、新しいPDFに取り換えていただくか、改訂版として新規に公開していただくか、どちらかの対応が可能でしょうか。

（三）未完成の巻につきましても、現時点における原稿をすべてPDF化するように、ウェブサイト「中山修一著作集」の更新の準備を現在進めています。一二月末までには、アップロードが可能かと思います。そこでお尋ねいたしますが、全巻が完結するまでに私が死亡した場合、そちらに誰かが連絡すれば、残りのすべての未完成巻につきましても、ウェブサイト「中山修一著作集」からダウンロードしていただき、保存と公開をしていただけますでしょうか。

ただちに、上記の三点につきまして、以下のような回答が返ってきました。

（一）はい、その都度ご連絡いただけましたら、今回のように対応させていただきます。

（二）ご連絡いただけましたら、本文を差し替えさせていただきます。（差し替えの旨注記で記載いたします。）

（三）はい、可能です。その際、ご連絡をくださる方が、たとえばさきほどいただいた中山先生のメールを添付してくださるなど、中山先生のご意思のもとでご連絡をくださっていることをこちらが把握できる形となっていると、進められると存じます。ただし、もしも館内でのリポジトリの運用方針等に今後変更があれば、その際の運用方針に則った対応となるかと存じます。恐れ入りますが、ご了承くださいますと幸いです。

以上のような回答が得られたことにより、いつどの時点で私のいのちが終わろうとも、その時点での執筆原稿のすべてが、神戸大学附属図書館の学術成果リポジトリに登録され、恒久的に公開される見通しが生まれました。研究者として限りなくうれしいことです。これで、著作集の行く末を心配することなく、安心して執筆活動に専念することができます。こうして幸いにも、私の著作集の「終活」が完了したのでした。（十一月）

三三．和風店舗の洋菓子店

瑠璃温泉の駐車場の道を隔てた反対側に平屋建ての建物があります。見た感じ、半分が住まいで、半分が店舗のようです。店舗らしい部分の入口は二枚戸で、のれんが下がっています。壁に遮られ、なかの様子はうかがい知ることはできませんが、「苺凛香（ばいりんか）」という店名からして、てっきり私は和菓子のお店とばかり思っていました。

ある日、少し予定より早く瑠璃温泉に着いたので、そのお店を訪ねてみました。私は、好物のもなかはおはぎでも、と思って入ったのですが、驚いたことに、ショーケースに並んでいたのは、何と洋菓子だったのでした。びっくりしました。外見だけではなく、内部のしつらえも和風なのですが、ただ、ショーケースとそのなかの商品だけが洋風なのです。店員さんに話しかけてみました。すると、「お客さん、みなさん、そうおっしゃいます」との返事

が返ってきました。意図的なデザインなのか、結果的にそうなっているのか、わからないまま、つまり、落ち着かない、かき乱されるような気持ちにあって、私はショーケースのなかをのぞき込みました。洋菓子では、私はシュークリームとモンブランが好物で、すぐにもそちらに目が行きました。しかし、シュークリームは完売の表示がなされており、そこでモンブランを買うことにしました。

家に帰って食しました。とてもおいしく、久しぶりに口のなかに洋菓子特有の食感が広がってゆきました。食べたあとコーヒーを飲んでみると、今日のことが、否応なく頭をトントんとたたきます。この地域は山と田畑で構成される、典型的な田舎の情景に彩られた土地柄です。その意味で、今日見た和風の建物は、よく環境になじんでいました。しかし、地域の人や観光客が、すべて和のお菓子を好むとは限りません。洋を限りなく愛する人もいます。和風店舗の洋菓子店——以外にも何かここに、食に限らず、すばらしい問題解決の解答例があるように思えてきました。異なるもの同士の一体存在とでもいいですか、不統一の同一感といった、日ごろあまり感じる事のない不思議な感覚が呼び覚まされた一日でした。（十一月）

三四．紅葉を踏みしめて

いつもこの時期、庭の紅葉が私の心を揺り動かします。モミジやカエデやイチョウの葉が、それぞれ固有の色を競い合うのです。毎年、十一月の最初の週が終わったころ、朝夕の冷え込みが感じられるようになると、赤や褐色や黄色の色味が、鮮やかになります。雨は禁物です。雨に打たれると、せっかく色づいた葉が、落ちてしまうからです。今年は天候に恵まれ、雨の日も少なく、長期間、紅葉を堪能することができました。

庭に出てもよし、ウッドデッキに出てもよし。はたまた、室内にいて窓から眺めるのもよし。しかし、よく観察しますと、必ずしも一斉に色づくわけではありません。樹木の種類によって、あるいは、太陽が届く場所の違いによって、時間差が出てきます。つまり、十一月の最後の週までのおよそ一箇月のあいだ、家を取り巻く四方の木々の全体的な色の景観が、その息遣いに似て、一日一日少しずつ微妙に変化してゆくのです。この変化に驚き、それを満喫できるのも、山に住んでいればこそ味わえる、貴重な体験となります。

葉の散り方にも、条件に応じて順番があるようで、地に落ちる葉の種類が、日ごとに変わってゆき、異なった形と色の層をつくり上げてゆきます。ここで生活してわかったことは、紅葉は、木についている葉が豪華に醸し出す錦絵だけを楽しむものではないということです。足で踏みしめるときに感じる、形や色の重なり具合による感触や、サクサクという乾燥した空気に響く軽快な音色もまた、人に楽しみを与えてくれるのです。これが、じゅうたんとしての紅葉のもつ、もうひとつのありがたさです。そういう思いに満たされながら、今年もまた、紅葉の季節が終わり、いよいよ寒い冬へ向かおうとしています。（十一月）

三五．三回目の忘年会の中止

私の高校の同窓会は江原会という名称で親しまれています。聞くところによりますと、その名称は「大江原頭」に由来しているようです。大江は地名で、原頭は原野を表わします。

いま母校は、熊本市中央区新大江一丁目の住宅街にあります、その昔は、この地域は原野だったのかもしれません。

私が住む南郷谷（南阿蘇村と高森町をあわせた地区）にも、阿蘇南部江原会という小さな同窓会組織があります。もともとこの地区在住の人もいます。私のように定年後にこの地区に移住してきた人もいます。みんなそれぞれに異なる人生の経緯があつて、いまこの地で生活をしているのですが、若いときの三年間をともにひとつの学び舎で過ごしたことが、共通点となっています。この会にとりまして、春の花見と暮れの忘年会が毎年恒例の行事となっていました。

ところが、コロナウイルス感染症の全国的な広がりにより、恒例行事も中止へと追い込まれました。二年前、最初に中止の知らせを受けたときは、今回限りで、また来年は楽しめるものと思っていました。しかし、次の年も中止の知らせが来て、今年の忘年会も中止に決まったとの手紙が、先日幹事より届きました。これで、三年続けて忘年会が開催されないことになります。

会員のほとんどは高齢者で、私たちの世代は、一番若い会員層に属します。忘年会には、二〇名前後の同窓生が年末に集い、それぞれの一年を語り合い、次の年の健康と安寧を誓い合う、ひとつの暗黙裡の儀式的要素があり、それがなくなることは、互いが互いに支え合っている目に見えない力を失うことを意味します。寂しいことです。来年こそは開催できることを祈りたいと思います。（一二月）

三六．旧友との再会ならず

東京教育大学（現在の筑波大学）の大学院時代、同期の台湾からのひとりの留学生と親しくしていました。その彼が、クリスマス休暇を利用して、四泊五日で、柳川、大宰府、湯布院、日田を楽しむため、娘夫婦の家族も連れ立って福岡にやって来ることになりました。ちょうど一〇年前に私が台湾に彼を訪ねていたので、久しぶりの再会です。福岡空港に到着し、チェックインする午後二時にあわせて、宿泊予定の福岡のホテルロビーで待ち合わせることにしていました。ところが、予定日前日の夕方から、高森町の北に位置する私の住む山野は大雪に見舞われ、車を出すことも不可能になってしまいました。さっそくメールを書きました。

彼とは、大学院に在籍中、明石一男先生の指導のもと、ともにインダストリアル・デザインを学んだ間柄です。奥さんは声楽家で、当時、東京芸術大学に籍を置いていました。日本滞在中、夫婦で熊本市内にある私の実家に遊びに来ていただいたこともありました。台湾への帰国後は、ふたりそろって大学の教員となり、定年後は、もうひとつ居住の場をバンクーバーに設け、台湾と行ったり来たりの生活を楽しんでいます。

積雪のために福岡のホテルに行けないことは、すぐにも理解していただき、台湾から持参されていたお土産が宅配便で送られてきました。さまざまな当地のお菓子やティーパック、それにからすみも入っていました。お礼状を書き、次の機会にぜひとも、台湾かこちらで、必ず会おうと、伝えました。彼は私より数歳年上で、最初に知り合ってからもう半世紀が過ぎ、いつのまにかともに高齢の年代に入っています。

彼がバンクーバーに生活の拠点を移したのは、中国本土の脅威によるものでした。バンク

ーバーには同じ思いをもつ台湾人のコミュニティーがあるそうです。数年前、奥さんが主宰するバンクーバーの台湾人合唱団が九州の数会場で公演するとき、熊本城見物が予定されていたため、都合よくそこでお会いしたこともありました。

雪で福岡まで行けないことを知らせるメールの返信には、「いつ何が起こるか誰にもわからない」ということわざが台湾にあることが書かれてありました。中国の台湾への侵攻、これも誰にもわからないことのひとつですが、これだけは避けなければならないことを、数日後に控えた年頭に当たり祈願したいと思います。（一二月）

第八編 二〇二三（令和五）年——神戸大学定年退職から一〇年

一．中山修一著作集の現在（年賀状）

謹んで新春の御祝詞を申し上げます

ウェブサイトで公開しています「中山修一著作集」のなかの七つの完成巻につきまして、昨年、神戸大学附属図書館の「学術成果リポジトリ（Kernel）」において、PDF ファイルの形式で登録・保存され、一般に公開されました。

一方、国立国会図書館の「インターネット資料収集保存事業（WARP）」におきましては、開設以来そのつど更新してきました過去の「中山修一著作集」が収集・保存の対象となり、HTML の形式により一般公開されています。もっとも、現時点では、国立国会図書館の東京本館、関西館、および国際子ども図書館の館内限定の公開となっています。

今年は、神戸大学を定年退職してから、ちょうど一〇年の節目となります。いつの日か訪れる全一五巻の完結を目指して、今年もここ阿蘇の山中に隠棲し執筆に一意専心したいと思っています。

穏やかなお正月をお迎えのことと思います。

本年のご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。

二〇二三（令和五）年 元旦

二．初日の出を追って

シンガポールに駐在する息子が、妻とふたりの幼子を連れて、年末年始の期間一時帰国し、この山荘にも泊ってゆきました。

元日の朝、私は息子と上の孫と一緒に初日の出を見に出かけました。この二年、天候に恵まれず、「ぜひとも今年は」という思いで、新しく見つけていた見通しのいいスポットに車を走らせました。七時一五分を過ぎたころ、東側の外輪山の一角がオレンジ色に輝き始めました。息を飲んで待ちました。しかし残念なことに、運悪く雲が遮り、わずかに光はあれど、太陽自身は姿を現わしません。やむなくあきらめ、帰路につきました。すると、住宅地が途切れた瞬間、強いご来光が、フロントガラスに差し込みました。見ると、東の山から初日がまさしく昇ろうとするところでした。急いで車から降り、携帯を取り出し、見事にその場面を撮影することに成功しました。今年も空振りかと、あきらめかけていた心に届いた、大きなプレゼントでした。

次は、そのとき詠んだ歌です。自身の息子と娘の名前を織り込んでつくりました。

美しき阿蘇より出づる日の光り

託麻の原にいま降り注ぐ

ここに登場します「託麻の原」は、わが母校である熊本県立熊本高等学校の校歌の冒頭一節の歌詞「西に金峰／東阿蘇／託麻の原の中しめて／築き成したるわが校舎」にも使われていますように、古き熊本市の地域全体を指し示す名称です。（一月）

三．巨木の根っ子が道をふさぐ

自宅を出て、牧野道の下り坂にさしかかりました。前方の路上に何か大きな塊があるのが目に入りました。ゆっくりと近づいてゆき、車から出て、確かめました。大きな樹木の根っ子の部分でした。一〇メートル前後の高さのある左右ののり面を見上げましたが、どちら側から落ちてきたのか判然としませんし、なぜ落ちてきたのかも、よくわかりません。もちろん手で押しても、びくともしません。しかし、やっとな軽の車幅くらい空いており、何とかぎりぎりでも通過することができました。

用事をすませたの帰路、ふたたびその箇所を通りました。この幅では、普通車や特殊な緊急車両は通行できません。帰宅すると、ただちに町役場に電話をし、撤去の依頼をしました。私たちの別荘地には自治会があり、こうした崩落や土砂崩れの場合は、町が責任をもって対処することで協定が結ばれており、今回も、それに則った依頼でした。数日後、切り株は取り除かれ、もとの道の姿にもどりました。昨年も、この道で二度ほど土砂崩れがあり、そのときも町に対応してもらった経緯がありました。ある意味で、日常化しているのです。

この牧野道は、もともとは隣接する村落の牧野組合が管理していましたが、後継者が減少し、牛の放牧も途絶えてしまいました。それに伴い、村落民と私たちの自治会との連名で、この道を町道に編入する陳情を行なったことがありましたが、回答は、それを受けてもらえるものではありませんでした。当時役場では、町道の見直しと削減を計画しているところで、そのことが理由となっていました。しかし、この道が生活道路であるという私たちの認識は共有してもらい、それ以降、回答書に書かれている内容に即して、実質上、この道路の管理に当たっていただいているところです。

しかし、こうした現象は、物損事故や人身事故につながりかねません。数年前から、それへの対応の一環として、地権者へリスク管理にかかわって注意喚起を徹底してほしいとの要望を、町にしているところです。もし、樹木や土石の崩落によって人命が失われることになれば、おそらく地権者の責任は免れることはないでしょう。また、町にも、一定の責任が生じる可能性もあります。

過疎化、人口減少、高齢化により、空き家が目立ち、道路の管理が行き届かず、小さな町や村の住環境が、近年急速に劣化しています。対策が急がれるところです。（一月）

四．一月も寒波襲来

昨年の一二月、強い寒気が南下し、ここ阿蘇地方にも雪が積もりました。いつもそうなのですが、積雪の予報が出ると、車は、牧野道の入口のガード下に置き、自宅とこの間の坂道をおよそ一五分かけて歩いて往復します。今回の積雪は一〇センチには満たなかったのですが、すべての用を先延ばしにして、まる二日間、一步も外に出ず、家のなかで過ごしました。

私がこの地に移住して、そろそろ一〇年になります。この間、雪が少し交じったみぞれのような現象はありましたが、一二月に雪が積もることはありませんでした。雪が積もるのは、いつも年が明けた一月と二月であり、その経験からすると、昨年一二月の積雪は、異例の気

象でした。

さて、年が変わりました。厳しい冬の寒さを、習慣的に予想していました。予想的中。数日間三月並みの温かい陽気に包まれたあと、昨年末に続いての寒波の襲来です。朝方の気温がマイナス一〇度を記録し、昼間も気温が上がらず、終日氷点下の日もありました。雪も積もり、路面が凍結しましたので、車はガード下に四日間置き、どうしても町に出る必要があるときは、やむなく牧野道のこの坂道を歩いて下りることになりました。体がポカポカしてきます。いい運動と思って、がんばっています。

今日から二月。この月は、どうなるのでしょうか。戦いはまだまだ続きそうです。（二月）

五. 福寿草咲く

玄関入口に上がる階段の左手の庭に、落ち葉のあいだから小さな福寿草が顔を出しているのが目に止まりました。わが家にとっては、春一番に咲く花です。これまで庭に積もっていた雪の白とは対照的に、花は黄色、葉は緑の暖かい色味です。ありがたいことに、毎年律儀に咲いてくれます。しかし、咲く時期が年々早くなっているように感じられます。数年前までは、二月の終わりか三月のはじめに咲いていましたが、何と今年に至っては、二月の上旬に開花したのです。

この間この地域は、昨年末と年が明けた一月に、二度の積雪に見舞われました。例年ですと、大雪は一月と二月に到来しますので、降雪の時期も前倒しの感があります。二月の残りの予報を見てみますと、雪のマークはありません。このまま今年は、春に突入するのかもしれませんが。うれしくもありますが、季節の変動に、何か言葉にならない戸惑いも残ります。（二月）

六. 空気が汚れる

私が田舎暮らしをしていることを知ると、たいていの人から、「自然のなかだと、空気がおいしいでしょう」という言葉が返ってきます。しかし、実際はそうではないのです。

大規模の噴火ではなくても、阿蘇の中岳は現役の活火山ですので、日常的に噴煙を上げ、微小の火山灰を降らせているのです。この火山灰は目には見えません。しかし、窓を閉め、雨戸も閉めていても、わずかな隙間から家のなかに進入してきます。その痕跡は、窓のレールに付着していることで、確認できます。ときどき、ペットボトルに入れた水を少しずつ流しながら、不用になった歯ブラシでこすり落とします。ひどいときは室内にまで侵入し漂います。目に入り、不快な痛みを感じます。

こちらで生活してわかったことは、車が汚れることです。最初は、自然のなかのでの生活ですので、空気も澄み渡り、大気中には何ひとつ異物はないものと信じていました。しかし、車の汚れ方を見ると、実はそうではなく、火山灰をはじめとして、いろいろの微細な不純物質が空気中に混入し浮遊していることに気づかされます。

先日、褐色の空が出現しました。少し火山活動が活発化したこともありましたが、西から黄砂が飛来し、加えて、飛び散る花粉の量が増加したことが、そうした現象を招いた要因となっていたようです。他方で、そのときの大気汚染の現象には、炭素成分や硝酸塩などを含

む微小粒子状物質である「PM2・5」の大量浮遊が重なっていた可能性も否定できません。

そのようなわけで、人が思うほどに、この地の空気は新鮮というわけでもないし、おいしいというわけでもないのです。コロナ感染症も少し落ち着きを取り戻し、マスクの着用は個々人の判断にゆだねられるようになりました。しかし、私にとりましては、別の意味で、マスクは手放せない常備品になっているのです。（三月）

七. 物価高騰

物価の高騰が続き、生活を圧迫しています。

週に一、二回、ウォーキングコースの道沿いにあるコンビニに立ち寄って、大好きな「チョコモナカジャンボ」を食べることが最近の習慣になっていましたが、先日行ったら、それまでの一六二円が一七三円に値上がりしていました。

スーパーには、週に二、三回足を運び、食料品の買い出しをします。ほぼ毎日食べるバナナの値段は、これまではひと房九九円でしたが、しかしいまは、二〇〇円に達しかねない勢いで高騰しています。

毎日行く温泉も、来月四月から、四〇〇円から五〇〇円に入浴料金が上がります。車のガソリン料金は、高止まりのままです。

長年農業を営む地元の高齢の方と話す機会がありました。「今年はもう田植えはしない」。その人の表情には陰しさが漂っていました。その人は、こうもいっていました。「稲作に必要なすべての経費が上がってしまい、経営が成り立たなくなったうえに、せめて自分が食べる分だけでもと思ってはみたが、それも、買う方が安くつくことがわかった」。

この一、二年で私の消費行動が少しずつ変化してゆきました。余分なものはいっさい買わず、あるもので暮らす——この精神が徐々に徐々に強化されていったのです。

一方でこんなこともありました。毎年初市のこの時期、私の慣例となっている行動なのですが、いつも買い物をする数店舗（電器店、薬局、クリーニング店など）に共通するポイントを、今年も一年ぶりにチェックし、金券に替えました。買い物の総量が減っているのに、額は例年に比べると多くはないのですが、それでも、四千五百円分のクーポンが発行されました。年金以外に実入りのない人間にとって、ありがたい臨時収入となりました。

九州電力からメールが届きました。事前に取り決めた節電目標に到達したので、来月の請求料金から千円を割り引くという知らせでした。これで二箇月連続の節電達成になります。こまめに電気を切っていることが、功を奏したようです。

このような、わずかこれだけの消費行動にも、一喜一憂する自分がいます。人間の生活とは、何なんだろうと思いつつ、啄木の言葉に倣い、「じっと手を見る」自分がここにいます。（三月）

八. 神戸大学定年退職から一〇年

二〇二三（令和五）年三月一日は、私にとって記念すべき日でした。このちょうど一〇年前に私は、神戸大学を定年退職しました。そのようなわけで、この日は退職一〇周年記念日だったのです。

いまそのときのことを思い出しています。送別会やお別れの会などが、幾つもありました。私はどの会にも上機嫌で出席しました。友だちからは、「よくしゃべるね、こんな中山、見たことなかった」とも、いわれました。確かに私は饒舌でした。退職できることが、私は本当にうれしかったのです。就職が決まったときよりもうれしかったように思います。その理由はいたって簡単で、この日を境として、組織から離れ、何の束縛も受けずに、ひとりで思うがままに生きていける——ただそれだけのことでした。誘いがあった私立大学への再就職もお断わりし、退職の翌日から、神戸のマンションと、阿蘇山中につくっていた別荘とを行き来する新しい生活がはじまりました。何にも属さない解放感が、とても心地よいものとして実感できたのもこのときのことでした。

英国では、よく independent researcher（独立研究者）とか、independent curator（独立学芸員）とか呼ばれる人たちに接する機会がありました。大学や博物館などの組織に属せずにひとりで研究したり、執筆したり、企画したりしている人たちのことです。私は、彼らのことを真の意味での創作者（creator）であると思っています。しかし日本では、組織があつてのその人ですので、こうした生き方をする人をみかけることはほとんどありません。イギリスにかぶれているといえ、それまでなのですが、定年退職により、独立研究者になれたことが、私にとっては、すごくうれしかったのです。

それからこの地に定住し、一〇年の歳月が流れました。大自然のなかにあつて、執筆し、温泉に入り、家と庭の手入れをする日々が続いています。自分が望んだ生活ができていることをありがたく思う一方で、それを成り立たせてくれている周囲の「万物万人」に心から感謝したいと思います。（三月）

九. 三年ぶりの「春の宴」開催

私が卒業した熊本県立熊本高等学校の同窓会は「江原会」といいます。私の住むこの南郷谷にも、二十数名の卒業生が暮らしています。ほとんどが、現役を退いた高齢者で、私などは若い部類に入ります。団体名を「阿蘇南部江原会」と称し、これまで、春と暮れに集まり、交流を深めてきました。

しかし、コロナ感染症の影響によりしばらく会合がもてず、今回の「春の宴」は三年ぶりの開催となりました。会場は、会員のひとりが所有する別荘で、庭からは阿蘇五岳の全体が見渡せます。誰しもが、この最高の眺望に舌鼓をまず打ちます。家の中に入ります。すると、お弁当とお酒の用意が整えられており、その後、ふたつの大皿に盛りつけられた刺身と、別のお店で購入された豚カツの盛り合わせが届きました。二度目の舌鼓です。

会長のあいさつと乾杯のあと、思い思いの席に座ると、会食のはじまりです。やはり三年ぶりということもあつて、話が弾みます。この会の特徴は、いつも奥さん方が多く参加されることです。孫の成長のことや高騰する物価のことなど、女性共通の話題でも盛り上がります。久しぶりに人と人とが直接触れ合うなか、相互に情報を交換したり、互いの生活をねぎらったりと、尽きることなく、時間が流れてゆきます。

最後に、会長からライン登録の案内がありました。今回から開始される会員相互の連絡網です。この日の翌日に、さっそく会計報告が届きました。それに続いて、誰からとなく、昨日の「春の宴」の感想のやり取りがはじまりました。まさにこの日のラインは、宴の二次会

といった趣でした。（四月）

一〇．季節の前倒し

こちらは山間部ですので、多くのサクラは、ヤマザクラです。熊本市内の平野部よりも気温が四度くらい低いため、満開を迎えるのは遅れて、毎年四月を過ぎてからのことになります。

しかし今年は、その時期が早まり、三月の下旬には花が咲きそろいました。そして、四月の声を聞くなり、サクラの花は風に舞い散り、それに代わるかのように、庭のシャクナゲのつぼみから、一斉に大輪の花弁が姿を現わしました。いつもは、四月の末の連休がはじまるころにみられる現象です。

この数箇月を振り返ってみますと、例年ですと、一月と二月に四、五日積もる雪が、今年は一二月と一月に見られました。玄関横の福寿草も年々その開花時期が早まり、今年は、二月の月上旬に観察されました。

そうしたことを考え合わせますと、今年は、例年に比べて数週間、季節が前倒しして進んでいるようです。これは、今年に限ったことなのでしょう。それとも、今後もずっと続くのでしょうか。生活に対する感覚と季節感ががずれてしまわないことを願います。（四月）

一一．庭の大掃除

今年は、いつもより数週間早めの庭の大掃除です。例年ですとこの時期、まだ肌寒いのですが、今年は暖かくなるのが早く、そのため、庭いじりも早まったというわけです。

毎年、紅葉の見ごろを過ぎ、一二月に入ると一段と寒さが増し、庭に出ることがほとんどなくなります。庭は、晩秋の落葉を残したまま年を越します。その間、家の周りの杉の木の小枝が風に折れ、庭に散乱します。そのようなわけで、冬が終わった早春は、わが家の庭にとって大掃除の時期になるのです。

まず、庭の何箇所かに分けて、落ち葉や小枝を集めます。雨の日はできませんし、雨のあともしばらくはできません。水分を含んで重くなるからです。作業が終わると、次は一輪車の出番です。山状に集めた葉と枝をスコップで切り崩しながら、一輪車に入れ、わが家の西の沢側ののり面まで運び、そこに廃棄します。ひとつの山で、だいたい五、六回の往復が必要です。この作業は、一日に一時間半行なうとして、だいたい一〇日くらいを要します。週二日くらいを使つての、約一箇月の作業です。そのあと、雨水や野外の水道水のはけ口となっている排水溝を清掃します。泥や落ち葉が堆積しています。それが終わると、やっと庭らしい庭が出現し、いろんなこの季節の花の苗を買ってきては、鉢植えをして、庭の要所に並べます。こうして、庭の大掃除が完了します。

完了するのは、だいたい五月の連休が明けたころです。この間、体力仕事が続きます。しかしそのあとの小さな花園は、特別の喜びをもたらします。その喜びのために、いま格闘しているところですが、この数年前から体力が衰えてきていることは、いかんとも隠すことができません。残念なことです。（四月）

一二. 母親の入院

母親は、昨年四月から施設に入居しています。そこで、この四月で、施設生活二年目に入りました。昨年は、胸痛やめまいで二回、かかりつけの病院に入院しました。最後の退院が九月でしたので、半年ほど安定した生活が続きました。しかし、最近食が細り、本人の希望もあり、主治医との相談の結果、再び入院することになりました。

前回の入院のときは、コロナ感染症が拡大していたこともあり、入院期間中の約四週間、一度も面会することができませんでした。今回は、その制限が緩和され、事前の予約により一五分だけ面会が許されるようになりました。昨日の面会のときは、モナカアイスと、一口大の大きさに切ったスイカをもってゆきました。病院の食事も、まだほとんど食べないらしく、すぐさま喜んで半分ほどモナカアイスを口にしました。スイカは、初物だといって喜びましたが、その場では食べませんでした。一五分は、あっという間です。看護師さんが合図に来られ、残りのモナカアイスとスイカの管理をお願いして、病室をあとにしました。（四月）

一三. 迷い犬

早朝玄関を開けて外に出たら、階段下の道に、一匹の犬が、所在なく立っていました。階段を降り始めると、後ずさりします。目は私の方を向けています。私も道路に出ました。目が合います。逃げてゆくわけでも、こちらに近づいてくるわけでもありません。一瞬私は、「一郎」と、数回呼びました。しかし、それに応じる素振りは見せず、自分の行動をどう取ればいいのか、思案しているようにも見えます。

全体が白で、首とお尻の部分が薄茶色をしています。中型犬です。犬種は柴犬の感じです。首輪はなく、しかし、毛並みのよさから判断しますと、野良犬ではなく、つい最近まで家庭で飼われていた犬のようです。

私が少し前進すると、少し後ろ向きになって歩み始め、私が止まると、犬も止まり、こちらを向きます。手をたたいて手招きします。しかし、動じることはありません。それを繰り返しているうちに、わが家を取り巻くように、逃げるでもなく、近寄るわけでもなく、姿を消してゆきました。

もし飼い犬であれば、なぜこんな山奥にいるのだろうか。首輪がないということは、首輪を外して、買い主がこの近くに捨てたのであろうか。しかし、ここで生きることは、現実的に難しく、今後この犬はどうなるのだろうか。私の玄関前にいたというのは、人の気配に引き寄せられた結果にちががなく、喉が渴いているかもしれないし、おなかをすかせているかもしれない。そうであれば、もう一度、ここに近づいてくるにちがいない。

そう思った私は、平皿に水を入れて、階段の上り口の所に置き、家のなかに入りました。しばらくして、外の様子が気になり、そっと玄関のドアを開けると、水を飲み終わって、ちょうどそこから離れようとするところでした。私に気づいたのか、犬はすぐさま立ち去り、姿を消しました。

私は、再び平皿に水を入れると、また別の皿を用意して、朝に食べようとしていたパンを小さく刻んでそのなかに置きました。それから家のなかに入りました。しばらく時間が流れ、

ドアを開けて階段を降りて、ふたつの皿を見てみると、水は半分くらい飲んだ形跡がありましたが、パンはそのまま残っていました。

一日が立ち、二日目の朝が来ました。しかしこの間、ここに来た様子はありません。どこへ行ってしまったのか。飼い主のところに帰れたのか、まだこの山のどこかにいるのかわかりません。犬のことが気になります。迷い犬に対する私の対応がこれでよかったのか、これも気になっています。（五月）

一四. ゴールデン・ウィーク

ある知り合いからメールが届きました。そのなかに、「世の中ゴールデン・ウィークというのに、私には、昔から縁のない休みです。休みだからといって血が騒ぐわけでもなく、平凡に過ごせる日々が幸せと思うこのごろです」という一節がありました。

ふと自分の生活を振り返ってみました。夜中の一時半ころに起きて朝ご飯を食べ、三時から八時ころまでの五時間、パソコンに向かい文章を書き、昼食（普通の人にとっては朝ご飯）が終わると街に出て、その日の用事（そのなかには、たとえば、銀行や郵便局、買い物やクリーニング、そして、コインランドリーでの洗濯物の乾燥、さらには、給油、役場、ごみ集積基地への立ち寄りなどが含まれます。）をすませると、瑠璃温泉の駐車場に車を止め、一〇時二〇分ころの開門まで、約三〇分間の体操とウォーキング。温泉を楽しんで帰宅するのが、正午を少し過ぎたところで、一時を回ると夕食づくりに頭と体を使い、二時、ウィスキーを少し飲みながらの晩飯。そして四時の就寝。

このような平凡な暮らしが、退職してこの地に移り住んでこの一〇年間、変わらず続いています。三六五日この日課で過ごす私にとって、したがって、土日、盆も正月も、ゴールデン・ウィークも無縁です。私の生活のリズムは、既存のカレンダーから完全にはみ出したところで機能しているのです。

しかしながら、自分なりのカレンダーはあります。一月と二月にそれぞれ数日間雪が積もり、それが終わると、庭の福寿草が咲き、三月から四月にかけて花見をし、四月の終わりに一斉にシャクナゲが開花すると、それに続くようにヤマアジサイの紫色が目を楽しませてくれます。小鳥のさえずりが日々耳に届くのも、この時期です。八月のお盆が過ぎたころから気温が下がりはじめ、落ち葉も目立つようになり、一段と冷え込む十一月になると、庭は絢爛豪華な色彩に彩られます。そして、静かにその年が暮れてゆくのです。

人には、私の生活は、世捨て人か流れ者の暮らしのように見えるようです。よく、「寂しくないかい」とか「不便ではないかい」とか、「何かおもしろいことあるの」とか聞かれます。私は、返す言葉が見つからず、たいてい黙ってうなずくだけです。しかし、心のなかでは、いつもこう叫んでいます。「平凡に過ごせる日々が幸せと思うこのごろです」。偶然にも、いただいたメールのなかの文言と、全く同じ。同じ感覚をもつ人もいるものだと、不思議な親近感を覚えました。今日でゴールデン・ウィークが終わります。（五月）

一五. 温泉売却の報道

いつものように瑠璃温泉の駐車場に車を止めて、出ようとする、親しい温泉仲間のひと

りが、その日の新聞をもって近寄り、手渡してくれました。彼は、私が新聞を読まないことを知っていて、このニュースをいち早く知らせたかったようです。そのニュースとは——。

新聞記事の見出しは「南阿蘇村二温泉売却へ」となっていました。内容は、南阿蘇村にある「ウイナス」と「瑠璃」のふたつの温泉の、その売却へ向けての入札手続きがはじまったことを告げるものでした。そのうちの「瑠璃」については、このように書かれてありました。

瑠璃は旧白水村が整備して九五年に開業。一万七一三八平方メートルの敷地に、木造二階建ての温泉施設（延べ床面積一九九二平方メートル）や、木造平屋の宿泊施設（同八六六平方メートル）など建物四棟が建つ。最低売却価格は一億円。

この日のサウナ談義は、この話題で沸騰しました。すでに、宿泊棟もレストランも閉鎖に追い込まれており、いよいよ温泉本体も閉鎖される日が来たのか、というのが、おおかたの感想でした。かつての高森温泉館の売却のときは、応札する業者が現われず、何度も何度も価格を下げていった経緯をみな知っていますので、赤字経営に陥っているこの温泉施設を一億円ものお金を使って購入する業者などいないだろうという見立てが、支配します。そうなればどうなるのでしょうか。赤字の累積を恐れて村は、早晚温泉を閉鎖するでしょう。その結果、宿泊棟やレストランと同じように、温泉棟も無人の空き家、行く末は廃屋の道をたどることが予想されるのです。

阿蘇五岳と南外輪山に囲まれたここ南郷谷は、高森町と南阿蘇村で構成されます。近年の人口減少は著しく、あちこちで空き家が目立ち、売れない田畑が荒れ始めています。これに加えて、村が管理する温泉がいま姿を消そうとしているのです。

サウナ談義を楽しむのは、一番風呂を目指して開館時間に合わせて集まってくる少数者です。みな温泉大好き人間です。温泉がなくなれば、私もそうですが、行き場を失います。しかし、「赤字だから」といわれてしまえば、存続を無理にお願いするのも限りがあります。町から人がいなくなり、家や建物から人影が消え、田畑から実りの作物がもはやみられなくなる、こうした光景が現実的に差し迫ってきています。南郷谷の光景は、将来の日本の姿を、悲しくも先取りしているのかもしれない。（五月）

一六．火の国の女たち

いま「火の国の女たち」というテーマでひとつの文を書いています。ここで取り上げる「火の国の女たち」は、高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子の三人です。副題は、「高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞆の女たちとの友愛」としました。この物語には「青鞆の女」であった平塚らいてうと富本一枝が登場します。どのような友愛が織りなされたのでしょうか。百年余の流れの一端を跡づけたいと思っています。

私は、「火の国の女たち」を書くために熊本県立図書館に行き、『高群逸枝全集』と『石牟礼道子全集』を手にししました。私にとってこれが二度目の機会でした。改めてその重みに心がつぶされそうになりました。そのとき、いつかはこのふたりについて、自分も書いてみたいという思いが内から湧いてきました。といいますのも、これまでの経験から、必要な部分を拾い読みするだけでは、なかなかその人の生きた内面には到達できず、自分が文字にして

はじめてその人物の思いの一端が手に入ることを知っていたからです。つまり、「読んで知る」だけでなく「書いて覚える」ことに、何らかの意味を見出しているのです。ふたりとも、「自伝」を書いています。そのため、私の文は「写経」ならぬ「写伝」になるかもしれません。それでも、文筆家の末尾に葉隠れする私にとって、ふたりを「書き学ぶ」ためには、書き写しの「写伝」であろうとも、それが必要なのです。しかし、執筆に向かう日がいつくるのか、全く見当が付きません。夢に終わるかもしれません。いまはただ、そのような夢を見ながら、目の前の「火の国の女たち」を書いているところです。（六月）

一七．図書の検索

今日も県立図書館に行き、高群逸枝さんの当時刊行された図書を借り出し、閲覧しました。コピーできる本は、必要な箇所をコピーします。コピーができない本は、カメラで撮影します。そうした仕事が一段落しときのことです。あることが頭をよぎりました。

もう随分前 NHK のラジオ深夜便を聞いていましたら、英国のブライトンに住むひとりの女性が出版した本が日本で評判になっているらしく、その著者へのインタビューがはじまりました。私も若いころしばしば仕事の関係でブライトン大学に足を運んだことがあり、懐かしさも手伝い、少し仕事の手を休めて、耳を澄ませました。最近の新しい英国の動きのなかに、アナーキズムに対する再評価があるとの話でした。私の専門とするウィリアム・モリスもアナーキストに近い政治活動家でしたので、親しみをもって聞きました。

それから月日が流れ、私は、「火の国の女たち」を書くにあたり、逸枝さんの仕事について調査をはじめました。調べを進めるなかでわかったことは、逸枝さんの政治的立場が、アナーキズムにあることでした。そこで思い出されたのが、かつてラジオで聞いた話の内容です。しかし、残念なことに、その人のお名前も、著書のタイトルも、メモをとっていなかったもので記憶に残っていません。どうしたらその方の本に出会えるのか、途方に暮れるなか、思い切って、この間逸枝さんの資料の貸し出しで対応していただいている司書の方に、事情を説明してみました。すると、数分も立たずに、そのブライトンにお住いの女性は、「ブレイディみかこ」というお名前ではありませんか、それであれば、その方の新刊書は、『他者の靴を履く——アナーキック・エンパシーのすすめ』で、当館にも所蔵がございます、という言葉が返ってきました。びっくりしました。著者名も書名をわからないのに、どうやって検索ができたのだろう……。驚きの言葉を発する間もなく、カウンターの上に、その本が運ばれてきました。魔法にでもかけられたかのような一瞬の出来事でした。

家に帰って頁をめくると、このなかに「ウィリアム・モリス」の名前がすぐにも飛び込んできました。逸枝さんが随筆のなかでモリスに触れていたこともあり、モリス、みかこさん、逸枝さん、すべてが私の頭のなかでリンクし、興奮の渦が私を巻き込み、回転してゆきます。出会いは「奇跡」なのだとということを、改めて実感した瞬間でした。（六月）

一八．母親の退院

母親が入院して、そろそろ三箇月になります。昨日、主治医の先生と入院後の二度目の面談をしました。体調も回復し、入院時と比べて一段と元気になったことを受けて、一週間後

に退院することに決まりました。

入院したときは、それまでの施設での生活と同じく、移動は車いすを使用し、酸素吸入は欠かせず、加えて、ほとんど食を受け付けない状態でした。ところが、この三箇月で劇的に変化しました。移動は、近いトイレまでならば、看護師さん付き添ってもらい、歩行器を使い自分の足で歩くようになりました。想像さえしていなかった回復ぶりです。また、一年半ぶりに酸素吸入も必要としなくなりました。おかげで酸素チューブから解放され、精神的にも楽になったようです。さらに、細っていた食も、少量ですが、進んでおいしくいただくようになりました。

ここまでの回復は、一日午前と午後の二回行なわれるリハビリの効果によるもののようです。主治医の先生は、苦笑いしながら、こんなことをおっしゃいました。「今回、私がお母さんにしてあげることは何もありませんでした。すべてはリハビリを担当する方々のチーム力によるものです」。そして、付け加えて、「リハビリは立派な医療行為です」とも。ただただ、納得するばかりでした。（六月）

一九．坊ちゃんかぼちゃと地きゅうり

この季節、地元の人と話していると、「坊ちゃんかぼちゃ」と「地きゅうり」という言葉を耳にします。最初は、どんなものかわかりませんでしたが、いつも通う温泉の野菜売り場で最近見かけるようになり、その正体がわかるようになりました。

先日、温泉で顔をあわせる仲間のひとりから、「坊ちゃんかぼちゃ」と「地きゅうり」をいただきました。自分の畑で採れたもので、その名前の由来や料理の仕方などもあわせておそわりました。

「坊ちゃんかぼちゃ」とは、「坊ちゃん」のように小さいかぼちゃを指するという名称とのことでした。ミニトマトならぬミニかぼちゃといったところでしょうか。片方の手のひらに乗る小ぶりのサイズです。一方、大きいかぼちゃもありますが、これは両手でないと抱えきれない代物で、「どてかぼちゃ」の名称で親しまれているようです。「坊ちゃんかぼちゃ」がどうして生まれたのかには諸説があるようですが、核家族化が進むにつれて、小型のかぼちゃの需要が増し、「坊ちゃんかぼちゃ」への品種改良が進んだようです。それにしても、「ミニ」ではなく、「坊ちゃん」とは、粹な表現のように感じられます。

次に「地きゅうり」ですが、これは、普通見かけるきゅうりの何倍もある大きさと、ちょうどへちまのような形をしています。「地きゅうり」の「地」には、「地元産の」とか「この土地固有の」という意味が込められているようです。つまり、この土地の人のあいだけで育て分け合うきゅうりらしく、スーパーなどで、見かけることはありません。この地域の秘蔵の品なのです。

さっそく、持ち帰って「坊ちゃんかぼちゃ」と「地きゅうり」をいただきました。味は、普通のかぼちゃやきゅうりと変わりありませんが、何だか、この南郷谷の大地に根差した神秘性のようなものを食した感じが残りました。（七月）

二〇．国立国会図書館のデジタルコレクション

いままで、国立国会図書館のデジタルコレクションといえば、国立国会図書館内か、送信館内（私の場合は熊本県立図書館内）でなければ閲覧できないものと思っていました。しかし、最近になって、個人送信も可能になっていることがわかりました。さっそくウェブ上で本登録をしました。案内には、登録完了には五日程度を要するとのことが書かれてありましたが、何とその日のうちに返事が返ってきて、対応の速さに驚かされました。

これにより、私の ID 番号とパスワードが確定し、すぐに、いま執筆している「高群逸枝」を検索語として入力してみました。かなりの数の資料がデジタル化されていることがわかりました。閲覧するには、国立国会図書館内限定、送信館内限定、そして個人送信に分かれますが、個人送信が可能な資料を選んでログインしてみました。いままで送信館（熊本県立図書館）で見ていた画面と同じ書式の画面が現われたときには、ただただ感動してしまいました。

これで、自宅にいながら、まだ一部ではありますが、国立国会図書館所蔵の書籍にアクセスできるようになったのです。地方の片田舎で執筆活動をする者にとっては、この恩恵はありがたく、一日もはやく、すべてのデジタルコレクションが自宅で閲覧できるようになることを願わずにはいられません。そして、さらに願うことは、すべての書籍をデジタル化してほしいということです。そうなれば、国立国会図書館そのものが個人所有の自宅の本箱として機能するようになるのです。夢のような話ですが、技術的には、もう大きな問題はなさそうに思います。

現役で神戸大学に勤めていたころを思い出しますと、最初のころは、まだパソコンはなく、原稿用紙に手書きしていました。他大学から本や複写物を取り寄せるにも、長時間を要していました。その間、執筆が中断することもしばしばありました。それを思うと、この四半世紀で研究環境が大きく変わりました。いまそうしたなかで、私の日々の執筆も進行しています。研究者や執筆者によって書かれたすべてのデジタル原稿が国立国会図書館に集められ、国民すべてが自宅や職場からアクセスし閲覧できる、まさしく「すべての知の共有化」がもうそこまで来ていることが、このたびデジタルコレクションの個人送信を利用して、さらに実感した次第です。（七月）

二一．モリス翻訳書の他館からの借用

高群逸枝の著書に、『戀愛創生』（萬生閣、一九二六年）という本があります。書名も少し変わっていますが、構成も一風変わっており、章も節もなく、全文が書き流しでできています。内容はというと、古今東西の恋愛の事例や、恋愛についての言説が拾い上げられ、かつて男女には自由な恋愛が存在していたものの、家制度や資本主義の発達により、かかる自由が脅かされ、男性中心の支配体制が成立するや、真の恋愛は、姿を消してしまったことを例証するものでした。そこには、「女性の解放」と「恋愛の創生」とは表裏をなすものであり、それを今後の女性の生き方に求めようとする強い意識が働いていたといえます。出版が大正一五年四月であることに着目しますと、その論調は際立って進歩的なものでした。

その本のなかで高群は、ウィリアム・モリスのユートピアン・ロマンスである *News from Nowhere* に触れて、こう書いています。「ウィリアム・モリスの『無何有郷だより』をみると、多くの子供達が、そこでは、自由な生活をして、森から丘へと遊び戯れてゐる。そ

こには學校といふものはない」。このなかの「子供達」を「女性たち」に、そして「學校」を「家庭」に置き換えて読み直してみますと、こうなります。「多くの女性たちが、そこでは、自由な生活をして、森から丘へと遊び戯れてゐる。そこには家庭といふものはない」。このとき高群が発見した、モリスの描くユートピアは、自らの心に宿す理想世界と完全に一致したものと思われまゝす。

私は、高群がどの訳書を読んでいたのか気になりました。このモリスの空想小説は、すでに過去においては堺利彦によって「理想郷」の訳題のもとに抄訳され、『平民新聞』に連載されていまして、その後も、「芸術的社會主義」という名辞のもとにモリスの思想と実践に関する研究書や紹介書が絶えることなく続くなかにあつて、高群が『戀愛創生』を発表する五箇月前の一九二五（大正一四）年の一月には、布施延雄が「無何有郷だより」という訳書題でもって、至上社から上梓していたのでした。

私は、布施延雄が訳した『無何有郷だより』を読みたく思いました。いつも利用する熊本県立図書館には蔵書がなく、近隣の図書館では、鹿児島県立図書館に所蔵されていることがわかりました。しかし、戦前の出版物ですので、利用は館内限定で、禁帯出になっているものと思われました。しかし、念のために、係の人を通じて鹿児島県立図書館に問い合わせてもらいました。そうしたら、驚くことに、「他館貸し出し可」しかも「コピー可」という返事が返ってきました。

熊本県立図書館の場合は、戦前に出版された本は、原則すべて禁帯出で、さらに加えて、高群逸枝のような熊本ゆかりの作家の著作は、戦後の比較的新しいものであつても、館内限定利用の制限がつけられています。少し前には奈良県立図書情報館から、そして今回は鹿児島県立図書館から、およそ一〇〇年前に世に出た本を貸し出してもらいました。そして、必要箇所のコピーもできました。僻地に住む独立研究者として、本当にありがたい対応に、お礼の言葉もなく、ただただ感謝した次第です。（七月）

二二．高群逸枝の「一文字のぐるぐる」

少し前に私は、この著作集 13 『南阿蘇白雲夢想』第四部「日々好々万物流転」のなかの第九話「この地の水と食べ物事情」で、「一文字のぐるぐる」という郷土料理に触れる機会がありました。それはおよそ、次のような内容でした。

地元の南郷谷に住む知り合いから、「一文字のぐるぐる」をいただきました。この料理は、熊本地方独自の郷土料理です。小さいころに母親がつくってくれた記憶が残っていました。しかし、高校を卒業すると同時に県外に出たので、それ以降これまで、一度も食すことはありませんでした。そのようなわけで、何と六〇年以上ぶりに、この日「一文字のぐるぐる」と対面したのでした。

一文字（ひともし）とは、ねぎの一種であるわけぎの別称です。「一文字のぐるぐる」は、一文字をゆがいて、上の緑色の葉を、そのまま根本の白い部分にぐるぐると巻き付けるだけの、いたって簡単な一品です。お酒にも合い、酢味噌でいただきます。白と緑の色合いがよく、ゆで加減にもよりますが、比較的やわらかく、やさしい食感があり、とろりとした汁のほどよい甘みが、酢味噌と絡み合いながら口のなかで広がります。一文字は、冬を越したいまが旬で、春の到来を感じさせるこの季節の食材なのです。

この日は、いただいた一口大の七、八個の「一文字のぐるぐる」と、別につけられていた、同じくお手製の酢味噌が、主役として私のテーブルに並びました。かつての母親の料理を思い出し、あわせて、幼いころの自分に再会したひとときでした。

さて、それから数箇月が過ぎ、熊本県立図書館で地元紙の『熊本日日新聞』のデジタル版を使って高群逸枝関連の記事を見ていましたら、興味深い話に出くわしました。それは、一九六一（昭和三六）年元旦の新年号三部四面に掲載されていた、熊本を離れて久しい、中村汀女、江上トミ、高群逸枝の肥後の著名女性による新春鼎談でした。中村汀女は俳人で、句誌『風花』の主宰者です。江上トミは、当時NHKテレビの「きょうの料理」で人気を博していた料理研究家です。高群逸枝は、対面出席はせず、紙上参加をしています。話題は、家のこと、学校のこと、郷土料理のこと、風土のこと、方言のことなど、多岐にわたりました。そのなかで高群は、思い出に残る郷土料理を聞かれると、「私はお客があると酒のさかなに『ヒトモジのぐるぐる』をよく作りました」と応じています。ここに、再び「一文字のぐるぐる」に出会った私は、この地に生きる人間に共通する自然な吐息のようなものを感じました。（七月）

二三. 「気候がおかしいのではなく、人間がおかしい」

八〇歳を過ぎた地元のお年寄りと話していましたが、最近の異常気象に話題が移りました。その人が子どものころは、冬にはよく雪が降り、隣り町からのバス便はしばしば途絶え、それでも人は気にかけず、夏は涼しく、いまのようなエアコンなどはなく、朝夕の冷気が、何よりのクーラーになっていた、ところがいまは——。そこで私が、「最近の気候はおかしいですね」と口を挟むと、間を入れず、静かな、そしてそっけない口調で、「気候がおかしいのではなく、人間がおかしいのですよ」という言葉が返ってきました。実は日頃から私も、うすうす感じていたことだったので、このときばかりは、心臓を射抜かれた思いに駆られました。

私がこの地方で生活をはじめてまだ一〇年ほどですが、この間、確かに、雪の量は減り、夏の暑さは増す一方です。確かに何かがおかしいのです。そのお年寄りにとっては、この間の気象の変動は、私が感じる何倍もの激変だったにちがいありません。しかし、その方にとっての心配事は、気候の変化だけではないようです。都会に出て行った子は、行ったきりでもどって来ず、田畑は荒れ、毎日草刈りに精を出すも追いつかず、いつかは墓守もいなくなり、すべてが無縁仏になる——これもまた、人間がおかしくなった結果だと、その人は思っているのです。その老人はいいます。「それを止めることはできません。最初っから人間は、そういう宿命に生きとつとですから」。

人間の脳の司令塔は、「前進」の掛け声しかもたず、「滅亡」への道を歩いていることを知りながらも、それでも「前進」「前進」と声を発しているようです。これが、避けがたい私たちの人類史なののでしょうか。そうであれば、もはや諦めるしかないのでしょうか。どうやら私も、次第に人類消滅の運命論者になってきたようです。（七月）

二四. 高齢者講習の認知機能検査

私の運転免許証は、来年一月二日で有効期限が切れますので、それまでに更新手続きをしなければならず、そのために、それに先立って高齢者講習を受ける必要がありました。前回一度、この講習を受けていますが、今回は、有効期限が満了するまでに七五歳になるため、講義と実車に加えて、新たに認知機能検査が課せられることになりました。

当日、申し込みをしていた地元の自動車学校へ行きました。一連の講義が終わり、いよいよはじめて経験する認知機能検査です。答案用紙の冊子が配布されると、氏名等を記入したあと、講師の先生が、「体の一部の〔耳〕です」「服のひとつの〔スカート〕です」「楽器のひとつの〔オルガン〕です」といった具合に、一六枚の絵を順番に見せてゆきます。そしてそれが終わると、答案用紙の所定の白紙に、順番にこだわることなく一六枚の絵の名前をすべて書いてくださいとの指示があります。一斉に受講生は鉛筆を走らせます。私は、半分の八つくらいまでは、すらすらと書けたのですが、そのあとが続きません。記憶をたどるように、絵を思い出しながら、やっと四つを書き加えたところで、時間切れとなってしまいました。一六のうち一二しか書けない結果になり、自分の記憶能力の貧弱さに驚くも、その余裕もなく、引き続き次の問題の指示が出ます。指示に従い、解答用紙の次の頁をめくると、「体の一部です」「服のひとつです」「楽器のひとつです」といった一六項目の文字が並んでいますので、それに対応する〔耳〕〔スカート〕〔オルガン〕といった用語を回答欄に記入してゆくことになります。これならできると思って書き進めていったのですが、何としたことか、途中でどうしても二個が思い出せません。思いもよらぬ結果に、自分自身啞然とした結末でした。

この数年、日常生活で忘れ物があつたり、勘違いをしたりすることが増えてきました。そうした自覚はあったものの、これがどの程度進行しているものなのか、数値的に知ることはありませんでした。しかし、自動車学校で受けたこの認知機能検査が、そのすべてを物語ります。釈明の余地もなく、受け入れるしかありません。結果は。「認知症のおそれがある基準には該当しませんでした」という評価で、運転免許証の更新に支障はありませんでしたが、悲しいやら情けないやら、複雑な思いで自動車学校をあとにすることになりました。（八月）

二五. シカが鳴く

秋になると、家の周りでよくシカ（鹿）を見かけるようになります。一匹よりも数匹でいることが多く、家族単位で行動しているようです。私の車の音に驚いて、一瞬じっとこちらを見たかと思うと、危険を察知したのか、一気に駆け出してゆきます。

昨年に続き二度目になりますが、先日私の別荘地に、ハンターの人影がありましたので、近寄って話をしてみました。近くに仕掛けをしたとのことでした。目的とする獲物は、シカとイノシシだそうです。今日はサルがかかっていたという話でした。こうした野生動物は年々増え、山里に下りては農作物を荒らすらしく、どの自治体も、捕獲された動物を、一匹いくらかで買い取っているようです。

ジビエ料理の代表格であるイノシシの肉は「ぼたん」、シカの肉は「もみじ」と呼ばれます。季節感を表わす言葉です。数年前、庭を歩いていたら、シカの角が落ちていたこともあ

りました。この時期は、シカの活動期なのです。夜になると、シカの鳴き声がよく聞こえてきます。「ヒュー、ヒュー」と鳴きます。昔の文人たちは、このシカの鳴き声を聞くために集まり、酒を酌み交わしたそうです。先日は中秋の名月でした。この日も、その美しい天空に届かんばかりに、森のなかではシカの遠音が響き渡っていました。古風を愛する人であれば、優美な酒宴の一夜になったかもしれません。（九月）

二六．病院の診察券が増える

年齢のせいでしょうか、病院通いが日常生活の一部になってきました。この一年でも、一回きりのものもありますが、次のような診療科で診察を受け、治療や手術をしました。

内科（七年前の心筋梗塞によるステント留置以来の、月に一度の継続診療）
泌尿器科（一一年前の前立腺がんによる全摘出以来の、不定期ながらの観察診療）
眼科（数年前から症状が現れた白内障の進行を遅らせる点眼薬の受け取り）
歯科（虫歯による歯痛緩和）
皮膚科（転倒の原因となった丹毒の診断）
整形外科（転倒による右膝骨折の接合手術）
リハビリテーション科（接合手術後のリハビリ）

わずか一年のあいだで、小児科、美容外科、産婦人科は別にして、精神科、呼吸器科、消化器科、耳鼻咽喉科以外はすべての診療科を受診したような気がしています。まさしく、満身創痍の状態なのです。このことは、診察券が増えることを意味します。

しかし、その一方で、これまで自然とため込んでしまっていた店舗ごとのお買い物券やポイントカードが減り始めました。買い物の機会が実際少なくなったことが大きな要因となり、それに伴い、金銭の管理を楽にするために、意識して、買い物をするお店を整理し、支払いの方法も、できるだけ単純化したためです。

年を重ねるごとに、診察券が増え、それに反比例してお買物券が減少する——私にとってこの現象は、近年のひとつの法則のようになってきました。しかし、診察券が限りなく増加し、お買物券が限りなくゼロとなったとき、そのとき私の身体と生活はどのような事態になっているのでしょうか。考えたくはありませんが、いつかは人間誰しもが遭遇しなければならない事態が、もうすぐそこまで来ているような気がしています。（九月）

二七．忘れ得ぬ病院でのリハビリ開始

町役場の駐車場で転倒し、救急車で運ばれました。レントゲンの結果、右膝にヒビが入っているとのことで、金属製の二本のピンとワイヤーで膝のお皿を固定する手術を受けました。手術から二週間後の翌日、無事退院ができました。自宅へ帰ってからは、通院が楽なように、地元の病院でリハビリを続けたいと思い、退院の際に、近所の南郷谷リハビリテーションクリニック宛ての紹介状を書いてもらいました。この病院には、整形外科、リハビリテーション科、内科の三つの診療科があります。整形外科担当の先生は、他の病院から週に何

回か来られる方のように、事前に電話でアポをとっての初診でした。さっそくレントゲンの撮影をしました。手術は、うまく行なわれているとのことでした。次に、担当される理学療法士の先生からリハビリの進め方の説明があり、さっそく次の週からリハビリに入ることになりました。

この病院に行くのは二度目でした。最初は、「ばね指」の治療で行ったのですが、病院の名称は「南郷谷整形外科」といっていました。院長は、最近 NHK を退職されてフリーとなられた武田真一アナウンサーの御父上でした。神戸から来たばかりで、見慣れない印象を与えたのでしょうか、診察が終わると、「あんたはどこから来たとかい」と、懐かしい熊本弁で声を掛けてくださいました。どンドンと話が弾んでゆくと、「それじゃ、あんたの高校はどこや」と聞かれ、「熊本高校です」と答えると、うれしそうな顔をされて、「よし、それじゃ入ってくれ」といって、阿蘇南部江原会の名簿を渡されました。見ると、この南郷谷に住む二十数名の熊本高校の卒業生の名前が並んでいました。若い会員可能者は都会に出てゆき、地元に住む会員は高齢化し、そのため会員の数が減少していたところに、たまたま私が、神戸からこの地に移住してきて、会員獲得の絶好の対象になったというわけです。これ以降、春の花見、冬の忘年会に出席するようになりました。しかし、残念ながら、院長の武田先輩は、その後しばらくしてお亡くなりになりました。そして、病院の名称も、「南郷谷整形外科」から「南郷谷リハビリテーションクリニック」に変わり、その病院でいま私はリハビリを受けているのです。診察室から武田院長が現われ、「どぎゃんしたとかい」という声が聞こえて来そうな気がします。私にとっては、忘れられない病院なのです。

因みに、院長の御子息の武田真一さんは、高校も大学も私と同窓になります。しかし、これまでにお会いしたことはなく、いつもテレビの画面越しに声援を送っています。いっそうのご活躍を祈ります。（一〇月）

二八. なじみのコンビニが閉店する

私が日々通う瑠璃温泉の近くに一軒のコンビニがあります。瑠璃温泉が開館した時期と同じころに開店したように記憶していますので、すでに二〇年を超える営業が続いているのではないかと思います。ところが、そのコンビニが閉店することになったのです。

その後、この国道沿いに次々とコンビニが現われ、過当競争の状態になっていました。数箇月前には瑠璃温泉が売却されるとの新聞報道が流れていただけに、この老舗コンビニの閉店は、それに続く地域衰退の象徴となる出来事でした。

瑠璃温泉に近くて便利のために、コンビニといえば、いつも私はこの店を利用していました。お中元やお歳暮の季節になると、郵送されてくるカタログを見ては、いつもここで発送依頼をしていました。国立国会図書館へ支払う資料複写料金もここから振り込んでいました。あるとき、こんなこともありました。瑠璃温泉に入館する前にいつもその周囲をウォーキングするのですが、突然雨が降ってきて、この店に駆け込みました。単なる雨宿りのつもりだったのですが、親切にも、濡れた髪や服をふくためにタオルを貸してくれ、帰りには、傘までもたせてもらいました。またこんなこともありました。たまたまヴァレンティンの日でした。ウォーキングのあとカウンター席に座って、好物のジャンボモナカアイスを食べたら、「ヴァレンティンですので、どうぞ」といって、チョコレートをいただいたことも、

記憶に残っています。

私が立ち寄る時間は、瑠璃の開館前ですので、ほぼいつも同じ時間です。その時間帯は、既婚のふたりの女性が入っています。暑い日は暑いなりに、寒い日は寒いなりに、会計の際に短いながらも会話を楽しみます。彼女たちとも、閉店に伴いお別れです。最後の勤務の日が近づいたある日、私は行きつけの花屋さんで花束をふたつつくってもらい、長年の務めをねぎらい、あわせて、これまで私に与えてくださった数々の親切に感謝をして、お渡しすることができました。（一〇月）

二九．人の親切のありがたみを知る

退院後、週二回のリハビリを近くの病院で行なっています。しかしまだ、外出中は杖が離せません。

先日、このようなことがありました。ディスカウント・ショップで会計をすませると、店員さんが近づいてこられ、言葉に甘えて、カウンターでレジ袋に入れる作業をしてもらいました。これだけでも私にとってはありがたかったのですが、袋詰めが終わると、何と今度は、品物を詰めたふたつのレジ袋を、駐車場の車まで持って行くことを申し出てくださったのです。いままでに経験したことがないことでしたし、そこまでの期待も想像さえすることのなかったことでしたので、正直、びっくりしました。左手で杖をついて、右手でレジ袋をもち、駐車場まで二往復する姿を想像されたのでしょうか、本当にありがたい申し出でした。すべてをおまかせし、楽をさせてもらいました。しかし、このようなとき、どのようなお礼の言葉があるのか、一瞬、戸惑ってしまいました。

また先日は、こうしたことがありました。コインランドリーで乾燥が終わると、近くでフィルターの清掃をされている方に、「ありがとう」の言葉をかけて、自動ドアの方へ歩き出しました。すると、後ろからかけてこられて、私の横からちょうどいいタイミングで、ドアの開放ボタンを押してくださいました。乾燥した洗濯物の入った大きな手提げ袋を片方の手にもち、一方の手で杖をついて歩く者にとっては、ボタンを押すという、ちょっとした行為も、歩行の重荷になります。おそらくその方は、経験的に、あるいは本能的にそのことをご存知だったのかもしれませんが。ありがたくも手助けしていただき、スムーズにコインランドリーの外へ出ることができました。いままでにない感覚が湧き出てきました。果たして、ふさわしいお礼の気持ちを十分に伝えきれたのだろうか。

この間、こうした、人の親切を、外出のたびに経験しています。けがをして、はじめて知るありがたみです。（一〇月）

三〇．前立腺摘出後の経過観察の終了

夜間のトイレの回数が多くなったので、泌尿器科で調べてもらおうと、前立腺がんの指標とされる PSA の値が一〇を越えていました。正常値の上限が四ですので、明らかに危険信号を発していました。精密検査が必要であるとの医師の判断に従い、私が勤務する神戸大学の付属病院を紹介してもらいました。いろいろな検査がなされました。その結果、前立腺がんであることが判明し、教授の主治医から全摘出が望ましいとの勧めを受けました。手術は、

ルネサンスの芸術家で「神の手」をもつといわれるレオナルド・ダ・ヴィンチに因み「ダヴィンチ」の名称で当時脚光を浴びていた新式のロボットを使って行なわれました。そして、無事終了しました。定年を半年後に控えた、二〇一二（平成二四）年八月の夏休暇のことでした。

それ以降、定期的に病院を訪れ、PSA を測定することが日常化しました。全摘出しているとはいえ、わずかながらがん細胞が残っていて、それが数値を押し上げることもあり、その経緯を観察するためです。最初は、限りなくゼロの値からはじまりました。こうして半年が過ぎ定年を迎えると、私は、神戸から阿蘇に転居し、そこで新しい生活をはじめることになり、紹介状をもって熊本市内の病院へ行きました。この時期あたりから、少しではありますが、上昇しはじめていました。といっても、いまだ一には達しない数値です。この後、通院に便利のように、私の住まいに近い病院を紹介してもらい、だいたい数箇月間隔で通院することになりました。今年で、手術から一一年になります。そして、七五歳の後期高齢者になります。この間数値は、一・五前後で推移していました。先日、半年ぶりに、予約していた日に病院に行きました。この日、主治医の先生から、「数値に大きな変化はみられず、術後一〇年が立っていることもあり、ここで一応、経過観察は終了し、あとは、何か大きな違和感が生じた場合に来院してください」と、告げられました。これを聞いた私は、その瞬間、「やっとこれで、前立腺がんから卒業ですね」という言葉が口から出ていました。実に長い前立腺がんのおつきあいでした。（一〇月）

三一．母親の再度の入退院

母親が体調を崩し、いつものかかりつけの病院に入院したのは、八月の末のことでした。少し脱水状態にあり、歩行能力も落ちていました。その母が、退院しました。母は、部屋への人の出入りが少なく、人と会話をする機会があまりない、静かな施設よりも、リハビリの先生や看護師さん、それに同室の患者さんたちと毎日話ができる、にぎやかな病院の方が好きなのですが、規則により入院は、原則最長で二箇月と決まっているらしく、意に沿わない退院でした。主治医の先生は、そのことに理解があり、「具合が悪くなったら、いつでも入院してもいいですよ」、といてくれています。これが、九六歳の母に安心感を与えているようです。

実は、母が入院しているあいだの一箇月間、別の病院ですが、私も膝骨折の手術で入院していました。これは、私にとってとてもいいタイミングでした。といいますのも、施設での生活とは違って、病院生活は、すべての面での支援が行き届いているからです。

退院に伴い、施設での生活がはじまりました。毎週月曜日には、いつものように施設に行きます。そこで、部屋の片づけをしたり、買ってきた好物を冷蔵庫に入れたり、洗濯物を持ち帰ったり、施設の方や介護担当者みなさんと意見の交換をしたりするのです。

私も、九月に思わぬケガで入院しました。そして、もうすぐ一二月には後期高齢者になります。施設での生活や病院生活も、もはや母親ひとりの問題ではなく、自分自身の問題として、実感するようになってきました。（一〇月）

三二．七回目のコロナウイルスのワクチン接種

コロナウイルスのワクチンを接種しました。今回が七回目です。手もとの記録によりますと、二〇二一（令和三）年六月二日に初回の接種をしています。この間、およそ二年と五箇月の歳月が流れたことになります。この新型ウイルスの感染拡大に関心が集まり始めたのは、その前年の二月ころだったと記憶しますので、ここから起算しますと、実に、三年九箇月ほどの長期にわたって、私たちは、新型コロナウイルスの脅威にさらされているのです。

話は変わりますが、この数箇月で、近所のスーパーマーケット、コンビニ、行政書士事務所が閉鎖され、それに加えて先日、かかりつけの眼科から年内閉院の通知が届きました。自分が日常的に利用していた店舗や病院ただだけに、言葉に表わせない、寂しさや虚しさのような感情が襲ってきました。廃業に至る理由は、おそらくさまざま、売り上げが落ち込んだことや適材の後継者が見つからなかったこともあるのかもしれませんが。この地区の人口減少は加速しています。そのことは、働き手が都会へと消え、地元の購買者や利用者の数が、勢い失われてゆくことを意味します。明らかに、既存の店舗や施設の数量に比べて、絶対的人口数が不足しているのです。人口増加の兆しは見えません。そうすると、結果として、自然と、店舗や施設が淘汰されることになります。

私にとって今回のコロナウイルスのワクチン接種は七回目でしたが、この間、人は家で過ごす時間が多くなり、店舗や施設への出足が確かに鈍りました。こうした、一種の自然災害も、廃業や廃院に拍車をかけていたのかもしれませんが。ワクチン接種の回数が増えることと、地元民の苦境とは、相関関係があるのではないかという思いが、接種を受けながら頭をよぎりました。コロナウイルスから完全に解放される日は、いつ来るのでしょうか。（一一月）

三三．後期高齢者の保険証が届く

町役場から「後期高齢者医療被保険者証」が届きました。七五歳の誕生日にあわせて発行されたものです。

「前期高齢者」は、六五歳の誕生日から七五歳の誕生日の前日までの一〇年間です。そうすれば、「後期高齢者」は、七五歳の誕生日から八五歳の誕生日の前日までの一〇年間を指すのでしょうか。そのような定義はないようですが、男女の平均寿命の中間をとれば、確かに八五歳ころになりますので、そう考えてもいいのかもしれません。そうであれば、一二月の誕生日から「後期高齢者」なる私の余命は、わずか一〇年となります。そう思うと、この状況からもはや逃げ出すことはできず、何か急に死の宣告を受けたような感じにさせられてしまいます。

この年になると、おそらく誰も、自分はあと何年生きるのだろうかとか、どんな老後を過ごすのだろうかとか、そういった思いが頭をよぎるのではないのでしょうか。考えても答えの出る問題ではないのですが、そんなことに頭を使うのが人間なのかもしれません。

同じ年齢の人とこうした問題を話題にすると、いつも「ピンピンコロリ」がいいよね、という結論になります。寝たきりになったり、周りの人の介護に頼ったりする老後生活に入る前の元気なうちに最期を迎えることを、みな望んでいるのです。私もそのひとりですが、思いどおりにならないのが人の人生だと思うと、気持ちが沈みます。この庭に寄って来る虫も鳥も、そんなことに思いを巡らしたりはしていないのにね。（一一月）

三四．母親の脳梗塞

母親が、一〇月三〇日にかかりつけの病院を退院し、施設にもどりました。ところが、予約していた十一月六日の退院一週間後の診断に連れて行ったところ、この間あまり体調が優れず、母親の希望と主治医の判断により、そのまま入院することになりました。

十一月二〇日に面会に行ったときは、とても元気で、話も普段どおりにできていたのですが、翌二一日の早朝、主治医から電話があり、脳梗塞を発症し、これから急性期の病気を扱う基幹病院に搬送することが告げられました。この病院は、私がかつて心筋梗塞で運ばれた病院でもあり、少し事情がわかっていました。病院に到着すると、検査結果を踏まえて主治医から病状の説明があり、間違いなく脳梗塞を発症しており、いま手術室で詰まった血栓を除去するカテーテル治療を施しているとのことでした。その後、カテーテル治療を担当した医師から説明があり、うまくいき血流が再開したとのことでした。しかし、脳の一部の細胞が壊死する脳梗塞を発症しており、そのため、言語障害と右手足にまひが残る可能性があるとのことでした。しばらくして、母親は、手術室から集中治療室に運ばれ、面会ができました。目は開けてこちらを見つめていましたので、意識障害はないものと思われましたが、言葉は出ませんでした。

翌日、入院に必要な用品や提出書類をもって面会に行きましたが、やはり言葉はなく、手足もしびれているようでした。ここは、一週間に一度の面会に制限されていました。五日間の入院予定でしたが、時間がかかり、集中治療室から一般病棟に移るとの連絡が入ったのは、二八日のことでした。そしてすぐ、再び携帯の呼び出し音が鳴り、一二月一日の午前中にかかりつけの病院から迎えの車が来て、そのまま転院することになったとの説明がありました。

当日、退院に立ち会いました。実際に母親に会って話しかけると、言葉は失われていますが、うなずきはしますので、状況は少し理解できているようです。リハビリ担当の先生の説明によると、脳梗塞としては重度のもので、転院先でのリハビリによって、言葉や身体機能の回復に全く見込みがないわけではないとのことでした。

もとの病院に帰ってきました。看護師さんもリハビリの先生たちも、母親のことをよく知る人ばかりで、廊下ですれ違うと、みな声をかけてくださいます。母親にとっては、自分の家にもどったような気持ちになっていたかもしれません。さっそく CT の検査がはじまり、その後主治医の話がありました。結論としては、鼻から胃に通してあるチューブから栄養分や水分、それに薬剤等を入れて生命の維持を図り、他方で、回復期のリハビリを集中して行ない、しばらく様子をみながら、再び相談の場を設けてその後の対応を考えるということになりました。

この病院の主治医の先生は、とても頭の低い、親切でやさしい方です。今後も親身になって対応してもらえるものと思います。その点、私は安心しています。（一二月）

三五．母親の死去と父親の三回忌

一二月五日の夜の一〇時過ぎ、母親が入院しています病院から、容体が急変したとの連絡

がありました。取り急ぎ、病院へ急行しました。病室では救急救命医の先生と看護師さんが、懸命の対応に当たっていらっしゃいました。母親に話しかけました。目を開けて、こちらを向いています。しかし、口元がかすかに動くだけで、言葉は出ません。それから一時間が立って、脈と呼吸が止まりました。死亡時刻は、日付が変わった六日の〇時五九分でした。

母親の遺体は霊安室に移されたのち、迎えの車で葬儀社へ運ばれ、そこに安置されました。私は一度自宅に帰り、用意をして葬儀社に向かいました。葬儀の段取りについて、事前に相談していた内容を最終確認させていただき、その後、湯灌の儀に臨み、納棺が終わって、いよいよ菩提寺の蓮政寺に向けて出発。ひつぎは本堂に運ばれ、そこで通夜を営みました。

翌日、葬儀を執り行ない、火葬ののち、再び蓮政寺にもどり、母親の初七日と、一週間後に予定していました父親の三回忌の法要をあわせて行ない、そのあと納骨の儀が続き、滞りなく、わが家の納骨堂に遺骨を納めました。

通夜と葬儀には、妹夫婦、佐賀に住む彼らの娘の家族、そして神戸に住む私の娘が参加しました。私の息子家族は、現在シンガポールに駐在しており、今年の年末年始に一時帰国を予定していましたので、そのとき親族そろって再び集まり、四十九日の法要を、少し早めて一二月三〇日に行なうことにしました。

二年前に父を亡くし、そしていま、母を見送りました。（一二月）

中山修一著作集 1 3

南阿蘇白雲夢想

第三部

燎原に幻影あり（小説集）

2021 年 7 月

著作集 13 『南阿蘇白雲夢想』
第三部 燎原に幻影あり（小説集）
目 次

中山修一著作集 13
南阿蘇白雲夢想

第三部
燎原に幻影あり（小説集）

目 次

序に代えて	三
第一編 沈みゆく村落	四
第二編 雪消を待つ女	一九

序に代えて

この、著作集 13 『南阿蘇白雲夢想』の第三部「療原に幻影あり（小説集）」は、現在、「目次」にもありますように、以下のふたつの編から構成されています。

第一編 沈みゆく村落

第二編 雪消を待つ女

詩歌や随筆では、うまく表現できない内容もあります。あるいは、小説という形式に頼らなければ書き表わせない内容もあります。この著作集 13 『南阿蘇白雲夢想』の第三部「療原に幻影あり（小説集）」は、ご覧のように、フィクションの形式をとった私にとりましての、いわば近年の「社会観察の記録」です。この間の生活で見聞きした社会的素材を全面的に一度解体し、一定の主題に即して、用意した虚構空間に再構築してみました。文末に示しています「初出」からもおわかりのように、なかには、地元の文化雑誌へ寄稿したものもあります。大事な記憶が遠ざかる前に、したためておきたいと思います。

（二〇二一年初夏）

第一編 沈みゆく村落

一.

星川信夫がこの奥阿蘇町に移住してきたのは、定年を迎えた二〇一三（平成二五）年三月の翌月のことであった。それまで信夫は、関西のある大学で工芸史を教える教員をしていた。信夫の退職後の夢は、栄華の巷から独り離れ、ひっそりと山にこもり、残された執筆に専念することだった。ちょうどいま、その実現のための入り口に、信夫は立っている。

移住先の奥阿蘇町は、阿蘇地域の一番西の外れに位置し、ここに、現役で働いていたときに取得した小さな山荘があった。二十数年前の話になるが、信夫は、別荘用として売りに出された分譲地の南西の一角を購入し、自分好みのデザインによってこの山荘を建築した。そのとき以来、信夫のお気に入りの隠れ家となり、春と夏の大学の休みの時期、静かに集中して、ここで論文を書くことが習わしとなっていた。

信夫の家と庭は、二区画をあわせた一五〇坪弱のゆるやかな斜面の敷地に設けられていた。もともとの分譲地は山林であった。当時、地元の開発業者によって整備がなされ、二十数区画に分割されて販売された。いま、そのうちの半数弱ほどの区画に家が建っているが、どの家も別荘として使われ、信夫以外にいまだ定住者はいない。下の集落の畜産農家がトラックに乗せて牛を運ぶための牧野道を上り切ったところにこの分譲地はあった。北の一面は見渡す限りの草原で、牛の放牧場として使われ、残りの三方をスギ林が囲い、いやがうえにも晩年の隠棲にふさわしい、世俗を超えた非日常の空間をつくり上げていた。

二.

転居の手続きのために、信夫は町役場へ行った。転入に際しての必要な書類に記入が終わり、それが受理されると、おもむろに信夫は、対応したその職員にゴミ出しについて尋ねた。

「私の分譲地には、ゴミ出し用のステーションがないのですが……どうしたらよいでしょうか……ステーションを設置していただけないでしょうか」。

すると職員は、こう答えた。

「この別荘地にはこれまで永住者はいませんでしたので、ゴミ・ステーションは設置していません。それでは、一番近くのゴミ・ステーションに出してもらって結構です。ゴミの分別表とゴミ出し曜日のカレンダーがこのパンフに記載されていますので、これを見てください」。

信夫は、すぐさま反応した。「『一番近くの……』とおっしゃいますが、そんなことをしたら、その住民はけげんに思うのではありませんか。よそ者が勝手に捨てに来た、と迷惑がられたり、不審に思われたりしても……」。

「そうですか、それでは、町のゴミ集積場が、役場の前の道を数百メートル先に行ったところにありますので、そこへ直接持参してください。一〇キロまでは無料です。土日は休みですが、分別さえきちんとしていていけば、出す曜日に制限はなく、いつでも受け付けてもらえます。詳しくは、先ほど渡したパンフレットに書いてありますので、読んでみてください」。

信夫は、職員のあまりもの冷徹な態度に驚いた。実のところ信夫は、人口が減少しているこの町に転入してきた自分を、町は歓迎するにちがいない、と内心思っていたのである。しかし、そのような様子はどこにもない。信夫は、町民の権利とばかりに、少し語気を強めた。

「私も町民のひとりとして、これからここで生活するわけですので、何とか私の住む場所にも、ゴミ・ステーションをつくってもらえないでしょうか」。

「それは無理です。ひとりのために、ゴミ・ステーションをつくることはできません。お手数ですけど、近くのゴミ・ステーションか、ゴミ集積場まで持って行ってもらえませんか」。

信夫は老後の新しい生活の出発点としてこの町を考えていた。それだけに、職員が発したこの返答は、信夫の初々しい町民意識を頭から砕いてしまい、つなぐ言葉がすぐに口から出てこなかった。よそ者だから、そういつているのであろうか。昔からの町民に、ゴミ収集はしなくなったので、各自ゴミ集積場まで持って行くようになどとは、いうはずがない……。信夫の心中は穏やかではなかった。そうした信夫の気持ちを尻目に、職員は別の話題を切り出した。

「ところで星川さん、この町では、住所ごとに駐在区が設けられており、各駐在区には、駐在囑託員と呼ばれるお世話係の人がいて、その人が、役場からのお知らせやパンフレットなどの回覧文書を配布しています。この用紙に、星川さんの駐在区名と、駐在囑託員のお名前と電話番号が書いてありますので、できるだけ早く、駐在囑託員の方に転入の連絡をしてください。お願いします」。

信夫は、これには何も答えず、質問もしなかった。小さく「ああ、はい」と、下を向いてうなずくだけだった。決して関心がないわけではなかった。信夫の頭は、まだゴミのことで整理がつかず、思考の余裕を失っていたのである。

三.

数日後、信夫は、渡された用紙に書いてあった駐在嘱託員の電話番号に電話をした。出たのは女性の声であった。駐在嘱託員の妻であるらしい。信夫は転居したことを告げ、さらに、ごあいさつに伺いたいと申し出た。というのも、関西に住んでいたときには、このような駐在嘱託員といった制度はなく、そこで、直接会って、どんな人なのか、そして、どんな業務をする人なのかを自分の目で確かめてみたいと思ったからである。その女性は、自宅のある場所を説明した。信夫は手持ちの地図で道順を確認すると、さっそく出かけることにした。

その家は、車で一〇分ほどのところにあった。敷地に入ると、庭というよりは、数台の車が十分に置けるくらいの駐車スペースが広がり、信夫はここに車を止めた。車から降りると、何かが天日干しされている様子がうかがわれ、ひょっとしたらこの空間は、農作業に使うスペースだったのかもしれない。右手に、農機具などを入れる大きな納屋があり、そして左手に、新しそうな住まいが配置されていた。典型的な最近の農家の家構えである。玄関には表札が掲げられ、駐在嘱託員の名前と一致した。信夫は呼び鈴を押した。奥から女の声が聞こえ、玄関の戸が開いた。

「はじめまして。私、先ほど電話をしました星川信夫と申します。ごあいさつに伺いました」。

そういつて信夫は、手土産と名刺を差し出した。女は、現在自分の夫が、町からの委託を受けてこの地区の駐在嘱託員をしていることを伝え、丁寧に手土産のお礼をいった。駐在嘱託員には任期があり、数年ごとに交代するらしい。そして夫は、代々受け継いだ農業を数年前に止め、田植えも稲刈りも業者に任せ、その一方で、収入を確保するために、隣り町にある会社に毎日通勤しているという。この町によく見かける脱農業のサラリーマンなのである。ひととおり自分の夫のことを話すと、続けて女は、「失礼ですが、星川さんはどちらからいらしたのですか」と、尋ねた。顔の表情や口調から、この男がどこから来て、何のためにここに住み着こうとしているのか、怪しんでいることが読み取れた。信夫は、不審な人間ではないという思いを込めて、こう答えた。

「実はこれまで関西の大学に勤めていましたが、定年を迎え、今後の論文の執筆は、自然豊かな奥阿蘇町でしたいと思ったものですから、ここに引っ越してきました……家は、二十数年前に分譲されたときに買って、建てています」。

この説明で、女の不審が解消されることはなかった。それどころか、関西とか、大学とか、論文とか、日ごろ使い慣れない用語が、彼女の怪しむ視線を強化させてしまったようである。女は、率直に驚きの表情を見せ、「よくまあ、こんなところまでいらっしゃいましたね」と応じた。信夫は、この発語から、歓迎というよりも、むしろ迷惑に通じる音の響きを感じ取った。しかし、町からの回覧文書は受け取らなければならないと、頭を下げて、今後の配布についてお願いをすると、何やら居場所を失って倒れかかるようにして、玄関の外に出た。

四.

それから一年近くが過ぎた。いっこうに町からの回覧文書が届く気配はなかった。駐在嘱託員の妻に名刺も渡している。そこに住所も電話番号も書いてある。なぜ持って来ないのであろうか。その間、折に触れては、このように不思議に思うことが、確かにあった。とはいえ信夫は、年に何回、どんな回覧文書が町から発行されるのかさえも、よく知らなかったし、加えて、もともと世俗を離れての隠遁生活である以上、町の動きについての情報など、ぜひとも必要とするわけでもなかった。

ところがそうするうちに、県議会議員と町議会議員の選挙がはじまった。投票日と投票会場が印字された葉書は、町の選挙管理委員会から郵送されてきたものの、選挙公報がどこからも届かない。どんな人が何人、立候補しているのか皆目わからない。選挙公報は駐在嘱託員の手を通して配られるものなのか、それもよくわからない。とうとう投票日が過ぎてしまった。そして間を置かずして、今度は国勢調査がはじまった。この調査についても、誰からも何の連絡もない。信夫の思いに、この町から見放されているような、裏を返せば、何か差別を受けているような、怒りにも似た熱い感覚が、にじみ出てきた。

信夫はこのことを質そうと、町役場に行くことにした。対応に出た職員に、信夫はこう切り出した。

「先日の県議会議員と町議会議員の選挙ですが、私のところには選挙公報が届かなかったのですが……どうしてですか」。

職員は少々困惑気味に、「駐在嘱託員さんが……」といって、言葉を止めた。信夫は攻めた。「一年前に転入してきたとき、役場の人から、駐在嘱託員さんにあいさつをするようにといわれたので、そうしたのですが、今日まで、何ひとつ回覧文書は届いていません」。職員は、「そんなことはないと思いますが……そうなんですか……」と、しきりに困惑してみせる。信夫はさらに攻め立てる。「なぜ私のところには町からの回覧文書が届かないのですか……これからは、町の職員が直接持って来てください」。「いや……それはできないのですが……」。「それでは、郵送してください」。「いや……それも……ひとりを特別扱いすることになりますので……」。「それでは、どうすればいいのですか」。

少し空白の時間が漂うと、職員は、こう力を込めた。

「わかりました。この場合、星川さんご本人に、役場に取りに来てもらうしかありませんね……だいたい二週間ごとに、広報や議会便りや、それ以外にもさまざまな文書が出ます……取りに来るのが大変でしたら、ある程度のものは、町のホームページにも掲載していますので、それをご覧になったらいかがでしょうか……」。

これを聞いて、信夫は、啞然とした。なぜ、自分のところだけ、駐在嘱託員の制度が機能していないのだろうか。なぜ、自分だけ、役場まで回覧文書を毎回取りに行かなければならないのだろうか。この一年、ほぼ二週間に一回発行されていたという回覧文書が届い

ていなかったことを知って、町は何も責任を感じないのであろうか。とりわけ、最近の選挙公報が配達されなかったことを、どう思っているのだろうか。信夫の脳裏を、幾つもの疑問と憤懣が渦巻いた。

しかし、それをこの職員にぶつけても、誠実な回答が返ってくる様子も感じられず、すべて、胸のなかに呑み込んでしまった。そして信夫は、もうひとつの国勢調査について問い質した。

「選挙公報もそうですが、最近行なわれた国勢調査についても、この間何の連絡もありませんでした。どうしてなのでしょう、私は調査の対象ではなかったということでしょうか、それとも……」。

明らかに信夫は、「それとも、町から無視されたのでしょうか」と、続けたかったのであるが、「それとも……」で、口を閉じてしまった。無視されたことをはっきりここで確認されることを恐れ、避けてしまったのである。しかし、結果的に無視されたことには変わりはないが、どうやら意図的に無視している様子でもなかった。職員は、「え、え……」と、何ともいえない音を何度も発し、「それでは、ここですぐ記入してください」と、信夫に要請した。「いや……テレビでやっていましたが、調査はもう終わっているのではないですか……」。「いや、まあ、大丈夫です、間に合います」。そういって、職員はすぐさま調査用紙を差し出し、鉛筆を横に置いた。信夫は、新参者である以上、無理に事を荒立ててはいけないという変な本能的判断が働き、こんなことが有効なのかどうかもあえて確認しないまま、あたかも強制されたかのような状況下で鉛筆を握りしめた。役場からの帰り道、信夫は、本当に自分はこの町の町民なのだろうかと、独り繰り返し自問していた。

五.

ある日、友だちが遊びにやって来た。信夫がこの町に来て、あっという間に数年が過ぎたが、家に引きこもって仕事をしているため、ほとんど地元住民との接触はなく、そのため友人と呼べる人の数も限られていた。信夫の日々の唯一の楽しみは温泉に行くことであった。定年の前年、信夫は前立腺がんを患い、全摘出していた。それ以来、尿のトラブルに悩まされ、この地への移住を決意したのも、ひとつには、温泉療法により少しでも排尿機能を改善したいという思いからであった。確かに毎日の温泉通いは、信夫の病後の体にとって効果的だった。それと同時に、予期せぬことに、温泉友だちもできた。開館を目指して毎日一番風呂に来るのは決まった数人で、まずサウナに入って、そこで日常雑事に関する談義を楽しむのが、自然と習慣になっていた。信夫同様、誰しもが、どこか体に不具合を抱えていた。そのことが、互いに心を開かせ、距離を縮めていった。この日訪ねて来た友だちも、そうした信夫の温泉仲間のひとりで、名前を富田雄一といった。富田は、信夫とほぼ同じ年齢であった。この奥阿蘇町で生まれ育ち、県外で就職したものの、途中で辞めてこの町に帰り、いまは年金に頼る生活をしていた。そのため、町のことならほぼ何

でも知っていて、信夫にとって富田は、この町の土地柄を知るうえでの数少ない貴重な情報源となっていた。

いつも客に接するときと同じように、信夫はコーヒーを用意した。ふたりは、庭を眺めながら、ひとしきり雑談に興じた。それが一段落すると、少し富田にこの町のことを聞いてみたいという誘惑に駆られ、信夫は、こう話題を転換した。

「富田さんが小さいころは、この町はどんな感じでしたか」。

「そうですね、この町は交通の要所で、商店街も活気があり、とくに春の初売りのときなどは、商店通りの両脇に外からの商売人たちがずらりと仮設の店舗を並べ、子どもたちは、それをのぞき込みながら、珍しいおもちゃやお菓子を買うのが楽しみでした。いまはもうありませんが、当時は旅館も数件あり、夜になると、料理屋から三味の音が聞こえてくることもよくありました……まあいまは、ほとんどの商店がシャッターを閉めています……大きく変わりましたよ」。

それを受けて、「やはり、人が減っているのでしょうか」と、信夫が問いかけると、こう、富田が返してきた。「私の子どもころは、この町には一万人を超える住民がいました。そして、自分が通った町の県立高校は、一学年四クラスありました。それがいまでは、人口は半減し、高校は一学年ひとクラスですよ、寂しいもんです……もう私も最近七〇を超えましたが……何もかもが移り変わってゆくんですね……この間、廃校になった小学校も幾つもあります、それに伴い学校区も変化してゆきました……さらには、町の居住区を示す大字名も、かつては一〇以上あったものが、いまでは数えるほどに減少しています……今後は、どうなってゆくのでしょうか……明らかに縮小社会です……いつかはすべてが消えてなくなるのでしょうか」。

富田の返答には、昔を懐かしむ思いとともに、諦めの境地も幾分交差し、顔には、何かやるせないような趣さえ見受けられた。富田の表情を察した信夫は、こうした話題はあまりよくなかったのかな、と重いものを感じた。

ここで少し話の流れが途切れた。しかし、しばらく間を置くと、富田は再びコーヒーカップに口をつけ、何か吹っ切れたときの、あのさばさばした顔色に変わり、自分から積極的に話し出した。この町のことを知らない信夫に、少しでも話題を提供して、何か役に立ちたいと思ったのかもしれない。富田はこういう話題で会話をつなげた。「星川さん、知っていますか、普通、単身赴任というと、夫が家族から離れて外へ仕事に出ることをいいますよね……」。信夫は相槌を打って、「そうですね」と言葉を重ねた。それを確かめると、続けて富田はこういった。

「ところがこの町では違うんです……この町の子どもたちは、だいたい小学校までは地元 학교に通いますが、ある程度お金があり、教育熱心な家庭では、中学か高校に入るときに、母親とともに家を出て、市内の學校に通うようになるのです。その結果、父親だけが独り地元に残って働くことになります。つまり、逆単身赴任なのです」。

はじめて聞く「逆単身赴任」という言葉に、信夫は心底驚いた。そして、進学にかかわる過疎地の田舎の深刻さを思い知らされた。さらに富田は、少々自嘲気味に、こう話を続けた。

「母親は、一緒に市内で暮らしながら、有名校に通う子どもの世話をする。そして、昼間の時間はパートとして働きに出て、生活費と学費を稼ぐ。これが一般的なパターンです。子どもは学校を卒業すると、今度は県外の都会の大学に入り、そのまま就職して、町には帰ってくることはほとんどありません。そして、こうなることは、親も子も、言わずもがなの了解事項となっているのです」。

都会暮らしが長かった信夫は、この町のことを、第二の人生を送るのにふさわしい自然豊かな桃源郷とばかり信じ込んでいた。しかし、この町の住民が置かれている実情を具体的に知るにつれ、その見方は、ひょっとすると一方的で単純すぎるものだったのかもしれない——信夫は、これまで自分が確信してきた生活感覚のようなものに、少しずつ、漠然とではあったが、疑問を感じはじめた。すでに、信夫のわずかばかりの知識の片隅にも、自分の地区担当の駐在嘱託員が、この時流のなかにあって農業を諦め、慣れないサラリーマンになっていた事例が刻み込まれていた。信夫のような移住者にとっては、この町は、自らの意思で自由に選び取った、晩年を楽しく過ごすための希望の町であった。しかしながらその一方で、生まれ育った地元民にとってのこの町は、教育の機会やら農業の継承やらにかかわって、自ら望まない幾重もの不自由さをやむなく引き受けざるを得ない宿命の町となっていた。信夫は、尋ねてきた富田との会話を通じて、そのギャップにはじめて気づかされたのであった。

六.

信夫が七〇歳を迎えたとき、町との関係が、新たに生まれた。ひとつは、町が運営する奥阿蘇温泉館の入場料が、高齢者福祉の一環として、半額になったことである。毎日通う信夫にとって、ありがたい対応だった。信夫はこの地に移住してからこのかた、理不尽とも思える役場の指示に順応しながら、町が発行する回覧文書は、駐在嘱託員を介すことなく、だいたい二週間に一度、直接自分で役場まで取りに行っていた。また、ゴミについても、ひとりの住民のためにはゴミ・ステーションを設置しないという町の見解に従い、そして同時に、近隣のゴミ・ステーションにこっそり隠れて置くことへのためらいもあって、ふた袋くらい生活ゴミが溜まると、車に乗せて町のゴミ集積場まで持参していた。このように日々難儀を背負わされていた信夫にしてみれば、半額で奥阿蘇温泉館に入湯できるようになったことは、町から授かったはじめての恩典であり、多少なりとも心和らぐ瞬間であった。

もうひとつの町とのあいだに発生した新たな関係は、今後毎年、敬老祝い金が出るようになったことだった。町から一通の文書が届いた。そこには、七〇歳の誕生日を迎えるこの年の敬老の日にあわせて、町から祝い金が出るので、決められた期間中に役場まで受け

取りに来てほしい旨、書かれてあった。まだそんな歳ではないと思いながらも、年金以外に収入がない身にとっては、少額とはいえ、思わぬいい知らせであった。

信夫は、役場へ行った。まず担当者が、「行政区はどこですか」と尋ねた。そのとき、これまでに信夫の胸に鬱積していた、何ともいえない不純物のような思いが溢れ出てきた。信夫はこう切り返した。「私にはそのようなものはありません」。

実は信夫は、「行政区」という制度を全く知らないわけではなかった。この間、それとなく気づいてはいた。この町の住所表示を見ると、町名の下に大字がつき、その下に小字がつき、最後に番地が来る。二十数年前にこの分譲地を買ったときの登記簿にも、正しく、町名、大字名、小字名、番地が表示されていた。いまでは住所表示から小字名の部分はなくなっているが、どうやらこの小字名をもつ集落が、この町の末端の「行政区」としていまなお機能しているらしかった。どの行政区にも区長と呼ばれるリーダーがいて、その区の親睦と相互扶助を司る。信夫が購入した分譲地の小字に属する地域は、すでに住む人が途絶えて久しく、行政区としてはもはや存続していない。そこで町は、勝手にも信夫を隣の行政区に貼り付け、この間の行政処理に当たってきたのである。

「私にはそのようなものはありません」という信夫の言葉に、その担当者は驚き、一瞬ひるんだかのように見えた。しかし、返す口調は威圧的で、「町から送った文書に、所属している行政区の名前が書いてあったと思いますが……」と、畳みかけてきた。「それは見て、知っています。しかし私は、その行政区の人間ではありません」。信夫は、もう少し冷静にならなければ、と自分に言い聞かせながらも、どうしても一度燃え上がった感情が、ひとりでに動いてゆく。

「これまでに私は、書かれてある行政区の集会や行事に誘われたり、参加したりしたことは一度もありません。私はこの行政区の人をひとりも知りませんし、逆にこの行政区の人たちは、私の存在など知る由もないと思います。どうかお願いですので、お役所仕事の都合でもって、私を適当に無縁の行政区に割り振らないでください。私だけではなく、割り振られた行政区にとっても、本当に不愉快なことだと思います。私には、この行政区の一員という自覚も、帰属意識のようなものも全くありません。どうか私のこの実態にあわせて、『その他』でも『番外地』でも、あるいは、以前の小字名を復活させてもらっても結構です、名前は何でも構いませんので、この際、行政区を新たに設けていただけないでしょうか」。

これを聞いて、まるで、浴びせられた暴言から身を隠すように、担当者は口を堅く閉ざしてしまった。そして、やおら気を取り直し、本来の業務に目を向け、「それでは行政区のことは結構ですので、住所とお名前をお聞かせください」といって、冷たく、そして事務的に、封筒に入った祝い金の受け渡し作業に入った。役場の鉄のような壁に遮られ、信夫の感情は、またしても行き場を失ってしまった。

七.

それから数箇月が立った。いつものように配布日にあわせて信夫は、回覧文書を受け取りに役場に行った。担当の職員は決まっており、その女性は、いつも親切に配布物の一つひとつについて簡単に説明し、時折それに関して信夫が発する世間話にも、にこやかな笑い顔で、つきあってくれていた。こうした和みのコミュニケーションを楽しむとき、自分から役場に取りに行くのも、あながち一方的な負担とばかりいえないことを、しばしば信夫は実感するのだった。

この日、配布文書についての説明を聞きながら、信夫にとってひとつだけ、気になる内容のものがあつた。家に帰ると、信夫は、さっそく丁寧に読み返してみた。それは、ある行政区の区長から町長へ宛てて書かれた要望書で、概略、町外からの移住者については、当行政区では対応しかねるので、今後一括して町で対応してほしい旨のことが書かれてあつた。

先日の苦い思いが信夫にはあつたので、自分のことかと思つたが、行政区が違つており、そうでないことはすぐにも判明したが、どの行政区も、移住者や外来者の扱いに困っていることが、文面の隅々から読み取ることができた。それにしても町は、コピーとはいへ、なぜこのような内容の要望書を回覧文書の一部として町民に配布するのであろうか。信夫には、町役場の意図が、よく理解できなかった。また、この要望書に対する町長の回答も知りたいと思つた。しかし、その後の配布物に、そうした形跡を見ることはなかつた。

この文書を読んだとき、信夫の頭に浮かんだのは、隣り町に住む友人夫妻がかつて話してくれた水を巡る問題についてであつた。

その夫婦は、奥さんが絵を描き、ご主人が陶芸をする美術家のカップルであつた。ご主人は信夫より五、六歳年上で、東京での会社勤めを早めに切り上げて、ふたりして比較的若いうちからこの町に移り住み、創作に励んでいた。敷地は数百坪あり、そこに、生活のための住まいと、製作のためのアトリエと、自作を公開し販売するためのギャラリーが設けられていた。工芸史を専門とする信夫は、美術品や工芸品を見ることに日々熱心で、たまたまギャラリーに入ったときにこの夫婦と出会い、それ以来、何かにつけ相互に往來する親しい仲となつていた。

かつてこの夫婦が信夫に語つた水を巡る問題とは、彼らがこの町を移住先に決め、土地を購入しようとした二十数年前に経験した、少々苦い思い出につながる話である。そのとき、彼らは水を引く必要があつた。そこで地元の集落に掛け合い、その集落が代々使用してきた水を使わせてもらうことで話が進められた。頭金数十万円で内々に合意に達したが、最終的にその集落の全体会議にかけられると、ひとりの反対者が出て、結局、この話は流れてしまった。先祖からの水利権を集落民以外のよそ者に渡したくないというのが反対者の意見だつたようである。そこでこの夫婦は、やむを得ず、購入した敷地内に独自に井戸を掘って、ポンプで汲み上げることにした。もちろん多額の費用がかかつた。しかし、ここに住むには、それ以外に方法はなかつた。

さらに信夫の耳には、こうした水利権のことにかかわつて、この友人たちから聞いた、次のような言葉が、いまだに鮮明に残つていた。

「私たちのような外部の人間の目からは、昔ながらの集落や組内と、近年の行政区とは、完全に一致するのかわかりませんが、いずれにしても、この地域は、歴史的に村落ごとに人の集団が組織化され、それを単位に農業や林業や畜産業といった生業が共同的に進められ、一方で冠婚葬祭が協同して執り行なわれてきました。こうしたことは、この地域に止まらず、日本全国がそうであったかもしれません。そしてまた、彼らの共通の財産として入会権や水利権などがあり、独自の管理のもとに、今日まで引き継がれてきているようです。そのため、時間とともに、利権や利害が複雑に絡み合い、容易に外来者である私たちがそのなかに入ることはできません。また、閉じられているがために、その内部の様子も見えてきません。しかし、近年の人口の減少や高齢化に伴い、集団としての単位の存続が危うくなっているような現象も所々で見受けられます。その傾向が続けば、外部の人間との対峙の仕方に今後柔軟な変化がみられる可能性もあります。しかしながら、その一方で、いまなお、過去のしがらみともいえる強固な組織原理のなかにあって、生き残る道を模索する傾向もあるようです。私たちが経験した水の例が、そのいい例であると思います」。

信夫は、こうした友人の経験談や観察眼を頼りに、もう一度、役場から持ち帰った、区長から町長に宛てて出されたその要望書を読み直してみた。これまで信夫は、いかなる自治体であろうとも、あまねく平等で対等に住民は組織されるものであると信じていた。しかしこの見解は、理想論的で原理論的ではあるものの、あくまでも建前にすぎず、この要望書を読んで、はからずも信夫は、目的や背負うものを異にして生きる人のあいだに存する、和しがたい差異に気づくことになった。いまだに閉じた生活共同体にとっては、この友人夫婦や信夫は、慣習化された既存の自治原理や統治原理に組み入れることがはなはだ困難な、歓迎されざる厄介者の外来種だったのである。そしてまた、これまでのこの地での生活体験から信夫が「差別」と感じ取っていた内実が、実際のところ、いまに残る、こうした人間の組織構造が醸し出す、かげろうにも似た、一種の陰影現象だったのである——信夫は、ここに至ってようやく、このような理解に達した。手ごわい数学の問題を解いたときに味わう、あの快感にも似た、一種の解放の感覚が、そこにはあった。

八.

信夫に、かつて水利権の話をしてくれた美術家夫婦の住む町に、近年になって新しい変化の風が吹き出した。それは、在来種と外来種の交配の試みであった。この町へは、この夫婦をはじめとして、この間に多くの美術家たちが、美しい自然に憧れて移住してきていた。画家や陶芸家が多かったが、ステインド・グラスや写真、刺繍や染織の作家も含まれていた。詳しい経緯はわからないが、町と移住組が協力して、「秋の大美術祭」が開催されはじめたのである。二週間の期間中、作家たちは、自分のアトリエや自宅を開放し、作品を飾り、なかには販売をする人もいる。来訪者は、自分の車で思い思いに移動しながら、パンフレットのなかで紹介された作家たちの家に立ち寄り、作品を見ては、歓談を楽しむという仕掛けである。期間中、町全体がひとつの大きな美術館になったような様相を

呈する。町民と移住作家が交流し、町外や、さらには県外からの友人や知人、そして美術愛好家たちが訪れる。加えてこの期間、飲食店や温泉、宿泊施設にもぎわいを見せる。

この企画は数年前から毎年続いている。信夫も仕事柄楽しみにしており、この期間、決まって、友人の美術家夫婦を訪ね、雑談に花を咲かせる。作品のこと、暮らしのこと、体や健康のこと、話題はさまざまである。信夫は、この夫婦がこの地に移住してきたときに経験した水のことを頭に残っていたこともあり、「あの一件からすれば、随分と地元民と移住者との関係が変わりましたね」、と問うてみた。すると、陶芸家の主人が、「もうあれから二十数年が立ちました。関係は大きく変わりました。あの当時は、私たちが移住者の草分けでした。周りには誰も知り合いはおらず、今後の生活を考えると、不安もたくさんありました。そうするうちに、移住者も段々と増えてゆき、横のつながりもできてきました。町は町で、人口の減少に頭を悩ませていました。そうやって自然と機運が盛り上がり、両者の思惑が一致したというのでしょうか、この美術祭へと発展していったのです」。そして彼は、こう続けた。

「星川さん、いまこの町のものも含めて、近隣の町や村のホームページを見てください。どこも競うようにして、『移住者・定住者支援サイト』をトップ画面にもってきています。これが何よりのこの間の変化のしるしです。間違いなく、いま大きく変化しようとしています……星川さんのお住まいの奥阿蘇町は、いかがですか」。

信夫は、帰るとさっそく、奥阿蘇町のホームページにアクセスしてみた。しかし、どこにもそのようなサイトは見つからなかった。そこで、友人夫婦の町と、幾つかの近隣の町や村のホームページに移ってみた。すると、それぞれに名称は異なっているが、確かに、移住者や定住者を支援するサイトが設けられていた。自分たちの町や村の魅力が美しい画像を使って紹介され、実際に移住して生活している人たちへのインタビューが掲載され、さらには、住まい、子育て、就労に関する独自の支援策が具体的に盛り込まれていた。信夫は、目を見張って、それぞれのサイトを見比べた。というのも、かつて信夫も、大学に勤めていたころ、受験生や学生や卒業生に対してのそれぞれの支援について検討する委員会に加わっていたことがあり、関係する人たちに、いかにうまく有益な情報を提供するか、その大切さを経験上よく知っていたからである。あのころを思い出すと、一八歳人口が激減するなか、生き残るための大学間の競争が確かに存在していた。いま信夫が身を置いているような田舎にあっては、その土地固有の魅力を発信する一方で、移住希望者の需要に応える支援策の提供を巡っての競争が積極的に展開されているのである。しかし、それにしても、奥阿蘇町のホームページには、どうして「移住者・定住者支援サイト」のようなものがないのであろうか。信夫には、不思議に思えてならなかった。ないということは、この町には誇るべき魅力など何ひとつありませんというメッセージを控えめに発しているであろうか。それとも、移住者は歓迎しませんという明確な意思表示なのであろうか。

奥阿蘇温泉館への通いは、変わらぬ信夫の日課となっていた。七〇歳の誕生日から入浴料が半額となり、信夫は町の高齢者福祉の恩恵に預かった。それから数箇月後のことである。入館口に、この年度末で閉館するとのお知らせの紙が張り出された。赤字がこの間ずっと続いており、売りに出されていることは信夫も耳にしていた。どうやら買い手がつかず、町は閉館を決めたようである。この温泉施設は、国の「ふるさと創生一億円」を活用して源泉が掘削されて、つくられたもので、開館当時は、年間四〇万人近くの来館者でにぎわったと伝えられる。しかし近年では、約一二万人にまで落ち込み、累積赤字もかなりの額に達していたらしい。まさしく、不採算の老朽公共施設となってしまったのである。町自体の人口が減少する一方で、レジャーの多様化に伴い町外からの観光客や別荘滞在者の数も減る——こうした人の縮小が決定的な要因となっていた。この閉館は信夫にとっても大きな痛手であった。閉館は、高齢者福祉の切り捨てを事実上意味していたし、それに加えて、富田雄一のような温泉仲間との今後の疎遠を暗示するものでもあった。

実はこれに先立って信夫は、町の衰退を示すもうひとつの事例を身近なところで体験していた。信夫の住む分譲地は、ひとつの集落の北の外れから牧野道に沿って坂道を上った一角にあった。この集落は、畜産農家が集まる土地柄で、牧野組合の団結のもと、牛をトラックに乗せてこの牧野道を上がり、上がり切ったところの牧野に牛を放し、飼育していた。信夫の分譲地の北側と牧野とは、簡単な金網で仕切られ、ときとして、牛が金網を乗り越えて分譲地まで脱走することがあった。そうすると、たまたま別荘に居合わせた誰かが牧野組合に電話をし、引き取ってもらうという、とても牧歌的な逸話も残されていた。ところが、信夫が定住する少し前あたりから、牛の姿が牧野から消えた。関係者に聞くと、この集落の多くの畜産農家が後継者不足や採算割れに陥り、廃業が続き、結果、牛が減少してゆき、牧野組合も解散に追い込まれてしまったというのである。

信夫の脳裏には、四半世紀が立ったいまもなお、この分譲地に家を建てたころの情景がしっかりと焼き付いていた。この草原に春から秋にかけて牛たちが放牧され、冬が終わると飼い主たちによって野焼きが行なわれ、黒い大地からつくしが顔を出し、それを少し採っては、てんぷらや和え物にして食す——慎ましくも、自然との一体感がそこにはあった。しかし、いまはその面影はなく、草原も牧野道も、人の手が入らず、日々荒廃してゆく。信夫の嘆きは、奥阿蘇温泉館の閉館のみならず、実はこんな身近なところにもあったのである。これが時代の変化というものであろうか。若者が都会に出て行って人が減り、高齢化の状態で生業の後継者が不足して廃業へと至る——このままでは、村落が立ち行かなくなるのは、誰の目にも明らかであった。

一〇.

そうしたなか、信夫は、町からの回覧文書として「奥阿蘇町基本五か年計画」と題されたパンフレットを受け取った。それは二つ折りのパンフで、最初の頁に、計画の趣旨と年次進行表が、見開き二頁を使って八つの町づくりの指標が、そして最後の頁に町の総人口の動向が示されていた。信夫の関心は、移住者や定住者についての位置づけだった。しかし、期待に反して、そのことには全く触れられていなかった。

町づくりの指標として掲げられていたのは、観光の振興、商工業の振興、農林畜産業の振興、教育の充実、健康増進の支援、育児・介護の支援、情報インフラの整備、行財政改革の実現の八つの項目で、それらの項目のどこにも、移住者や定住者という言葉はなかった。そして、信夫の驚きは、最後の四頁目の人口動向のグラフによって、さらに増幅された。その折れ線グラフによると、四〇年前の一九八〇（昭和五五）年の町の総人口は八六九五、現在の二〇二〇（令和二）年が五七七五、そして、四〇年後の二〇六〇（令和四二）年の総人口が、二六二七と推計されていた。グラフ化された数字はここまでであったが、この減少率がそのまま続けば、それ以降の三〇年か四〇年のうちに、この町の人口がゼロとなることは明らかであった。何と、この奥阿蘇町は、いまの世紀が終わるころまでには、人が完全にいなくなり、消滅するのである。仮定に基づく予測とはいえ、信夫がこれまでに生きてきた年数とほぼ同じ年数が立てば、この町は確実に死に至る。自分のこれまでの人生なんか、瞬きするほどの、あっという間の出来事だった。それを思うと、信夫は、言葉を失ってしまった。

そうした虚脱感のなかにあって、信夫にとって、どうしても理解できないことがあった。それは、グラフで示された人口動向の衝撃的な推移と、五か年計画に掲げられた町づくり計画の八つの指標とが、連動することなく乖離していたことであった。つまり信夫には、この「奥阿蘇町基本五か年計画」が、人口動向の推移を踏まえたうえでの、それにふさわしい今後五年間の町の行動指針であるとは、どのように読んでも、そう読めなかったのである。人口が日に日に年々減少しているのであれば、それへの対応が、喫緊の課題となるはずなのに、そうした生き残りをかけた政策が、この「奥阿蘇町基本五か年計画」に全く盛り込まれていない——心配性の信夫の目には、そう映った。

元来信夫には、事物であろうと生き物であろうと、衰退や消滅といった様態を目にすると、理由はともあれ、何としてでも、それを食い止めなければならない、と考える傾向があった。それは、死を恐れる感覚ともいえるし、生こそ善という価値観でもあった。そうした信夫の観点に立てば、奥阿蘇町のような沈みゆく村落は、何もせずに放置されるべきではなく、何か手を施して、わずかな効果であろうとも、再生の道が模索されなければならない。「奥阿蘇町基本五か年計画」を見て、信夫にとって一番衝撃的だったのは、実は、町の消滅を示唆するグラフそのものの存在ではなく、そのことを他人事であるかのように無視し、それに対してのいかなる工夫も知恵も講じない、楽天的とも惰眠ともいえる行政上の姿勢であった。

しかし信夫は、心の平静を取り戻して、いま一度、冷静にこの問題に向き合ってみた。信夫はこれまで、人口減少と高齢化に悩む小さな町や村にとっては、都会にはないそれぞれ固有の自然や景観を保全し、加えて、これまで培ってきた伝統的な地域文化を継承しながら、それらの魅力を介して外からの移住者や定住者を増やすことが最も肝要ではないかと、一面的にそう思い込んでいたところがあった。しかし、外部からの流入を安易に許すと、それだけ大きな摩擦と軋轢が内部とのあいだに生じる。それであれば、内部だけで、一種の鎖国的状況のなかにあって衰退する現状を甘受した方が、その分安楽的であり平和的であるともいえる。もちろんそれは、内部の状況に照らし合わせて、内部の人間が自発的に判断することであり、外部がとやかく口出しすることではない——そうした思いが、信夫の胸に徐々に押し寄せてきた。

その観点に立って自分自身の移住生活を振り返ってみた。内部の意思に添って、回覧文書は自分で役場まで取りに行き、ゴミも自分で集積場まで運ぶ——よく考えると、これらのことは、衝突も亀裂も派生させない最も安定した解決案であり、そのことにすぐにも気づかず、むやみに心をかき乱していたのは、明らかに信夫のひとり相撲であり、逆に内部の人たちに不快な思いをさせてしまっていたかもしれない。経験した選挙公報や国勢調査の問題も、そして行政区の問題も、本質は同じである。そう思うことで信夫は、とげとげしい気分から解き放され、そこに、諦観してゆく虚無的な自分の姿を感じ取っていた。

しかし、それとは別に、信夫はこう思っていた。個人としての自分の場合や、個別この町の場合は、それでいいのかもしれないが、巨視的観点から日本全体を考えた場合は、人はそうであってはいけない。むしろ誰しものが、現状に率直に向かい合い、信じる解決策を自由闊達に論じ合う必要があるのではないか。行政論的にも、文明論的にも——。

「奥阿蘇町基本五か年計画」に掲載の人口動向の推計値から予測すると、奥阿蘇町の人口がゼロになるのは今世紀末である。一方、総務省統計局が公表している「人口の推移と将来人口」によれば、二〇九五（令和七七）年に、日本全体の総人口はほぼ現在の半分となる。この劇的な変動に対して、これまで信夫は、大きな都市部への一極集中型の人口の分布を是正し、全国的に均衡のとれた地方分散型の分布に置き換えてゆくべきであるという考えをもっていた。自身の奥阿蘇町への移住もその延長線上に位置し、その実践は、信夫の思考に、さらに鮮明なイメージを付与することになった。たとえば、このような具合である。旧式の扉を開き、内在する固有の魅力的なリソースを磨き発展させることによって生き残ろうと内発的に再生を願う地方の生命力については、あらゆる手を尽くして積極的かつ全面的に支援し、その一方で、既存の幾つかの大都市については、有機的に機能を整理統合し、多様な高密度空間へと圧縮進化させるために、今後さらなる戦略的な手助けが必要とされるのではないか——移住後の信夫は、そう思えるようになっていた。そして、そのイメージのなかには、豊かな伝統、習俗、自然、田園などを内に輝かす地方と、先鋭な情報、教育、医療、ビジネスなどが複合的に集約された都市との二箇所定住地を設けて生きる人びとの姿があった。それは、地方と都市というふたつの翼をもって羽ばたく、新しい種類の人間の生活像であり、空間像であった。信夫の考えによれば、ふたつの地域に等しく足を置いて暮らしを成り立たせようとする将来的生存の傾向には、ふたつの避けて通れない理由があった。ひとつは、人間が求める高度な先進化に応じて振り子のようにバランスをとろうとする、自然回帰への根源的願望の存在であった。そして、いまひとつは、今後予想される地震、津波、豪雨などの自然災害、感染症の流行による生活様式の変容、原発事故による放射能汚染、加えて、気候変動による国土の一部水没や食糧資源の部分的枯渇、さらには、人為的なテロや戦争による都市破壊、そうした生存リスクの高まりを受けての自衛的かつ避難的手段への本能的自覚の顕在化であった。ひとつの造形論に置き換えるならば、前者にみられる根源的願望は、機能と装飾の融合を意味し、後者にみられる本能的自覚は、構造の強靱さを意味していた。信夫は、このふたつの人間的欲求こそが、近未来の困難な時代を安定的に生きのびるための原理的で不可避的な要素ではないかと、考えるようになっていたのである。

信夫がこの奥阿蘇町に移り住んで、すでに七年の歳月が流れた。この間信夫は、美しい大自然のなかにあつて、現役時代に積み残してきた論文の執筆に精進することができた。しかし、それにも増しての大きな収穫は、人口減少期における村落の営みに日々接し、それにかかわる思考の機会をもったことだった。果たして七〇年後、八〇年後の世紀末、日本の地方と都市が果たす有効な補完関係は、どのような姿に構築されているのだろうか。そのときまでに、地方と都市とが、その役割分担のうえから、それぞれになしえなければならない手立てとは、一体何であろうか。そして、推計されているとおり人口の減少が進むなか、幾つもの町や村が沈み、半分の人間が消えてしまった世紀転換期の日本列島において、実際、残された人びとは何を考え、どう生きているのだろうか。そう遠い話ではないはずである。信夫は、仕事柄、造形の歴史家として、こうした自由なデザインを描いては、この時代の行く末に思いを馳せていた。

【初出：「小説 沈みゆく村落」『KUMAMOTO』No. 32 号、くまもと文化振興会、2020 年 9 月、167-186 頁。】

第二編 雪消を待つ女

一.

三保は、小学生の高学年のころ、教室の窓から遠くに臨む三井山連峰の頂に積もる雪を見ては、いつも美しいと思っていた。春が近づいてきたときのことである、受け持ちの担任の先生が、雪の山頂を指さしながら、もうすぐ訪れる山里のにぎわいを語りはじめると、黒板に「雪消」という文字を書いた。そして、みんなにわかるように、横に「ゆきげ」と読み仮名をふった。三保は「降雪」や「積雪」は知っていた。「雪解け」も日常語であった。しかし「雪消」は、はじめて聞く言葉であった。美しいと思った。このとき、「雪消」は未知の世界を表わす神秘的な響きをもって三保に伝わった。

その日の学校の帰り、三保は、「暖かくなると雪が消える」、それでは「寒くなると何が消えるのだろう」と、なぞなぞに似た言葉を繰り返していた。三保の心に絡みついていたのは、「消えること」の不思議さであった。消えるということは、生きることなのだろうか、それとも、死ぬことなのだろうか、考えれば考えるほど、わからなくなった。そしてそれが、かえって楽しかった。この日以来、「雪消」という言葉は、三保から離れることはなかった。

島田三保の両親は、地元で小さな不動産の会社を営んでいた。土地の売買や古家の賃貸・斡旋などが主な業務であった。ある日、家の解体の仕事が舞い込んできた。この種の依頼は珍しかったが、最近の傾向でもあった。住んでいたのは、高齢の女性で、子どもたちは都会に出て働き、主人は数年前にがんで亡くし、その後は何とか独り住まいをしていたが、買い物も調理もままならなくなり、元気なうちに隣り町の老人ホームに入居するのだという。解体作業は、あっという間であった。更地になった。今度はこの土地を三保の両親が買い手を見つけて売るのである。解体作業中、三保は学校の行き帰りに、のぞき込んだり、のけ反ったりしながら、家のなかから出てきたものが重機の音とともに無残にも壊されてゆく姿を眺めた。三保は父親に尋ねた。

「あの家、消えるの」。

「そうだね、住む人がいなくなったからね」。

「じゃ、あの家、消えて死ぬの」。

「まあ、そうだけど、新しい人が家を建てて、そこに新しい人が住むから、死んだわけではないさ」。

「家は消えても、死んだわけではない……それじゃ、生き返ったの」。

「そうなるかな……三保もおもしろいことを聞くね」。

そうした会話をしながら、父と母がやっていることが、何かいのちとかかわるような、とても大きな仕事であるように、三保には感じられた。お父さんはお医者さんかもしれない、いや、お葬式屋さんかもしれない。

こんなとき三保は、かつての自作のなぞなぞ遊びを思い出していた。「暖かくなると雪が消えます」、それでは「寒くなると何が消えるのでしょうか」。三保の答えは、こうであっ

た。「寒くなると、町から人が消えます。それは、寒いから人が家で過ごすようになるからです……ピンポン」。

家の解体のことで父と言葉のやり取りをするなか、今度は新しい連想ゲームを三保は思いついた。「人がいなくなると家が消えます」、それでは「家がなくなると、今度はそこから何が生まれるのでしょうか」。

二.

三保が大学に入ったのは、それから七、八年が立っていた。家から一番近い都会にある私立大学の社会学部であった。自宅と大学のあいだは電車で二時間とはかからなかったものの、親からの自立とばかりに大学の近くにアパートを見つけ、そこに住むことになった。親からの仕送りによって生活が成り立っているのであるから、実際には、三保のいうような親からの自立からは、ほど遠いものがあつた。

コンビニでアルバイトをしては、服代や旅行代に消えてゆく、苦労知らずの学生生活だった。勉学も、決して夢中になるということはなく、ほどほどにおつきあいしていた。しかし、四年になって卒業論文のテーマを決めるときは、少し顔つきが変わった。「小学生のときの連想ゲームに答えを出さなきゃ」という思いが蘇ってきたのである。指導教員は、厳しくハードルを上げたり、何としてでも知識を教え込んだりするタイプではなかった。ほとんど学生任せだった。三保がこの教員を選んだのも、そこに理由があつた。三保が卒論のテーマに選んだのは「今後の日本人口の動向と社会変容」だった。三保が生まれたのは一九九六（平成八）年で、小学生も終わろうとする二〇〇八（平成二〇）年のころから、日本の総人口は減少傾向を示していた。三保の関心は、このまま人口減少が続いてゆけば、空き家も増えていくにちがいない。空き家が増えれば、どうなるであろうか。

「人がいなくなると家が消えます」、それでは「家がなくなると、今度はそこから何が生まれるのでしょうか」。三保は、どうしても、この問いへの答えが欲しかった。

指導教員はとくに何も教えてくれず、「自分で調べろ」というばかりであつた。何を、どう調べたらいいのかもわからず、適当な検索語を入れては、インターネット上のサイトをあっちこちと訪問して、そこに書いてある文章をうまく選び取って、卒論らしきものをつくり上げた。実際は、「つくり上げた」というよりも、でっち上げたといった方がふさわしかったかもしれない。

しかし、そのような三保も、卒論を書いたことにより、知識が増え、考える機会も多くなり、少し大げさにいえば、社会を見る目が変わった。小学校のときに体験した家の解体の記憶がよい例だった。ひとつの家に両親と子どもが住んでいた。子どもたちは家を出て都会で働き、母親は夫を亡くすと老人ホームに入る。そこに空き家が発生する。空き家が発生するということは、どうやら、人の移動と関係しているようである。そして人の移動は、職や勉学、そして結婚や老後の生活を求めた結果の副産物なのである。しかし、そもそも人口が減るということは、女性が子どもを産まなくなったことに起因する。なぜ産まないのか、なぜ産みたくないのか。三保は女性としての自分に問うてみた。しかし、やすやすと答えにはたどり着かなかった。そもそも自分は将来結婚するのだろうか。結婚しなければ子どもは生まれないだろうし、結婚しても、働いていたら、育児も大変そうだし、

子どもをつくることを、面倒くさく思うかもしれない。すべて、そのときにならないとわからない。三保の頭のなかで、人口減少、人の移動、空き家、女性、仕事、そして子育てといったキーワードが絡み合いながら、あたかも走馬灯のように、くるくる、くるくる回転していた。

あまり深刻に考え込む性格ではなかったが、卒業を間近に控えて三保は、大学に来たかいたがあった、これで自分も大人の仲間入りができるかもしれない、そういう一種高揚した知的雰囲気をも密かに味わっていた。

三.

卒業後、三保が入社したのは、この都市の鉄道沿線を主たる基盤とする三井山土地開発という会社であった。社名はこの地区を遠くから見守る連山の名称に由来し、どの駅前にもこの会社の店舗があって、この沿線に住む人でこの会社の名前を知らない人はいなかった。三保がこの会社を選んだのには、ふたつの理由があった。ひとつは、両親の背中を見て育っていたので、不動産の仕事にとくに違和感はなく、スムーズに抵抗なく入っていきえると思えたことだった。もうひとつは、隠された関心事が心の奥に息づいていたことだった。それは、実際の業務内容を越えたもので、三保にしてみれば神秘の内なる関心事であった。土地に家が建てられ、そしてまた、いつしか消えてゆく現象が、どうしても三保には不思議に思えてならず、その不思議の世界に日々身を置いてみたかったのである。小学生のときに感じた一種のロマンティシズムのようなものが、大学卒業後の職業選択にまで作用していたことになる。三保は、こうした自分の性格を自分でもおかしく思うことがあったが、変更することもできなかったし、また、変更する必要性も考えたことはなかった。

入社式のあとの数日間、本社の会議室で社内研修が続いた。そして、その最後の日、社内講師の数人と新入社員とのあいだで、幾つかのテーブルを囲みながらの、立食による懇親会が催された。三保は、昨日の研修会の際に講師として壇上に立って話した、ひとりの男性社員のことが気になっていた。この社員の年恰好や風貌が父親と似ていた。しかし、三保の興味を引いたのは、そのことではなく、話の内容だった。この男性の名は、黒田源蔵といった。肩書きは、本社の賃貸営業部付であった。黒田が昨日話したのは、おおかた次のようなことだった。

「不動産の管理や斡旋や契約には、多くの場合、利害や権利が絡み、それだけに、もめごとも多く、決してきれいごとで済まされないのが、不動産を扱う仕事であります。つまり、表も裏もあるということです。法律も国のガイドラインもあります。しかし、それでは収まらない事態がたびたび起こるのです。いや、ほとんどの場合が、そうだとはいえるかもしれませんが。そのとき会社はどうするのでしょうか。お客さまのおっしゃることを受け入れながらも、会社の利益と対面を守らなければなりません。不動産会社の営業や経営の難しいところはそこにあるのです。新入社員のみなさんも、すぐにそうした問題に出くわすと思いますが、その解決の技をいち早く身につけて、磨いてほしいと願っています。困ったときには、私に相談してください」。

この黒田の言葉が、三保の心に残っていた。残っていたといっても、何かに感動したわけではない。黒田のいった内容があまりにも抽象的すぎて、三保には皆目理解ができなかったのである。その意味で、強く心に残っていたのである。次々と料理とお酒が振る舞われ、懇親会もたけなわとなった。そのときだった。三保のテーブルに渋いスーツ姿の黒田が近寄ってきた。三保は一瞬たじろいだ。「昨日の私の話、どう感じましたか」と聞かれたら、どうしよう。どう答えたらよいのだろうか。しかし、それは杞憂に終わった。その質問は、三保個人に対してではなく、そのテーブルを囲む数人の新入社員に対して発せられたからである。そばにいた男子の新入社員が、そつなく応じている様子が、三保にはありがたかった。

四.

「表も裏もある」とは、どういうことだろう。家が建って家が消えることと、どう関係するのだろうか。三保の脳裏で、こうしたことが行きかっていた。

テーブルを挟んだ対面同士の三保と黒田の目が、一瞬あった。グラスを片手に黒田が三保のところに歩み寄って来た。すかさず三保は、「島田三保と申します。どうか、よろしくお願いいたします」といって、深々と頭を下げた。

すると黒田は、こう三保に尋ねた。

「みほさんとおっしゃるのですか、いい響きのお名前ですね。おそらく私ははじめて聞く名前だと思いますが、どのように漢字で書きますか」。

予期しない質問だった。面接試験でも受けているような感じがした。軽く息をして、こう三保は答えた。『『三つを保つ』と書きます。美と体と徳を保つようにと、父がつけたと聞いています」。

「ああ、そうですか。女の子が生まれて、美貌と健康を保ってほしいという願いがお父さまにおありになったのでしょう。それにしても、徳が加わっていることが、うれしいですね。おおかたの人は、徳を失いがちですから。ぜひとも、徳を、これからの仕事のうえでも、大切にしてください」。

三保は、名前を褒められたのか、今後の勤務について叱咤激励されたのか、わからないまま、「あ、はい、そのようにいたします」と答えてしまった。

三保は、黒田との会話はこれで終わったものと、内心ほっとした。しかし、黒田は、手にもっていたグラスに再び口をつけ、移動しようとしないう。こんなときは、お酌をしなければならぬのかとの思いが過ったが、三保自身、お酒は飲めないし、男の人にお酌をした経験もなかったし、一瞬、何をどうしてよいのか、わからなくなった。苦し紛れともいおうか、自分で何かを考えるに先立って、あっという間に口をついて出てきた。「黒田さ

んのときも、こんな新入社員の歓迎会がありましたか」。三保にとっては、必死の言葉であつた。しかし黒田は、落ち着いた様子で、こう応じた。

「いや、私は中途採用でしてね……それで、こうした懇親会に顔を出して、若い人と接したいという気持ちが人一倍強いのかもしれません。仕事を抜け出して、来てみました」。

発話の仕方が、どことなく穏やかで、人を包み込むような雰囲気醸し出していた。三保は、それに誘われたのか、「それでは、黒田さんは、それまでどのようなお仕事をなさっていたのですか」と、言葉を継いでいた。「少しぶしつけな質問だったかな」と、顔に何か走る感覚があつたが、黒田は、それさえもやさしく受け止めているようで、グラスをテーブルの上に置くと、ゆっくりと、こう話し出した。

「まあ、余計な、私の身の上話になりますが、私が生まれたのは一九六八（昭和四三）年です。そのとき、藤純子さん主演の映画《緋牡丹博徒》の第一作が公開されました。もちろん生まれたばかりの私はその映画を見るわけではないのですが、確か高校の一年のときだったと思います。友だちから借りて、はじめてビデオでその映画を見ました。単なる感動とか感激とかをはるかに超えて、これが私の人生の出発点になりました。その後二十数年が立って、先々代の社長に見出され、いまに至っています。そんなわけで、私はこの会社の裏方の人間です」。

三保はこれにどう返事をしていいのか、わからなかった。《緋牡丹博徒》という映画も知らなかったし、藤純子という女優さんの名前を聞くのも、これがはじめてであつた。一体この黒田という人は、どんな道を歩いてきた人なんだろうか。「裏方の人間」とは……一体どんな仕事をする人なんだろうか。新入社員の三保が耳にした言葉は、どれもが鈍い響きをもっていた。返事をためらっている三保の様子を察したのか、黒田は、「それでは、これからのお仕事、がんばってください」と言い残して、その場から離れて行った。

懇親会がお開きになった。ドアを出たところで、最初に黒田と言葉を交わした、同じテーブルの男子新社員と一緒に立った。その子は、三保に向って、「どんなことを黒田さんと話したの。楽しかった。どうも黒田さんは、お客さま苦情係りの仕事をしている人のようですよ。昔は反社の人だったようですが」。そう一方的にいつて、開きかけたエレベータの方へ駆け出していった。三保はそれに続かなかった。

独りエレベータわきの階段を下りながら、緋牡丹博徒とか、裏方の人間とか、苦情係りとか、反社の人とか——馴染みのない言葉が、何度も繰り返し押し寄せてきた。しかし、「自分とは関係ない」と、少し強引に言い聞かせると、いつの間にか、三保の思考範囲から消えていった。それでも、何か変な感じのものが残った。自分もそうだけど、黒田さんも、小さいころというか、若いころの経験がひとつのきっかけとなって、自分の人生を歩んで来た人であることには間違いない。三保は、あたかも自分自身の性格を肯定するかのよう、今日の黒田との会話から、切って捨てられない共感に近い何かを感じ取っていた。ビルを出ると、外は、生暖かい春の雨が降っていた。

五.

会社の方針により、入社後の一年目は、およそ一箇月単位で各営業所を移動しては、その先輩社員の指導のもとに業務を覚える、いわゆる見習い期間として設定されていた。どの営業所も、駅前にあったが、町の様子も違えば、営業所の雰囲気も異なっていた。新入社員として、三保も、店舗の掃除やお客さまへのお茶出しからはじまり、少しずつ先輩社員の後ろについて業務のいろはに接するようになっていった。

一年間の見習い勤務が終わり、三保が配属されたのは、最近開発された分譲住宅やマンション群が奥に控える駅前の店舗であった。この地区は、オフィスの集まる都市部の中心エリアまで電車で一時間少々で行けるため、利便性があり、とくにサラリーマン家族に人気があった。加えて、田畑もあっちこちにまだ残っており、適度の田園暮らしも楽しめた。三保は、この店舗の賃貸デスクで業務にあたるベテランの藤村由紀の補助役として仕事をはじめることになった。主に藤村が、建物賃貸借契約書や賃貸管理業務委任契約書などの契約関係の業務を担当し、三保が、それに付随して派生する貸主や借主からの問い合わせや苦情などの対応を受け持った。藤村は、三保よりひと回りくらい年上で、半年前からこの店舗で働いている。余分なことは嫌いで、与えられた仕事だけに神経を向ける人だった。かといって、冷たい人ではなかった。三保にも柔らかく接し、わからないところも適切に教えてくれた。ただ、うわさ話や世間話に身を乗り出して興じるタイプではなかった。

そろそろ一年が立とうとする、ある日のことである。三保のデスクの電話が鳴った。受け取ると、相手は少し興奮気味に話し出した。

「私は、そちらの会社と賃貸管理業務委任契約をしています、長谷川良介と申します。サンライズホーム四〇三号室の区分所有者です。実は、先日、そちらの会社の緊急時担当者を名乗る男の人から電話がありました。話の内容は、入居者さまから玄関ドアのインターホンがうまく作動しなくなったとの連絡があり、担当の営業所の者が忙しくしていることもあって、代わりに私が現場で確認したところ、取り換えた方がよいと判断いたしましたので、さっそくこれから工事会社に指示をしようと思いますが、作業に入っているかどうか、というものでした。そこでお聞きしますが、なぜ、契約に立ち会った営業所の担当者が私に電話をするのではなく、直接関係ない人が連絡をしてくるのですか。しかも、不具合の様子も知らされず、見積書もなく、どうして、いきなり取り換え工事の許可を取ろうとするのですか」。

ときどきこうした感情的な口調の電話がかかってくるので、経験上その場合、ことさら落ち着いて相手の言い分を聞くようにしていたが、聞き終わった三保は、その内容に、面食らってしまった。普通、賃貸物件の設備に不具合が生じた場合は、借主が、建物賃貸借契約を仲介した営業所に連絡をし、それを受けて賃貸デスクの担当者が現場確認をして、その様子を貸主に伝え、貸主の意向に沿って見積もりを取り、工事に入る。これが一般的な流れである。なぜ借主は、私たちの営業所ではなく、緊急時対応の部署に連絡

したのか。そして、なぜ、その部署の担当者はいきなり貸主に電話をして、工事の許諾を求めたのか。長谷川からの電話は、三保にはすぐには呑み込めない、不可解な内容の話であった。そこで、三保は、「それでは、これから社内で調査をいたしまして、改めてこちらからご連絡を差し上げます。どうかそれまでお待ちいただきますでしょうか」といって、長谷川の了解を取り付け、電話を切った。

三保は、すぐさま賃貸デスクの上席の藤村由紀に報告した。まず藤村は、建物賃貸借契約に目を通した。そして三保に、こういった。「この契約は私の前任者のときに交わされていますね。したがって私も、持ち主の長谷川良介という人がどんな人なのか知りませんし、会ったこともありません。しかし、資料によると、三年前に転勤に際して長谷川さんは自宅のサンライズホーム四〇三号室を賃貸に出し、その管理をうちの会社に委任したようですね。ここに、その賃貸管理業務委任契約があります」。それを受けて三保は、「それではこの件、どう対応しましょう」と尋ねた。藤村はあまり積極的ではなかった。「緊急対応の部署に聞くか、四〇三号室に行って、借主さまにそのときの様子を聞くか、まずは、そんなところかしら」。自分が関係した契約ではないことが理由だったかもしれない。あるいは、余計なことに深入りしたくないという思いが、どこかにあったのであろうか。

六.

その翌日のことであった。この会社の下請け会社のひとつである吉田工務店から封書が届いた。開けてみると、サンライズホーム四〇三号室の玄関ドアのインターホン取り換え工事に関する請求書が入っていた。三保は驚き、吉田工務店に電話を入れた。すると担当者は、こう説明した。「貴社の指示による取り換え工事が完了しましたので、その請求書を送らせていただきました。お手数ですが、貸主さまに再送していただけないでしょうか」。三保は、再び藤村に相談した。しかし藤村は、そっけなく、「この請求書は、貸主さまに送るしかないわね」と、短く言い放った。緊急時対応の部署といっても、組織上社内に位置づく管理部門ではなく、社外の契約警備会社である。どういう流れでこのインターホンの取り換え工事が決済され、実施されたのか、三保には、判然としないところがあった。しかし、すでに工事も終わっているようであるし、上司の藤村もそういうのであれば、三保は送るしかなかった。はじめて長谷川に送る書類である。事が事だけに、何か長谷川の気持ちを和らげようとする気持ちが働いたのだろうか、三保は、私用に使うときの、小ぎれいな花柄の短冊状の便箋を使って、用件のみを書き記し、名刺も同封した。

数日後、三保のもとに長谷川から電話があった。明らかに長谷川は怒っていた。

「なぜ、こんな請求書を送ってよこすのですか。私はこの工事を了解したつもりはありませんし……何がこの間に起こったのですか……これは架空工事の請求書なのではないのですか」。

三保は返答に窮した。ただ、「ああ」だの、「ええ」だの、意味不明のつなぎの音を繰り返すだけだった。こうして三保は、長谷川がいらだったまま自分から電話を切るまで、何

とか耐え忍んだ。三保にとってこの電話は、この勤務についてはじめての、汗が流れる経験だった。

さっそく翌日、サンライズホーム四〇三号室へ出向いた。しかし、借主とは簡単なあいさつに止め、インターホンに不具合が生じた経緯も、緊急対応の電話番号に電話をした事情についても、何も聞かなかった。すでに終わったことであるし、それを聞いて、不審な実態に出くわすことにでもなれば、三保はそれに耐えきれない。それよりも何よりも、三保は、問題の真相を究明するためにここに来たわけではない。そこで、交換されたインターホンの写真だけを撮って、足早に退散した。店舗に帰ると、間違いなく取り換え工事が実際に完了していることを示す証拠として数枚の写真をつけて、支払いのお願いをする手紙を長谷川に書き送った。三保は、また長谷川から怒りの電話がかかってくるのではないかと思って、数日間は身構えていた。しかし結局、何の連絡もなく、音信が途絶えた。

その後忙しい日々が続き、三保は仕事に追われた。そのため、長谷川の件は、全く頭から離れていた。そんななか、サンライズホーム四〇三号室の借主から電話がかかってきた。用件は、浴室のシャワーのヘッド部分が劣化して、思ったような水量が出ないので、貸主に取り換えてもらうように伝えてほしい、というものであった。電話を切ると、すかさず三保の耳もとに、電話口で怒る半年前の長谷川の声が蘇ってきた。どう対応したらいいのだろうか……これからどうなるのであろうか。不安が過ぎる。三保は夢中で現場に行っては、状況を見て、写真に納めた。それから、手紙によりこの間の経緯を説明し、写真を同封すると、長谷川に郵送した。長谷川の反応が、しきりと三保は気になった。

一週間後、電話があった。長谷川はこう三保にいった。

「島田さんですか、私、長谷川です。先日来、浴室に設置されているシャワーのヘッド部分の写真を送っていただいているのですが、これは、おっしゃるような経年変化ではありません。見てもおわかりのように、割れて破損しているではありませんか。おそらく、借主さんが床に落とされたものと思います。したがって、その責任は借主にあります。至急、新品に取り換えて、原状回復されるように、借主さんにお伝えください。……それから、半年前のことになりますが、なぜ請求書だけが送られてきて、見積書はないのでしょうか……」。

長谷川の声は、以前とは違って、極めて冷静だった。そして、帰って来た返答も、虚をつく、意外なものであった。長谷川は、明らかに借主の過失ないしは故意を確信している。しかし、それを借主に伝えても、おそらく借主は経年劣化を主張するであろう。三保は、現場を思い出しながら、何度も写真を見るも、どちらともいえない、微妙な画像である。三保は、借主にいうべきか、判断がつかなかった。そのとき、デスクの電話が鳴り響いた。借主からであった。「島田さん、例の件、まだでしょうか、シャワーが使えなくて、困っているのですが」。借主は、用件だけ言って、すぐに切ってしまった。困っているのは、私の方だ——三保は自分の怒りを自分にぶつけてしまった。

それから数日後、考えても妙案は浮かばず、ホームセンターでシャワーヘッドを自費で買い、四〇三号室へ行って自分で古いものと交換した。水栓をひねると、勢いよく新しいシャワーヘッドから水が噴き出した。三保は、よそよそしく、「貸主さまからの指示で取

り換えさせていただきました。これでよろしいでしょうか」と、借主に告げると、営業所に引き返した。帰ると、自分のデスクの袖の引き出しの奥に、古いシャワーヘッドを、自分の感情とともに押し込んだ。そしてデスクの上を見ると、吉田工務店へ発行を依頼していた、半年前のインターホン取り換え工事の見積書が届いていた。三保は、自分の手もと資料用に一部コピーをとったあと、一筆添えて、この見積書を長谷川に送った。「これで、長谷川も納得して、工事代金を吉田工務店に支払うであろう。インターホンもシャワーヘッドも、もうこれですべてが終わった」。疲労のなかで三保は、慰めるように自分に言い聞かせていた。

七.

しかし、事は、これで終わってはいなかった。むしろ、さらに大きな問題へと発展していった。それは、三保へ宛てた長谷川からの一通のメールではじまった。そのメールには、冒頭に、こんなことが書かれてあった。

「これからのやり取りは電話ではなく、メールにさせてください。のちのち、言ったとか、言わなかったとかの水掛け論になることを避け、しっかりと証拠として残しておきたいからです。メールの表題は『サンライズホーム四〇三号室の設備不具合についての管理業務について』とさせていただきます。いっさいこの表題を変更せずに、今後この表題のもとに、双方の交信を続けたいと思います」。

ここまで読んで、三保の体に何か稲妻のようなものが走った。長谷川は、何を考えているのであろう。何をしようとしているのであろうか。三保は、次の段落へ目を進めた。すると、驚くことに、概略次のようなことが書かれてあった。

「インターホンの取り換え工事の見積書、受け取りました。しかしよく見ると、この見積書の日付が、すでにいただいております請求書の日付の三日後となっています。なぜなのでしょう。ご説明ください。私の理解では、日付は、見積書、工事完了確認書、請求書の順に並ぶのではないかと思います。見積書と請求書の日付が逆転していることの説明とあわせて、借主の署名と捺印がなされた工事完了確認書の提出を求めます」。

すぐさま三保は、見積書と請求書のコピーをファイルボックスから取り出した。長谷川が指摘するように、請求書の発行日付から三日後の日付が、見積書に記載されていた。あたふたと、受話器を握りしめた。しかし、吉田工務店の担当者は不在だった。そして経緯の確認がとれないまま、三日が流れた。

出社すると、いつものように三保は、パソコンを立ち上げ、メールの確認をはじめた。すぐにも目に留まったのは、「サンライズホーム四〇三号室の設備不具合についての管理業務について」を表題とするメールであった。大まかな内容は、こうだった。

「先日の質問につきまして、この三日間、いかなる回答もいただいております。この質

問の内容は貴社と締結しています賃貸管理業務委任契約に関するものでありますので、すみやかに回答する義務が貴社にあるものと考えられます。そこで、そのことを踏まえまして、以下にさらに二点、ご質問をさせていただきます。（一）ご回答の責務を履行されない理由は何なのでしょう。（二）回答ができないということは、質問内容に関しまして、賃貸管理業務委任契約に反する行為が貴社にあったことをお認めになった証左であると理解しますが、そのように受け止めてよろしいですね。確認をさせていただきます」。

三保は、「お返事が遅くなっていますが、これは、責務の履行を怠っているわけではなく、現在、工事を担当した会社にお問い合わせ、確認中によるところのものです。ご理解いただき、いましばらくお待ちください」——こう返信するのが、やっとなことだった。すると、間を置かずして長谷川から再びメールが届いた。内容は、六つの質問と、それへの回答を求めるものであった。三保は、無我夢中で六つの質問に目を走らせた。短く要約すると、おおかた以下のようなことが、箇条書きされていた。

（一）なぜ、不具合状況の説明もなく、そして、貸主の了解もなく、インターホンの取り換え工事が行なわれたのですか。やはり、架空工事だったということでしょうか。

（二）なぜ、その工事にかかわる請求書が、貸主に送られてくるのですか。本当に不具合はあったのですか。もし不具合があったとしても、その責任は、借主にある可能性もあるのではないのでしょうか。なぜ、確認しないのですか。

（三）請求書の送付に際し、なぜ、社用の公的な便箋ではなく、私用に使う花柄便箋をお使いになったのですか。貴社では、日常的に公私混同が行なわれているのですか。

（四）なぜ、見積書と請求書の発行日付の順番が逆転しているのですか。明らかに、工事のあとに見積書が作成されたことになりますよね。

（五）なぜ、工事完了確認書が届かないのですか。本当に工事は行なわれたのですか。

（六）シャワーのヘッド部分の取り換えを、なぜ、瑕疵責任のある借主が行なうのではなく、貴社が肩代わりされたのですか。今後の不具合も、すべて貴社によって補償されるものと考えてよろしいですね。

そして最後に、こう記されていた。

「おそらく島田さまには、この質問に対してお答えできる職務権限も、当事者能力もないものと思われます。そこでこのメールを、賃貸管理業務委任契約書に記載されています私のカウンターパートであるところの、三井山土地開発株式会社賃貸営業部長の本郷真一さまに転送してもらい、直接ご本人さまからご回答をいただくべく、お取り計らいいただきますよう、よろしくお願いいたします」。

八.

三保は、窮地に立った。このメールを隣りに座る藤村由紀に転送して、指示を求めた。藤村は、こういった。この日はやさしかった。そして、珍しく流暢だった。「こんなメー

ル、営業部長に転送するわけにはいかないわね。こうなったら、『黒百合の源』に処理してもらおうことね。私から連絡して、アポをとっておくから、心配しなくてもいいわよ」。

「ありがとうございます。でも、その『黒百合の源』という人は、どなたでしょうか」。この質問に藤村は、鼻でせせら笑いながら、こう答えた。「知らないの、本社の黒田源蔵さんよ。飲むとあの人、おだてられているとも知らずに、平気で人前で、『緋牡丹博徒』の映画のなかの緋牡丹のお竜さんの真似をするのよ。腰を低くして、右手を出して、上目使いに、『姓名の儀は、姓は黒田、名は源蔵、別の名を黒百合の源と発します』とか何とか、仁義を切るのよ。変でしょ、そんなに格好つけなくてもいいのに。だからみんな、黒田さんのことを陰では『黒百合の源』と呼ぶのよ。馬鹿げた話だと思うけど……」。

そのとき三保は、新人研修の最終日の懇親会のときに出会った黒田との会話を思い出した。あの人が「黒百合の源さん」なのか。そういえば黒田さんは、『緋牡丹博徒』がきっかけでこの道に入った、といていたし、確かそのとき、「徳」が話題に出た。黒田さんにとっての「徳」とは、任侠世界の義理や人情のことを意味していたのだろうか……。

それから二日後、本社の会議室の片隅で、三保は、社員呼んで「黒百合の源」こと黒田源蔵に会った。職務上のミスを叱責されることを覚悟していた。下を向き、目をあわせることもなく、消え入るような面持ちで相談内容を一つひとつ説明すると、聞き終わった黒田は、こうしゃべり出した。

「私はあなたの直属の上司ではありません。したがって、あなたのこの間のお客さまへの対応が適切なものであったかどうかを云々することは控えます」。

三保は、うつ向いたまま、「本当に申しわけありませんでした」と、小声で応じた。それを聞いて黒田は、話を続けた。

「私はお客さまとのトラブル解決には、極上と松竹梅の四つのレベルがあると考えています。極上は、法廷での決着です。松は、示談金や慰謝料などの金銭による決着です。竹は、社としての公的な文書による回答や謝罪を意味し、最後の梅は、電話やメールでのやり取りのなかでの話し合い解決を意味します。重要なことは、すべてのトラブルを梅のレベルで止めることです。そしてそれが、私の仕事です」。

「ご迷惑をおかけします。どうか、よろしくお願いします」。三保は、蚊の鳴くような弱々しい声で、言葉をつないだ。続けて黒田は、こういった。

「今日お聞きした問題も、何とか話し合いで解決しなければなりません。今後私が、このメールを引き取って長谷川さまと話してみます。あなたにも同文のメールが読めるようにしておきます。もし今後、再びあなたにお聞きしたいことが発生したら、電話かメールをします。今日は、これで結構です。営業所にもどり、勤務に復帰してください」。

帰りの電車のなかで、三保は、黒田さんはこの問題を今後どうもってゆこうとしているのだろうか、と自問した。しかし、想像さえできなかった。自分の能力のなさ、性格の弱

さをしきりと責めた。車窓の外に目を移してみた。遠くを眺めると、三井山連峰が美しくも初冠雪していた。一方、都市部を抜けるにしたがって、ビルや家がなくなってゆき、それに代わって、積雪の山々を背景に、いまだ残る田園や山野が少しずつ姿を現わす。おもしろいことに、家がなくなって、田畑が現われ、次の駅が近づくと、田畑が消えて、また家やビルが現われる。そのときのことだった。「人がいなくなると家が消えます」、それでは「家がなくなると、今度はそこから何が生まれるのでしょうか」——昔から抱いていた三保のいたずらっぽい疑問が再生された。

藤村由紀であれば、こう答えるのではないか。「決まっているじゃない、家がなくなれば、そこからビジネスが生まれるのよ。私たちがここでこうして働いているのも、そのおかげでしょ」。確かにそうである。それでは、黒田源蔵であれば、どうであろうか。「私は、家がなくなると、今度はそこから争いが生まれると思います」、と答えるにちがいない。そこに彼の存在意義があるのだから……。しかし、三保の頭の片隅では、違った別の答えが、胎児のように、小さな手足を動かしていた。

大学で卒論を書いていたときに見た総務省統計局の資料には、二〇九五（令和七七）年には日本の総人口は半減すると推計されていたし、別の資料には、そのときまでには、日本の家屋は、いまの三分の一が空き家になることが示されていた。そうなれば、不動産会社の業態も影響を受け、これまでの造成と建設という足し算の仕事から、解体と再生という引き算の仕事へと大きく変化するはずである。人には恥ずかしくて、こんな偉そうなことは誰にもいえなかった。しかしこれが、三保の内に秘めた、卒論の結論部分であった。これからこの世紀の終わりに向けて、ビルや家屋がどんどん空き家になって、解体されてゆく。そして、そのあとに、昔あった自然や田園が生き返る。このようにして日本の国土の原状回復が進められてゆくにちがいない……。家や建物がなくなって、そこから生まれるものは、明らかに自然と田園なのである。自分はいま、そんな時代に生きている。

ひ弱になっていた三保は、移りゆく窓からの眺めに誘われながら、子どものころに体験した、「雪消」という文字への感動や、人がいなくなった家の解体場面や、その後の、卒論で頭を悩ませていたころの自分の情熱を思い出しては、そこにわが身を置こうとしていた。

九.

営業所にもどると、さっそく黒田から長谷川に宛てたメールが、三保にも届いていた。素早い対応に驚きながらも、書かれている内容をいち早く知りたいという思いで、そのメールを開いた。書き出しには、こう書かれてあった。

「私は、三井山土地開発株式会社賃貸営業部付グループリーダーの黒田源蔵と申します。長谷川良介様には、ご所有のサンライズホーム四〇三号室につきまして弊社とのあいだで賃貸管理業務委任契約を交わしていただいております。平素から大変お世話になっております。今般、本物件の管理業務につきまして、受任者であります三井山土地開発株式会社賃貸営業部長本郷真一へお問い合わせをいただき、ありがとうございました。しかしなが

ら、すでに本郷は関連会社に出向しており、それ以来、私が、押印管理者に任命され、対応に当たらせていただいております」。

このことは事前には聞かされておらず、三保は、これにより黒田の立場をはじめて知った。黒田の文は、六つの質問内容への回答へと進んだ。回答の趣旨は、おおかた以下のようなものであった。

（一）テレビモニター付インターホンの取り換えにつきましては、防犯上緊急を要するものであり、同時に、少額工事の範囲にある案件であると判断いたしました。借主さまからの強い要望に沿って、ただちに工事を進めさせていただきました。

（二）テレビモニター付インターホンの不具合につきましては、工事担当会社（吉田工務店）の判断によりますと、経年劣化によるものであるとの報告を受けております。

（三）便箋につきましては、担当者に確認しておりますが、弊社では、公私の区別をはっきりつけて業務に当たるように、従来から指導しております。今後、そのことを徹底させてゆく所存であります。

（四）請求書と見積書の日付に関しましては、吉田工務店に確認いたしましたところ、単純な記載ミスであることが判明いたしました。誤った日付になっているにもかかわらず、担当者が十分に確認しないまま、長谷川様にお送りしてしまったことを、心からおわびいたします。改めて正規の書類を送らせていただきます。

（五）工事完了確認書につきましては、これも吉田工務店に確認しましたところ、従前より、こうした書類は発行していないということでした。

（六）シャワーのヘッド部分の不具合につきましては、借主さまから再三のご要望があり、また、使用不可能な状態であることを踏まえまして、これ以上借主さまにご不便をおかけしてはいけないという担当者の判断で取り換えさせていただきました。ただし、これが前例となることはありません。

三保にとっては、必ずしも事実ではない表現もあったが、黒田が、自分のためにこう書いていることを思うと、それは口に出せなかった。自分も三井山土地開発の一社員として、黒田の見解に従わなければならない——そういう思いが三保に生まれていた。しかし、長谷川を憎む気にもなれなかった。

そして最後に、黒田は、こう締めくくっていた。「今回の担当者の対応に、長谷川様の信頼を損ねる結果を招いた部分があったことを深く反省し、これからの賃貸管理業務の向上につなげてゆきたいと考えます。今後これ以上の事実が判明しない限り、これを持ちまして、最終的なご回答とさせていただきます。引き続き、どうかよろしくご指導たまりますよう、お願い申し上げます」。

三保には、黒田が、真実であろうと虚偽であろうと、作り上げたストーリーを本心から信じて発話していることが、ひしひしと伝わってきた。これが会社を守る防波堤というものであろうか。悪役というか、汚れ役というか、黒田の役回りに同情した。しかし、ど

こかで完全に同心化できない自分も存在していた。徹しきれない自分、身軽さを求める自分、何かそんなものが、三保の内面に居座っていた。

一〇.

そのメールから一日が過ぎた。長谷川の返信はない。三保は、これでこの件はすべて終わったのか、そうではないのか、長谷川の気持ちを知らたかった。それから二日後、じりじりしながら待つ三保のパソコンに、長谷川から黒田に宛てた返信のメールが入った。これは、こうした非日常的な文言からはじまった。

「いただいたご回答は、大変理知的で堂々としたものであり、クレーム処理における他の手本となるような、実に見事な表現と語句の羅列によって構成されており、心底感服するとともに、あたかも、羊が狼に急変するさまを扱った、めったに経験することのない、貴重な一幕の芝居を観るようでもあり、十分堪能させていただきました。難しい役どころ、本当にご苦労さまでした」。

明らかに長谷川は、黒田の回答を嘲笑している。彼の目には、黒田の文は、強弁とも詭弁とも駄弁とも、映じたのであろう。長谷川のメールは、次のような一文で閉じられていた。

「私は、黒田さまご自身を責めようとは思いません。また、賃貸管理業務委任契約書に反することを理由に、管理手数料の返還を求めようとも思いません。そうではなくて、私は、あなたの職責を疎ましく思っているだけなのです。なぜ、正直になれないのですか。この回答には、多くの虚勢や欺瞞が含まれています。今後、幾つかの疑問点や矛盾点をお尋ねしますので、再調査のうえ、真相を明らかにしていただきたいと思います。私は真実が知りたいのです」。

これを読んで三保は、いま世間の関心を集めている、国有地売却にかかわる国の疑惑隠しへの犠牲者側からの再調査要求に幾分近いものを感じ取った。しかし、その心情は心情としてありながらも、会社に金銭的損失はなく、長谷川にとっても実害はない。おそらく長谷川は、見積書と請求書の日付問題を理由に、インターホンの取り換え工事の費用を支払うことはないであろう。そうであれば、工事を請け負った吉田工務店がその損失を被ることになるが、それは今後、工事の依頼を増やすことで、ある程度補えるし、シャワーヘッドの購入費は、すでに自分が負担している。この実態を冷静に見れば、長谷川の今後の再調査の要請は、誰にとって得になるというのであろうか。三保は、現状に幕を降ろしたかった。

もちろん三保には、長谷川が求めているのが、損得ではなく、高德にかかわることであることは、理解できていた。実のところ、生まれたときに父親がつけた自分の名前に、「美」と「体」に加えて、「徳」が含まれていた。そしてまた、新人研修の懇親会で顔をあわせたとき、黒田が、「おおかたの人は、徳を失いがちですから。ぜひとも、徳を、こ

れからの仕事のうえでも、大切にしてください」といったことも、三保にはしっかりと記憶に残っていた。

誰しも「徳」に生きたい。しかし、このとき三保は、少し「徳」から身を引いた。私は、「黒百合の源」こと黒田源蔵のように、消えない「悪」や「汚れ」を背中に背負うほど強くはない。かといって、長谷川のように、「徳」だけに縛られていては、おそらく息苦しさを感ずるであろう。背負うのであれば、私は肩に白い雪を背負いたい。三保の思いは、営業所の窓から目に映る三井山連峰の春の雪消と重なっていた。暖かくなれば、雪であれば、間違いなく消える。私は雪消を待つ女でいい。三保は、しきりと別の自分に話しかけていた。それにしても、長谷川良介とは何者であろうか。一方で、その影のような存在が気になっていた。彼もまた、雪となって消えてほしい。三保はそう願った。しかし、自問もしてみた。長谷川が消えてしまえば、今度はそこから何が生まれるのだろうか――。

(二〇二〇年)

中山修一著作集 1 3

南阿蘇白雲夢想

第四部

日々好々万物流転（随筆集）

2023 年 10 月

中山修一著作集 13

南阿蘇白雲夢想

第四部

日々好々万物流転（随筆集）

目 次

序に代えて	三
第一話 二度の震災に遭って思う	四
第二話 蘇る過去——新聞部での大失態	八
第三話 南阿蘇に魅せられて	九
第四話 阿蘇南郷谷の温泉——地震からの復興のなかで	一一
第五話 私の南阿蘇暮らし——生活習慣の改善と執筆活動	一四
第六話 私の南阿蘇讃歌——庭の四季を楽しむ	二四
第七話 ロシアのウクライナ侵攻を考える	二九
第八話 死と向き合う	三四
第九話 この地の水と食べ物事情	三七
第一〇話 消滅か再生か	四〇
第一一話 実家の終幕	四三
第一二話 病窓より	四七

序に代えて

この、著作集 14 『外輪山春雷秋月』の第四部「日々好々万物流転（随筆集）」は、「目次」にもありますように、以下の一二話から構成されています。

- 第一話 二度の震災に遭って思う
- 第二話 蘇る過去——新聞部での大失態
- 第三話 南阿蘇に魅せられて
- 第四話 阿蘇南郷谷の温泉——地震からの復興のなかで
- 第五話 私の南阿蘇暮らし——生活習慣の改善と執筆活動
- 第六話 私の南阿蘇讃歌——庭の四季を楽しむ
- 第七話 ロシアのウクライナ侵攻を考える
- 第八話 死と向き合う
- 第九話 この地の水と食べ物事情
- 第一〇話 消滅か再生か
- 第一一話 実家の終幕
- 第一二話 病窓より

神戸大学を定年退職した私は、住み慣れた神戸の地を離れ、生活と研究の場を、以前から別荘として使っていた南阿蘇（南郷谷）の小庵に移しました。こうして新しい田舎暮らしがはじまりました。ここに述べる「日々好々万物流転」は、記憶のなかの過去の出来事、昨今の南阿蘇（南郷谷）での暮らしの様子などに焦点をあてて綴ったものです。いわば私にとりましての近年の「生活雑感」です。そのなかには、雑誌への寄稿文や集会での講演原稿も含まれており、それぞれの文の末尾に「初出」を示しています。大事な記憶が遠ざかる前に、したためておきたいと思います。

（二〇二三年中秋）

第一話 二度の震災に遭って思う

一九九五（平成七）年一月の阪神・淡路大震災から二一年目のこの年、突如として高森町に激震が走り、再び私は巨大地震に遭遇した。

私が南郷谷の東端に位置する高森町をはじめて訪れたのは、高校二年の終わりの春休みのときだった。同級生数名との日帰りのお別れ遠足といった感じだったが、鍋の平キャンプ場に向かい、眼前に広がる根子岳を前にしたとき、私はその凛々しさに圧倒され、これから始まるであろう受験勉強のことも忘れ、ただただ、いつの日かこの地で暮らしてみたいとの思いに駆られていった。人生における若き日の衝撃というものは、このようなものなのだろうか。五〇年近く前の出来事である。

月日が流れ、一九九二（平成四）年の暮れに、高森町色見地区の牧野道を上った一角に小さな山荘をつくった。すぐ裏手の草原には牛が放牧され、根子岳もスギ林の合間からその力強さを垣間見せていた。夏や春の休みになると、いまだ小さい子どもたちが、野の花や虫たちを求めて庭先を駆け巡った。普段は、熊本市内に住む両親がしばしば好んで訪れ、私たち家族にとってまさにこの地は「地上の天国」であった。

阪神・淡路大震災が私たち家族の住む神戸を襲ったのは、それから数年後のことだった。家族は無事だった。しかし、部屋のなかには本棚も食器棚もテレビも、すべてが倒れ、床には物という物が散乱し、そのかたちをとどめないほどに無残な姿をさらけ出していた。すぐさまマンションの外に出てみた。いつもは静寂で、夏には心地よい涼風が吹き流れる通り道は、両側から家屋が倒壊し、瓦礫で塞がれ、先が見通せない、まさしく「地上の地獄」と化していた。ひと言の言葉も出なかった。思考が停止し、呆然とそこに立ちすくんでしまった。

二晩の避難所生活ののち、歩いて西宮まで行き、空路家族を熊本に住む両親宅に疎開させ、私は、昼間は職場の、夜は自宅の復旧作業にあたった。無我夢中だった。水道、電気が通り、最後のガスが使えるようになったのは、地震発生からおおよそ二箇月が立っていた。復興の兆しも少しずつ見えてきた。いつしか季節も、厳しい冬の寒さが幾分和らぎ、穏やかな春の暖かさへと着実に変わろうとしていた。その間子どもたちは、おじいちゃんとおばあちゃんに連れ添われて、この山荘へも出かけ、春のはじめの阿蘇の大自然を満喫した。四月から小学三年生になる息子と小学校に入学する娘のふたりの子どもたちの目には、そのときの神戸と阿蘇との落差がどのように映っていたのだろうか。息子には、私が託麻原小学校の卒業生ということもあり、また、たくましく一生を生き抜いてほしいとの希望もあって「託麻」と名付けた。一方娘は、美しい阿蘇に因む「阿美」という名前をもっている。この音はフランス語で友だちを意味し、生涯よき友に恵まれてほしいという親の願いが込められている。

それからさらに歳月が流れ、二〇一三（平成二五）年の三月、三九年間勤務した神戸大学を定年により退職した。その間ぼんやりと定住を考えていた私は、最初の一年目を、神戸と山荘を行き来しながらの四季を通じてのお試し体験にあてた。ところが一年目が終わろうとする厳寒の二月、何十年ぶりという大雪がこの地を襲った。牧野道が雪で覆われた。町に出るために車は近くの公道沿いに置き、もはや道の姿さえも判別できない一面の銀世界を、コートと帽子と手袋に身を包み、竹の杖を頼りに、数日間この牧野道を歩いて往復した。歩いていると自然と体が温まり、一息ついて振り返ると、そこには長靴の足跡だけが無言のま

ま長く曲がりくねって残っていた。何か自分のこれまでの人生と重ね合わせるような感傷に浸った瞬間であった。

二年目の夏、ついに意を決して山荘の増築に取り掛かった。神戸の家財道具を入れるためである。すると増築の完成がそこまでに迫った十一月、今度は阿蘇中岳の火山活動が活発化し、それ以来火山灰がこの地区に降り落ちるようになり、重苦しい灰色の世界が広がった。屋根やウッドデッキ、車や庭に火山灰が積もり、窓も開けられない過酷な生活は、これまでに経験はなかった。数箇月間くらい降灰との悪戦苦闘の日々が続いたかと思う。それでも心身をいやしてくれたのは、阿蘇の自然の四季の美しさであり、温泉のぬくもりであった。こうしてやっとのこと、定年後三年目の昨年の夏を過ぎたころから、それまでイメージしていた安堵と静寂に満ちた山荘暮らしが営めるようになった。いよいよ待ち望んでいた新生活のはじまりである。

しかし悲しいかな、それもつかのまのことであった。この四月一四日の夜半、大きな揺れが眠りについてた私の身体を強く揺り動かした。そうでなかったことはあとでわかることになるが、そのときは一瞬、阿蘇が爆発したと思った。夜が明けるとともに、すぐに私は車を走らせた。熊本市内に住む老齢の両親の安否を確認するためである。室内には少々の落下物が散乱していたものの、ふたりとも無事だった。取り急ぎ、割れ落ちた危険物を除去し、安全を確保すると、折り返し山荘にもどり、自宅家屋の損傷の有無を調べ、そのあと、明日再び両親の家に行くために、差し入れの料理をつくった。メニューは、天ぷらと鶏のからあげ、そしてポテトサラダだった。それからそのままベッドに入った。

すると、有無も言わせぬ強い力が再び、私の眠りを破壊した。形容しがたい家のきしむ音、物が落ち割れる音、そしてすべての明かりが奪われた。日が変わった一六日未明のことだった。のちにこれが本震であることがわかったが、完全に生活は無の状態となった。二一年前の神戸での体験の再来であると瞬時に思い、覚悟を決めた。懐中電灯ひとつで不安な数時間を過ごし、外が明るくなるのを待って、とりあえず状況把握のために町役場に向かった。ところが例の牧野道の途中で大小五、六箇の土の塊が崩落し、道を塞いでいた。車を止め、どうにか車が通れる幅まで自分の手で土石の撤去を行なったものの、これは単なる入り口であって、極めて過酷な生活上の困難がこれから待ち受けていることは、すぐさまそこからも読み取ることができた。何とか町役場にたどり着きはしたが、職員は一四日に発生した地震の対応に追われ、さらに新たにいま何が起こって、これからどうなるのかといった見通しを語ってくれる人は、一六日の早朝にはまだ誰もいなかった。そうした、情報のない虚無的空白状態が数日間続いた。外部との連絡は、役場に設置された緊急用の仮設電話だけだった。両親、妹夫婦、子どもたちと連絡がとれたことだけでも、ありがたかった。両親は、余震を恐れ夜は近くの病院のロビーに避難し、日中は妹夫婦の家で過ごしていた。地震の恐怖で体調は思わしくなかった。道路が寸断され、ガソリンも残り少なく、余震や雨も続き、すぐにも熊本市内に入れる状況ではなかった。

しかし、予想していたよりも、高森町の復旧は比較的速かった。高圧発電機車による送電が開始されたのは、三日後の一九日のお昼過ぎのことだった。ガスはプロパンなので最初から問題はなかったが、水も、通電したおかげで地下水を汲み上げるポンプが安定的に作動しはじめた。この日には、情報を得て、高森峠を越えた蘇陽にあるスタンドまで行き、給油することもできた。翌日には仮設の光ケーブルが通じ、これでパソコンが使えるようになった。

スーパーでも少量ではあるが、品物が並んだ。頼みの綱とでもいえる携帯も、さらに遅れはしたものの、その数日後には使えるようになった。こうして、私の住む山荘についていえば、一六日の本震からほぼ一週間後には、インフラや通信手段が復旧し、食料、ガソリン等の確保も可能となった。

そのあとすぐに熊本の実家に行った。見ると、外壁の数箇所に亀裂が入り、屋外の給湯器は倒れ、玄関入口周りのタイルが剥がれ落ちていた。室内は、見る影もない無残な姿を露わにしていた。その日からというもの、私は、片づけのために毎日実家通いをすることになった。阿蘇大橋が崩落し、俵山トンネルも落石のため不通となり、熊本市内に入るには、南外輪山を越えるグリーンロードのみが通行可能となっていた。

グリーンロードの地蔵峠を越える手前に展望所がある。そこからの南阿蘇の南郷谷の眺めは、何物にも劣ることはないであろう。誇るべき絶景なのである。しかしいま、目を西端の立野方面に移すと、地滑りの跡と思われる山肌がむきだしになっている【図一】。さらにこのグリーンロードの先には、被害が大きかった西原村と益城町がある。何の手助けをするわけでもなく、連日素通りすることが、ある種の罪悪感めいたものを引き起こす。希望を捨てずに、いましばらく耐えてほしいと、ただ祈るばかりだった。

私が山荘生活を進めるにあたってモットーにしたのは、「あわてず、あせらず、あきらめず」であった。もし、豪雪と降灰と地震が同時に起こったならば、どうなるであろうか。山奥に住む私の命は、暖がなく、食料が途切れ、外との通信もできず、数日ともたないであろう。それでもこの地で生き抜きたいと思う。この間、慰めとなったのは、庭に咲く、白やピンクの大輪のシャクナゲの開花であった【図二】。自然は確かに怖い。しかしその美しさは、いつも人を和ませる。二度の震災に遭遇した私は、自然に対しても人に対しても、抗うことなく、率直に生きることの喜びを感じ取ることができる自分でありたいと、ひたすら願っている。

昨秋の託麻に続いて、五月四日は阿美の結婚式である。この原稿を無事に書き上げ、明日の三日、私は東京へ向けて熊本を発つ。その後は、病身の両親を支え、いままでどおりの自立した生活ができるようになるまで、しばらくは寄り添っていきたいと思っている。定年後の楽しみにしていたウィリアム・モリスと富本憲吉のさらなる研究は、いまだ遮断されたままである。「あわてず、あせらず、あきらめず」、その日が来るのを静かに待たなければならない。

【初出：「二度の震災に遭って思う」『KUMAMOTO』No. 15 号、くまもと文化振興会、2016 年 6 月、29-33 頁。】



図1 南外輪山地蔵峠からの南郷谷の眺め。左手に土砂崩れの痕跡が認められる。（4月29日に執筆者撮影）



図2 地震前日に庭に咲きはじめた山荘のシャクナゲ。（4月13日に執筆者撮影）

第二話 蘇る過去——新聞部での大失態

正確な過去の記憶が少しずつ薄れつつあるこのごろではあるが、新聞部での思い出となると、どうしてもあの失態が頭に浮かんでくる。それは広告原稿にかかわるものであった。

当時は、新聞の発行に先立って、掲載する広告の原稿を依頼主のところまで取りに行っていた。私が受け持ったのは、いまも上通にある老舗靴専門店だった。お店に行き、次号の広告をお願いすると、快く承諾してくれた。原稿は、前号と同じ。

いよいよ新聞が刷り上がり、広告が掲載された一部をそのお店へもっていった。すると店主の方から、すかさず間違いを指摘された。店名の「〇〇かばん店」が、どういうわけか「〇〇かばん店」となっていたのである。それでも、大目玉をくらうこともなく、さらには、あつかましくも、正規の広告料をいただくことになった。

それにしても、なぜ「ば」が「ぱ」に誤植され、それに気づかなかったのだろうか。前号と同一の広告ということで気のゆるみもあったのであろう、簡単な指示でもって印刷所に入稿してしまったことに加えて、丁寧な校正を怠ってしまったことが、こうした大失態につながったのである。釈明しようもない完全な私のミスであった。そして私は、店主の方のあの寛大な接し方に救われた。

それから何年かの歳月が流れて、私は大学に奉職した。自ら論文を書き、一方で学生が書く論文の指導をすることが、日々の生業となった。この間、執筆をしながら、また校正をしながら、高校時代の新聞部での失態が、ときどき頭を過ぎることがあった。思い返すたびに、恥じ入る気持ちにさせられる。

【初出：「新聞部での大失態」『卒業 50 周年記念誌』（熊本県立熊本高等学校 昭和 42 年 [高 19 回] 発行）2017 年 5 月、28 頁。】

第三話 南阿蘇に魅せられて

阿蘇南郷谷の東端に位置する高森町を私がはじめて訪れたのは、高校二年の終わりの春休みだった。友だち数人とのお別れ遠足といった感じで、鍋の平キャンプ場に行った。そこで遭遇したのが、眼前に迫りくる阿蘇五岳のひとつ、根子岳であった。一瞬にしてその凜とした力強さに魅了されてしまった。月日が流れ、一九九二（平成四）年の暮れに、色見の奥の牧野道を上ったところの一区画に小さな山荘をつくった。それ以降、春や夏になると、この地でしばしの休暇を楽しみ、ふたりの幼い子どもたちは虫や花を求めて庭先を駆け巡った。

二〇一三（平成二五）年の三月、私は三九年間勤務した神戸大学を定年により退職した。一年目は四季を通じてのお試し山荘暮らしにあてた。二月の豪雪には確かに閉口した。それでも意を決して少しばかりの増築を行ない、二年目の暮れに神戸を離れこの高森町に引っ越してきた。すると今度は降灰である。夢に見た新生活はどんどん遠のいていく感じがした。やっと一息つけたのは昨年（二〇一六）年の秋ころからであろうか。しかしそれもつかのま、今年（二〇一六）年の四月一四日と一六日、突如として熊本を大きな地震が襲い、普段の生活が一変した。そうしたなか、同じ新聞部だった廣島正さん（昭和四二年卒業同期三年一〇室）から電話があり、震災の体験を寄稿してほしいという依頼であった。聞くと彼は、宮崎眞由美さん（同期三年一一室）の取材の協力を得て、季刊の総合文化誌『KUMAMOTO』の編集責任者をしているという。いまだ厳しい生活環境のなかにあつたものの、自分自身の記録として文字で残しておきたいという気持ちもあり、阪神・淡路大震災と熊本地震の経験を内容とした「二度の震災に遭って思う」と題する原稿を書き上げ、送付した。

それから一週間くらいが立った五月一日の未明、今度は激しい胸痛が私を襲い、済生会熊本病院に緊急入院した。心筋梗塞だった。冠動脈の一箇所にはステントを留置し、幸い一命はとりとめた。退院後は、体力や気力にかかわる活動能力がこれまでの六、七割程度にまで低減した超低速生活を強いられることになった。四級の身体障害者手帳が交付された理由もそこにあった。かつて現役最後の年（二〇一二年）の八月に神戸大学の付属病院でガンにより前立腺を全摘出していたこともあり、それに続く今回の疾病は、あつてはほしくないが、何か今後さらに過酷な病の発症を予感させるに十分な出来事となった。

地震から四箇月が過ぎたある日、隣の南阿蘇村に住む村上建徳さん（同期三年一室）から電話があった。内容は、高森町在住の私中山修一（同期三年二室）と堤泰宏さん（同期三年八室）、高森町に実家のある菅原州一さん（同期三年七室）、最近南阿蘇村に引っ越してきた橋本正博さん（同期三年六室）と、それに自分を加えた同期の五人で一杯飲もうという話であった。阿蘇南部江原会の会長で南阿蘇村在住の牧野雄二先輩（昭和三五年卒業、熊大名誉教授）もゲストとして出席され、計六名が、八月二日に南阿蘇村久石の蕎麦茶屋「山さくら」に参集した。橋本さんは、四月一三日に関西からこちらに引っ越してきて、翌日地震に見舞われていた。ほかの五人は、地震の四日前の四月一〇日に、南阿蘇村中松の藤本康子先生（昭和四四年卒業、藤本医院院長）の病院のお庭を借りて和気あいあいと阿蘇南部江原会の恒例の「春の宴」を楽しんでおり、地震後最初の再会となった。

私は、定年の数年くらい前から、退職後は、栄華の巷を低く見て、阿蘇の山中に隠遁、蟄

居をし、ウィリアム・モリスと富本憲吉にかかわる論考を引き続き執筆する学究生活に憧れを抱いていた。しかし、いまだそれが遮断されたままとなっている。現在執筆中のテーマは「富本憲吉と一枝の近代の家族」である。周知のとおり、富本憲吉は、一九世紀英国のデザイナーで、詩人で、政治活動家でもあったウィリアム・モリスの思想に影響を受けた近代日本を代表する陶芸家のひとりであり、その妻の一枝は青鞥社の一員として出発した日本の女性運動の先駆けとなった人物である。現役の期間中に、「緒言」以下「第一章 富本憲吉と尾竹一枝の出会い」「第二章 一枝の進路選択と青鞥社時代」「第三章 憲吉の工芸思想と模索的实践」「第四章 憲吉と一枝の結婚へ向かう道」の四章については脱稿し、私のホームページ「中山修一著作集」にも掲載している。残りは「第五章 安堵村での新しい生活」「第六章 千歳村での生活の再生」「第七章 離別とそれぞれの晩期」の三章である。完成することを密かに待ち望んでいる人がいる。その最初の読者に届けるために、たとえいかなる超低速生活のなかにあっても、着実に筆を進めなければならない。研究者としての残された命を、あたかも阿蘇の火柱のごとくに、真っ赤に燃やし続けながら――。

【初出：「南阿蘇に魅せられて」『卒業 50 周年記念誌』（熊本県立熊本高等学校 昭和 42 年〔高 19 回〕発行）2017 年 5 月、58 頁。】

第四話 阿蘇南郷谷の温泉——地震からの復興のなかで

私は大学に入学するまで熊本市で生まれ育った。そして、奉職した神戸大学を定年退職すると、阿蘇郡高森町の山奥の庵に蟄居し、いま自然回帰の生活を楽しみながら執筆活動に専念している。この間、小さいときは両親に連れられて、成人してからは家族と一緒に、よく阿蘇の温泉に出かけた。地獄や垂玉などの古くからの温泉旅館へ行くと、よく母親が自分の子どもころに來たときの様子をなつかしく話していた。そうした記憶をたどるように、高森に住むようになって以降は、近くの温泉施設でゆっくり朝風呂に入るのが、ほぼ日課となった。心も体も生き返る。さらにそのうえに、稚拙な詩歌の片々も口をつく。

小雨が降る降る 湯舟をたたく
阿蘇の五岳に わが身をゆだね
流れた月日を 愛しむように
いつか夢見た 御神火の里

およそ二七万年前から今日に至るまで永久の火山活動を続ける阿蘇火山。この火山活動とともに暮らしてきた地域の人びとにとって、温泉は、自然からの大きな贈り物であった。現在の南阿蘇村は、長陽村、久木野村、そして白水村の三村合併によって二〇〇五（平成一七）年に誕生した。旧長陽村が前年に発行した『長陽村史』のなかでは、「火山の恵み」という表題のもと、温泉にかかわって、こう記述されている。「長陽村には湯の谷、地獄・垂玉・栃木など多くの温泉が古くから自噴していたが、その熱源は一様ではないようである。また、一つの温泉でも、掘削深度によって泉質や温度にも違いがあり、複雑である。この付近の温泉は、中央火口丘から地下に浸透した雨水が、地下深部の高温の岩体を通して上昇してくる熱とガスによって加熱され、同時に周囲の岩体の中に一つの温泉水の貯留槽ができているらしい。さらにこの貯留槽からの蒸気やガスによって、地表近くの地下水が温められ、いくつかの成分を持った温泉水が形成されているようである」。

寝湯に身を伸ばす
湯煙が風に舞い上がり
色づいた山の葉と戯れながら
灰色の雲に吸い込まれていく

さらに各温泉の特徴について、『長陽村史』は、次のように紹介する。湯の谷温泉は「中央火口丘群西麓の中腹にあって、古くから開かれた温泉である。湯の谷の、温泉としての歴史は十四世紀ころから始まる。……泉質は単純硫化水素泉で、中岳の活動との関係性が指摘されていることから、熱源は中岳のマグマとの関係が大きいと考えられる」。一方、地獄温泉は「標高約七百メートル、夜峰山の爆烈火口内にある。発見時期は明らかではないが、江戸時代ごろから湯治場として栄え、現在の宿は天保三年（一八三二）、岩本徳三によって創設された。元湯は九〇度の単純酸性硫黄泉、雀の湯は四二度の硫化水素泉である」。

この地の湯治は、江戸時代中期ころからはじまり、当初は、藩士以上の高級武士か一部の僧侶にしか利用の機会が与えられていなかったらしい。その後主として農民が、農閑期にあつて二、三週間長期に滞在し、疲れた体を休め、持病の回復にも努めた。温泉を利用したこうした湯治は、治癒力や免疫力を高め、当時の人びとにとって、なくてはならない「火山の恵み」としての医療手段であつた。温泉が観光やレジャーの一部となっている現代にあつては、忘れかけられているかもしれないが、ひと昔前までは、自炊のための食料や日用雑貨を荷馬車に積んで、宿に通じる山道を上る人たちの姿が見受けられたという。

昇りゆく朝日に照らされて 露天風呂
森羅万象 すべての命が蘇える
ああ この世のよろこびよ

続けて『長陽村史』は、こう書き記す。垂玉温泉は「標高約六百七十メートル、疑獄温泉の北西側にある。天正年間（一五七三～一五九二）、ここに金龍山垂玉寺という観音堂があつたと伝えられており、このころから温泉の利用がされていたと考えられる。現在この観音堂は袴野に再興されており、千手観音像が祀られている。泉質は単純硫黄泉である」。最後に栃木温泉については、「白川の谷に沿い、鮎返りの滝や北向山の原生林などが望める風光明媚な場所にある。寛文四年（一六六四）の発見といわれ、阿蘇でも由緒ある温泉とされている。炭酸水素塩泉である」。

女湯と男湯を隔てる笹垣に
交わって
さざんか二輪が咲いていた

それではここで、南阿蘇村温泉旅館組合発行の冊子『南阿蘇の温泉』のなかの記述内容をもとに、泉質について少し説明しておきたい。泉質にかかわらず、温泉には入浴そのものによる身体への効能が広く認められており、たとえば、神経痛、筋肉痛、関節痛、疲労回復、健康増進などがそれに相当し、「一般適応症」と呼ばれている。それに加えて、温泉のなかでも医学的に「薬理効果」が認められているものを「療養泉」といい、「療養泉」の泉質は、主成分によって幾つかに分けられる。例を挙げると、「単純泉」は、含有成分の量が一定量に達していないために刺激が少なく、万人向けであると同時に、脳卒中のリハビリなどにも利用されている。「硫酸塩泉」は、血管を拡張して血液の流れを促進する作用があるため、高血圧症や動脈硬化症の予防に効果があるといわれている。「炭酸水素塩泉」は、皮膚の表面を軟化させる作用があり、皮膚病ややけど、切り傷によいとされている。「硫黄泉」は、固ゆで卵のような硫化水素特有の匂いが特徴で、解毒作用があるために、金属中毒や薬物中毒にも利用され、慢性の皮膚病や関節疾患への効能も指摘されている。「酸性泉」は酸味があり、抗菌力に優れているため、皮膚病や婦人病に適している。

露天の寝湯に 身を伸ばし
朝寝楽しむ 冬の阿蘇

閉じた瞼に 光射し
白雲夢想 消えにけり

東西約一八キロ、南北約二五キロ、面積約三五〇平方キロメートルの世界最大級の規模を誇る阿蘇カルデラ。いまなお噴煙を上げる中岳を中心に、東に根子岳、高岳、そして西に烏帽子岳と杵島岳の阿蘇五岳。この阿蘇五岳と南外輪山に挟まれた、肥沃な大地と豊潤な水資源に恵まれた南郷谷。この地に地獄温泉、垂玉温泉、栃木温泉といった昔からの温泉場があり、老舗旅館がその伝統をいまに伝える。その一方で、南阿蘇村と高森町で構成されるこの南郷谷には、近年開設されたさまざまな個性をもつ公共温泉場や温泉センター、加えて温泉宿泊施設が幾つも点在する。その魅力は、何ととっても、宿や施設によってそれぞれに異なる泉質の多様性にあるだろう。この多彩な泉質こそが、何度来ても飽きることなく楽しめる南郷谷温泉郷の大きな特徴となっている。

ところが、二〇一六（平成二八）年の四月、この地を大きな地震が襲った。建物が倒壊したり、宿へ続く道が寸断されたり、湯量が不安定になったり——想像を超える過酷な苦しみをもたらした。この間何とか再開にこぎつけた施設もある。いまだ再建途中の宿もある。なかには再興の見通しさえ立たないところもある。地震前の悠々の時を重ねた自然豊かな姿をいま一度取り戻し、「火山の恵み」をみんなで分かち合える日が再び訪れることを願いながら、ボランティアも行政も含め、多くの関係の方々の懸命の努力が日々続く。

最後に、本稿執筆に際しての取材に対し、ご協力をいただきました南阿蘇村役場と南阿蘇村温泉旅館組合に心からお礼を申し上げます。

【初出：「阿蘇南郷谷の温泉——地震からの復興のなかで」『KUMAMOTO』No. 21 号、くまもと文化振興会、2017 年 12 月、119-122 頁。】

第五話 私の南阿蘇暮らし——生活習慣の改善と執筆活動

はじめに

いま聞いていただいたのは、私たちの母校の校歌をピアノソロ（変ト長調）で演奏したものです。少し珍しいのではないかと思います、この講演の導入曲として使わせていただきました。

改めまして、昭和四二年卒業の中山修一でございます。本日は、みなさまのご期待に沿える内容になるかどうか、不安ではありますが、どうかよろしくお願いいたします。

それではさっそくですが、これより、「私の南阿蘇暮らし——生活習慣の改善と執筆活動」というテーマでお話をさせていただきます。私が神戸大学を定年で退職したのは二〇一三（平成二五）年の三月のことでした。いまから五年半前のことです。今日のお話は、この五年半の私の南阿蘇での暮らしについての報告ということになります。具体的には、スクリーンの目次にありますように、最初に「なぜ南阿蘇に恋をしたのかな」、次に「生活習慣の改善のなかでの心筋梗塞」、そして最後に「夢追い人の執筆活動」の順で、進めさせていただきます。

一．なぜ南阿蘇に恋をしたのかな

私が定年後の暮らしの場として南阿蘇の高森を選んだのには、幾つかの理由がありました。まずひとつには、高校時代に南阿蘇に魅了されたことです。二年生から三年生になる春休みに、お別れをかねて一〇人近くの友人と、はじめて高森の鍋の平に日帰りで行きました。そのときに見た根子岳の雄姿が私の心を強くとらえることになりました。その理由を振り返って考えてみますと、熊本市内からいつも見る山は、金峰山も、立田山も、阿蘇山も、みな、頂きの一部にしかすぎませんでした。しかし、このとき見た根子岳は、裾野のすべてまでが視野に入ってきました。山というものの全体の姿を見たのは、これがはじめてで、この美しく堂々とした全体像が、私が南阿蘇に魅了された大きな理由になっています。このとき、いつかはこの山麓で生活してみたいと強く感じました。

次に山暮らしを意識したのは、大学受験に失敗して壺溪塾に通った浪人生活のときでした。もう五〇年も前の話になります。いまでもそうかもしれませんが、当時の壺溪塾は、禅の教えを教育方針に取り入れている予備校でした。記憶が間違っていなければ、毎週月曜日の一限目がはじまる前に、塾長の講話があり、そのあと、座禅を行なうことになっていました。イスに座ったまま、両手をへその前で組み、雑念や妄想を体内から払いのけ、無の境地に入るように指導を受けます。禅寺や道場などでの本格的な修行ではありませんが、それでも、もはや高校生でもなく、かといって、いまだ大学生になっていない、落ち着き場をもたない浪人生にとりましては、ひとつの精神修養の場となり、微々たるものではありますが、私なりにこのとき、無の心を求める体験ができたと思っています。そのときは、何か書生にでもなった感じで、ひたすら勉強する充足感のようなものを覚えました。

一箇月ほど前のことです。雑誌を読んでいたら、ある禅宗のご住職のエッセイが目にとまりました。それには、平安時代の僧侶の西行や歌人の鴨長明がそうであったように、古来文人墨客は、山に隠棲することを理想の生活としていたと書かれてありました。そのとき「我

が意を得たり」とばかりに、ぽんと膝を叩きました。いまの私の山ごもりの生活も、ひとえに、こうした若き日の禅の経験が根底にあるからではないかと思っています。

同じく壺溪塾では、しばしば昼休みなどの空き時間になると、教室のスピーカーから、旧制高等学校の寮歌が流れていました。だいたい北から南へ、つまり、北海道帝国大学の恵迪寮の寮歌である「都ぞ弥生」からはじまり、いまの鹿児島大学の前身である第七高等学校造士館の寮歌「北辰斜めにさすところ」へと、順番に曲が続いていたように記憶しています。どの寮歌の歌詞も、総じて、移り行く四季の花鳥風月を愛で、世俗を離れて学問にいそしむことを奨励し、さらには、義を重んじ寮生同士の友愛の大切さを説く内容になっていました。座禅を行なうことで無の境地を少しずつ体験していた私のような若造には、この寮歌の歌詞内容は、乾いた心にしみわたる、清き水滴のように感じられました。とくに心をひいたのは、一高寮歌の「嗚呼玉杯に花うけて」の歌詞のなかにある「栄華の巷低く見て」という一語でした。このとき私は、金銭に明け暮れる栄華の巷ではなく、真実を追い求める学問の世界にあって、今後生きていけたら、と強く願うようになりました。

また五高寮歌の「武夫原頭に草萌えて」は、私の幼いときの記憶を覚醒させるに十分なものでした。そのときまでに、五高につながる記憶を、私は幾つかもっていました。小さいころ親はよく、かつての五高生のバンカラぶりを話題にしていましたし、熊大の運動会を見にいったような記憶もありました。そのときの運動場が「武夫原頭」だったのかもしれませんが。また、小学校の一年か二年生のとき、絵画の全国大会に出品する作品を描くために、選ばれて、熊大の近辺に先生に連れていってもらったことがありました。私は、五高を象徴する赤門を写生しました。そのときの作品が、「天地人」の三賞のうち、「地」か「人」の賞を受け、私なりの五高との関係が一層深まるような経験をしたことがありました。

その一方で、当時「原頭」という用語は、孤独な浪人生の私には、特別の響きがありました。寒風吹く原野に独りたたずむ青年の姿と重なったからではないかと思います。そして後年になって、母校の同窓会の名称である「江原会」の「江原」が、「大江原頭」の「大江」の「江」と「原頭」の「原」に由来する略語であることを知ったときには、壺溪塾で聞いた五高寮歌の「武夫原頭」と二重写しとなり、密かな感動を覚えたことを記憶しています。「大江原頭」こそが、私たちの校歌や第二応援歌に出てくる「託麻の原」だったのではないかと思われるのですが、いかがでしょうか。

このようにこの壺溪塾で体験した寮歌の歌詞の世界が、その後の私に大きく影響し、デザイン史を専門とする研究者の道を選ばせたのではないかと考えています。いまなお、断片的ではありますが、幾つかの寮歌が耳に残っており、ときおり口ずさむことがあります。これらの寮歌に書かれている内容こそが、浪人生活のときもそうでしたが、いまもまた、山のかでの私の研究生生活を勇気づける応援歌となっているのです。

私だけではなく、今日お集りのみなさまのなかにも、旧制高等学校の寮歌にさまざまな思いをもっていらっしゃる方が多いのではないかと思いますので、ここで、YouTube からダウンロードした五高の寮歌をご紹介しますと思います。もしほかの寮歌も聞きたい方がいらっしゃいましたら、遠慮なくリクエストしてください。すぐに用意いたします。

私が入学したのは、東京高等師範学校を前身校とする東京教育大学という大学で、当時、筑波移転を巡って学園紛争が激化していました。そのためほとんど授業らしい授業もなく、したがって、ほとんど勉強することもなく、ヨットの部活と家庭教師に明け暮れ、最後は、

大学から放り出されるようにして四年が終わってしまいました。結局は、入学式も卒業式も経験することはありませんでした。指導教授は、人吉のご出身で、五高から東京帝大へと進まれた方でした。その後、少し大学も落ち着きを取り戻し、修士課程を修了すると、幸運なことに、神戸大学教育学部の助手に採用されました。それから三九年間、この大学でデザインの歴史を講じ、プロダクト・デザインの実技を教えました。ところが、知らず知らずに、体に無理が生じていたのでしょうか、六〇歳になる少し前のころから、職場での検診も、人間ドックも、検査結果がよろしくなく、ついにコレステロールや血糖、そして血圧を下げる薬の厄介になるようになりました。自分でもふがいなく、この歳で薬漬けになることに、大きないらだちを感じました。こうして、自分の体や健康に、真剣に向き合うことになったのでした。

二. 生活習慣の改善のなかでの心筋梗塞

この間ほとんど病気らしい病気をすることもなく、少し過信していたのかもしれませんが。そこで、そのことを反省し、率直に医師の指示に耳を傾け、雑誌や本の記事にも積極的に目を向けるようになりました。

まず禁煙に取り組みました。いろんな方法を繰り返しながら、かなりの歳月を要し、やっと完全に止めることができるようになりました。その間、口がさびしいこともあり、食事の量も偏り、メタボの傾向はさらに進んでいました。そこで次の課題となったのが、減量でした。それ以降、大学の帰り道は歩くようにしましたし、時間があれば、朝夕、裏山に登りました。半年や一年では、ほとんど変化は表われませんでした。それを過ぎると、はっきりとした結果がついてくるようになりました。標準体重の範囲内にするためには、一〇キロやせなければなりませんでした。何とかそれに近づきつつあり、メタボ解消のゴールが見えてきたそのときのことです。現役最後の年、六四歳のときでした。何と前立腺がんが発覚し、全摘出手術を受けることになりました。手術は無事成功し、ほかの部位への転移もなかったのですが、悲しいかな、その後尿のトラブルに悩まされることになりました。こうして手術から半年後の二〇一三（平成二五）年の春、満身創痍の状態で、私は定年を迎えました。

生活習慣を変え、体質を抜本的に改善する——このことが、定年後の生活をはじめるにあたっての喫緊の課題となりました。そうしたなか、それまでの長いあいだ心のなかで眠っていた、高校時代に抱いた南阿蘇への熱い思いが、そしてさらには、壺溪塾での禅の教えと寮歌の世界とが、一気に鮮明に脳裏によみがえってきました。転地により、心身ともに生まれ変わり、一学徒として残された研究の道を歩むことを決意したのは、このときのことでした。いまから数えて二六年前の一九九二（平成四）年に、子どもを自然に親しませ、春、夏の休みを過ごすために、高森町の色見のはずれに小さな別荘を建てていましたので、住むところはすでにありました。こうして幾つかの理由が重なって、私の定年後の生活の場は、住み慣れた神戸から、高森の山荘へと移ることになったのでした。

一年目は、神戸と高森を行ったり来たりしながらのお試し体験にあてました。といいますのも、山荘生活は、これまで季節のいい春と夏しか知らず、一年を通しての生活、とりわけ、厳しい冬の生活を知らなかったからです。お試し山荘生活が終わると、二年目は、造園業者を入れて、少し庭の手入れをしました。それから、神戸からの荷物を入れ、日常生活ができ

るようにするために、少し増築をしました。最初の新築のときもそうでしたが、増築のときも、間取り等すべて自分でデザインしました。こうしてお気に入りの空間と庭ができたのですが、そのときくらいから、ご承知のように、中岳の火山活動が活発化して、日々火山灰が降るようになりました。閉め切っていても、部屋のなかにまで、灰が侵入してきます。新生活の意気込みが、見事にくじかれてしまい、日々、何ともいえない、むなしい気持ちに襲われました。収束したのは、二〇一五（平成二七）年の秋のころだったのでしょうか。やっとここへ来て、夢に描いていた生活習慣の改善と執筆活動が開始されました。もう定年から二年半が立っていました。

まず考えたのは、現役時代の乱れていた日常生活を見直し、一日を規則正しく過ごすことでした。真夏の日の出の時間、そして真冬の日の入りの時間におおよそあわせるようにして、早朝三時に起き、軽く朝食をとり、それから書斎で五時間ほど執筆に励み、それが終わるとだいたい九時に車で家を出て、三〇分ほどウォーキングをして、そのあと温泉に入り、昼前に帰宅し、午後の三時間は主に家の片づけや庭の手入れをして、ちょうど三時になると夕食をつくりはじめ、六時に就寝、そして翌朝三時にまた起床——こうした規則正しい一日の時間割でもって、待ちに待った新生活がはじまりました。

次に、体重だけではなく、コレステロール、血糖、血圧などについても、科学的に根拠のあるいろいろな情報を集め、数値目標を定めたいうえで、温泉、食事、ウォーキングを組み合わせた生活習慣改善のための最初のメニューを、とりあえずつくってみました。私が山暮らしをはじめるとあたってのモットーは、「あわてず、あせらず、あきらめず」でした。そこで、もしうまくいかなければ、別のメニューに移ることも視野に入れ、結果を急がず、十分時間をかけて、生物学的な個体としての自分の体に最も適合した改善方法を見出そうと、努力の日々が、こうしてスタートしました。

冬の寒さもうまく乗り切り、実践に入って数箇月が立ちました。もちろんまだ、これといった結果は出ていませんでした。ところがです、そうしたなか、みなさまもご経験のように、二〇一六（平成二八）年の四月、思いもかけない大きな地震がこの地を襲いました。そして、さらに不幸なことに、その一箇月後の五月、今度は、強い胸痛が私を襲いました。医者から告げられた病名は心筋梗塞でした。冠動脈の一箇所にはステントを留置しました。一命はとりとめたものの、その後、後遺症とでもいうのでしょうか、体力が衰え、気力が失われ、退院して山荘に帰ってみると、二階に上がることができません。重いレジ袋をもつこともできません。そして、短いメールさえも書くことができない体になっていました。大げさにいえば、そのときの気持ちは、ただ「絶望」のひとことでした。もはや、体質改善もなく、執筆活動もない、あるのは、すべての力を失った体と喪失感だけでした。

そうした状況が数箇月続いたのでしょうか、やはりこれではいけないと思い直し、そして、とりあえず、萎えてしまった心と体のリハビリという思いもあって、できる範囲で、少しでも発症以前の日々の生活へ復帰しようと気持ちを切り替えはじめました。「キリン午後の紅茶」のCM「あいたって、あたためたいだ」に出会ったのは、ちょうどそのときのことでした。舞台は、南阿蘇村の見晴台駅、主演は、一六歳の高校生の上白石萌歌さん、テーマ曲は、CHARAさんの「やさしい気持ち」でした。これを最初に見たとき、本当に感動しました。このCM作品は、南阿蘇村の震災からの復興を祈願してつくられたものでしたが、私にとりましては、そのことと同時に、心筋梗塞からの病後回復とが重なり、そのためでしょ

うか、大きなパワーとインスピレーションが、私の全身を震撼させました。いまから二年前の二〇一六（平成二八）年の暮れの出来事でした。それではここで、上白石萌歌さんの「あいたって、あたためたいだ」の CM と、それにあわせて作成された CM-MAKING をご覧いただきたいと思います。

その後も、上白石萌歌さんによる「キリン午後の紅茶」の CM のシリーズは続き、二〇一七（平成二九）年の夏には白川水源を舞台にした「おちつけ、恋心」が、そして、ちょうど一年前の二〇一七（平成二九）年の十一月には、同じく見晴台駅を舞台にした「あいたって、あたためたいだ」の第二弾が撮影され、オンエアされました。

生活習慣の改善と執筆活動という私の退職後の二大プロジェクトは、上白石萌歌さんの CM 作品に背中を押されるようにして、進行してゆきました。そのようなわけで、私は、一六歳の高校生のこの少女に救われたと思っていますし、とても感謝をしています。それ以降、生活習慣の改善の方は、この二年間で見事に軌道に乗り、幸いなことに、薬の服用効果もありますが、設定していた数値目標に、ほぼすべてのチェック項目が到達してゆきました。それまで、私が一貫して信じていたのは、自己に内在する治癒力と回復力とによる再生でした。いまでもこの信念に変わりはありません。そこで、こうした良好な体調の現状を踏まえて、いま考えているのは、湯治、食事、運動の各療法に加えて、体操による体づくりです。今後これにより、筋肉や骨の形や位置を整え、それらが支えている内臓の各器官の機能を活性化させ、老化現象を少しでも遅らせ、起こりうる病気を予防したいと考えています。

三．夢追い人の執筆活動

大学に勤務していた現役時代の主な仕事は三つありました。ひとつは、自分の専門とする領域の研究をすること、次に、授業をはじめ、卒論、修論、博士論文の指導を含む、学生に対して教育をすること、そしてもうひとつが、教授会や各種委員会に参加して学部や大学の運営に携わること、この三点でした。つまり、研究、教育、運営の三本柱にかかわって三十九年間を神戸大学で過ごしたことになります。そこで定年を迎えるときに考えました。これよりのちは、教育と運営からは完全に離れるとしても、研究だけは、何としてでも続けたいと。つまり、私の体内には、研究者として生涯現役でありたいという強い思いが、いまだに失われずに、持続していたのでした。そしてさらに、定年に際して、こうも考えました。三本の柱にかかわって三十九年間を過ごしてきたのであれば、三十九年の三分の一である一三年間が現役中の研究時間の総量であったということになり、これからさらに同じく一三年間、つまり自分が七七歳になるまで研究が続けられるとするならば、ちょうどいまが、研究の振り返り点になるのではないかと考えました。こうして私は、研究という柱に限っていえば、定年を迎えたのではなく、道半ばの中間地点に立っているという自覚をもつようになりました。

私の専門分野は、近代英国のデザイン史です。隣接する美術史や建築史は、学問領域としてすでに確立していますが、このデザイン史という分野は、私が院生のころにイギリスにおいて生み出された、比較的新しい学問領域です。とりわけ私は、一九世紀のデザイナーで、詩人や政治活動家でもあったウィリアム・モリスという人物に興味をもって、この研究の世界に入ってゆきました。そして、さらにのちには、日本人ではじめてモリスの仕事と思想に

関心を抱いて明治末年に英国に留学した富本憲吉と、そしてその妻で、日本の女性運動の先駆けとなった富本一枝について、研究の幅を広げてゆきました。富本憲吉は、いうまでもなく、日本の近代を代表する陶芸家であり、富本一枝は、平塚らいてうに憧れて青鞥の一員に加わった経歴の持ち主です。

定年後ただちに取りかかったのは、これまでの研究を時系列に並べ、本巻二巻、別巻二巻の全四巻によって構成される「中山修一著作集」をウェブサイトアップロードすることでした。こうした手法により、自分なりに過去の研究を整理し、これからの研究目標を明確にしようとしたのでした。現在は、執筆が加速し、本巻八巻、別巻二巻の全一〇巻の構成へと進化しています。そのなかには、もちろん未完の巻も含まれています。それではここで、現在の「中山修一著作集」のウェブサイトへご案内させていただきます。

この著作集を構成している柱は、ひとつは、通史としての近代英国デザイン史研究で、いまひとつは、個別研究としてのウィリアム・モリス研究と富本憲吉・一枝研究です。しかし、南阿蘇での山暮らし以降、それとは別の相に属する研究にも、関心をもちはじめています。これは何かと申しますと、それまでの研究の過程で遭遇した熊本^{びと}人にかかわる研究です。

今年に入って、地元の文化雑誌で、年に四回刊行される『KUMAMOTO』という雑誌の六月号に「汀女の句誌『風花』の終刊と初期編集者の富本一枝」を、続けて九月号に「中村汀女没後三〇年にあたって——汀女主宰誌『風花』創刊前後の人間群像」を寄稿しました。中村汀女さんは、ご存じのとおり、熊本が生んだ才能豊かな女流俳人で、富本一枝との親交も深く、この九月に没後三〇年を迎えました。それではここで、『熊本日日新聞』に掲載された『KUMAMOTO』六月号（第二三号）および九月号（第二四号）の広告をスクリーンに映し出してみたいと思います。

さらに私は、この『KUMAMOTO』の次の一二月号（第二五号）に、「石牟礼道子の『沖宮』の能衣裳を監修した志村ふくみの原風景」と題した一文を寄稿しており、もうすぐ、今月の半ばに刊行される予定です。いまからお見せするのは、その原稿の著者校正用の PDF ファイルです。

みなさんご承知のように、石牟礼さんは、今年二月にお亡くなりになりました。「沖宮」は、石牟礼さんの最晩年の作品で、つい先だって、水前寺成趣園の能楽殿において上演されました。残念ながら追悼公演となってしまったわけですが、このときの天草四郎と幼子のあやがまとう能衣裳を監修したのが、若き日に富本憲吉夫妻に薫陶を受けた、いま九四歳になられる染織家の志村ふくみさんでした。

中村汀女さんや石牟礼道子さん以外にも、これまでの私の研究の周辺には、多くの熊本人がいます。たとえば、五高で教鞭をとった夏目漱石は、ウィリアム・モリスの作品に影響を受けて、自著の書籍装丁に強い関心をもちました。富本憲吉も、漱石を訪ねています。富本憲吉は、モリスのデザイナーとしての側面を扱った「ウィリアム・モリスの話」という評伝を書いています。漱石に続いて五高に赴任した英文学者の厨川白村^{くりやがわはくそん}は、その富本が書いた評伝に刺激を受けて、自らは「詩人としてのキリアム・モリス」という論文を書いているのです。

また私は、戦後に「富本憲吉さんのこと」と題した評論文を書くことになる、蔵原惟人^{くらはらこれひと}にも関心をもちています。惟人自身は東京の生まれですが、父親の蔵原惟郭^{これひろ}は、阿蘇神社の家系に生まれた反骨の教育家で、衆議院議員も務めた清廉孤高の人として知られており、母親

の終子は、北里柴三郎の妹です。蔵原惟人は、戦前にあつては、とりわけ日本のプロレタリア文化運動の理論面での中心人物としてその役割を担い、八年半の獄中生活も経験しています。先日、熊本県立図書館で、彼が書いた書物を手にしてしまいました。そこに、「松前重義」の名前と住所が記載された寄贈印が押されていました。松前重義と蔵原惟人は、生没年がほぼ同じで、同じ時代を生きています。そのとき、熊本県ゆかりのこのふたりのあいだの思想的つながりに、はからずも触れたような感覚に陥り、驚いたことがありました。松前重義は、ご承知のとおり、旧制の熊本県立熊本中学校の出身で、かつて日本社会党の代議士を務めた人物でもあり、また、東海大学の創立者としても有名です。

蔵原が投獄されている時期の一九三六（昭和一一）年に、熊本県出身で、日本の女性史研究の偉大な先達である高群逸枝が、『大日本女性人名辞書』を上梓します。そのとき「高群逸枝著作後援会」が発足するのですが、その発起人に、富本一枝も加わっています。

このように、ウィリアム・モリス、富本憲吉、そして富本一枝を対象とする私の研究の周辺には、熊本人として、漱石や白村をはじめとして、蔵原惟人、高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子らがいます。この熊本の地でこれから執筆を続けるにあたって、こうした人たちの足跡を訪ねることも、残された私の研究のテーマの一部に加え、熊本人の精神のありかのようなものにかかわって、少しでも接近できたら、と考えています。

おわりに

いま私は山にこもって執筆に専念しています。その理由として、高校時代に感銘を受けた南阿蘇の雄姿、予備校時代に気づかされた旧制高等学校の寮歌の精神、そして、現役時代の生活習慣の乱れに由来する種々の病気からの復帰を挙げて、これまで説明をしてきました。しかし実は、もうひとつ大きな理由がありました。私が研究の対象としているウィリアム・モリスが活躍した一九世紀のイギリスを眺めてみますと、産業革命のひとつの反動として、中世精神の復興へ向けての動きがありました。そして一方では、喧騒の都会を離れての自然への回帰という動きもありました。モリス自身も、田舎に別荘をもち、素朴な田園暮らしを楽しんでいます。この伝統は今日へと引き継がれ、ロンドンのような大都会で精一杯仕事に励み、そののち、カンントリーサイドの美しい自然のなかで残りの暮らしを楽しむことが、イギリス人にとってのひとつの理想の生き方として、いまや定着しているようです。よくイギリスの文化は、「産業」と「田園」とのふたつの翼によってバランスと取り合いながら飛び進む、一羽の鳥に、たとえられますが、一国の文化の形態だけではなく、一人ひとりのイギリス人の生き方のなかにも、そのことは反映されていると思います。私のいまの山暮らしも、一種の田園回帰の行動であり、私にしてみれば、少し大げさにいえば、イギリス精神のひとつのありようを実践しているような気持ちでいます。これこそが、ブリティッシュ・スタイルの生き方であると確信しているのです。その一方で、これこそが、私たちの熊本高等学校が伝統的に標榜している「士君子」という英国ジェントルマンの精神につながる道であるとも、考えています。私は、高森の山荘の玄関のわきに、小さな英国国旗を掲げていますが、それは、そうしたイギリスへの私なりの敬意の表われなのです。

思えば、遠く明治の時代に、夏目漱石も富本憲吉もイギリスに渡りました。遅れて私も、昭和の時代と、続く平成の時代に、二度イギリスに渡りました。最初は英国政府の助成金で、

二度目は日本国の支援で行き、そこで、生まれたばかりのデザイン史という新しい学問を学びました。そのとき、死ぬまで英国で暮らしてみたいとも、すべて英国人になり切りたいとも、思ったことがありました。そうしなければ、本当のイギリスのデザインの歴史は書けないのではないかと、当時思い込んでいたからにはほかなりません。しかしそれは、現実がどうてい許さず、実現するはずもなかったのですが、それでも、そのときの思いは生き残っており、それが、いまの山暮らしを支える、ある種の大きな力となっているような気がしています。つまり、私がいまこの南阿蘇の地にいるのは、明らかにひとつには、二度の英国暮らしから学んだ田園回帰の精神に由来し、いまひとつには、移ろう四季を愛で、俗世を離れて学問にいそしみ、清き心で友に接することを高らかと歌い上げた旧制高等学校の寮歌の精神に起因しているのです。

ときどき最近、自分でも不思議に感じるのですが、どうやら私という生命体には、若き日の高校時代にそれとはなく培った「士君子」の精神と、壺溪塾でふと身に着けた書生魂とが、五〇年を経ていまなお、うまく融合しながら、しっかりと根を下ろしているようです。あるいは、五〇年という長い歳月を経たからこそ、やっといま土のなかから芽を出して、その姿を現わそうとしているといえるのかもしれません。これが、「教育」というものののでしょうか。こういう「教育」によって自分の本質的な部分がつくられたのだなと、その思いをたぐり寄せてみますと、必ずしも自分で計画をして、身をゆだねた道ではないだけに、偶然とか、出会いとか、風土とか、そのようなものに、言葉にできない懐かしさを感じる一方で、それとは別に、何か、周りの森羅万象から与えられた恵みの大きさのようなものに、昨今、強く意識が向かうようになりました。

定年後の山暮らしのなかでの私の執筆活動も、熊本県立図書館が震災の痛手から立ち直り、開館へとこぎつけた時期にあわせるかのように、ほぼ二年前にやっと再開することができ、生活習慣の改善へ向けての実践と同じく、いま、徐々にではありますが、定年当初に思い描いていたイメージに近づきつつあります。すでにご紹介いたしましたが、私の現在の「中山修一著作集」は、本巻八巻、別巻二巻の全一〇巻で構成されています。これを、来年の半ばころまでには、さらに一步進めて改訂し、本巻一〇巻、別巻二巻の計一二巻に衣替えることをいま計画しています。ここまで来ますと、残りの未着手の巻が、四巻になり、少し先が見通せるようになります。何とか、目標にしています七七歳までに、この残された四つの巻も書き上げ、全巻完結したいと考えています。しかし、この宿題を予定日までに提出することができるのでしょうか。ただただ願うことは、それまでの勉学の日々にあって、気力と体力と能力が失われないことです。ときとして、果たして自分の老化は、今後どのようにして進行してゆくのだろうかとか、いつまで執筆することができるのだろうかとか、こうした答えのない愚かな質問を、無意識のうちに自分にしていることがあります。いつまでたっても修行が足りず、雑念や妄想から逃れられないようです。いずれにいたしましても、今日の「いま」を大切にしなければならない、と思い直して、かつて壺溪塾で体験した禅の気持ちに改めて立ち返り、日々自分を戒めています。

はい、少々愚痴っぽくなってしまいました。これをもちまして、私の本日の講演を終了させていただきますと思いますが、実は今日一二月二日は、私の満七〇歳の誕生日でした。思いもかけず、ちょうどこの日に、これまでの自分の歩んできた道のりの一端を整理して、振り返ることができました。本日、こうした、よい機会を与えていただきました、幹事の村上

建徳さんをはじめ、みなさまお一人おひとりに、お礼を申し上げます。そして、つたないお話にもかかわりませず、最後までご清聴いただきましたことに、心より感謝いたします。それではこれで、すべてを終わらせていただきます。ありがとうございました。

【初出：「私の南阿蘇暮らし——生活習慣の改善と執筆活動」2018年12月2日に南阿蘇久木野温泉「四季の森」において開催された阿蘇南部江原会の忘年会での講演。】



図1 タイトル頁（当日のパワー・ポイント画像）。

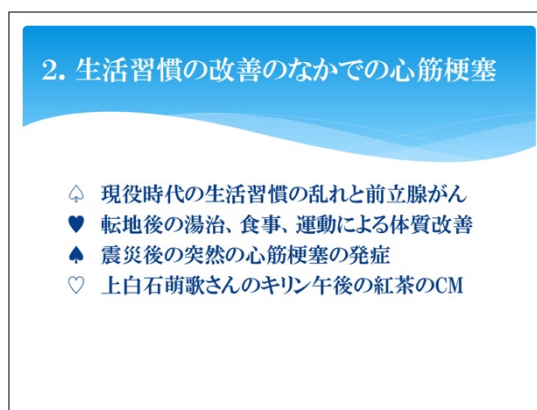


図4 2. 生活習慣の改善のなかでの心筋梗塞（当日のパワー・ポイント画像）。

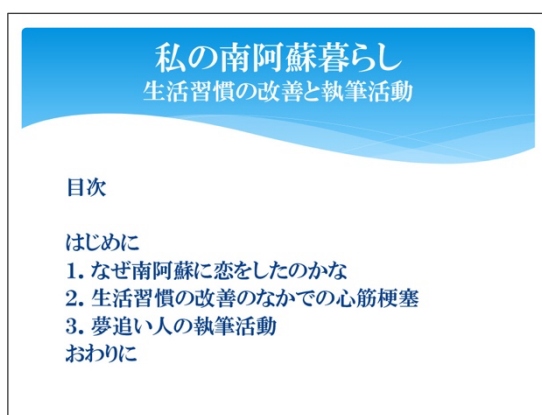


図2 目次（当日のパワー・ポイント画像）。

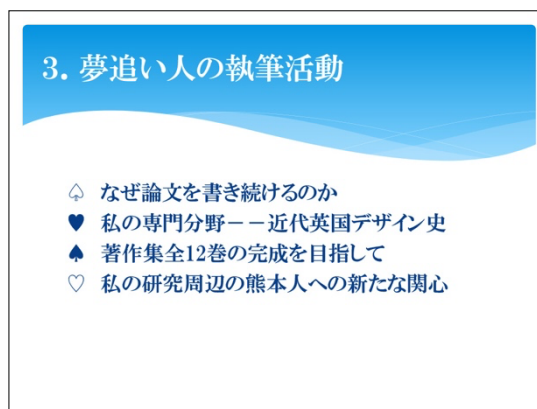


図5 3. 夢追い人の執筆活動（当日のパワー・ポイント画像）。

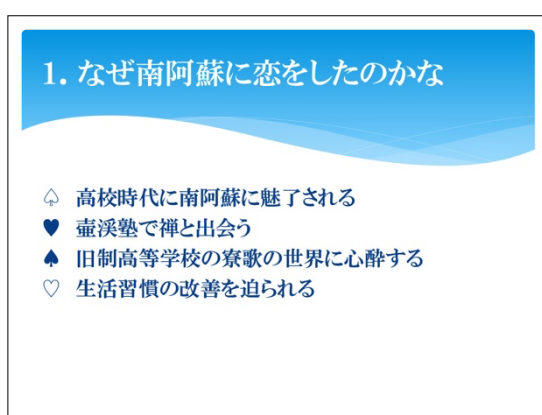


図3 1. なぜ南阿蘇に恋をしたのかな（当日のパワー・ポイント画像）。

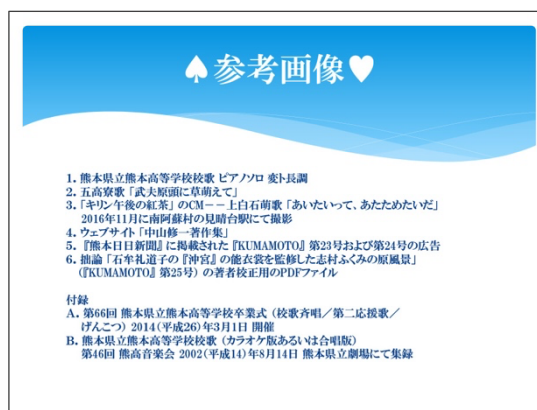


図6 参考画像（当日のパワー・ポイント画像）。

第六話 私の南阿蘇讃歌——庭の四季を楽しむ

はじめに

私は、二〇一三（平成二五）年三月末に神戸大学を定年退職し、これ以降、高森町色見の奥の牧野道を上り詰めたところにある小さな庵に蟄居し、執筆活動に専念しています。私がこの地をはじめて訪れたのは、高校の二年から三年に進級する春休みのことでした。お別れ遠足といった感じの南阿蘇探訪でした。しかしそれは、少し大げさにいえば、私の人生をある意味で方向づける一大事件でもありました。といいますのも、熊本市内に住む私にとりまして、西の金峰も東の阿蘇も、山といえばその頂の一部しか見たことがなく、裾野の広がりをも含む山全体の勇壮な姿に接したのはこのときが最初だったからです。五岳のすべての雄姿が視野に入ってきたとき、ひとつの大きな力強い世界を手にしたような驚きが、全身を揺り動かしました。東京で学生生活を送り、神戸で就職をし、それからしばらくして、この地に粗末ながらの山荘を建て、春夏の帰省のたびに立ち寄っては、子どもたちを遊ばせ、ひとときの山暮らしを楽しむようになりました。定年後は、それが日常の生活となり、山奥での蟄居暮らしも、いつしか八年目に入ってしまった。高校時代のお別れ遠足が、何と半世紀以上立ったいまも、続いているのです。自分でも不思議に思うことがあります。一体その魅力はどこにあるのでしょうか。この間に体験した一片一個の感動を、わが家の庭の四季に沿わせながら、以下に短く描写し、それをもって本号特集「まるごと南阿蘇」の総論に代えさせていただきたいと思います。

一．厳寒の冬を過ごす

この地の冬は厳しく、一日中氷点下という日もたまにあるほどです。そのため、その寒さに耐えて生活する術を自ずと身に着けることになります。

たとえば、雪の予報が出たときは、いつもは自宅前の路上に駐車する車を、農業道路のガードの下へと移動します。エンジンまわりに毛布を置き、そのうえから専用の車カバーをかけます。タイヤはスタッドレスをはかせていますが、そのうえに、タイヤチェーンも後部座席に用意し、こうして前日のうちから大雪に備えます。昨年と今年は幸い大雪を免れましたが、例年ですと、一月と二月、ともに数日間、私の住む山荘は雪に覆われ、家までの坂道が凍結します【図一】。もっとも、街中は除雪作業も早く、ほとんど凍結することもなく、買い物など日々の行動に大きな支障が出ることはありません。

ガード下に車を置いているあいだは、そこから家までは、徒歩になります。長靴に履き替え、買い物などの荷物があるときは、手にもたず、リュックを背負い、マスク、帽子、手袋を着用し、竹の杖を使って、牧野道の坂を上ります。見渡す限り白銀の別世界です。この雪景色に、重い心が少し救われます。一五分くらい歩き、家にたどり着くころには、体がポカポカになっています。このようにして、厳寒の山の冬を過ごします。

二．早春の野は黄色

この地方の風景は、春の訪れとともに、白から黄色の色調に変わります。といいますのも、田畑の畦道や牧野道、土手やのり面の至る所で、ナノハナ（菜の花）、スイセン（水仙）、タンポポが一斉に花を咲かせるからです。厳冬の雪景色と初夏の新緑とのあいだに挟まれたこの一瞬に、草原から田園までのすべての生命体が再生されてゆく感じです。そういえば、わが家の庭で最初に春を告げる花といえば、フクジュソウ（福寿草）です。二月の月上旬から、遅くとも下旬までには花を咲かせます。この花の色も黄色です。どうやら、早春と黄色は切り離せないようです。黄色は生命の色かもしれません。

気温が上がり、本格的な春になります。いつしか庭は、桜吹雪の乱舞の舞台となり、心を奪われます【図二】。四月末には、シャクナゲが咲き、そのあと五月に入ると、ミヤコワスレが玄関周りに一斉に咲き出します。とても清楚な小さな花です。そうするうちにヤマアジサイの青の季節を迎えます【図三】。

その一方で、野鳥の生息を身近に感じるのも、この時期です。これまでに、キジやヤマドリ、のよちよち歩きに出会うことがしばしばありましたし、目の前の庭の木に、大きなフクロウが止まっていることもありました。数年前には、カッコウが朝夕、よく鳴き声を上げていました。そのほかにも、日々庭には、いろんな鳥がやってきます。鳥の種類は正確にはなかなか特定しがたいのですが、ムクドリやヒヨドリ、セキレイやキツツキなどの仲間ではないかと思います。まさに野鳥は森の合唱団です。鳴き声は五月ころにピークを迎えます。

三．夏へ向けて

昔から、栗の木の花が散ると、その一週間後くらいを目安に梅雨に入るといいう言い伝えがあります。こちらは山のなかですので栗の木も多く、五月の中旬ころには、牧野道の至る所で散った白い花を見かけるようになります。そうすると、だいたいその言葉のとおり、梅雨入り宣言が出されます。

夏は虫の季節です。ここに山荘を建ててもう少しで三〇年になろうとしていますが、その当時は、カミキリムシやクワガタをはじめ、いろんな虫たちが野山に集まり、夜になると明かりを求めて飛び交っていました。子どもたちにとっては、昆虫採集に最適の空間でした。しかし、かつて栄華を極めた虫たちはいつしか消え去り、最近では、その姿をほとんど見かけなくなりました。理由はよくわかりません。

この地の夏は、平地に比べ、かなり涼しく感じられます。ここは、標高が七〇〇メートル近くありますので、平地よりも四度ほど低く、三〇度を超える日は、ひと夏に数日くらいしかありません。熊本市内が三五度くらいまで気温が上がり、熱中症に注意するようにテレビで報道されているときでも、こちらは三〇度前後で、肌を射すような太陽の強い日差しを感じることもなく、ほとんど冷房を使うこともありません。そのためか、ときどき、弱々しくて何か頼りないような夏に思えることさえあります。酷暑から離れて過ごせることは、ありがたいのですが、その一方で、周りが林野ということもあって、湿度が高く、雨の日も多く、雷の音もよく耳にします。

四．紅葉に燃える秋

そのようなわけで、夏の終わりも平地より少し早く、八月のお盆を過ぎたころから、朝夕、少し肌寒さを感じるようになります。この時期、ヒガンバナ（彼岸花）の赤が野を染める一方で、春先から少し前まで、さまざまな音色で耳もとを楽しませてくれていた鳥の鳴き声が、あまり聞かれなくなります。それに代わって、色づいた木々の葉がウッドデッキに落ちているのを見かけるようになり、忍び寄る秋の気配を感じはじめます。

いつのまにか秋も深まり、暖房を使うようになると、一気に木々の葉が色づきはじめます。冷え込みとともに、庭は燃えるような赤や黄色の絢爛豪華な絵巻と化し、落ち葉もたくさん目立つようになり、その黄金色の錦の織物の上を、サクサクという音を聞きながら歩くと、この時期固有のぜいたくな季節感を味わうことになります【図四】。天を仰げば華やかな色の配り、地に耳をすませば心地よい音の響き、一年の疲れをいやす、年の終わりに向けての充足の瞬間です。その至福の一瞬が終わると、冬の到来を告げる声が聞こえはじめ、静かにその年が暮れてゆきます。

おわりに

以上簡単に、これまでに私が体験した南阿蘇のわが家の庭の四季について描写してきました。しかし、こうした一年の四季の移り変わりも、決して不動のものではなく、数十年という長いスケールで見えますと、確かに大きく変化しているのです。すでに書きましたように、かつてわが家の夏の庭で観察できた虫や蝶の活況は、いまはほとんど見られなくなっています。冬も、気候変動の影響で暖かく、近年ますます雪の量も減っています。自宅に隣接する牧野から、いつのまにか牛の姿が消え、ひとつの産業が衰退してゆきました。それに伴って春の野焼きも行なわれなくなり、自然生態への影響が心配されています。さらには、かつて観光客を集めてにぎわった「ビール工場」も短い期間で閉鎖され、最近では、町が運営する高森温泉館も休館に追い込まれてしまいました。そして何よりも大きな変化は、人口が激減していることです。高森町の場合ですと、直近の一〇年間でおよそ千人弱が減じ、二〇二〇（令和二）年二月末の時点で六、三四二人になりました。数十年後には、どれだけの人がこの地に残って生活しているのでしょうか、不安は増します。

このように、この地の自然の営み、人の営みが、質的にも量的にも、大きく加速度的に変容しているのです。「はじめに」において記述しましたように、私がはじめてこの南阿蘇に遊びにきたのは、一九六六（昭和四一）年の高校生のときでした。その後、一九九二（平成四）年に山荘をつくり、定年後の二〇一三（平成二五）年からここに永住し、外来者として遠くから、この地の自然と人の営みを眺めてきました。そこで気づいたことは、本文で書きました四季の美しさだけではなく、むしろそれよりも、日々のその変容の激しさでした。こうしたことは、日本各地の村や町で起きています。いま私たちは何を本気で考え、行動しなければならないのでしょうか——色見の山奥での蟄居生活に身をゆだね、移りゆく庭の四季を楽しみながら、私は考えあぐねています。残念ながら、なかなか一気に結論へとたどり着けません。しかし、自分自身の生活環境の問題として自然や村落の行く末に関心をもち続けたいと思っています。ウェブサイト「中山修一著作集」【検索】のなかに、南阿蘇での自身の生活をテーマにした、執筆進行中の数巻を設けています。これからもこの問題に思い

著作集 13 『南阿蘇白雲夢想』
第四部 日々好々万物流転（随筆集）
第六話 私の南阿蘇讃歌——庭の四季を楽しむ

を巡らせ、受け止めた内容を少しずつこの場を使って記録してゆきたいと考えています。

【初出：「私の南阿蘇讃歌——庭の四季を楽しむ」『KUMAMOTO』No. 31 号、くまもと文化振興会、2020 年 6 月、118-123 頁。】



図1 雪に埋もれたわが家の冬（2014年2月）

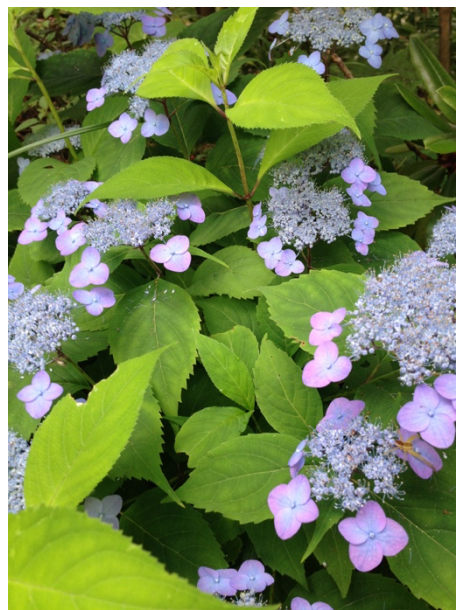


図3 庭を彩る初夏のヤマアジサイ（2016年6月）



図2 春到来、庭のサクラが咲く（2019年4月）

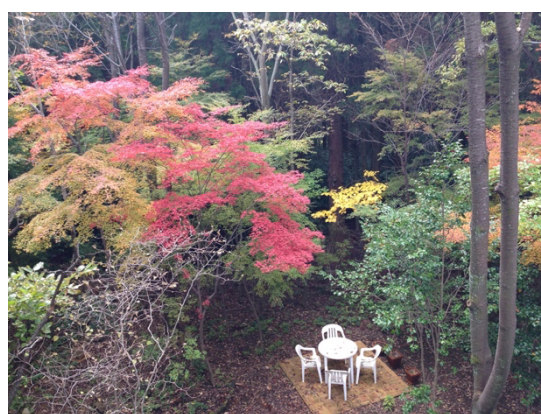


図4 紅葉に燃える秋の庭（2016年11月）

第七話 ロシアのウクライナ侵攻を考える

一. ウクライナ考（1）

ロシアがウクライナに侵攻しました。私は、いかなる理由があろうとも、武力による他国の侵略に反対します。

一九世紀は、宗主国が植民地を支配するという、強圧と略奪の時代でした。二〇世紀は、ふたつの世界大戦による軍事力の衝突により、多くの尊いいのちが失われました。そのとき、非人道的な完全破壊兵器である核も使用されました。こうした、この二世紀にわたる近代の世界史的経験を踏まえるならば、一方が一方に攻め入り、支配し、生命と財産を奪う権利は、いかなる国であろうとも、もっていないことは、明らかなる普遍的原理であると断言できます。

それでは、二一世紀に入った現在、武力による侵攻に対して、私たちは、どのような態度をとるべきなのでしょう。

決して武力によって立ち向かってはいけません。それは、過去の世紀への立ち返りでしかなく、経験から導かれた英知の発露が遮断されることを意味するからです。それでは、どのような英知の発露があるのでしょうか。それは、対象国へ、それ以外の多くの国々が一致協力して、考えられうるすべての経済制裁を加えることです。これは、レッド・カードを意味します。次に、国連をはじめとして、すべての国や地域の国会や議決機関が、対象国の暴挙を批判する明確な声明を発し、同時に、とりわけ裕福な国は、侵略を受けた国への経済的支援を積極的に行ない、一方で、余儀なく発生した避難民を温かく迎え入れることです。それに加えて、一人ひとりの地球市民は、こぞって、すべてのソーシャル・メディアを駆使して、戦争反対の強固な意志を鮮明にし、あわせて、地球規模での募金活動に参加することです。

このように、多様な非軍事的な手法を結集して、この地球に生きるすべての人間はその強い意思を明確化し、侵略国に対して、いま行なっている非人道的暴力行為を理性的判断のうちに中止させ、平和裏に生きる道を模索させる状況へと導いていかなければなりません。

二一世紀の時代に必要なことは、さらなる武器の生産や、まして核の開発ではなく、上で述べたような、武器や核に頼らない、地球規模での反戦にかかわる多様な意思形成手法が、さらに手際よく、そしてさらに有効的に展開されてゆかなければならないということにほかなりません。平和を愛する地球世論の不退転の意志の鎖が、経済性においても、実効性においても、蒙昧的で狂信的な軍事力に勝ることに気づかされたとき、そのときこの地球から軍事的侵略や戦争は姿を消すものと思います。私は、そうなる日が訪れることを心から願っています。武力に対抗するのは武力ではありません。そうではなく、それは、グローバルな理性的説得力と熱い批判の声とによる全地球的包囲網であることを確信しています。

いま熊本城の大天守と小天守が青と黄色にライトアップされたとのニュースが届きました。この二色はウクライナ国旗の色です。北と南で、あるいは東と西で、この地球をこのふたつの色に塗り分けられないか。いまこそ、グローバルな連帯と団結が必要とされているのです。

（二〇二二年三月）

二. ウクライナ考（2）

ロシアがウクライナに侵攻して二箇月が立ちました。私は、新聞もテレビも見ませんので、この間の詳しい様子はわかりません。ただ、スマホで読む内容が、唯一の情報を得る手段となっていました。

そもそもロシアがウクライナに侵攻した理由は何だったのでしょうか。伝えられる情報によりますと、もともとウクライナはソ連が解体される以前にあってはソ連の一部の領土であったことを強引にも理由として持ち出し、ロシアはいま、あってはならない武力の行使でもって、現状の変更を企て、ウクライナを自国の領土に編入しようとしているようです。また、ウクライナが欧米に接近する近年の姿は、国境を接するロシアにとっては安全保障上の脅威となり、それを阻止するためにウクライナの国土に無法にも足を踏み入れているようです。一方で、その行為は、一般市民をも虐殺し、公共物を破壊し、資産を略奪するに至り、その非人道ぶりが国際世論からの強い批判の対象となっていることもまた伝えられています。

なぜロシアは、無法な他国侵攻を止めないのでしょうか。どのような状況になれば、虐殺や破壊や略奪といった非人道的な残忍行為を中止するのでしょうか。これらはすべて、犯罪に相当するにちがひありません。それにもかかわらず、世界の多くの国々は、そして世界の多くの人びとは、傍観するしかない状態に立たされているのがいまの現実です。この現実に立ち向かう方途はないのでしょうか。

他方、「武力には武力で」という言葉が飛び交います。また、「第三次世界大戦」を予言する人もいます。果たして世界規模の戦争を望む人が、世界にひとりでもいるのでしょうか。誰ひとりとして地獄と化す大戦を望む人はいないはずですが、ところが、誰も望まない、誰の益にもならない死の谷へ向けて、一部の人が奇怪な熱狂に侵されて、夢遊病者の集団のように足並みをそろえて突き進んでいるとすれば、その姿は、誰の目にも、愚かな行進に見えるのではないのでしょうか。行進に加わっている一人ひとりが、自分の行為の愚かしさに目覚めるべきです。そのとき、その歩みは止まります。愚行に気づく英知、これが、唯一、戦火と犯罪を招来しない道であると確信します。そのためには、声を上げ続けなければなりません。声が封殺されてはいけません。

（二〇二二年四月）

三. ウクライナ考（3）

ロシアのウクライナ侵攻、そして、それに対するウクライナの自衛のための戦いが、いまなお続いています。その様相を見て、ロシアだけではなく、中国や北朝鮮と接する日本は、いまこそ武力の増強をする必要があると声高に主張する人が目立ってきました。それは、本当に正しい考えなのでしょうか。他方、一般論として、敵対国の戦闘能力に対して同等能力を保有し、均衡を保つことが、安全保障上の要として考えられていることも事実です。しかし、果たしてこれも、正しい考え方なのでしょうか。

しばしば指摘されていることです。敵対国が軍事力を増大すれば、一方の相手国はそれを脅威と受け止め、さらなる増強に走る。ここで均衡が保たれれば、それでいいのですが、一

般的にはそれですむことはなく、それを見た敵対国は、それを非難し、いっその軍備を企て、それに対して相手国も、それに負けじとばかりに軍備の拡大を続ける。こうして、いわゆる脅威と怨念とから成り立つ敵対連鎖は歯止めを失い、いつしかどちらかが発砲し、戦争という悪夢の道が開かれてゆくのです。

そうした的を射た指摘を熟知しながら、そして、「誰も戦争は望まない」と表面上言い繕いながら、今日のわが国の指導者や批評家たちのなかには、ウクライナの現状を巧みに利用して、人びとの不安をうまくあおり、必要以上の軍備拡大という危険な道を選択しようとしている人が少なからず見受けられます。しかしこれは、明らかに、誰も望まない悲惨な戦争へと続く第一歩のように思われます。

それでは、私たちが選択しなければならない道は、どのような道なのでしょう。いうまでもなくそれは、脅威と怨念による敵対的な負の連鎖を加熱させない道です。換言すれば、それは、反戦の意思と平和の尊さとを、日常的に世界と自分自らに向けて強く語り続けてゆく、強固で地道な道のりにほかなりません。このような主張をすると、絵に描いた理想主義にすぎないとして一蹴されてしまいそうです。しかし私は、そうは思いません。私自身は、これこそ、それ以外に選択肢はない厳格な現実主義であると思っています。

戦争によって人の安寧や幸せがもたらされるでしょうか。しかし人は、それがわかっていても、戦争をはじめようとします。それを戒め、その悪夢から目覚めさせるのは、言論しかありません。言論が、人を説得し、人の心を和らげ、人への信頼感を生み、その結果、人びとのあいだに安寧と幸せが醸成されるのです。多額の資金を使って軍事力の増大を図ることよりも、国連などの国際機関の場において、そして各国間のさまざまな外交の場において、言論による平和の維持に向けての日常的な努力こそが、より重要なのではないのでしょうか。

人びとのあいだには、相手を憎み、制圧しようとする力だけではなく、相手を慈しみ、手を取り合おうとする力が存在していることを、私たちは決して忘れてはなりません。私たちは、この後者の力の存在を固く信じ、言論でもってこの点に強く訴えかけることによって、前者の邪悪な力を少なからず封じ込めることができるのです。これこそが、私たちが選び取らなければならない、現実主義的な安全保障の礎石である、と私は考えます。

いま一度、以下に、日本国憲法の前文の一部を引用します。この部分を、屈辱的であるとか、自虐的であるとか、受け止める人がいます。しかし、私の目には、人類が共通して永遠に保持すべき誇り高き理念が率直に表出されている、輝く一文のように映ります。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信じる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。

私たちは、上に引用した憲法前文のなかのこの文言を、私たち日本国民の崇高な理想としてのみならず、世界市民の全き共通言語となるまで、決して努力を惜しむべきではありません。なぜならば、私は、これこそが、私たちが住むこの地球の安全保障にかかわる第一義の要諦であると信じるからです。武器があっても平和は訪れません。しかし、誠実な言論と説得が展開されている限り、平和は維持できます。平和は、人類の限りない日々の努力のなかにしか息づくことはないということを、改めて肝に銘じたいと思います。

（二〇二二年六月）

四．真の意味での安全保障

ロシアのウクライナ侵攻から四箇月が立ちました。スーパーに行くと、価格の値上がりが日々実感できます。ガソリンも高止まりしています。欧米とは真逆の金融政策に固執する日本政府は、一方で欧米に迎合するかのよう、防衛費を二倍にする案を出しています。一度増額すれば、歯止めがかからなくなります。財源はどうするのでしょうか。増税か、さもなければ社会保障費の切り捨てしかありません。いつしか消費税が現行の一〇％から二〇％になり、医療費が現行の三割負担から六割負担に変えられ、そして、年金が三割削減されてしまうようなことを想像するならば、防衛費の増額は、国民生活を破綻へと導く愚策としかいいようがありません。防衛費は、これまで国是としてきた必要最小限度に止めるべきです。

他方、国内の状況を見ても、海外に部品の供給を依存する国内の製造業は、その生産ラインが一部で止まっています。原油を海外から調達する日本は、猛暑が続くと電力の供給に赤信号がとまります。同じく、自給力に欠ける農産物は、世界や相手先の事情によって、すぐさま高騰に結び付いてゆきます。

こうした状況を見て、若い人たちが、日本の行く末に希望が待てず、結婚を諦めたり、子どもをつくることに二の足を踏んだりするのも、当然のことなのかもしれません。総務省の統計予測では、今世紀末には、驚くことに、日本の人口は半分に減少するのです。

日本にとって本当の安全保障とは、何でしょうか。ロシアのウクライナ侵攻で浮足立ち、防衛費の増額を求めるのは、決して適切な安全保障とはいえません。これには、「いざとなったときに備えて」という、不安をあおるような文言がいつもつきまといまいます。しかし、これには、「武器満ちあふれて、国民死せり」という、見過ごすことができない結果がつきまとうのです。

今日的な安全保障にとって大事なことは、国民生活の本当の意味での自立化と安定化のために、国家としての基本構造を再生させることです。たとえばそれは、二酸化炭素を排出しない自然エネルギー生産への積極的な転換、国内完結型の部品供給網の可及即時的な構築、そして、農産物の生産自給率の飛躍的改善などを意味します。これらの政策はどれもが、生んで育てるのに時間がかかります。「気づいたときには、時すでに遅し」では困ります。勇気をもっていち早く決断し、粘り強く長期にわたって支援してゆかなければなりません。

防衛費を増額し、すぐにもその費用（国民が納める税金）を外国の購入先に支払って、防衛省の倉庫のなかに必要以上の武器弾薬を貯め込むことが、真の意味での安全保障とならないことは明白のように思います。

（二〇二二年七月）

五. 改めてウクライナ考

ロシアのウクライナ侵攻から半年以上が立ったいまなお、戦火が止む気配はありません。この間、多くの死者を出し、多くの人が他国へ逃れ、多くの施設が破壊され、そして、拷問に晒された人も、強制連行された子どもも、たくさんいます。人の苦しみや悲しみは、いかななものだったのでしょうか。もはや言葉さえ失われてしまいます。

ニュースを聞き、現状の一端を知るにつけ、人道に反した数々の行為が日々連続的に積み重なってゆく様子に驚愕します。銃弾に倒れた人の無言の無念さというに及ばず、銃口を向け死に至らしめた人の良心の呵責も、重く息苦しく人の奥底に沈殿してゆきます。当然ながら、ここに人間の幸せを見出すことはできません。ここにあるのは、それとは対極に存する、ぬぐいがたい苦痛と罪悪感にあえぐ人間の異様な叫び声のようなものであるにちがいありません。

人が人を殺し合う戦争は、人間の誇りや尊厳を根底から傷つけ、人間の安寧で喜びに満ちた生活を徹底的に破壊します。つまり戦争からは、誰一人として、人間らしい何かひとつのものさえも手にすることはできないのです。

そのことが教えるところは、すぐにも武器を捨て、以前の原状に復帰することです。これこそが、唯一残されている人間らしい英知の輝きであり、いま人間に求められている真の勇氣の発露なのです。ウィリアム・モリスと富本憲吉の反戦の思想に倣い、私はそう確信します。

（二〇二二年九月）

第八話 死と向き合う

一．父親の一周忌

父親の一周忌が巡ってきました。納骨堂のある蓮政寺で法要を営みました。参列したのは、数名の身内のみでしたが、いつものように、広い本堂には、親、子、孫の三人の住職が鎮座し、厳かに読経が流れてゆきました。

私は両親のもと長男として生まれました。その四年後に妹が誕生しました。これが、この家族にとっての原形です。その後、子どもが成長し、それぞれに家庭をもつようになり、そこから子どもが生まれ、そしてさらに、その子たちにも子どもが誕生しました。私と妹は、昨年父親を亡くし、母親は、いま高齢者の施設で暮らしています。最初の方原形が、七〇数年を経たいま、このような新しい形へと姿を変えたのでした。

明らかに人間も、生命体としてのひとつの種族です。いのちが終わり、新しいいのちがはじまります。それを数百年、数千年の単位で繰り返しています。そこには永久の時間が流れます。そして、その流れをひとつの空間に収めたのが、いま読経が流れている、このような寺院の本堂なのです。改めて、時間と空間の意味に思いを馳せることができました。しかし、その意味は、いまだ私にとって不明です。人は、不明だからこそ、一方の手に数珠をもち、一方の手で焼香をし、口で経文を唱えるのかもしれませんが。この行為が途絶えることなく、今日まで繰り返されているということは、生命体である人類にとっての時間と空間の本質は、いまだに万人にとって納得し得る正解が得られず、その本質の真の意味は、人類永遠の課題として、これから先も未解決のまま引き継がれてゆくことになるのでしょうか。そのようなことを、読経に耳を傾けながら考えてみました。

（二〇二二年一二月）

二．開運星祭法要に参加して

私の父親の実家の菩提寺は善行寺（浄土真宗）といい、熊本市の南に隣接した宇土市にあります。一方、母親の実家のお寺は、熊本市内の中心部にあります蓮政寺（日蓮宗）というお寺です。亡くなる前の父親の意向もあり、納骨堂は、この蓮政寺に設けました。一昨年の一二月に父は旅立ち、昨年の祥月命日に一周忌の法要を行ないました。

お寺から案内状が届きました。それによると正月の八日に、開運星祭の法要が行なわれるとのことでした。納骨堂を購入して以来、毎年この案内は届いていたのですが、「この機会に一度」と思って、参加してみました。参加している人は、およそ百人で、父親と子の計四人の住職によって読経が奉じられました。その間、小さなワゴンに乗せられた香炉が、係の人の手によって巡回し、一人ひとり手もとで香を焚きました。お経が読み上げられたあと、最年長である父親の老師住職からお言葉があり、スクリーンに映し出された映像とともに、開祖者の日蓮上人の逸話が紹介されました。帰りには、家内安全のお札とともに、お弁当と、このお寺特製の乾燥麺をお土産にいただきました。

この蓮政寺の創建は一五九八年で、永い歴史を有します。私は、今回はじめて星祭という法要に加わったのですが、長きにわたって開催されてきた行事のようです。日常生活にあっ

て、私は、ついつい今日か明日、長くて数箇月先のことしか考えませんが、こうした法要に参加する人の観念のなかには、数百年に及ぶ時間が静かに流れているのかもしれない。非日常の別次元の空間に身を置いた短いひとときでした。

（二〇二三年一月）

三. 訃報

ときどき温泉で会うと、どちらからともなく、よもやま話に興じる、ひとりの若い顔見知り、突然亡くなりました。温泉仲間からそのことを聞かされたとき、瞬時に心のなかで、「二日前に会って話したのに、なぜ、どうして、まだ若いのに」と、叫ぶ自分がありました。彼は、週に三日、人工透析を受けていました。彼が温泉に来るのは、それ以外の曜日でした。彼の母親は高齢で、施設に入っていました。姉さん家族は、少し離れた別の地域に住んでいました。彼は小さいときのことをよく覚えていて、農家に生まれ、牛を飼って田を耕していたことなどを話していました。彼自身は、すでに農業から離れ、いまや秋になると、業者に頼んで機械で稲刈りをしてもらい、収穫の半分は、いつも姉さんのところに届けていました。そろそろ彼の四十九日が来ます。いまころどうしているだろうか。温泉に足を運んできそうな気がします。改めまして、合掌。

自分より若い人が亡くなった知らせを聞くと、本当につらい思いがします。またひとつ別の訃報が入ってきました。

スマホでニュースをチェックしていたら、高井美紀さんの死亡記事が目にとまりました。驚いたというよりは、一瞬凍りつきました。高井さんは関西の毎日放送のアナウンサーで、そのアナウンス力の確かさと番組進行の適切さは、多くの人が認めるどころでした。私自身も神戸にいたころ、夕方の報道番組を担当する高井さんの落ち着いた、そして品のある姿に、いつも見入っていました。高井さんのご家族のお住まいは、私たち家族が住む同じ東灘区の岡本地区にあり、町を歩いていると、ときどき出くわすことがありました。有名人にありがちな、気取った感じは全くない人でした。報道によれば、享年五五歳。あまりにも早すぎる旅立ちでした。テレビを通じて日々その姿に接していた、関西にお住まいの人たちのあいだには、何か空白感のようなものが、いま漂っているにちがいありません。惜しまれてなりません。心よりご冥福を祈ります。

（二〇二三年二月）

四. 自身の死を思う

人の死に接すると、どうしても死を身近なものとして、思い巡らすことになります。最近、こんなことを夢想することがありました。

思い描く場面は、この南郷谷地区の昔々の姿です。田畑と山林のあいだに連なって続く田舎道を、野良着の人や旅姿の人が、行き交っています。自動車がまだ走っていない時代です。見かけるのは、大八車くらいです。道路もまだ舗装されてはおらず、砂利と土の道です。両脇には、野の花が咲き乱れています。遠く見渡せば、阿蘇中岳の噴火が目にとまります。

よく見ると、路傍の片隅に倒れている人がいます。村人が集まってきました。彼らは、近

くの空き地に土を掘り、そっと静かにその亡骸を入れて盛り土をしました。それがすむと、少し大きめの石を見つけてきて墓石とし、何種類もの野草を摘んできては飾りつけます。こうして、いつもながら手厚く、見知らぬ流れ者を遇しました。道行く人は誰もみな、無言で手を合わせます。さわやかな風が流れ、虫たちが鳴いていました。

これが、最近私の脳裏に去来した風景です。人の死が、夢や幻を誘発したようです。しかしながらこれが、潜在的に願う私にとっての理想形なのかもしれません。

（二〇二三年二月）

第九話 この地の水と食べ物事情

一．湧き水

地下水を汲み上げる水中ポンプが故障したのは二〇二一（令和三）年二月のことでした。三箇月間、給水が止まり、近くの湧水トンネル公園まで水汲みに通いました。あれからちょうど二年が立ちました。あのときの苦労が蘇ります。

水が使えなくなるのは、ポンプの故障だけではなくありません。停電によってもポンプは止まります。水が止まれば、たちどころに生活は麻痺します。まさしく水はいのちなのです。

この二年間、毎日温泉に行くため使用することのない浴槽に、常に水を入れておくように心がけてきました。非常時のトイレの水に使うためです。また、五リットルのペットボトル六本には、湧水トンネル公園の湧き水を一箇月ごとに入れ替え、断水時の飲料水として備えてきました。

最近では、二リットルのペットボトル四本にも湧水トンネル公園の湧き水を入れ、毎日小さなペットボトルに移し替えながら、車のなかや室内で飲むための水として使っています。何ととっても、この水はおいしいのです。

このトンネルは、旧国鉄時代に高森と高千穂を結ぶ鉄道トンネルとして掘削された遺跡で、いまは公園として整備されています。何でも掘削の途中で出水事故に見舞われ、そのことが要因となって工事を中断へと向かわせたようです。毎年七月には「七夕まつり」が、一二月には「クリスマスファンタジー」が催され、高森町の観光スポットになっています。

その一方で、このトンネルは、潤沢な湧き水を放出する、貴重な水供給の場となっています。日々おいしい水を求めて、町民はもとより、県外ナンバーの車も見かけます。平時、災害時にかかわらず、いうまでもなく水源は、人の暮らしに欠かせない、なくてはならないありがたいものなのです。

（二〇二三年二月）

二．いただき物を分け合う

この土地に暮らしはじめて、一〇年になろうとしています。この間感じたことは、「いただき物を分け合う」という、習慣といいますか、住民感情が残っていることでした。私のような他の土地から移住してきた者に対しても、日ごろ接して話をする間柄になると、ときとして「おすそ分け」にあずかることになります。これまでに、新たに知り合った土地の人たちから、庭で採れた野菜、手づくりのお惣菜、それに、お茶やしょうゆやお菓子などの周りから贈答された物、そうした品々を数えきれないくらい、分け与えてもらいました。

先日のことです。最近温泉でよく話すようになった、私よりひとつ年配の方から、「ちょっとうちに寄らせませんか。もらい物のイチゴがあるので」と、声がかかりました。温泉を出ると、彼の車の後ろにつけて、すぐ近くの自宅に到着しました。なかに上がって部屋を見せてもらい、外に出て、畑や工作納屋などを案内してもらいました。イチゴは、お隣のイチゴ園からいただいた品だったようです。

ちょうど私のところに、知り合いからお礼の品としてたくさんのミカンが届いていまし

たので、明日、それを何個か持って行こうと思いました。

（二〇二三年三月）

三. つくね芋の天ぷらと一文字のぐるぐる

知り合いからつくね芋をいただきました。山芋はときどきスーパーで買って、すりおろしたり、お好み焼きに入れたりして食べていましたが、その仲間であるつくね芋は、私にとって珍しい食材でした。その形に、驚かされました。ラグビー・ボールに似た楕円形で、長さが二〇センチくらいある、巨大な芋でした。三個もらったので、二個はそれぞれ、いつも物をやり取りする友人の所に持って行きました。

さあ、どう料理をするか、山芋と同じではなく、何か別の料理法はないか、ネットで調べてみました。するとそこに、つくね芋の天ぷらが紹介されていました。ボールを用意し、食べたい量につくね芋をすりおろし、そこに適量の小麦粉と卵と調味料（赤酒、白だし、お醤油）を加えて、よく混ぜます。フライパンの油が適温になったところで、適当な量（この日は、食べやすい形の四個）に分けて、投入します。色がつき、ちょうど小さ目のコロケのような感じになります。器に盛り、さっそく食しました。「おいしい」という言葉が、つい口から漏れ出てきました。中のまろやかなやわらかさ加減と、外の適度の歯ごたえがあるシャキシャキ感とが、絶妙のマッチングで口のなかで溶け合い、うれしい悲鳴になったのでした。

ほぼこれと同じ時期のことです。別の知り合いから、「一文字のぐるぐる」をいただきました。この料理は、熊本地方独自の郷土料理です。小さいころに母親がつくってくれた記憶が残っていました。しかし、高校を卒業すると同時に県外に出たので、それ以降これまで、一度も食すことはありませんでした。そのようなわけで、何と六〇年以上ぶりに、この日「一文字のぐるぐる」と対面したのでした。

一文字（ひともし）とは、ねぎの一種であるわけぎの別称です。「一文字のぐるぐる」は、一文字をゆがいて、上の緑色の葉を、そのまま根本の白い部分にぐるぐると巻き付けるだけの、いたって簡単な一品です。お酒にも合い、酢味噌でいただきます。白と緑の色合いがよく、ゆで加減にもよりますが、比較的やわらかく、やさしい食感があり、とろりとした汁のほどよい甘みが、酢味噌と絡み合いながら口のなかで広がります。一文字は、冬を越したいまが旬で、春の到来を感じさせるこの季節の食材なのです。

この日は、いただいた一口大の七、八個の「一文字のぐるぐる」と、別につけられていた、同じくお手製の酢味噌が、主役として私のテーブルに並びました。かつての母親の料理を思い出し、あわせて、幼いころの自分に再会したひとときでした。

（二〇二三年三月）

四. 春の御膳の完成

ある日のこと、ちらし寿司と高菜の和え物と大根の煮物をいただきました。製作者は、そろそろ八〇歳になろうかという「お母さん」です。私の年齢からすれば、数歳離れた「お姉さん」といったところでしょうか。一度もお会いしたことはなく、別の方が、いつも手渡し

てくださいます。話を聞くと、この高齢の女性は料理が好きで、周りの人に分け与え、おいしく食べてもらうことが何よりの喜びとなっているようです。

この日は、いただいた三品にあわせて、私独自の茶わん蒸しをつくりました。以下は、そのレシピです。五分もあればできる男料理です。

（1）私の場合は、ラーメンやチャンポンに使うどんぶりを用意します。

（2）たまごを割って、よくかき混ぜます。そのなかに、適量のだし、赤酒、醤油、砂糖を入れ、どんぶりの六、七分目くらいになるまで水を加えて、再び全体をよく混ぜ合わせます。

（3）その上に、具を載せます。私は、茹でたほうれん草、えのきやしいたけ、あげやちくわなどをよく使います。

（4）ラップをして、左右に少し隙間をつくって、電子レンジでチンします。

これででき上がりです。さっそく、ちらし寿司、高菜の和え物、大根の煮物、そして、茶わん蒸しをテーブルに並べました。豪華な和の勢揃いです。格別のおいしさでした。

あいだに入って手渡してくださる方にお礼のメールを差し上げました。その返信には、「春の御膳ができたのですね」という言葉が添えてありました。旬の食材を使った季節感あふれる手料理を食べられるのも、田舎生活のおかげでしょうか——しみじみとそのありがたさに触れた、三月ある日の夕べでした。

（二〇二三年三月）

第一〇話 消滅か再生か

一．温泉が消える

私が住む高森町は、現在の人口は約六千人です。年間一〇〇人くらい人口が減っていますので、単純計算しますと、六〇年後には、この町に住む人はいなくなります。それほどまでに人口減少のスピードは速く、この間、学校は廃統合され、商店街はシャッターを閉めた店が目立って多くなりました。

数年前に、私が日々通っていた高森温泉館が閉鎖されました。赤字が続いていたためです。それ以降、私は、お隣の村にある阿蘇白水温泉瑠璃に通うようになりました。しばらくすると、併設されていた宿泊施設とレストランが廃業となり、何とかいまは、温泉だけが生き延びている状態です。しかし、来月四月から料金が改訂され、四〇〇円が五〇〇円に値上がりします。一方、同じ南阿蘇村にある別の温泉がこの三月末で閉鎖され、高森町の別の温泉も二月から閉じられたままで、再開の見通しは立っていないようです。

もともと、私がこの南阿蘇を定年後の定住の地として決意したのは、その理由のひとつに温泉があることでした。私は退職の前年に前立腺がんを患い、全摘出の手術を受けていました。そこで、術後の健康回復が、私にとって退職後の喫緊の課題となっていたのです。こちらに移住してのちのしばらくは、午前と午後、日に二回温泉に足を運びました。その後一回に減ったものの、おかげで、その効果もあり、徐々に尿のトラブルが改善してゆきました。しかし、喜びもつかのま、今度は心筋梗塞が私を襲いました。いのちは取り留めましたが、退院後の体調管理に、引き続き温泉が欠かせないものになったのでした。

いま、周りの温泉施設が一つ、そしてまたひとつ消えています。もし、いま通う瑠璃温泉がなくなれば、私は行き場を失います。

（二〇二三年三月）

二．店舗の改装と再生

いまこの地にある、ひとつのコンビニとひとつのディスカウントショップが店を開けています。こちらは閉店ではなく、積極的な営業活動の一環のようです。

この地の国道沿いには、短い区間に五店舗ものコンビニが軒を連ねています。おそらく客を奪い合う競争には激しいものがあるものと想像されます。ある日、私がよく使うコンビニに立ち寄ると、一箇月の休店を知らせる案内が張り出されていました。店の人に事情を聴くと、内装を一新し、品ぞろえを充実させるためとのことでした。

この国道にはコンビニやスーパーだけでなく、ディスカウントショップも二軒、並んでいます。いまそのうちのひとつが隣接地に新しい店舗を建設しています。どのような内装に変わるのでしょうか。品ぞろえはどうなるのでしょうか。そして、値段に何か変化があるのでしょうか。私もよく使う店だけに、幾つもの興味がわいてきます。

（二〇二三年四月）

三. 大学の生き残り

人口減少の余波は、こうした小さな村や町だけに留まりません。新年度を迎えるこの時期、しばしば大学のことが話題に上ります。大学の定員割れが続いています。とりわけ女子大において深刻で、報道によりますと、すでに閉校を見越して、今後学生募集を停止する大学もあるようです。

閉校に至らないまでも、いま女子大では、定員確保に向けてさまざまな改革が試みられているようですが、そもそも定員割れは、どのような要因があって引き起こされているのでしょうか。幾つか考えられます。全体としていえることは、人口減に伴う受験者の絶対数が変化していることです。他方で、男女共学へ流れる受験生が多くなったことも、その要因として挙げられます。さらに、教養教育に重きを置く女子大にとっては、それだけではなく、これまで以上に女子の実学志向が強まっていることが、受験生の減少につながっています。

今後、各大学で進められている定員確保へ向けた努力が功を奏すでしょうか。それとも、やむなく閉校へと向かう女子大学の数が増えてゆくのでしょうか。生き残りをかけた厳しい現実には直面しているといえます。

（二〇二三年四月）

四. わが身を振り返れば

閉校になれば、その大学の卒業生の寂しさは、いかばかりのものでしょうか。少し、わが身を振り返ってみます。

私が入学したのは、東京教育大学農学部林学科木材工学専攻でした。当時、筑波移転に関して大学は大きく揺れ動いていました。学生運動の渦中であって、学生も代々木派と反代々木派に分かれて対立していました。入学はしたものの、校舎は封鎖され、授業もなく、私はヨット部に入ると、千葉県館山と神奈川県葉山の地で、延べにして年間一〇〇日くらい合宿生活に明け暮れました。東京にいたときは、もっぱら家庭教師をして、学費と生活費を稼ぎました。そのようなわけで、大学に籍は置いていたものの、本当の学問というものに接することはなく、厄介者が追われるかのようにして、卒業しました。入学式も卒業式も経験することはありませんでした。そこで、学び直しのつもりで、大学院に進むことにしました。そこで新たに学んだのは、「工芸・工業デザイン」という分野でした。院生だったこの二年間は、大学も落ち着きを取り戻し、身の置き場所をやっと得たという感じでした。大学院修了後しばらくして、この大学は、文京区の大塚の地区から筑波の新天地に移転して、名称も筑波大学に変わりました。

大学院を修了すると、幸いなことに私は、神戸大学教育学部の美術科の助手として職を得ることができました。ここで、デザインの実技を教えました。多くの学生は、兵庫県内の中学校の美術の教師となって巣立ってゆきました。しかし、徐々に教師を志す学生が減少し、民間の企業に職を求める人が増える傾向に歯止めをかけることができませんでした。これは、教員養成系学部の機能不全を意味しました。その一方で、私が就職した当時は学部のみでしたが、その後、大学院の修士課程が、さらにその後、博士課程が設置され、私自身の教育と研究に課せられた職務内容も、次第に、実技を中心としたものから理論を中心としたものへと変わってゆきました。こうしたなか、全国的な教養部改組の動きを反映して、神戸大

学においては、教育学部が発達科学部になり、教養部が国際文化学部へと衣替えしました。私が退職したのは、それからしばらくしてからのことです。そしていまや、発達科学部と国際文化学部が合併し、国際人間科学部という名称のもとに、新たな発展の道を探ろうとしているのです。

私が学んだ東京教育大学はいまはなく、教鞭を執った神戸大学教育学部も、もはや姿を消しています。その意味で、故郷を失った研究者として、私はいまを生きているのです。寂しくもあり、悲しくもあり、つらくもあります。しかし、現実を受け入れるしか、いまの私には何も残されていません。私に残されているのは、よそ見をすることなく、ひたすら学問を続行することです。しかしながら、よく考えてみますと、こうしているのも、いまは実在しないとはいえ、東京教育大学と神戸大学教育学部の過去の存在のおかげであるのかもしれない。母校はなくとも、この母なる大地がなければ、私の学者としてのいまはないような気がします。最後まで、誰にも頼らず、誰にも迷惑をかけず、流浪の研究者として、学問という険しい荒野を独り歩いてゆきたいと思います。

（二〇二三年四月）

第一一話 実家の終幕

一. 見ると、実家の庭木に花が

先日の二月最後の月曜日のことです。いつものように、母を施設に訪ねたあと、片付けのために実家に寄ってみました。見ると、ウメ、カンザクラ、ボケ、ツバキなどの庭木に花が咲いていました。そこへちょうど一羽のメジロが飛んできて、カンザクラの枝に止まりました。山よりも市内は四度ほど気温が高く、もう春の季節を迎えています。少し小枝を切って、施設に逆戻りし、母に届けました。大喜びでした。

父が亡くなり、そして母がその数箇月後に施設に入りました。母の入居からそろそろ一年になろうとしています。その間、実家は無住の状態です。庭の手入れもなされていません。しかし、それにもかかわらず、庭木は花を咲かせます。鳥たちも遊びに来ます。春の到来は、確かに人の気持ちを和ませます。ありがたいと、しみじみ思いました。

（二〇二三年三月）

二. 家庭から庭が消える

一〇年前に阿蘇山中のこの別荘に移住してくる前は、神戸市東灘区にある「岡本ハウス」という名称のマンションを中古で購入し、約一六年間、そこに住んでいました。このマンションができたのは一九七〇（昭和四五）年で、戦後日本の高度経済成長の終盤の時期にあたります。ちょうどそのころまでに、日本の大都市では、高層の団地やマンションが、雨後の竹の子のように、出現していました。

地方育ちの私は、小さいころ、よくこんなことを大人から聞かされてきました。「家庭というものは家と庭から成り立っている。庭がない都会のマンションなどは、家庭とはいえない」。そしていま、私は、これまで両親が住んでいた実家の売却に入ろうとしています。実家は木造二階建てで、わずかながら庭もついています。私自身は、この家で生活したことはないのですが、今年も冬が終わり春になると、庭の木々が、一斉に花をつけ、鳥たちも集まってきました。ウメ、ボケ、サクラ、それに続いて、モクレン、ツバキ等々。しかし、売却によって、こうした庭木までもが解体されるのには忍びないものがあり、買い取って、別の新しい顧客の庭に移植をしてもらうことはできないか、そう思うようになりました。

園芸業者でつくる組合組織をネットで調べ、思い切って電話をしてみました。すると、次のような回答が返ってきました。「昔は、どんなに若い人であれ、家を建てる時には、必ず庭づくりもしたものです。そしてその後、定期的に私たちが、剪定のお手伝いもさせてもらっていました。しかし、いまや車社会になり、家以外の敷地は、庭ではなく、みなさん、数台分の駐車スペースとして活用されるようになりました。そのようなわけで、買い取っても、それを購入してくれる人がいないのです」。これを聞いて、この地方都市の変容ぶりを思い知らされました。いまや家庭は、「家と庭」で構成されるのではなく、「家と車」で構成されるようになってしまったのです。庭いじりの楽しみよりも、車のもつ利便性を、人は選択したのです。一〇年前までマンション暮らしをしてきた私には、それを、よいとも、悪いとも、いう資格はありません。ただ、無言のなかに空虚さだけが残りました。

（二〇二三年三月）

三．形見の品や記念の品を贈与する

このように業者による庭木の買い取りは実現しませんでした。しかし、この時期に咲く花はどれも美しく、花とつぼみのついた小枝を伐採しては、何回かに分けて、近くの施設で暮らす母親の所に持って行ったり、ご近所や知り合いの方にもらっていただいたりしました。みなさん喜ばれ、私自身もうれしくなりました。花は人を和ませます。それだけではありません。花を介して、会話も花開きます。花は、人と人の気持ちをつなぐ、何か不思議な力をもっているようです。

そのころすでに、私は、売却を前にして、家のなかの品々の片づけに入りました。それを目にした近所の方がしばしば来てくれて、思い出の品を持ち帰られました。「あのとき、このソファーに座って、こんな話をしたのよね」「あのときは、確かこのカップでコーヒーを飲んだわね」などなどと、話が進み、私の知らない両親の思い出を次から次に聞く機会となりました。

父は多趣味の人で、俳句をつくり、写真を取り、加えて、絵画製作が日常生活の一部となっていました。絵の主題は、すべて阿蘇の風景です。私が、いま住んでいる阿蘇の別荘をつくったのは、ほぼ三〇年前のことでした。まだ神戸大学に勤務していたときで、夏休みや春休みに利用する以外は、両親が週末ごとに滞在し、庭いじりを楽しみ、とりわけ父は、近所の風景を写真に収め、それをもとに、熊本市内の実家のアトリエで油絵にしていました。

実家の片づけで一番悩んだのが、このたくさんある作品群の処分方法でした。しかし、周りのみなさんも、父が阿蘇の絵を描くことはよくご存じで、ご近所の方だけではなく、その人たちのご親戚の方々も足を運んでこられました。私の知り合いにも、話をすると、父の阿蘇の絵が欲しいといってくれる人が現われ、お譲りすることができました。私自身も、手もとに残しておきたい作品を、数回に分けて自分の車に乗せて、阿蘇の家に運び込みました。昔から飾っている作品を含めて、いまや総計十数点が各部屋の壁に掛けられています。さながら、父親の個展会場です。

こうして数箇月をかけて行なった実家の整理も一段落し、遺品整理士の資格をもつ業者に入ってもらい、対象となる用品について、買い取りをしてもらいました。残りは、家屋が解体されるときに、不用品として撤去されることになります。

（二〇二三年三月）

四．確定測量

現役で働いていた神戸での三九年間は、すべてマンション暮らしでしたので、一戸建てを購入し、そこに住み、その後、売却するといった経験はありませんでした。今回、両親が住んでいた実家を売却するにあたり、確定測量というものが必須の要件となっていることを、契約した不動産会社から知らされました。

そのようなわけで、私にとりまして、確定測量ははじめての体験でした。この業務は、隣接する敷地の境界を明確にし、売却後、もめることがないようにするための土地所有者間で

の確認作業のようです。すべて、不動産会社と提携している測量業者が取り仕切ります。

私の実家は、東と南は道路に面していますので、確定測量が必要になるのは、北側と西側のふたつのお屋敷に接した境界についてでした。まず、北側のお屋敷との境界の確定から進められてゆきました。確定測量をする業者が事前に連絡をしていて、息子さんに立ち会ってもらいました。ここは、道路に埋め込まれた杭からはじまる境界線が、ブロック塀のちょうど真ん中を走るように、ブロック塀が設置されていることがわかりました。一方の西側のお屋敷との境界線につきましては、娘さんが立ち会われました、この境界線は、ブロック塀の真ん中を通っているのではなく、ブロック塀のお隣り寄りの側面に沿っていることが、杭の位置から判明しました。

確定に際しては、両者が確認したあかしとして、ふたりが計測用のホールを握った状態で境界線のはじまる位置に立った姿を写真にします。そのあと、双方が書類に署名と押印をします。数日後、不動産会社から連絡がありました。それによると、この測量会社から、確定測量図面と立会証明書が届いたとのことでした。

こうして、確定測量は終わりました。売買契約をしている買い主様が銀行に申し込まれている住宅ローンが、予定どおりに承認されれば、次に、いよいよ家屋の解体作業に入ることになります。

（二〇二三年三月）

五. 家屋解体

買い主様の住宅ローンの審査が終わり、承認されたとの報告が、不動産会社からありました。そして、間を置かず、家屋解体にかかわる「請負契約書」「届出書」「委任状」が送られてきました。必要な箇所に記入と押印し、返送。こうして、不動産会社の関連業者による解体作業へ向けての書類が整いました。

次に、業者の担当者によって、工事のお知らせと協力のお願いが、近隣住民になされました。私も、工事開始の当日、近所へのあいさつ回りをしました。両親と長いおつきあいのある方ばかりで、快く受け入れてくれました。

いよいよ解体に入りました。私は、週に一度、現場を訪れ、進行状況を確認したり、ご近所の方に、騒音やほこりなどの様子についてお聞きしたりしました。ご迷惑をかけていることが伝わってきます。申しわけない気持ちになります。しかし、「お互いさまです」とか、「心配無用ですよ」とかの言葉をいただくと、少し気が楽になります。しばらく、解体作業をみながら、立ち話をします。みなさんどの方も、高齢化問題や空き家問題、そして後継者問題を話題に持ち出されます。いつかはこの問題に直面することを覚悟されているようですが、なかには、いい案を探しあぐねていらっしゃる方もいました。日本の至る所でいま起きている深刻な問題であることにちがいません。

三週間を要して、解体は無事終了しました。母親は入院中で、現場を見ることはありませんでした。両親が半世紀前に建てた家です。最後の別れを告げたかったかもしれません。しかし、思い出が幾重にも重なり、平静ではいられなくなることも予想されます。いまは、これでよかったと思っています。あと数日で、母親の九六歳の誕生日が巡ってきます。

残金の清算がすべて終わりました。これをもって売買の完了です。私自身も、スムーズに

売却が進んで安堵する気持ちと、両親が生活の場とした建物を失う寂しさと、加えて、一つひとつのさまざまな思いが交錯し、言葉にならない心情になってしまいました。終幕です。

（二〇二三年六月）

第一二話 病窓より

一. 救急車に乗せられて

九月五日（火曜日）の午後、いつものように町役場に回覧文書を受け取りに行きました。総務課で用をすませ、庁舎を出て、駐車していた車のところまで歩こうとしたときです、急に歩行に加速度がつき、車まであと一步というところで、足がもつれ、前に転倒してしまいました。意識はありました。しかし自力では、起き上がることができませんでした。見たら、もっていた役場の封筒の上に、少し血がついていました。どこから出血したのかはわかりません。気づくと、数人の役場の職員に囲まれ、名前などを聞かれたり、どうしたのかを尋ねられたりしました。そのなかのひとり、以前に町が行なった集団診断で私を担当した保健師の方で、それ以来親しく声を掛け合う間柄で、すぐに私の身元を周りの人たちに紹介する声が聞こえてきました。そのときのみんなの判断は、このまま動かさずに、救急車を呼んだ方がよからうというものだったようです。まもなくすると、サイレンを鳴らした救急車が到着し、ストレッチャーに乗せられ、車のなかに運び込まれました。かかりつけの病院を聞かれ、それに答えると、連絡されている様子でした。しかし、町内のその病院には、検査機器や入院設備が充実しておらず、そこで、比較的近くで設備が整った、隣り村にある阿蘇立野病院へ直行することになりました。車内にいる私の目には、壁と天井のあいだの窓から、青空がずっと見えていました。その間、いまの暮らしの様子や家族のことが問いただされました。三〇分くらいで病院に到着し、ただちにコロナウイルス感染症とインフルエンザなどの感染症の検査を受け、陰性との報告を受けて、検査室に運ばれました。

検査室では、CTやレントゲンを撮影したように思います。また、検温や血圧も測定され、採血もあったかもしれません。疲れのためか、あるいは病院に到着した安堵感のためか、少し意識が遠のいていたようです。検査室から病室へ移されました。ふたり部屋のひとり使用でした。ポータブルのトイレも、ベッドの横に置かれていました。しばらくすると、主治医の先生が来られました。丁寧にわかりやすく説明をされる方で、信頼を寄せるにふさわしい先生でした。点滴開始。そして、医師の問診と触診がはじまりました。幸いなことに、脳に損傷はなかったようです。また、封筒に付着した血痕は、左目の上の擦り傷からの出血が原因だったようです。病院に到着したとき、四〇度近い熱があったようですが、心当たりがないか尋ねられるも、自分でも理由はわかりませんでした。右足の足首の上が二〇センチくらいの幅でぐるりと赤く腫れ上がっていました。数日前から、痛みを伴う、そうした炎症の症状があることを伝えました。また、右足の膝に痛みがあり、そのことも伝えました。

その夜は、確か食事はありませんでした。提供はあったのかもしれませんが、食べた記憶が残っていません。痛みが激しく、ベッドから自力では起き上がることができず、ナースコールで看護師さんを読んで、トイレの介助をしてもらいました。なぜ転倒したのか、なぜ高熱が襲ったのか、わからないまま、一夜を馴れないベッドの上で過ごすことになりました。

（二〇二三年九月）

二. 一夜が明けて

夜が明けました。看護師さんから、この部屋は二階にあり、窓は東向きで、天気がよければ朝日が入るとの説明を受けました。九時前に回診があり、今日、痛みのある右膝のレントゲンを撮ることが告げられました。また、右足首上部を取り巻くベルト状の皮ふの腫れについては、原因がわからず、とりあえず痛み止めを処方するとのことでした。

夕方また回診があり、レントゲンでヒビが入っていることがわかった旨の報告を受けました。この病院には整形外科がないので、転院の必要があり、これから調整したいとのことでした。まだ、皮ふの痛みも、膝の痛みも、続いていました。これからどうなってゆくのか、少々不安に襲われました。妹夫婦が見舞いに来てくれたのが、一条の光りとなって、この日は終わりました。

次の日は木曜日でした。この病院は週に二回の入浴日が定められていて、今日はその日でした。看護師さんが迎えにこられ、車いすで浴場へ行きました。そこでは、順番に患者を浴室に入れ、介護用のいすに座らせて、介護士さんが頭から背中までシャンプーやボディー石鹸で洗い、そのあとシャワーで洗い流す一連の手順が決められているらしく、非常に手際よい機械的な作業で、数分のうちに完了しました。たとえば、ベルトコンベアに乗せられて、芋の子を洗う光景でした。

夕方、回診があり、調整がついた整形外科の病院名が告げられました。ここから車で十数分の隣り町の街中にある大津中村整形外科という個人病院です。そこで、先生に申し出て、明日一番にこの病院を退院し、ただちに一度帰宅し、入院道具をそろえたり、生ものの処理をしたりしたうえで、新しい病院に行きたいとの希望を伝えました。こうして、明朝の八時半に退院することが決まり、妹夫婦が迎えにくることになりました。

昨日から病院食がはじまっていました。朝と昼は院内で調理したと思われる料理が提供されますが、夕食は、宅配給食業者によるお弁当でした。人件費の節約なのかもしれませんが、いままでに経験したことのない病院内の食風景でした。

（二〇二三年九月）

三．高熱と転倒の原因が判明

九月八日（金曜日）の早朝、予定どおり、妹夫婦が迎えにきて、一時帰宅しました。生ごみを専用の袋に入れ、一方、入院道具をキャスターのついた旅行用キャリーに詰め込みました。おそらく入院中は時間をもてあますことになることも考えられ、執筆を継続するためパソコンと簡単な資料も、専用のリュックに入れました。痛みはまだありましたが、前日のうちに、家から持ち出す品物のリストをつくっていたため、比較的順調に進みました。郵便物は、前日に電話をし、局留め置き申請用紙を郵便受けに入れてもらっていたので、それに記入しました。

いよいよ転院先の大津中村整形外科に向けての出発です。途中、ごみ集積場に寄って、生ごみを捨て、申請用紙をポストに投函し、いつも利用しています自動車の整備工場に立ち寄ってキーを渡し、車を役場の駐車場に取りに行ってもらい、整備のうえ退院まで預かってもらいました。事前に電話で事情を話していたので、これも順調に進みました。こうして、新たに入院する整形外科に到着しました。

紹介状を見ながら、院長である主治医から、今後の治療方針について説明がありました。

手術は、この病院では毎週木曜日に行なわれているらしく、一四日（木曜日）に行なわれることがすんなり決まりました。そして、膝下の腫れの原因をはっきりさせたいということで、紹介状をもって近くの皮ふ科に車いすで行くことになりました。病院間で事前に連絡されていたらしく、スムーズに対応してもらいました。腫れた皮ふの様子をつぶさにみながら、これは「丹毒」という病気の症状ですと、担当された医師にいわれました。説明によると、目に見えない小さな傷口からばい菌が入り、皮ふが赤く腫れあがり、次第に高熱を発し、強い虚脱感に襲われることがあるようです。私の高熱と転倒は、この「丹毒」によるものでした。こうしてあっという間に原因が判明し、返事の手紙をもって、最初の整形外科に帰りました。

（二〇二三年九月）

四．膝骨折の接合手術

これまで私の手術歴は、三例ありました。最初は、文部省（現在の文部科学省）の長期在外研究員として一九九五年にイギリス滞在していたときに発症した尿管結石の手術です。手術翌朝に提供された、個室でとるフル・ブレイクファストがとても印象に残っています。あたかも英国の高級ホテルで楽しむルーム・サービスのようでした。

次は、定年退職一年前の二〇一二年のがんによる前立腺の全摘出手術です。これは神戸大学医学部の附属病院で行ないました。執刀されたのは、いま神戸大学の学長をされている藤澤正人先生でした。「神の手」と称されるルネサンスの天才レオナルド・ダ・ヴィンチに因んで命名された最新の医療機器を使っの手術でした。

三番目の例が、二〇一六年四月の熊本地震から一箇月後に発症した心筋梗塞によるステントの留置手術です。これは、救急車で搬送された熊本市内の済生会熊本病院で対応してもらいました。無事に一命を取り留めました。私の住まいのある阿蘇山から昇る朝日を、病室の窓から望むのが日課となっていました。忘れられない思い出です。

いよいよ膝蓋骨の接合手術に向けて、さまざまな角度からレントゲンの撮影がなされ、主治医から施術の説明がありました。横方向にヒビは入っているので、縦に二本の金属のピンを入れて、それを膝の周囲に添ってワイヤーで固定するとのことでした。一方、麻酔医は外部からの訪問医らしく、前日に病室にいらして、麻酔についての説明がありました。そのなかで、親族のなかに麻酔に対して拒否反応を示した者はいないか質問されました。これは、イギリスでの手術のとき麻酔医から受けた質問と同じで、変に親近感を覚えました。しかし、緊張感は次第に増してきました。

当日、手術室に運ばれ、麻酔担当の医師と、一言二言、言葉を交わすと、そのまま眠りにつき、主治医の顔を見ることもなく、気がついたのは、自分の病室に移されたあとのことでした。しばらくして、主治医の先生が来られ、写真を見ながら、無事手術が終わったことが告げられました。消灯のとき、痛み止めの薬を点滴に入れてもらって、最初の夜に向かいました。激しい痛みがあると、事前に聞かされていたので、覚悟はしていたのですが、それほど痛みはなく、したがって、一度もナースコールを使うこともなく、あっけなく次の朝を迎えることができました。後日そのことを主治医に話をすると、どうやら私の体質は、痛み鈍感なのかもしれないとのことでした。

（二〇二三年九月）

五. 入院生活

さっそく翌日からリハビリがはじまりました。右足が伸び切ったままで、まったく曲げることができません。少しずつマッサージをしながら、曲げ伸ばしの訓練がはじまりました。この段階では、健常な左足と同じ機能を回復することは、想像さえできないことでした。しかし、一日一日、足が動くようになりました。もちろん痛みが伴いますが、それも受け入れ、訓練に励みました。

歩行は、最初は歩行器、次に二本の松葉杖、それから一本の松葉杖、最後に普通の杖に変わってゆきました。病院内の廊下を、日に何度も歩き、病室では、リハビリで教わった訓練を自分で繰り返しました。足が次第に曲げられるようになり、そして、曲げた足を伸ばして、もとの位置にもどすこともできるようになりました。たとえば、ベッドに座るときは、左足は、膝を支点にして九〇度に折り曲げることができるのに対して、右足は、一八〇度に伸ばしたままで、少しも曲げることができませんでした。それが徐々に曲げることができるようになり、左足と同じように直角に曲げることができたときは、何ともいえぬ感動が沸き上がってきました。

手術から一〇日が過ぎたころ、病室が二階から三階に移りました。四人部屋には変わりないのですが、使用者がふたりとなり、ここで窓側のベッドを使うことになりました。南向きで、阿蘇のある東から朝日が昇り、熊本市内のある西に夕日が沈みます。あるときの夕日は、忘れがたいものになりました。

病窓から望む南数キロ先に、東西に延びる高遊原と呼ばれる台地があります。手前は森林に囲まれ、その奥の様子は直接かいま見ることはできませんが、ここに、阿蘇くまもと空港があります。ときおり飛行機の離着陸時の音響が伝わってきます。

時間があるときはパソコンに向かいました。そのとき著作集 14 『外輪山春雷秋月』に所収予定の「火の国の女たち」を書いていましたので、旧稿のリメイクで、比較的資料を必要としない、第八章の「中村汀女の句誌『風花』の誕生と青鞥の女たち」と第九章の「志村ふくみの染織家への道を支える富本憲吉・富本一枝夫妻」を執筆しました。それだけではありません。少し前から頭に浮かんでいた、現在の全一五巻に新たに九巻を加えて全二四巻に組み替える構想を、より現実的なものへと一つひとつ検討を進めてゆきました。帰宅できたら、さっそく、ウェブサイト「中山修一著作集」を全二四巻に再編集したいと思います。これも、入院によって思わぬ時間を手にしたおかげによるものであるとするならば、不幸が幸に転じた一瞬とも理解することができます。

病院食はとてもおいしく、入院生活に彩りを添えてくれました。調理の方だけではなく。看護師さん、看護助手の方、清掃担当の方、みなさん親切で、本当に見知らぬ人びとに毎日の生活が支えられていることを実感しました。森のなかで独り生きる私は、すべてのことをひとりでしなければなりません。しかし、入院によって別世界に移され、ここに温かい人の手があることを現実的に知ったのでした。

（二〇二三年九月）

六. 一時帰宅と退院

手術からちょうど二週間が経過した九月二八日（木曜日）の午後、妹夫婦の車で一時帰宅しました。今後独りで家で生活ができるかどうかを確かめると同時に、退院に備えて車を病院までもってこることが目的でした。途中、預けていた整備工場に立ち寄り、車を受け取りました。久々に乗る車です。家まで自分で運転して帰りました。車の乗り降り、足の操作に問題がないことがわかりました。家では、杖なしで歩いたり、高い所にあるものや、逆に低い所にあるものを取り出したり、移動したりすることができるかを確認しました。リハビリのおかげで、手術をした右足は、日常生活をするのに支障がないほどに、痛みもなく、それなりに回復していました。

病院へ帰る道すがら、阿蘇の絶景を売り物にするレストランに入り、三人でお茶を楽しみました。それから、車二台を連ねて、病院に帰りました。帰ると、ナースステーションに立ち寄り、退院しても問題なく生活ができることを報告。これで、予定どおり、明日の退院が決定しました。この病院では、退院については主治医が決めるのではなく、患者自身が決めるようになっています。といいますのも、退院後の家庭生活の受け入れ体制が人によって異なるためです。そこで、ある程度回復したら、一人ひとりの家庭の事情に応じて、いつ退院するのが最適かの判断が、患者自身の手によだねられているのです。

翌日、朝食のあと、主治医の先生の最後の回診がありました。切開の箇所も問題ないとのことでした。その後、ナースステーションと受付に立ち寄り、事務的な手続きをすませ、車に入院用具を詰め込み、自宅へ向けて出発しました。次回の診察は、一週間後です。今後のリハビリは、自宅近くのリハビリ専門の病院で受けることにし、紹介状を作成してもらいました。転倒から二四日が過ぎていました。いよいよ自宅生活（自宅療養）です。ゆっくりゆっくりと、一步一步をかみしめるように、これより日々の暮らしを味わってゆきたいと思います。

（二〇二三年九月）

七. 快気祝いの差し入れが届く

退院して三日後、思いもよらぬ快気祝いが届きました。重箱に入ったお赤飯とお惣菜でした。つくってくれたのは、これまでもときどき料理を差し入れてくれていた隣り村にお住いの「お母さん」です。かれこれ八〇歳とのことですので、私より五歳程度年上のお姉さんといったところでしょうか。実際には、まだ一度もお会いしたことはありません。届けてくれるのは、いつもその家のお嫁さんです。

そのお嫁さんの話によると、「お母さん」も半年前に転倒が原因で膝にヒビが入り、しかし、軽微なものだったため、手術はせずに、保存治療で回復したとのことでした。しかし、定期的にリハビリを続けていらっしゃるらしく、病院は、これから私がリハビリを行なおうとしている病院と同じとのことですので、ひょっとしたら、その病院で今後お目にかかる機会があるかもしれません。

足が不自由なため、思いどおりに料理がつくれなかったり、つくれたとしても、いつもの何倍もの時間を要したりの、のろのろ生活者です。手づくりの料理は、本当にありがたく、

しみじみと人の思いやりが伝わってきます。前にも母の日のころに、「お母さん」の好きなユリの花を贈ったことがありましたが、近いうちにお礼の気持ちを添えて、またユリの花を届けたいと思っています。

（二〇二三年一〇月）

八．地元でのリハビリ開始、そして退院一週間後の検診

退院時に受け取った紹介状をもって、近所の南郷谷リハビリテーションクリニックへ行きました。この病院には、整形外科、リハビリテーション科、内科の三つの診療科があります。整形外科担当の先生は、他の病院から週に何回か来られる方ようで、事前に電話でアポをとっての初診でした。さっそくレントゲンの撮影をしました。手術は、うまく行なわれているとのことでした。次に、担当される理学療法士の先生からリハビリの進め方の説明があり、さっそく来週からリハビリに入ることになりました。話を聞くと、週二回程度のリハビリで二箇月の見通しになるとのことでした。リハビリに励み、もとの元気な姿で新年を迎えたいと、気持ちを新たにしました。

その翌日が、退院一週間目に当たり、手術をした病院に検診に行きました。ここでもレントゲンを撮りました。先生の説明によると、順調に回復しており、骨が少しくつついてきたようです。また、退院の日に採血した結果が出ており、炎症の程度を示す CRP 定量の数値が標準値にもどっているとのことでした。先生から「若いですね」との言葉をかけられ、うれしいやら、はずかしいやら、返答に困りました。この日も採血があり、一箇月後の受診の予約をして、帰宅しました。

いまは、一、二時間机に向かつては、ひと休み、料理をつくっては、ひと休み、皿洗いをしては、ひと休みの生活です。どうしても動作や行動が連続しないのです。加えて、重い物や大きい物の移動はまだできません。庭の掃除も控えています。しかし、痛みも全くなく、おおかたのことはすべて自分できるので、疲れやすくはありますが、日常生活に支障が出ることはありません。ただただ、ひとつの動きに時間を必要とするのです。こちらでは「日にちが薬」という言葉をよく使いますが、日を重ねるごとに、あとは自然と治癒し、回復していくことでしょう。そう願っています。

（二〇二三年一〇月）